愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 179 集

町屋（まちや）遺跡

2013

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

町屋遺跡の所在する愛知県一宮市は、平成 17 年 4 月 1 日に愛知県の北西県境を流れる木曽川左岸に位置する旧尾西市と旧葉栗郡木曽川町を編入して現在のかたちになった市であります。古くから木曽川の水運と現在でも東京と大阪を結ぶ東西の交通路が市域の中央を貫く地勢を反映して、政治・文化が営まれてきた地域であります。

この度報告いたします町屋遺跡は、昭和初期から地元の方々により多数の弥生土器や石器が発見・調査されてきた遺跡であり、一宮市の弥生文化を語る上で草分け的遺跡であります。この発掘調査により、弥生時代の遺構と遺物が多数確認され、集落の姿を推定できるようになったことは、愛知県尾張地域の弥生文化を考える上でも貴重な資料になったものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ，関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 25 年 3 月

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　加　藤　高　明

例　言

1. 本書は愛知県一宮市千秋町町屋に所在する町屋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県道名古屋江南線道路拡幅工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成 19 年 11 月から平成 20 年２月までで、発掘調査面積は 1,600㎡である。整理および報告書作成作業は平成 23 年４月から平成 24 年３月にかけて実施した。
4. 調査担当者は、石黒立人（本センター調査研究統括専門員）・蔭山誠一（本センター調査研究主任）・永井邦仁（本センター調査研究主任）である。発掘調査はテイケイトレード株式会社の支援を受けて実施した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、一宮市教育委員会、一宮市博物館、一宮市千秋町町屋自治会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の編集は蔭山誠一が担当したが、執筆は永井邦仁・蔭山誠一により分担した。また付論では、付論１を藤根　久（株式会社パレオ・ラボ）・米田恭子氏（株式会社パレオ・ラボ）、付論２を永草康次（神塾）、に執筆して頂いた。
7. 整理作業は蔭山誠一が担当した。整理作業は伊藤あけみ・瀧智美（整理補助員）の協力を得て実施した。遺物の実測・トレース作業はナカシャクリエイテブ株式会社・株式会社アーキジオに委託して実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に、本書レイアウト編集作業を有限会社アルケイリサーチに委託して実施した。
8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
    〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
    〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
    安藤春雄・久保禎子・黒沢浩・土本典生・長谷川昭三・長谷川稔・馬場伸一郎・松本彩・北村和宏

目　次

第１章　前　言

第１節　調査の経緯と方法…… 1

第２節　町屋遺跡の立地とこれまでの調査・研究…… 7

第３節　周辺の遺跡…… 8

第２章　遺　構

第１節　基本層序…… 13

第２節　各調査区の概要…… 15

遺構図版…… 29

第３章　出土遺物

第１節　弥生土器・土師器・陶器…… 60

第２節　石器…… 68

第３節　ガラス製品…… 72

遺物図版…… 73

第４章　総　括

第１節　遺構の変遷…… 122

第２節　弥生土器・土師器・陶磁器の出土分布…… 126

第３節　石器の出土分布…… 129

第４節　遺構・出土遺物の分布と地形環境…… 130

第５節　町屋遺跡の全体像…… 131

付　論１　町屋遺跡出土土器の胎土材料…… 137

付　論２　愛知県一宮市町屋遺跡出土した櫛条痕文系土器の胎土に関する考察…… 152

付　論３　愛知県一宮市町屋遺跡採集資料の分析…… 158

写真図版

遺構：写真図版 1 ～写真図版 10

出土遺物：写真図版 11 ～出土遺物 20

抄　録

挿　図・挿表目次

第 1 図　町屋遺跡位置図 …… 1
第 2 図　調査区位置図 …… 2
第 3 図　発掘調査の行程 …… 3
第 4 図　町屋遺跡の立地 …… 6
第 5 図　町屋遺跡の出土遺物 …… 7
第 6 図　町屋遺跡周辺の遺跡 …… 9
第 7 図　町屋遺跡基本土層図 …… 14
第 8 図　第1 面 07A 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 29
第 9 図　第　1 面 07A 区・07B 区遺構図 (1:200) …… 30
第 10 図　第 1 面 07B 区・07C 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 31
第 11 図　第 1 面 07C 区遺構図 1(1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 32
第 12 図　第 1 面 07C 区遺構図 2(1:200)、個遺構断面図 (1:100) …… 33
第 13 図　第 1 面 07E 区・07F 区遺構図 (1:200) …… 34
第 14 図　第 1 面 07F 区遺構図 (1:200) …… 35
第 15 図　第 1 面 07G 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 36
第 16 図　第 1 面 07G 区・07H 区遺構図 (1:200 …… 37
第 17 図　第 1 面 07H 区遺構図 (1:200)…… 38
第 18 図　第 1 面 07I 区遺構図 1(1:200) …… 39
第 19 図　第 1 面 07I 区遺構図 2(1:200) …… 40
第 20 図　第 1 面 07J 区遺構図 1(1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 41
第 21 図　第 1 面 07J 区遺構図 2(1:200) …… 42
第 22 図　第 2 面 07A 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 43
第 23 図　第 2 面 07B 区遺構図 (1:200) …… 44
第 24 図　第 2 面 07B 区・07C 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 45
第 25 図　第 2 面 07C 区遺構図 1(1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 46
第 26 図　第 2 面 07C 区遺構図 2(1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 47
第 27 図　第 2 面 07C 区個別遺構断面図 (1:100) …… 48
第 28 図　第 2 面 07D 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 49
第 29 図　第 2 面 07F 区遺構図 (1:200) …… 50
第 30 図　第 2 面 07G 区遺構図 (1:200) …… 51
第 31 図　第 2 面 07Ha 区遺構図 (1:200) …… 52
第 32 図　第 2 面 07Hb 区遺構図 (1:200) …… 53
第 33 図　第 2 面 07I 区遺構図 1(1:200) …… 54
第 34 図　第 2 面 07I 区遺構図 (1:200)2、個別遺構断面図 (1:100) …… 55
第 35 図　第 2 面 07D 区遺構図 1(1:200) …… 56
第 36 図　第 3 面 07A 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 57
第 37 図　第 3 面・第 4 面 07C 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100) …… 58
第 38 図　第 3 面 07Ha 区遺構図 (1:200) …… 59
第 39 図　07Aa 区～ 07Ac 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 73
第 40 図　07Bb 区・07Ca 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 74
第 41 図　07Ca 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 75
第 42 図　07Ca 区・07Cb 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 76
第 43 図　07Cb 区～ 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 77
第 44 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1) …… 78
第 45 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (2) …… 79
第 46 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (3) …… 80
第 47 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (4) …… 81
第 48 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (5) …… 82
第 49 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (6) …… 83
第 50 図　07Cc 区・07D 区・07Ga 区・07Ha 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 84
第 51 図　07Ha 区・07Hb 区・07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 85

第 52 図　07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1) …… 86
第 53 図　07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器 (2) …… 87
第 54 図　07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器 (3) …… 88
第 55 図　07Ia 区～ 07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 89
第 56 図　07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1) …… 90
第 57 図　07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器 (2) …… 91
第 58 図　07Id 区・07Ie 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 92
第 59 図　07Ie 区・07Ja 区出土弥生土器・土師器・陶器 …… 93
第 60 図　07Aa 区・07Ab 区出土石器 …… 94
第 61 図　07Bb 区出土石器 (1) …… 95
第 62 図　07Bb 区出土石器 (2) …… 96
第 63 図　07Ca 区出土石器 (1) …… 97
第 64 図　07Ca 区出土石器 (2) …… 98
第 65 図　07Cb 区出土石器 (1) …… 99
第 66 図　07Cb 区出土石器 (2) …… 100
第 67 図　07Cb 区・07Cc 区出土石器 …… 101
第 68 図　07Cc 区出土石器 (1) …… 102
第 69 図　07Cc 区出土石器 (2) …… 103
第 70 図　07Cc 区出土石器 (3) …… 104
第 71 図　07Cc 区出土石器 (4) …… 105
第 72 図　07Cc 区出土石器 (5) …… 106
第 73 図　07Cc 区出土石器 (6) …… 107
第 74 図　07Cc 区出土石器 (7) …… 108
第 75 図　07Cc 区出土石器 (8) …… 109
第 76 図　07Cc 区出土石器 (9) …… 110
第 77 図　07Cc 区出土石器 (10) …… 111
第 78 図　07Cc 区出土石器 (11) …… 112
第 79 図　07Cc 区・07Cd 区・07Gb 区・07Ha 区・07Hb 区出土石器 …… 113
第 80 図　07Hb 区・07Ia 区出土石器 …… 114
第 81 図　07Ia 区出土石器 …… 115
第 82 図　07Ia 区・07Ib 区出土石器 …… 116
第 83 図　07Ic 区・07Id 区出土石器 …… 117
第 84 図　07Id 区出土石器 (1) …… 118
第 85 図　07Id 区出土石器 (2) …… 119
第 86 図　07Id 区・07Ie 区出土石器 …… 120
第 87 図　07Ja 区出土石器 …… 121
第 88 図　ガラス製品 (1:1) …… 122
第 89 図　A 期～ C 期の遺構 (1:1,000) …… 123
第 90 図　D 期の遺構 (1:1,000) …… 124
第 91 図　E 期・F 期・古代の遺構 (1:1,000) …… 125
第 92 図　町屋遺跡の復元図 (1:5,000) …… 134

第 1 表　町屋遺跡の発見・調査歴 …… 8
…… 135
第 2 表　弥生土器・土師器・陶磁器の出土傾向 …… 127
第 3 表　石器の出土傾向 …… 130

付 論 1
図 版 1　分析試料の偏光顕微鏡写真 …… 148
図 版 2　分析試料の偏光顕微鏡写真 …… 149
図 版 3　分析試料の偏光顕微鏡写真 …… 150
図 版 4　分析試料の偏光顕微鏡写真 …… 151
第 1 表　胎土分析を行った町屋遺跡出土土器とその詳細 …… 138
第 2 表　土器胎土中の微化石類・岩石・鉱物組成の観察結果 …… 141
第 3 表　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表 …… 144
第 4 表　岩石片の起源と組み合わせ …… 145
第 5 表　器種と粘土の種類および砂粒組成の関係 …… 145

付 論 2
第 1 図　主要鉱物三角ダイヤグラム …… 152
第 2 図　粒径三角ダイヤグラム …… 152
第 3 図　胎土分析試料実測図・写真 …… 155
第 1 表　町屋遺跡胎土分析試料一覧 …… 153
第 2 表　実態顕微鏡観察結果 …… 156
第 3 表　偏光顕微鏡観察結果 …… 156

付 論 3
第 1 図　安藤春雄氏所蔵資料 (1) …… 159
第 2 図　安藤春雄氏所蔵資料 (2) …… 160
第 3 図　安藤春雄氏所蔵資料 (3) …… 161
第 4 図　長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料 …… 162
第 5 図　長谷川稔氏所蔵資料 …… 162

第１章　前　言

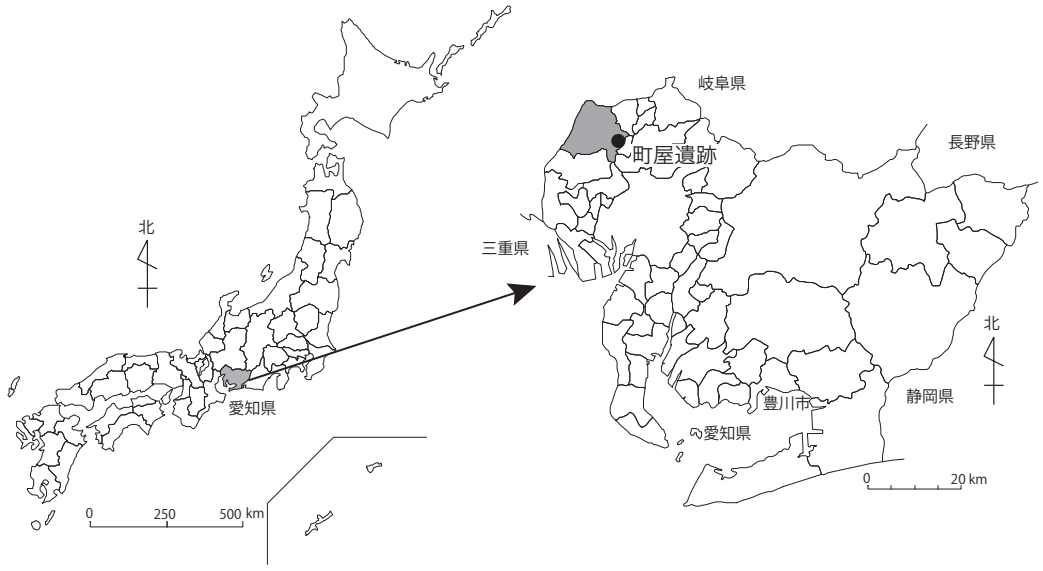
第１節　調査の経緯と方法（第１図～第４図）

町屋遺跡は愛知県一宮市千秋町町屋に所在する遺跡で（図１）、名古屋鉄道犬山線石仏駅より西南西 850m の地点に位置する。本遺跡は一宮市埋蔵文化財包蔵地一覧に町屋遺跡（遺跡番号 02034）として周知の遺跡として知られており、愛知県建設部道路建設課による県道名古屋江南線道路拡幅工事に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室による試掘調査が平成 18 年度に行われた結果、奈良時代から室町時代の遺構・遺物が全ての試掘調査地点において確認された。この為、県道名古屋江南線道路拡幅工事事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成 19 年 11 月から平成 20 年２月の期間で、発掘調査を実施した。

調査面積は 1,600㎡で、調査地点は県道名古屋江南線が名神高速道路と交差する地点を中心に南北約 500m の範囲にわたる。調査区は県道名古屋江南線の東西拡幅部分の南北に細長い範囲となり、県道名古屋江南線と交差する東西方向の道路を境界として、県道の西側の地点を北から A 区・B 区・C 区・D 区・E 区・F 区の大きく６ヶ所に、県道の東側を北から G 区・H 区・I 区・J 区の大きく４ヶ所に分けた（第２図）。また発掘調査に伴う排土置場の設置と県道沿線の民地（商店・民家・畑地など）への出入り口の確保の為、A 区を北から Aa 区～ Ac 区の３ヶ所に、B 区を北から Ba 区～ Bc 区の３ヶ所に、C 区を Ca 区～ Cd 区の４ヶ所に、F 区を Fa 区～ Fc 区の３ヶ所に、G 区を北から Ga 区・Gb 区の２ヶ所に、H 区を北から Ha 区・Hb 区の２ヶ所に、I 区を Ia 区～ Ie 区の４ヶ所に、J 区を Ja 区～ Jc 区の３ヶ所に細分して調査を行った。

発掘調査の工程は（第３図参照）、A 区を平成 19 年 12 月上旬～平成 20 年２月中旬に、B 区を平成 19 年 12 月上旬～中旬と平成 20 年１月上旬～中旬に、C 区を平成 19 年 11 月中旬～下旬と平成 20 年１月下旬～２月上旬、同年２月中旬～下旬に、D 区を平成 20 年２月下旬に、E 区を平成 20 年２月下旬に、F 区を平成 20 年２月上旬～中旬に、G 区を平成 20 年１月中旬～下旬と同年２月下旬に、H 区を平成 20 年１月中旬～２月上旬）に、I 区を平成 19 年 11 月中旬～平成 20 年１月下旬に、J 区を平成 20 年１月中旬～平成 20 年２月下旬であった。発掘調査の終了後、平成 23 年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

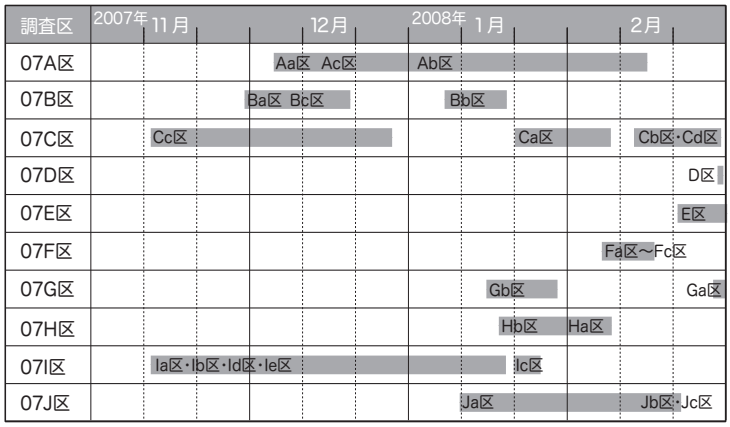
調査方法はショベルカーにて表土となる旧水田埋立て土と旧水田耕作土・旧畑耕作土、近世以後の造成土と思われる堆積を除去した後、発掘調査作業（人力に



第１図　町屋遺跡位置図

07A 区
07G 区
07B 区
07H 区
07C 区
07I 区
07D 区
07E 区
07J 区
07F 区
千秋町芝原
千秋町町屋
鈴井町
名鉄運輸一宮流通センター
天王公園
0
250m

第２図　調査区位置図



第３図　発掘調査の工程

よる遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察など）を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

遺跡の地元説明会は実施できなかったが、以下の遺跡の発掘調査現場の見学があった。

町屋道路建設推進委員会の役員をはじめとする地元の皆様：発掘調査中随時

一宮市立千秋中学校の生徒：平成 19 年 12 月 13 日

明治大学付属博物館友の会の皆様：平成 19 年 12 月 17 日

愛知県立一宮南高等学校の生徒：平成 19 年 12 月 26 日

また平成 20 年 1 月 3 日～ 5 日に一宮市町屋公民館において町屋遺跡出土遺物の展示と調査写真のパネル展示を行った。

19.12. 8 中日新聞 朝刊 P.23

何が出るかな

町屋遺跡の発掘進む

一宮 見学OK

中日からあなたの街のふれあい情報をお届けします 平成20年1月号

ふれんどちあき

集落跡で方形周溝墓

発掘１　調査区設置のフェンスにより仮囲い（07Ga 区、南西より）

発掘２　表土掘削（07Id 区、北より）

発掘３　遺構の検出（07Cc 区北側 03SD、北より）

発掘４　遺構の掘削風景（07Cc 区、北より）

発掘５　遺構の掘削（07Cc 区 051SK、北西より）

発掘６　高所作業車による全景写真撮影（07Cc 区・07Id 区・07Ib 区）

発掘７　個別遺構の写真撮影（07Ia 区、南より）

発掘８　遺構の測量（07D 区、北より）

発掘９　一宮市立千秋中学校生徒の見学

発掘 10　愛知県立一宮南高等学校生徒の見学

発掘 11　埋め戻し作業（07Ie 区、北より）

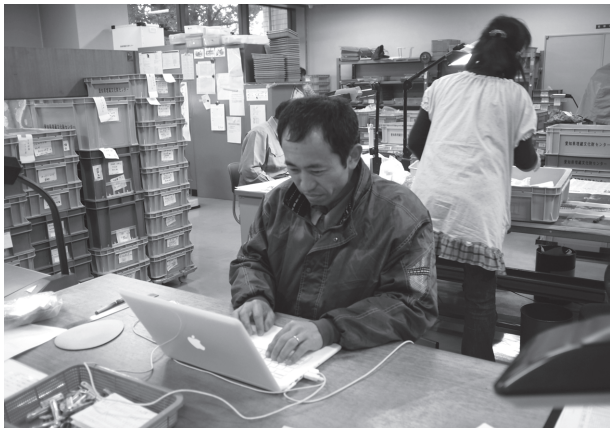
発掘 12　出土遺物の洗浄

整理１　遺物の分類・接合

整理２　遺物の復元（石膏入れ作業）

整理３　遺物の実測

整理4　遺物の写真撮影


整理5　報告書の執筆・編集・作成

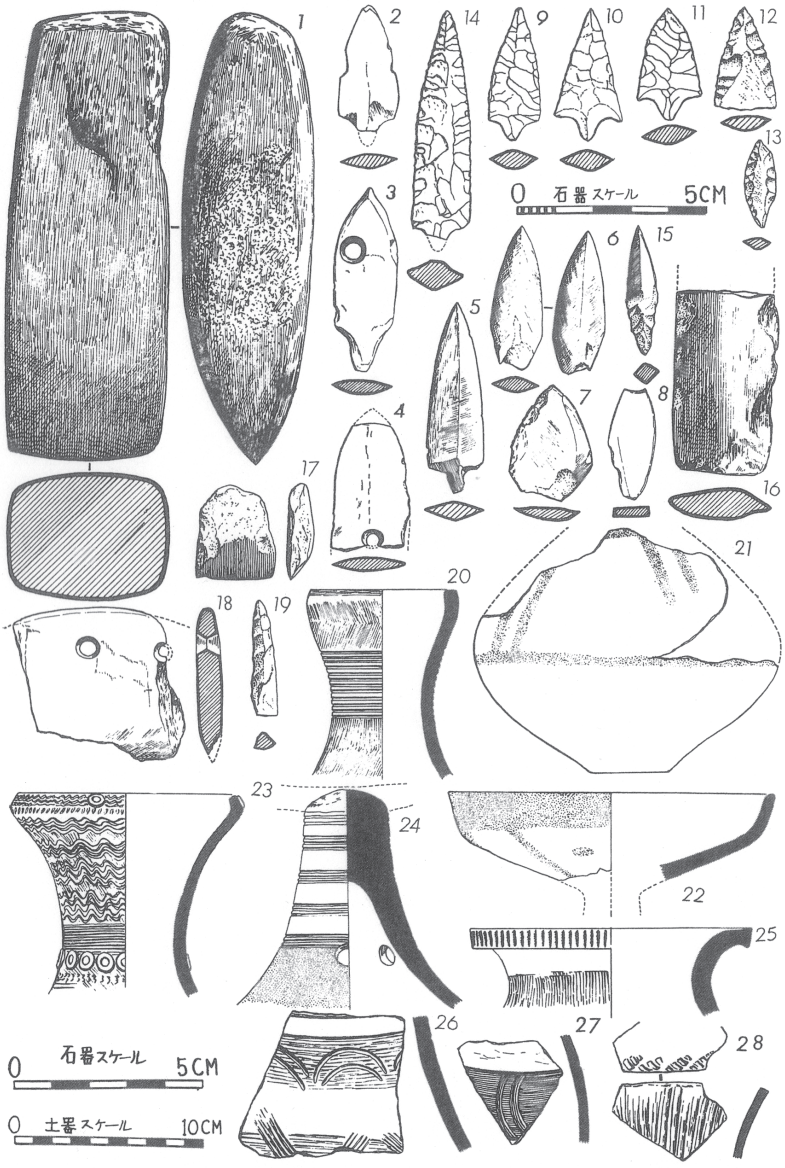
木曽川
木曽川扇状地
町屋遺跡
小牧山
三宅川
五条川
鳥居松段丘
庄内川
矢田川
大曽根凹地
熱田台地
旧海岸線
笠寺台地
天白川
0
5km
後背湿地他
自然堤防
扇状地
丘陵
河川

第４図　町屋遺跡の立地

第2節　町屋遺跡の立地とこれまでの調査・研究（第4図・第1表）

町屋遺跡（第4図−1、以下遺跡番号を付す）の所在する愛知県一宮市は、濃尾平野を流れる木曽川の左岸にあり、木曽川により形成された沖積平野の扇状地帯から氾濫原地帯にあり、町屋遺跡のある一宮市南東部は犬山市から続く扇状地帯から氾濫原地帯に移る地点に位置する。さらに木曽川左岸になる尾張地域では、かつての木曽川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は本遺跡の北西を青木川が、南東を五条川が北東から南西へ蛇行しながら流れている。

町屋遺跡が、遺跡として知られるようになったのは古く、戦前（昭和16年）には、梶田不二男氏と坂重吉氏により、弥生土器や石鏃・石斧などの石器が採集されて報告されている。その後昭和29年8月には名古屋大学考古学研究室により、「町屋遺跡」として発掘調査が実施され、弥生時代中期の遺物が多く出土した(註1)。またこの遺跡は昭和38年に発行された『東海の先史遺跡』において、紅村弘氏により遺跡の紹介がある（第5図、註2)。昭和42年に刊行された『一宮市史』においては、「花ノ木遺跡」として報告されている（註3)。



第27図　町屋遺跡出土各種遺物（石器½ 土器¼）　1磨製石斧　2—8磨製石鏃
9—14打製石鏃　15サヌカイト製磨製尖頭器　16石錐　17小型石斧
18手鎌　19石錐　20—28土器（長谷川政エ門氏蔵）

第5図　町屋遺跡の出土遺物
紅村 弘　1963『東海の先史遺跡』総括編 名古屋鉄道株式会社より第27図を引用転載

第 1 表　町屋遺跡の調査歴（地点は第 92 図に対応する）

地点	地点詳細	調査・発見日	出土遺物	その他	文献
A	字花の木 1619 番地	昭和 29 年 8 月 26 日～同年 8 月 28 日	貝田町式壺・甕、寄道式壺・甕・高杯・鉢など	調査指導は楢崎彰一氏	千秋村史編纂委員会編・発行 1956「町屋遺跡」『千秋村村史』
B	字花の木、07Ic 区の東 20m 地点付近	昭和後期	瓠形壺・赤彩広口壺	長谷川稔氏所蔵資料	本報告書付論 3 参照
C	花の木遺跡、07D 区の南西 100m 地点付近	昭和 36 年の土取りの際	弥生中期の壺・深鉢・甕	安達厚三氏採集	大参義一・岩野見司 1967「花ノ木遺跡」『新編一宮市史資料編二　弥生時代』一宮市
D	字北坪 1435 番地	昭和 10 年 3 月下旬頃と昭和 10 年 5 月頃と昭和 13 年 5 月上旬頃	石剣？・石鳶？（石小刀か）・敲石	梶田不二男氏採集（梶田氏は地点 D～地点 G 付近に於いて石器 500 点以上、弥生土器 100 点以上他にも採集された）	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
E	字北坪 1432 番地	昭和 6 年 7 月上旬頃	打製石斧・磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
F	字北坪 1438 番地	昭和 2 年 5 月中頃	磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
G	字北坪 1430 番地	昭和 10 年 5 月上旬頃と昭和 13 年 10 月上旬頃	勾玉・管玉・臼玉・磨製石斧・敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収、坂重吉 1941.6「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
H	字北坪 1398 番地	昭和 13 年 11 月上旬	弥生時代中期壺・土錘・球？	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
I	字北目保 1222 番地	昭和 10 年 5 月中旬	敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
J	07D 区の南西 100m 地点付近，地点 C の北側畑地	昭和後期～平成	弥生時代中期～後期の弥生土器片多数、磨製石斧・敲石・凹み石・砥石・石小刀・打製石鏃・打製石錐など多数	安藤春雄氏採集	本報告書付論 3 参照

第 3 節　周辺の遺跡

まず町屋遺跡（1）周辺の遺跡を概観してみるために、本遺跡の北側を愛知県江南市、丹羽郡扶桑町、丹羽郡大口町、本遺跡の東側を小牧市西部、本遺跡の南側を一宮市南東部、北名古屋市、西春日井郡豊山町の範囲について、遺跡分布図を作成した（第 6 図）。以下、本遺跡周辺の遺跡の分布について述べる。

旧石器時代には、丹羽郡大口町小口にある西山神 B 遺跡（156）と大口町伝右付近にある山間遺跡（201）・中原遺跡（203）・中原西遺跡（204）、小牧市西之島にある西之島遺跡（251）、小牧山付近にある小牧市元町の総濠遺跡（275）と小牧市小牧の小牧山東遺跡（284）の大きく 4 地点にみられる。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代の遺跡がみられた大口町小口に西山神 A 遺跡（155）・地蔵堂遺跡（159）が、大口町伝右から秋田付近に東藪山遺跡（202）・中原西遺跡（204）・兎遺跡（219）・北替地遺跡（220）が、小牧市本町付近に総濠遺跡（275）・織田井戸遺跡（294）が分布する。また江南市山尻町から江森町にかけて高海戸遺跡（83）・河原山遺跡（86）・角畑遺跡（87）が、一宮市千秋町に佐野遺跡（4）が、一宮市丹陽町伝法寺付近に池之上遺跡（17）・権現山遺跡（368）が、一宮市丹陽町塩尻から岩倉市大地町にかけて猫島遺跡（11）・穴田遺跡（42）・西町畑遺跡（43）・伴定遺跡（45）・西北出（A）遺跡（47）・野辺遺跡（49）・ノンベ遺跡（50）が、岩倉市八剱町から鈴井町にかけて御山寺遺跡（35）・八剱遺跡（65）が、岩倉市曽野町から西春日井郡師勝

第６図　町屋遺跡周辺の遺跡

1. 町屋遺跡（弥生時代）
2. 堂浦（裏）遺跡（平安時代）
3. 海戸遺跡（弥生時代）
4. 佐野遺跡（縄文時代～弥生時代）
5. 加納馬場遺跡（弥生時代）
6. 長福寺廃寺（飛鳥時代）
7. 円長寺古墳（古墳時代）
8. 一宮南高校平松遺跡（弥生時代～鎌倉時代）
9. 鹿取遺跡（奈良時代～平安時代）
10. 蕪池遺跡（弥生時代）
11. 猫島遺跡（縄文時代～室町時代）
12. 重吉城跡（古墳時代・平安時代～鎌倉時代）
13. 東高龍遺跡（奈良時代～平安時代）
14. 飛所遺跡（奈良時代～平安時代）
15. 茂八枚遺跡（弥生時代・平安時代）
16. 六所遺跡（弥生時代～平安時代）
17. 池之上遺跡（縄文時代晩期・古墳時代・鎌倉時代）
18. 稲荷山古墳（古墳時代、含む陪塚）
19. 伝法寺廃寺（奈良時代）
20. 元屋敷遺跡（弥生時代～中世）
21. 西大門遺跡（弥生時代～平安時代）
22. 五輪ヶ淵遺跡（奈良時代～室町時代）
23. 寺跡遺跡（近世）
24. 大地遺跡（縄文時代～弥生時代）
25. 井上城跡（室町時代）
26. 新溝古墳（古墳時代）
27. 山内一豊生誕地（室町時代）
28. 岩倉城跡（室町時代）
29. 西広畑遺跡（弥生時代）
30. 西土門遺跡（平安時代）
31. 長福寺遺跡（弥生時代）
32. 梅ノ木遺跡（古墳時代）
33. 岩塚遺跡（弥生時代）
34. 立切遺跡（弥生時代・奈良時代）
35. 御山寺遺跡（弥生時代～江戸時代）
36. 法成寺遺跡（奈良時代）
37. 天神遺跡（古墳時代）
38. 宮東遺跡（弥生時代）
39. 西道海戸遺跡（弥生時代）
40. 前田遺跡（古墳時代・平安時代）
41. 乾出遺跡（弥生時代・奈良時代）
42. 穴田遺跡（縄文時代～弥生時代）
43. 西町畑遺跡（縄文時代～弥生時代）
44. 東町畑遺跡（弥生時代）
45. 伴定遺跡（縄文時代）
46. 西北出（B）遺跡（古墳時代）
47. 西北出（A）遺跡（縄文時代～弥生時代）
48. 葉広遺跡（弥生時代～平安時代）
49. 野辺遺跡（縄文時代～古墳時代）
50. ノンベ遺跡（縄文時代～古墳時代）
51. 薬師堂廃寺跡（弥生時代～鎌倉時代）
52. 寺山遺跡（奈良時代）
53. 神宮寺古墳（古墳時代）
54. 西出古墳（古墳時代）
55. 西出遺跡（室町時代）
56. 吸田遺跡（古墳時代）
57. 前畑遺跡（古墳時代・室町時代）
58. 石塚遺跡（弥生時代）
59. 高畑遺跡（古墳時代）
60. 下流遺跡（古墳時代）
61. 小森遺跡（室町時代、柿経出土地）
62. 西生田遺跡（弥生時代）
63. 種畑古墳（古墳時代）
64. 七面山古墳（古墳時代）
65. 八剱遺跡（縄文時代～古墳時代）
66. 大塚遺跡（弥生時代～古墳時代）
67. 東郷前遺跡（弥生時代）
68. 中出口遺跡（弥生時代）
69. 白山遺跡（弥生時代）
70. 古市場遺跡（古墳時代）
71. 真光寺遺跡（弥生時代）
72. 天神塚遺跡（古墳時代）
73. 曽野遺跡（弥生時代～平安時代）
74. 居屋敷古墳（古墳時代）
75. 神清院古墳（古墳時代）
76. 御土井廃寺跡（弥生時代～室町時代）
77. 国衙遺跡（縄文時代～室町時代）
78. 長畑遺跡（古墳時代）
79. 北島白山遺跡（弥生時代）
80. 下新田遺跡（弥生時代・奈良時代～江戸時代）
81. 音楽寺廃寺（奈良時代～室町時代）
82. 二夕子遺跡（古墳時代～中世）
83. 髙海戸遺跡（縄文時代晩期・古墳時代、勝佐遺跡）
84. 石塚遺跡（古墳時代後期）
85. 宮東遺跡（古墳時代）
86. 河原山遺跡（縄文時代）
87. 角畑遺跡（縄文時代～弥生時代・中世、両高屋東遺跡）
88. 大門遺跡（鎌倉時代）
89. 大日遺跡（弥生時代～中世、両高屋遺跡）
90. 八幡裏遺跡（古墳時代～奈良時代・室町時代・江戸時代）
91. 宮後城跡
92. 八幡前遺跡（室町時代）
93. 寺ノ西遺跡（古墳時代）
94. 前野大塚古墳（古墳時代）
95. 宮浦遺跡（古墳時代）
96. 前野小塚古墳（古墳時代）
97. 砂場裏遺跡（平安時代）
98. 南大塚古墳（古墳時代）
99. 小金堂遺跡（平安時代・鎌倉時代）
100. 鳥森遺跡（古墳時代・平安時代・室町時代・江戸時代）
101. 大上戸遺跡
102. 諸家遺跡（鎌倉時代・江戸時代）
103. 室生寺遺跡（鎌倉時代）
104. 寺廓遺跡（鎌倉時代）
105. 山王南屋敷遺跡（鎌倉時代～室町時代）
106. 観音寺遺跡（鎌倉時代、四辻山遺跡）
107. 石枕南屋敷遺跡（弥生時代）
108. 上ゲ遺跡（古墳時代・奈良時代～鎌倉時代）
109. 桐野遺跡（弥生時代～古墳時代・奈良時代・鎌倉時代）
110. 長塚遺跡（奈良時代～室町時代）
111. 札掛遺跡（古墳時代）
112. 椿屋敷遺跡（弥生時代）
113. 茶屋遺跡（弥生時代）
114. 上源寺遺跡（縄文時代～弥生時代）
115. 天王山遺跡（古墳時代）
116. 富士塚古墳（古墳時代～室町時代）
117. 小折城跡
118. 二子山古墳（古墳時代）
119. 榛原遺跡（古墳時代）
120. 岩塚浦遺跡（古墳時代）
121. 塔塚遺跡（古墳時代）
122. 大堀遺跡（平安時代）
123. 西屋遺跡（室町時代）
124. 神屋遺跡（弥生時代）
125. 正号寺遺跡（弥生時代・室町時代）
126. 青木添遺跡（鎌倉時代）
127. 上本郷遺跡（中世）
128. 後山遺跡（中世）
129. 北川原遺跡（中世）
130. 高島遺跡（鎌倉時代）
131. 長泉塚古墳（古墳時代）
132. 恵心庵（江戸時代）
133. 高木古墳（古墳時代）
134. 竹薮遺跡（弥生時代）
135. 斉藤遺跡（弥生時代）
136. 花立遺跡（弥生時代）
137. 元亀塚（古墳時代）
138. 柏森遺跡（弥生時代）
139. 白山１号古墳群（古墳時代、白山１号墳）
140. 白山１号古墳群（古墳時代、白山３号墳）
141. 白山１号古墳群（古墳時代、白山２号墳）
142. 白山１号古墳群（古墳時代、白山１号墓）
143. 白山１号古墳群（古墳時代、白山５号墳）
144. 白山１号古墳群（古墳時代、白山６号墳）
145. 白山１号古墳群（古墳時代、白山７号墳）
146. 善光寺塚古墳（古墳時代）
147. 桜塚古墳（古墳時代）
148. 大日塚古墳（古墳時代）
149. 堀尾氏邸宅跡（中世）
150. 仁所野遺跡（弥生時代～古墳時代）
151. しょうねん塚古墳（古墳時代）
152. 道心塚古墳（古墳時代）
153. 起シ遺跡（弥生時代）
154. 墓ノ腰遺跡（弥生時代）
155. 西山神Ａ遺跡（縄文時代）
156. 西山神Ｂ遺跡（旧石器時代）
157. 水瀬遺跡（弥生時代～古墳時代）
158. 垣田遺跡（縄文時代）
159. 地蔵堂遺跡（縄文時代）
160. 下山伏遺跡（古墳時代）
161. 万願寺遺跡（古墳時代）
162. 馬場遺跡（弥生時代～古墳時代）
163. 寺浦遺跡（古墳時代、浅畑遺跡）
164. 西浦遺跡（弥生時代）
165. 寺前遺跡（弥生時代～古墳時代）
166. 宮西古窯（奈良時代）
167. 宮之前遺跡（弥生時代～古墳時代）
168. 清水遺跡（弥生時代～古墳時代）
169. 日高遺跡（弥生時代～古墳時代）
170. 日高南遺跡（弥生時代～古墳時代）
171. 神明下遺跡（弥生時代～古墳時代）
172. 権現西遺跡（弥生時代）
173. 寺前南遺跡（弥生時代）
174. 北屋敷遺跡（古墳時代）
175. 小口城古墳（古墳時代）
176. 六部遺跡（弥生時代）
177. 向江遺跡（弥生時代）
178. 若ケ橋遺跡（中世）
179. 中畑遺跡（弥生時代～古墳時代）
180. 下島東遺跡（弥生時代～古墳時代）
181. 下島前遺跡（弥生時代～古墳時代）
182. 乗船遺跡（弥生時代～古墳時代）
183. 西流遺跡（中世）
184. 新田１号墳（古墳時代）
185. 新田２号墳（古墳時代）
186. 東樋田遺跡（弥生時代）
187. 植松遺跡（弥生時代）
188. 山王道古墳（古墳時代）
189. 竹田遺跡（弥生時代）
190. 北海道遺跡（弥生時代）
191. 三期神社古墳（古墳時代）
192. 西樋田遺跡（弥生時代）
193. 丸遺跡（弥生時代）
194. 大塚１号墳（古墳時代）
195. 大塚２号墳（古墳時代）
196. 大塚３号墳（古墳時代）
197. 中五反田遺跡（弥生時代）
198. 大御堂遺跡（中世）
199. 苗田島遺跡（中世）
200. しょうねん塚古墳（古墳時代）
201. 山間遺跡（旧石器時代）
202. 東藪山遺跡（縄文時代）
203. 中原遺跡（旧石器時代）
204. 中原西遺跡（旧石器時代・縄文時代）
205. 神明神社１号墳（古墳）
206. 神明神社２号墳（古墳）
207. 神明神社遺跡（弥生時代）
208. 石亀塚古墳（古墳）
209. 中池尻遺跡（中世）
210. 秋葉社古墳（古墳時代）
211. 宮浦遺跡
212. 西屋敷遺跡
213. 東屋敷古墳（古墳時代）
214. 八剱社古墳（古墳時代）
215. 善鍬遺跡
216. 土田屋遺跡（近世）
217. 南山遺跡（古墳時代）
218. 道心塚古墳（古墳時代）
219. 兎遺跡（縄文時代）
220. 北替地遺跡（縄文時代）
221. 福田遺跡（弥生時代）
222. 岩木塚古墳（古墳時代）
223. 白亀塚古墳（古墳時代）
224. 白木古墳（古墳時代）
225. 白木遺跡（古墳時代）
226. 西郷前遺跡（古墳時代）
227. 神福神社古墳（古墳時代）
228. 丸山古墳（古墳時代）
229. 平田遺跡（古墳時代）
230. 耳塚古墳（古墳時代）
231. 鳥塚古墳（古墳時代）
232. 小牧山（安土桃山時代）
233. 高根遺跡（古代～中世）
234. 甲屋敷古墳（古墳時代）
235. 村前遺跡（古墳時代・中世）
236. 村東遺跡（中世）
237. 天王前遺跡（中世）
238. 古天王遺跡（古代～中世）
239. 間々本町遺跡（中世）
240. 松原遺跡（中世）
241. 足中代遺跡（中世）
242. 片山遺跡（中世）
243. 森本遺跡（中世）
244. 洞木遺跡（中世）
245. 村中前田遺跡（中世）
246. 小塚山遺跡（中世）
247. 西之島北屋敷遺跡（中世）
248. 西之島中屋敷遺跡（中世）
249. 柿ノ木島遺跡（中世）
250. 高拍子遺跡（中世）
251. 西之島遺跡（旧石器時代）
252. 牛屋遺跡（中世）
253. 牛屋浦遺跡（古墳時代・中世）
254. 三ツ渕原雉子野遺跡（中世）
255. 北甲塚遺跡（中世）
256. 日塚遺跡（古墳時代・中世）
257. 三ツ渕雉子野遺跡（古墳時代・中世）
258. 三ツ渕宮東遺跡（中世）
259. 三ツ渕宮前遺跡（中世）
260. 諏訪塚遺跡（中世）
261. 手越西ノ門遺跡（中世）
262. 新租遺跡（中世）
263. 旦那新田遺跡（中世）
264. 三ツ渕・東播州遺跡（中世）
265. 三ツ渕観音堂遺跡（中世）
266. 東阿原遺跡（中世）
267. 惣作遺跡（中世）
268. 土針田遺跡（中世）
269. 舟津寺前遺跡（中世）
270. 舟津宮前遺跡（中世）
271. 柏瀬遺跡（古代～中世）
272. 林屋敷遺跡（中世）
273. 巾上遺跡（中世）
274. 惣堀遺跡（中世）
275. 総濠遺跡（旧石器時代～縄文時代）
276. 下御園遺跡（中世）
277. 柏所遺跡（中世）
278. 上御園遺跡（中世）
279. 石原遺跡（中世）
280. 上鍛冶遺跡（中世）
281. 小牧池田遺跡（中世）
282. 上善光遺跡（中世）
283. 新町遺跡（中世）
284. 小牧山東遺跡（旧石器時代・中世）
285. 市之久田北浦遺跡（中世）
286. 御殿遺跡（弥生時代）
287. 常普請遺跡（中世）
288. 東出遺跡（中世）
289. 西出遺跡（中世）
290. 若宮遺跡（中世）
291. 市之久田中島遺跡（古墳時代・中世）
292. 松山遺跡（中世）
293. 下御園紺屋町筋遺跡（中世）
294. 織田井戸遺跡（縄文時代～中世）
295. 小木狐塚遺跡（弥生時代・中世）
296. 天王山古墳（古墳時代）
297. 甲屋敷東遺跡（古墳時代・中世）
298. 甲屋敷第２号墳（古墳時代）
299. 浄音寺古墳（古墳時代）
300. 浄音寺山遺跡（中世）
301. 乙屋敷遺跡（中世）
302. 善能寺遺跡（中世）
303. 藤島町高畑遺跡（中世）
304. 藤島遺跡（縄文時代）
305. 藤島町居屋敷北遺跡（弥生時代～中世）
306. 藤島町居屋敷遺跡（弥生時代～中世）
307. 藤島町五才田遺跡（弥生時代～中世）
308. 藤島町出口遺跡（弥生時代～中世）
309. 藤島町鏡池遺跡（中世）
310. 十三塚古墳（古墳時代）
311. 多気西町遺跡（中世）
312. 多気西河原遺跡（中世）
313. 多気元屋敷遺跡（古代～中世）
314. 多気竜泉寺北遺跡（中世）
315. 多気安正寺北遺跡（中世）
316. 多気神社西遺跡（中世）
317. 多気中町遺跡（中世）
318. 多気北町遺跡（中世）
319. 西之海道遺跡（古墳時代・中世）
320. 門遺跡（中世）
321. 観音寺遺跡（弥生時代～古墳時代・中世）
322. 小針已新田高畑遺跡（弥生時代～古墳時代・中世）
323. 小針已新田萱場遺跡（古墳時代～中世）
324. 中宮遺跡（古墳時代・中世～近世）
325. 小針八幡遺跡（中世）
326. 小針堂地遺跡（中世）
327. 小針観音堂遺跡（中世）
328. 大池遺跡（古代～中世）
329. 光善寺遺跡（古代～中世）
330. 小針入鹿新田中市場遺跡（古代～中世）
331. 小針北堂地遺跡（中世）
332. 小屋敷遺跡（中世）
333. 羊之木原遺跡（中世）
334. 昭和遺跡（中世）
335. 市之久田八幡社裏遺跡（中世）
336. 市之久田稲荷遺跡（中世）
337. 市之久田善光寺前遺跡（中世）
338. 岩之田西遺跡（中世）
339. 南外山北浦遺跡（中世）
340. 内方前遺跡（中世）
341. 桜井山遺跡（中世）
342. 城島遺跡（中世）
343. 高塚古墳（古墳時代）
344. 鍛冶ヶ一色遺跡（弥生時代～中世）
345. 徳重遺跡（古墳時代）
346. 法成寺遺跡（弥生時代～中世）
347. 神子前遺跡（弥生時代）
348. 弥勒寺廃寺跡（奈良時代～平安時代）
349. 弥勒寺御甲塚遺跡（弥生時代～古墳時代）
350. 弥勒寺遺跡（弥生時代～古墳時代、古山王古墳）
351. 樋口遺跡（弥生時代）
352. 村前遺跡（弥生時代～古墳時代）
353. 十二社古墳（古墳時代）
354. 堤下遺跡（縄文時代）
355. 六の坪遺跡（縄文時代）
356. 山浦遺跡（平安時代）
357. 古井遺跡（弥生時代・平安時代）
358. 射矢重遺跡（弥生時代）
359. 新宮遺跡（弥生時代～古墳時代・平安時代）
360. 八幡西遺跡（弥生時代・中世）
361. 仙人塚古墳（古墳時代）
362. 石塚遺跡（弥生時代）
363. 熊之庄遺跡（弥生時代）
364. 江川遺跡（古墳時代・中世）
365. 村上遺跡（奈良時代）
366. 山の神遺跡（中世）
367. 稲荷古墳（古墳時代）

第６図の町屋遺跡周辺の遺跡一覧

町山の前にかけて国衙遺跡（77）・藤島遺跡（304）・堤下遺跡（354）・六の坪遺跡（355）が比較的集まって分布している。

弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡があった地域をつなぐように遺跡の分布が広がり、大きく４つの分布するエリアを捉えることができる。一つは青木川の西にある江南市江森から大口町余野にかけての地区付近を中心に分布する一群、二つ目は町屋遺跡も含まれるもので、一宮市丹陽町天摩から岩倉市大地町や小牧市藤島町を経て、師勝町熊之庄にいたる地区付近を中心に分布する一群、三つ目は小牧山の南西部にある小牧市元町から常普請にかけての地区付近を中心に分布する一群、四つ目は一宮市丹陽町伝法寺付近に分布する一群などに分かれる。

本報告の主体となる弥生時代の町屋遺跡周辺の遺跡について具体的にみると、本遺跡から南東 2.9km にある一宮市元屋敷遺跡（20）は、弥生時代前期の集落遺跡として著名で、東西約 120m、南北 100m の環濠が確認されている。隣接する岩倉市北島白山遺跡も弥生時代前期の遺跡として知られている。南 2.1km にある岩倉市野辺遺跡では前期の遠賀川土器片が出土し、遺物包含層が確認されている。近接するノンベ遺跡からも遠賀川式土器や中期朝日式土器片が出土している。続く弥生時代中期においても、南西 1.3km にある一宮市猫島遺跡（11）では弥生時代中期前半の環濠集落がみつかっており、南 1.9km にある岩倉市大地遺跡（24）では沈線文形土器として知られる「大地式土器」を出土した遺跡であり、南西 3.0km にある一宮市飯守神遺跡（369）では、中期中葉の土器・石器等が出土しており、土坑・溝を主体とする遺構群も検出されている。他にも一宮市一宮南高校平松遺跡（8）で弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の土器が出土した。同市鹿取遺跡（9）も弥生時代中期～後期の遺跡である。南南西 0.8km にある一宮市蕪池遺跡（10）は、弥生時代後期の大型器台、底部に先行した大型長頸壺など完形土器多数が出土し、後期の墓域が展開したと推定されている。岩倉市梅ノ木遺跡（32）では弥生時代後期の竪穴建物、溝状遺構や、古墳時代初頭の土器などが出土している。岩倉市岩倉城遺跡（28）でも弥生時代後期末の竪穴建物と方形周溝墓が確認されている。このように、遺跡群として捉えられる遺跡の分布も確認されている出土遺物などからみると、遺跡の中心となる時期は異なっており、遺跡間において変遷がみられる。

古墳時代の遺跡は弥生時代の遺跡分布とやや地点を変えつつもほぼ重なるように展開しており、古墳時代後期の前方後円墳である巣本二子塚古墳（118）がある大口町秋田や同町御供所から江南市曽本町や小牧市三ツ渕原新田にかけて、新たに遺跡が多く分布する。この結果、図５の北にある江南市山の尻や大口町小口から大口町御供所付近を経て南の岩倉市大地町や師勝町熊之庄にいたる遺跡群と大口町御供所から南東の小牧市下小針につづく遺跡群が形成されたようにみられる。

以上に述べた遺跡の分布は、主に地表面における表面採集によるところが大きい成果であり、分布図を作成した範囲の地域では、比較的多くの遺跡が確認されているように思われる。しかし、近年までの宅地や商業施設、耕作地、工場などの開発により、地表面における遺物の表面採集が困難な地区も多くある為、必ずしも正確な遺跡の状態を示しているわけではないが、大まかな傾向をみる上で有効な方法であり、先に述べた弥生時代から古墳時代の遺跡分布以外にも町屋遺跡の東北東 1.2km にある一宮市長福寺廃寺跡（６）と本遺跡から南東 2.7km にある岩倉市御土井廃寺跡（76）、本遺跡から南 2.8km にある薬師堂廃寺跡（51）、本遺跡から南西 3.0km にある一宮市伝法寺廃寺跡（19）などがあり、尾張国府推定地の候補ともなっている岩倉市国衙遺跡（77）の存在とともに、白鳳時代から奈良時代にかけて広く開発された地域と考えられる。また中世の遺跡は古代まで遺跡があまり多く存在しなかった小牧市小牧城跡（232）のある北西側から南側の地域に比較的多く分布するようであり、遺跡の地域的変遷も考えられ、興味深い傾向である。

また、近年大規模な発掘調査が行われた遺跡の例をみると、本遺跡から 1.3km にある一宮市猫島遺跡（11）では、縄文時代後期前葉から晩期末葉の土器や石鏃、磨製石斧が少量出土しており、遺跡の東側に自然河道が見つかっており、遺構こそ極めて少ないが、微高地上に集落が存在した可能性が高い。弥生時代中期前半には長径 200m 前後の環濠集落がみつかっており、内

部からは平面プランが円形の松菊里型住居や平面が方形プランの竪穴建物が 90 棟程、方形周溝墓 10 基、土坑多数、水田跡があり、弥生時代中期の拠点集落の一つである。その後も古墳時代前期後半の大型土坑や奈良時代の掘立柱建物群、平安時代後半の掘立柱建物 3 棟、井戸 1 基、溝などがあり、中世後半期にかけて北東から南西にのびる多数の溝がみつかっている。

本遺跡の南東 0.8km にある岩倉市御山寺遺跡（35）では、弥生時代の遺跡として周知されてきたが、発掘調査の結果、岩倉市鈴井町にある立切遺跡（34）の南に位置する西側地点では縄文時代晩期前半を中心とする土坑などの遺構群、古墳時代前期の竪穴建物や溝などの遺構群、古代末から中世前半期の河道に伴う遺構群、中世後半期の区画溝などがあった。また岩倉市中野町にかかる東側地点では弥生時代後期末の方形周溝墓 1 基、古墳時代前半の竪穴建物 25 棟、奈良時代末から平安時代前半にかけての竪穴建物 8 棟や古代から中世にかけての掘立柱建物 11 棟、中世前半期の掘立柱建物や区画溝、中世後半期から戦国時代の区画溝や土坑、江戸時代の土坑墓、水田跡などが確認されている。

このように各遺跡の中においても地点毎に異なる遺構変遷がみられ、遺構と遺物の分布には消長がみられる。これらは、従来周知されてきた遺跡の情報が、発掘調査で確認できる情報の一部分であることを示す可能性が高いようである。これまでに周知されてきた遺跡（遺物包含地）の外にも、発掘調査の行われた事例では遺跡が広がる可能性が高く、近接する遺跡間では、連動した人々の営みが存在したものと思われる。今後の研究を期待したい。

［註］

註 1　梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村ニ於ける遺物」『尾張の遺跡と遺物』第 29 号（復刻版中巻に所収）
坂重吉 1941.6「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『尾張の遺跡と遺物』第 29 号（復刻版中巻に所収）

註 2　紅村弘 1963『東海の先史遺跡』総括編、名古屋鉄道株式会社

註 3　大参義一・岩野見司 1967「花ノ木遺跡」『新編一宮市史資料編二　弥生時代』一宮市

第２章　遺　構

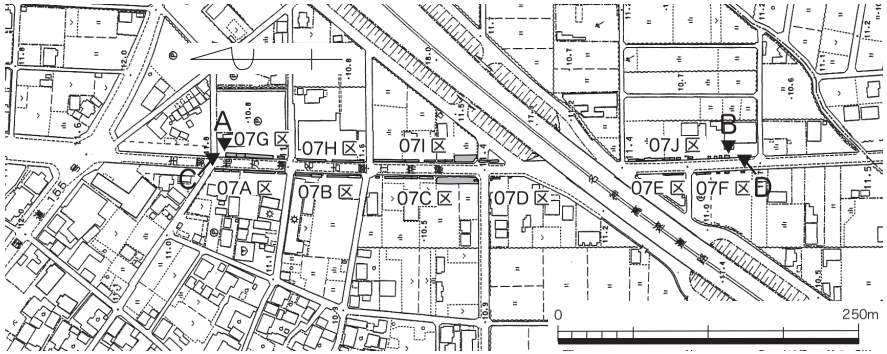
第１節　基本層序

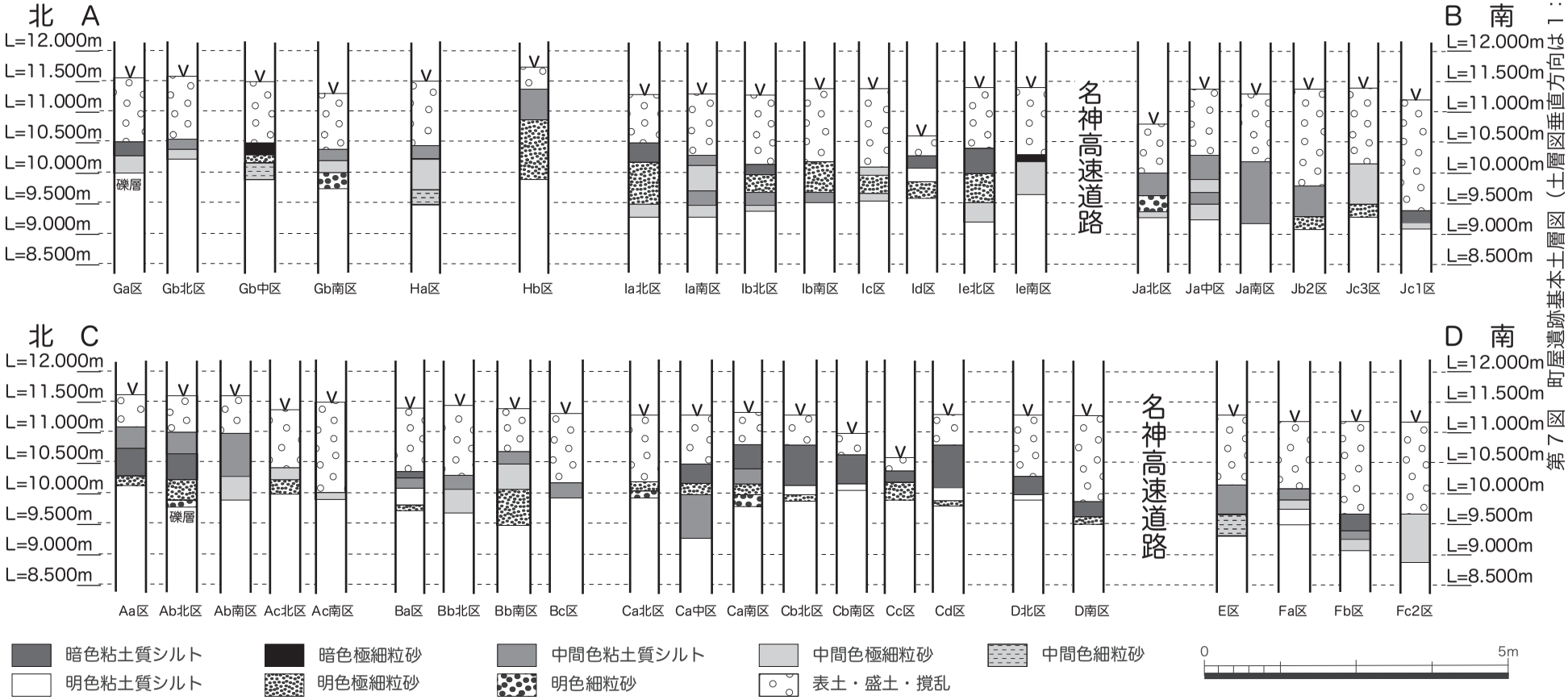
今回の発掘調査を行った各調査区の典型的堆積状況を示す部分を表現して、発掘調査地点の南北約 450m にわたる表土以下の堆積について柱状断面図を作成した（第７図）。柱状図数は県道名古屋江南線の東側が 20 本、西側が 22 本である。なお、柱状図の土層表現については、調査時の土層観察の情報に基づいて、色調を暗色：明度１～３、中間色：明度４・５、明色：明度６～８に分類し、粒度を粘土質シルト、極細粒砂、細粒砂、礫層に分類し表現した。以後の堆積の記述は色調の明度と粒度によって行う。

本遺跡地およびその周辺では、水田や畑だったところに最近の土盛り整地が多くみられ、発掘調査時の地表面の標高は名神高速道路北側の 07A 区と 07G 区、07G 区付近が 11.5m ～ 11.6m 前後、名神高速道路を挟む南北の地点が 11.2m ～ 11.4m で、盛土がない水田が残っていた 07Cc 区・07Id 区・07Ja 北区の標高 10.6m ～ 10.8m を除くと、北から南に緩やかに下る地形である。

表土である土盛り整地・近代以後から現在にかけての畑・水田の旧耕作土下の状況は、近世にさかのぼる可能性のある旧水田（畑）耕作土が一部確認される地点はあるものの、概ねその下で弥生時代から中世にかけての遺物包含層（遺構を含む、以下省略）があり、その上面付近が遺構検出面となる。遺物包含層の上面の標高は、表土の影響が及ぶ深度により異なる。遺物包含層と遺跡基盤層の堆積物の粒度は、下層から礫層があり、その上に細粒砂、極細粒砂、粘土質シルトの上方へ細粒化する順に基本的に堆積しており、基盤層の部分ではこれらが互層になる部分も確認できる。

古代から中世にかけての遺物包含層は、中間色粘土質シルトを主体に、名神高速道路の北側にある 07Gb 中区・07Aa 区・07Ab 北区・07Ab 南区・07Bb 南区や名神高速道路の南側にある 07Jc3 区・07E 区・07Fa 区・07Fb 区において 0.1m ～ 0.4m 程みられ、本遺跡の周辺部分に多い傾向がみられる。弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物包含層は、暗色粘土質シルトと中間色粘土質シルト、中間色極細粒砂を主体にみられ、07Aa 区・07Ab 北区・07Ab 南区・07Bb 南区 07C 区全体・07D 区全体・07Gb 中区・07Gb 南区・07H 区全体・07I 区全体・07Ja 南区に層厚 0.1m ～ 0.6m 程で広がっており、弥生時代の遺構分布とほぼ対応している。この堆積の中で、弥生時代中期～後期の遺物包含層である暗色粘土質シルト層は 07Aa 区・07Ab 北区、07Ca 中区から 07D 南区にかけて、07Ia 北区南側から 07Ia 南区北側にかけて、07Id 区・07Ie 北区の地点に確認でき、標高 10.2m ～ 10.8m にみられる。名神高速道路南側の調査区では基盤層を掘り込む撹乱が多く、概して遺構の残存状況は悪かったが、07Ja 南区に弥生時代中期から古代にかけての遺物包含層が確認できたのは、本遺跡が名神高速道路の南側にひろがることが確認できた点で重要である。





第７図　町屋遺跡基本土層図（土層図垂直方向は１：100）

第２節　各調査区の概要

今回の発掘調査できた調査区は、県道の両脇部にあたる小さく長細いものが多く、調査地点により遺構の残存状態に大きな違いがあり、また確認された遺構の時期・形状も差異があるため、各調査区において調査の概観を述べ、その後遺構面ごとに主要遺構について述べる。

尚、遺構の時期について、古墳時代前期以前は弥生時代中期前葉をＡ期、弥生時代中期中葉前半をＢ期、弥生時代中期中葉後半をＣ期、弥生時代中期後葉をＤ期、弥生時代後期をＥ期、古墳時代前期前半をＦ期として、記述した。

・07Aa 区（第８図・第 22 図・第 36 図）

概観

表土層（約 60cm 厚）下の黄褐色シルト層の上面を第１面（標高約 10.5 ～ 11.0m）、その 50 ～ 60cm 下の礫まじりシルト層上面を第２面（標高約 10.2 ～ 10.5m）、さらにその約 10cm（調査区北端で約 20cm）下の黒色シルト層上面を第３面（標高約 10.0m）とした。第１面で古代（7 世紀）の土坑、第２面で弥生時代集落の遺構が検出された。一方第３面は、北へ向かって傾斜する地形で、ピット状の落ち込みが多数みられたものの遺物の出土はなく、これらは植物の痕跡と考えられる。

【第１面】

010SK　楕円形の土坑である。長軸 0.62m 短軸 0.43m で深さは 0.17m である。011SK と一部重複し、関係は 011SK → 010SK となる。遺物は、須恵器杯身が出土している。時期は I-17 号窯期で７世紀後半である。

011SK　010SK と一部重複して検出されたやや崩れた円形の土坑である。こちらが先行する。東西方向の軸は 0.8m で深さは 0.44m である。遺物は土師器長胴甕の口縁が出土している。時期は概ね７世紀代である。

【第２面】

046SK・047SK　調査区北半部で検出された黒色土層を畦畔のように挟んで分布する黄褐色土の土坑である。一見水田のような景観であるが、検出時には明瞭であった平面形も、掘削すると境界がはっきりしなくなった。出土遺物はない。第３面の草本類痕と同じく人為的なものではないと考えられる。

・07Ab 北区（第８図・第 22 図・第 36 図）

概観

07Aa 区に南接する。第１面（標高約 11.0m）では古代～中世、特に 100SK・103SK のような明瞭な中世の土坑が検出されている。第２面（標高約 10.6m）では弥生時代中期の遺構が検出された。なお当該調査区では調査区東壁にそってサブトレンチ掘削を行い、第２面から約 80cm 下（標高約 9.8m）で礫層を確認した。

【第１面】

100SK　およそ南北方向に長軸となる楕円形の土坑である。長軸はグリッド北から東へ 20° 振れる。残存最大長は 1.36m、深さは 0.2cm である。遺物は山茶碗の小片が出土しており時期は中世と考えられる。周辺で検出されている同形状の土坑群中で最も残存状況が良い。

103SK　100SK と重複しそれに先行する土坑である。形状や大きさが 100SK とほぼ同じであり、これも同時期の土坑墓の可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。

【第２面】

110SB　調査区南部に位置する。竪穴建物の北西隅部が検出されている。建物方位はグリッド北から西へ 35° 振れる。その北西辺では壁溝が認められる。北西辺長は 1.54m ある。遺構の重複関係は、111SK より前で 112SK・113SK より後になる。顕著な出土遺物はなかった。

・07Ab 南区（第８図・第 22 図・第 36 図）

概観

07Ab 北区の約 2m 南の地点から設定した調査区である。基本土層は同区とほぼ同じである。第１面（標高約 10.9 ～ 11.0m）で古代～中世の遺構、第２面（標高約 10.3 ～ 10.5m）で弥生時代の遺構が検出された。なお、第２面は遺構の重複が多いため、まず上部に位置する溝群を調査し、その後下位の竪穴建物２棟などの遺構を調査した。

【第１面】

080SK　調査区北端で検出された隅丸方形土坑の一部である。出土遺物はなかったが、形状から墓坑と考えられる。

081SK　調査区半ばで検出された、東西方向に長軸となる楕円形土坑の一部である。長軸 1.17m 以上、短軸（幅）は 1.09m、深さは 25m である。遺物は、須恵器無蓋高杯（H-50 号窯期～ I-17 号窯期）で 7 世紀中葉～後葉である。遺構形状や遺物から古代の土坑墓と考えられる。

【第 2 面】

084SD　085SD に重複して検出された溝状遺構である。深さは 0.25m である。屈曲部があることなどから第 3 面の 094SB の上層部分に相当する可能性が高い。遺物は C 期の太頸壺や深鉢が比較的大きな破片で出土しており、第 3 面検出の竪穴建物の時期に関わると考えられる。

085SD　調査区を北東から南西へと抜ける溝である。幅 0.94m、深さは 0.25m である。出土遺物は小片で先行する 084SD に由来するとみられる。

087SD　調査区南部で検出された溝状遺構である。085SD と重複しそれに先行する。全体形は不明であるが、調査区東壁によるとその断面は皿状をしており、竪穴建物の可能性も考えられる。顕著な出土遺物はないが、周辺状況から C 期と考えられる。

【第 3 面】

093SB　グリッド北から若干西へ振れる竪穴建物である。調査区北部で北東隅部を検出し、南部は上位の溝（085SD など）により不明瞭であった。このような状況であるため床面はほとんど残存せず、また顕著な遺物はなく弥生土器の小片が出土したのみであった。深さは 0.09m である。遺構の重複関係では、093SB → 094SB となる。 094SB　093SB と重複して検出された竪穴建物である。壁溝の屈曲部が検出されている。建物方位はグリッド北から西へ 50° 振れる。建物平面形における一辺の長は推測するしかないが、仮に 093SB と同規模のものを推測することも可能である。出土遺物は弥生土器小片であったが、第 2 面の 084SD が当該遺構の埋土上層であると考えられ、それによると C 期である。

・07Ac 北区（第 8 図）

概観

07Ab 南区から約 4m 南から設定した調査区である。撹乱などの表土層が地表面下約 1.3m 以上あり、07Ab 南区以北でみられた第 1 面は、当該調査区では滅失していた。加えて調査区南側に向かって基盤砂層が上昇傾向にあるため、同第 2 面相当の遺構の残存状況も良くなかった。この検出面の標高は約 10.3m である。遺構は、東西方向にのびる数条の溝や不定形な土坑状遺構が検出されるにとどまり、弥生土器は 037SK で出土したのみである。したがって大半の遺構について時期は不明である。

【第 1 面】

025SD　調査区半ばで東西方向にのびる溝である。幅約 1.5m、深さ 0.29m で中央部ややや凹む浅い皿状の溝である。方位はグリッドの東西方向からやや北東ないしは南西へ振れる。重複関係では 024SK・026SK より後で、顕著な遺物はなかったものの、相対的に新しい時期と考えられる。また 027SD・029SD などとほぼ同じ規模であることから古代・中世以降の地境溝である可能性も考えられる。

027SD　調査区半ば、025SD の南側で同様に東西方向にのびる溝である。幅 1.13m、深さ 0.21m である。方位はグリッドの東西方向からわずかに南東ないしは北西方向に振れる。断面形は緩やかな湾曲である。重複関係では 029SD より前である。

029SD　調査区半ば、027SD の南側で同様に東西方向にのびる溝である。幅 1.41m、深さ 0.14m である。方位はグリッドの東西方向からわずかに北東ないしは南西方向に振れる。断面形は浅い皿状である。

・07Ac 南区（第 9 図）

概観

07Ac 北区の南端から南へ約 2m の地点から設定した小調査区である。地表面下約 1.5m まで撹乱などを含む表土層が、標高 10.0m 前後の基盤砂層まで達しており、遺構は完全に滅失していた。また顕著な遺物の出土もなかった。

・07Ba 区（第 9 図）

概観

調査着手前の段階で産業廃棄物の存在が想定されていた調査区で、試行的に調査区北端から表土掘削を

開始した。そして北端から約 3m 掘り進めたところで大規模な撹乱があらわれたためそれ以上の掘削を中止した。土層 SP9-SP10 では、撹乱に相当する表土層上層（1 層）が北から南へ掘り下がりその先で基盤層を掘り込んでいることが示され、ここから南側での遺構検出は不可能と判断される。

・07Bb 北区（第 9 図・第 23 図）

概観

07Ba 区に南接する調査区で、地表面から約 1.2m は撹乱などの表土層が一部基盤層にまで達していたが、東西方向の溝 029SD・030SD が検出できた。検出は 2 回実施しているが、検出面のレベルはほぼ同一で標高は約 10.3m である。

【第 1 面】

005SD　東西方向にのびる溝状遺構である。断面は深さ約 10cm の浅い皿状である。顕著な遺物はなかった。

【第 2 面】

029SD　調査区北端に位置する東西溝である。調査区北壁付近で北側上端が検出され、幅 1.00m、深さは 0.24m である。断面は逆台形になるとみられる。遺物は C 期以前のものがごく小片で出土する。当該溝の東方延長には 07Ha 区 028SD があり、同一溝の遺構と考えられる。

030SD　029SD から南へ約 3m に位置する東西溝である。幅 1.25m、深さ 0.24m、断面逆台形をしており、029SD とほぼ同じ規模である。溝の方向はグリッドの東西方向からやや北へ振れておりその東方延長には 07Ha 区 024SD があることから、両者は同一溝の遺構とみられる。

・07Bb 南区（第 10 図・第 24 図）

概観

07Bb 北区から南へ約 5m 離れた地点から設定した調査区である。表土層（70 ～ 80cm）下の、調査区北半部では砂層、同南半部ではシルト層上面を遺構検出面とした。検出面の標高は約 10.6 ～ 10.7m である。調査区東壁（土層 SP15-SP16）によれば、基盤層が北から南へ下り傾斜になっている。遺構は、弥生時代から中世までのものが同一面で検出されたが、遺構数が多数になることから遺構検出と掘削は 2 回に分けて実施した。

【第 1 面】

023SD　調査区南部に位置する幅 0.70m の東西溝である。断面形は浅い皿状である。遺物は土師器高杯の脚部が出土している。E 期以降と考えられる。

【第 2 面】

008SD　調査区内を北西から南東へぬける溝である。幅 1.35m、深さ 0.66m である。断面形は縦長の逆台形で掘削後崩落が進まぬうちに埋没したと考えられる。遺物は少ないが C 期の太頸壺がある（E07Bb001）。形状から周溝墓の一角と推定するが、その場合調査区東側に展開していたとみられる。

035SB　調査区南半部で壁溝とみられる幅約 10cm の小溝を 2 条検出した。それぞれ南北方向と東西方向に延びる。これらを組み合わせて竪穴建物の壁溝を想定すると、グリッド北に対して西へ 12° 振れる方位となる。わずかな痕跡であるため所属遺物を特定しがたい。

043SB　035SB と重複してそれに先行する竪穴建物である。南東隅部が検出されており、東辺はグリッド北から西へ 20° 振れる。明瞭な壁溝は検出されなかったが、竪穴建物の一部と推測した。顕著な遺物はなかった。

038SD　調査区南端に位置する東西方向の溝である。北側上端が検出され、全体に浅く中央部がやや凹む形状である。ハケ調整甕片が出土している。

・07Bc 区（第 10 図）

概観

以前はガソリンスタンドとして利用されていた区画に設定した調査区である。地表面下約 1.3m の基盤層まで最近の撹乱層が入り込んでおり、コンクリート基礎があるなど遺構の残存状況は良くなかった。遺構検出面の標高は約 10.3m である。また、顕著な遺物の出土もなかった。

・07Ca 北区（第 10 図・第 24 図）

概観

全長約 2m の小さな調査区であるが、東西方向にのびる溝などを検出した。検出面の標高は約 10.3m である。

177SD　東北東から西南西方向にのびる溝の一部である。調査区内では北側の上端と南側への傾斜部分が確認できたのみで、幅 1.4m 以上、最深部は 0.22m

以上でその南側 07Ca 中区との間にあると思われる。顕著な遺物はなかった。なお、当該溝を東方に延長すると 07Ia 北区の 114SD に達する。

・07Ca 中区（第 11 図・第 25 図）

概観

南北約 15m の調査区である。畑地として利用されていたため大規模な撹乱はなく、表土層は地表面下約 80cm までである。しかしながら基盤砂層は標高 10.5m まで上昇しており、その上面でのみの遺構検出となった。ただし遺構の重複が激しいため、調査区南半部を中心に調査は 2 段階に分けて実施している。調査区の北端には東西方向の溝 208SD があり、そこから南側では上位で 208SD と同方向とみられる竪穴建物数棟が検出され、下位では向きの異なる竪穴建物が 2 棟検出されている。さらにそれらが廃絶した後に多数の土器が出土する土坑 203SK が調査区南端で検出されている。

【第 1 面】

186SD　調査区北部に位置する南北溝で、調査区西壁に沿って東側上端が検出されている。幅は 0.76m 以上あるが小溝に近いと考えられる。深さは 0.37m である。明瞭な遺構の重複関係を確認でき、187SD の埋土を掘り込んでおり、南端は 189SK ～ 192SK に掘り込まれている。時期はD期～中世と考えられる。

187SD　調査区北部に位置する東西溝である。グリッド北に対してほぼ東西方向に延びる南側上端が検出された。断面は緩やかなＶ字形をしており、上幅が約 2.9m 以上あるのに対して、底面幅が比較的狭いのが特徴である。深さは 0.38m である。遺物（E07Ca009 ～ E07Ca015）は小片だが甕を中心に比較的多くみられる。時期はＤ期と考えられる。当該溝の東方延長には同時期の溝07Ia北区076SDがある。

190SK　調査区半ばに位置する方形皿状の遺構である。西辺長から一辺は約 2m と推定される。平らな底面で 189SK が検出されている。また重複関係では 186SD 南端埋土を掘り込んでいる。遺物は尾張第 6 型式の山茶碗があり、時期は 13 世紀以降と考えられる。

195SD　調査区半ばに位置する東西溝である。グリッド北に対して若干南東に振れる。検出面での上幅約 1.5m、深さ 0.41m である。断面形は逆台形の中央部に対し両脇が浅くなる。重複関係は、186SD より後で 193SK や南側で同様に掘り込まれる 196SD より前である。遺物にヒサゴ壺片があるため時期はＦ期以降となるが、古代～中世の可能性が考えられる。

198SK　調査区南部に位置する。調査区西壁に沿って検出された推定隅丸長方形の土坑である。

199SD　調査区南部に位置する東西溝である。グリッド北に対しほぼ東西方向に延びる。断面形は検出面での上幅 1.56m、深さは 0.08m の浅い皿状である。重複関係は 200SB より後で 197SK より前である。遺物からＤ期以降とみられるが、195・196SD に類似することから古代～中世の可能性が考えられる。

200SB　調査区南端に位置する竪穴建物である。西辺と底面の一部が検出されている。したがってその全体規模は推測域を出ないが、土層断面（C1d-C1d'）によると貼床（2 層）に対し壁溝（1 層）が掘り込まれており、竪穴建物の掘り方を検出したものと考えて差し支えない。遺物はＤ期に相当するものが中心となっているが、以上の検出状況から考えて建物が機能したのはそれ以降と考えるべきである。

201SB　200SB の底面で検出され、その西方へ延長する小溝である。竪穴建物の北（南）壁溝の一部と考えられるが全体形は推測の域を出ない。遺物はなく時期不詳である。しかし周辺でＤ期以降の竪穴建物が検出されていることから、一連のものである可能性が考えられる。

202SB　調査区南端に位置する竪穴建物である。北辺の一部とその壁溝が検出されているのみで、全体形については推測域を出ない。しかしその方向は 200SB と同じくグリッド北から 10° 西に振れている点が共通する。重複関係では 200SB の埋土を掘り込んでいる。遺物はＤ期を中心に一部Ｅ期とみられるものもある。後述する 203SK との関係もあるが概ねＤ～Ｅ期と考えることができる。

203SK　調査区南端に位置する楕円形の土坑である。調査区西壁に沿って一部が検出されたにすぎず、全体規模も南北に長軸 1.15m 以上としか推定できないが、多数の土器が出土したことで注目される。断面形は西壁土層断面（C1Pr-C1Pr'）によると皿状で

深さ 0.06m である。埋土は単層で遺構ほぼ全体にわたって土器が廃棄された状態で出土した。土器の時期は D 期を含むが主体は E 期（E07Ca033・034）や一部は F 期（E07Ca035）に相当する。甕や壺とともに高杯が比較的多く出土している点が注意されよう。他に剥片石器が出土している。この遺構の評価であるが、遺構の重複関係では 202SB などの竪穴建物の埋土をその位置とは関係なく掘り込んでおり、それらとは時期的に断絶したものであると考えられる。E ～ F 期の墓域に関わる遺構と推測される。

【第 2 面】

215SB　調査区南部に位置する竪穴建物である。北東・南東辺が検出されている。しかしそのほとんどは掘り方が残存しているにすぎず、床面や壁溝については不明である。北東辺はグリッド北から西へ 40° 振れる。重複関係では 217SB より後である。

217SB　調査区南端に位置する竪穴建物である。215SB に一部重複して検出された。当該遺構では南西辺の壁溝が確認されたが、残存部分の大半は 215SB と同様に掘り方である。遺物は弥生土器の壺や甕で、D 期と考えられる。

・07Ca 南区（第 11 図・第 25 図）

概観

表土層の厚さは最大 1.2m である。そのため、検出面は基盤砂層上面の 1 面のみである。調査区の位置は、07Ca 北区南端の 202SB や 203SK の続きが検出される可能性が高かったが、大きく削り込まれてそれらは滅失していた。07Ca 基盤砂層は標高 10.1 ～ 10.4m で、北区同様に自然堤防の高所に位置している。複数の土坑と竪穴建物（182SB）が検出されている。

179SK　調査区北東隅を中心に検出された楕円形の土坑である。長軸は約 1.8m 以上、短軸 1.02m で深さは 0.05m である。出土遺物（E07Ca003）から D ～ E 期と考えられる。

182SB　179SK に接し調査区西壁に沿って検出された竪穴建物である。隅丸方形の南東隅を中心に検出され、規模は一辺 1.41m 以上深さ 0.12m である。建物の方向はグリッド北から西へ 30° 振れている。壁溝は確認できなかったが、概ね掘り方部分を検出したものと考えられる。顕著な遺物なかったが、07Ca 北区第 2 面の竪穴建物（215SB・217SB）と同じ方向である点が注目されよう。

183SK　調査区南端で検出された崩れた円形の土坑である。長さ 1.38m 以上あり、緩やかな傾斜ですり鉢状の断面形となる。土器から D 期と考えられる。

・07Cb 北区（第 11 図・第 25 図・第 37 図）

概観

調査区北端から大部分は、地表面下約 1.2m まで近代の水田耕作土による削平があり、水田床土の上面および畦畔の下面を第 1 面として遺構検出を行った（標高約 10.2 ～ 10.4m）。結果、第 1 面では土坑 1 基（234SK）の検出にとどまったが、再度畦畔下層を中心に検出を行ったところ（第 2 面）、竪穴建物 3 棟他の遺構が確認できた。ただし遺構の重複が激しかったため、調査は 2 段階に分けて実施し、下部の遺構は第 3 面として扱った。

【第 2 面】

236SB　竪穴建物の北東辺と壁溝が検出されている。建物方位はグリッド北から西へ 45° 振れる。重複関係では、240SB・241SB より前である。顕著な遺物はなかった。

240SB　236SB の南側で重複して検出された竪穴建物の北西辺である。壁溝は確認できなかったが、立ち上がりや平らな底面から竪穴建物の床面もしくは掘り方とみられる。建物方位はグリッド北から西へ 30° 振れる。遺構の重複関係では 236SB → 240SB → 241SK である。出土遺物は D 期である。土器の他に直径約 20cm の平らな円礫が正位で出土している。そして 07Cb 南区には当該遺構と方位が合致する 248SB がある。遺構底面の標高はいずれも約 10.3m で齟齬のない範囲であり、これらで 1 棟分と考えられる。

241SK　240SB の後になる竪穴建物と推定される直線的な平面形の遺構である。壁溝は確認できなかった。出土遺物は D 期である。240SB 同様、07Cb 南区には当該遺構と方位・底面標高が合致する 246SB があり、これらによって竪穴建物の可能性があると考えられる。その場合建物方位はグリッド北から東へ 30° 振れる。

・07Cb 南区（第 11 図・第 25 図・第 37 図）

概観

07Cb 北区の南端と同様の堆積状況であり、地表面下約 1m に近代の水田畦畔上面がある。そこで第 1 面として水田耕作土を検出した。その後 20 ～ 30cm の包含層を掘削し第 2 面として竪穴建物 246SB を検出した。当該調査区では降雪などによって調査区東壁の中央部が崩落し、そのため土層や付近の遺構平面について十分な記録がとれていない箇所がある。

【第 1 面】

233SD　調査区北部で南側上端が検出された溝状遺構である。それは南東から北西方向に延びており、幅は約 1.3m 以上、深さは 0.18m である。底面は平らで立ち上がりも明瞭な皿状の断面形である。遺物に山茶碗が含まれるので、時期は 14 世紀後半以降と考えられる。これだけで遺構の評価は難しいが、水田耕作時の畦畔もしくは島畑にかかわる箇所ではないかと考えられる。

【第 2 面】

282SB　調査区中部に位置する竪穴建物の一部である。検出時には緩やかにカーブしていたが、壁溝は比較的直線で検出されている。したがって形状が確定的ではない。加えて当該遺構の南側で検出された 285SK と同一である可能性も指摘される。

292SB　調査区北部に位置する竪穴建物の南東隅部である。壁溝は確認できなかったが平らな底面からその可能性が高いと考えられる。遺物は内湾口縁鉢があり D 期と推測される。建物方位はグリッド北から西へ 25° 振れる。

284SK・285SK　調査区南部に位置する。ともに直線的な平面形であるため、竪穴建物の一部である可能性が考えられるが、北側への展開が確定的でないので保留される。ただし位置関係から 282SB が 285SK と同一であった可能性が残るものの、先述のような状況の悪化により検証ができていない。出土遺物から D 期と考えられる。

287SD　調査区南端に位置する溝の一部である。南西から北東方向へ延びる北側上端を検出した。調査区範囲内では浅く平らな形状であったが、その位置は大型周溝墓 07Cc 区 003SD の北側延長に相当する。顕著な遺物の出土はなかった。

・07Cc 区（第 12 図・第 26 図・第 27 図）

概観

今次発掘調査で最初に着手した調査区であり、面積も一番広い。調査前は水田として使用されており、07Cb 区などとほぼ同じ標高約 10.30m までが表土層（水田耕作土）である。第 1 面では、001SX などの浅く広い窪地を検出したが、これは現行水田の耕作に伴う窪地である。そこで再度検出したところ（第 2 面）、弥生時代の方形周溝墓や竪穴建物などの遺構がほぼ同一面で検出できることが判明した。ただし調査区南部を中心に遺構の重複が激しく、そこでは上下 2 段階で調査を実施した（第 3 面）が、それでも判然としない状況であった。遺構の分布は調査区北寄りで方形周溝墓 003SD、その南側に竪穴建物 2 棟（028SB・035SB）があり、さらに南接して大形土坑 051SK がある。検 3 面ではさらにその南側で重複する竪穴建物 3 棟を検出した。

003SD（大型周溝墓）　調査区北部に位置する。調査区内では、北東から南西方向へのびる溝が屈曲して南東方向となる周溝の南西隅部が検出された。北西溝部分は調査区内で約 4.0m 検出され、幅は 2.8m、検出面からの深さは 0.34m で平らな底面をもつ皿状の断面形状をしている。周溝の屈曲部は半径約 2 m のカーブとなり、墓の平面形は隅丸方形となる。一方南西溝部分は、概ね西辺と同じく皿状の平な溝の底面が広がるが、周溝屈曲部から約 2m 南東の位置で、基盤層を掘り残して構築した陸橋が確認された。陸橋は取り付き部分が撥形に開き、半ばの最も括れた部分での幅は 0.6m で、溝底面からの高さは 0.2m である。なおこの陸橋は、003SD 検出時には埋土下にあって見えなかった。その他北西溝部分の底面で溝状の凹み（083SK・100SK）が検出されたが用途は不明である。

003SD の堆積状況は 2 カ所に設定した土層ベルトで確認したが、遺構掘削時には、オリーブ黒色シルトに極細流砂が混じる上層、上層より粘質の強い黒色シルトの中層、基盤砂層を多く含む灰色系シルトの下層を概ね水平に区分して遺物を取り上げた。そのため一部下層の遺物を上層で取り上げている箇所もある。土層断面で確認すると、セクション C2Pa-

C2Pa' では1・2層、セクション C2Pb-C2Pb' では1・3・4層が掘り返し後の堆積であることが判明する。したがって周溝の堆積には大別2時期があると考えられる。上層の底部では多数の円礫が散在して出土した。そして上層堆積後に掘られた土坑004SKからは磨製石斧1点が出土している。追葬もしくは祭祀に関わるものと考えられる。

003SDの時期は、重複関係ではD期の土器が出土した方形土坑145SKより後になる。周溝そのものからは土器片は少なく主体はE期で、若干だがF期のものも含まれる。前者の時期に築造され、後者の時期まで祭祀が継続していたものと考えられる。

028SB・086SK　調査区半ばに位置する竪穴建物である。調査区内では概ねその東半部が検出された。東辺長は3.18mで、平面形は隅丸正方形とみられる。建物方位はグリッド北から西へ24°振れる。遺構の重複関係は、南接する035SBより後で、さらに当該遺構の埋土に対して掘り込まれた溝状の土坑086SKがある。その位置と平面形は、028SB底面のレベルでは概ねその東辺に沿う溝状をしている。しかし当該遺構は当初028SBと同時に検出されており、検出時には028SB南東隅を起点とする細長い扇形で端はその北辺にまで及んでいた。基本平面図で示しているのは、028SB底面を掘り貫いたその最深部である。086SKからはD期の甕が多数出土している。

028SBの底面ではピット（130SK～137SK）が検出され、4本柱で上屋を支える構造であったとみられる。なお壁溝は確認できていない。また、竪穴建物の掘り方を全て掘ると、中央が比較的浅く四隅が凹む形状になる。遺物はC～D期である。

035SB　028SBに北辺の一部が重複する竪穴建物である。建物方位は同じで、前後関係は035SB→028SBとなる。南辺長は3.80mで、平面形は隅丸正方形である。南辺から西辺にかけて壁溝が廻っている。底面でピットが検出されているが、028SBのような4本柱構成にはならず不均衡な位置にある。遺物はD期が主体である。

051SK　調査区南部に位置する北東から南西方向に長軸となる不定形な土坑である。主体となるのは051SKであるが、遺構検出面では円形土坑（050SK・055SK）が重複して検出されており、それらは051SK埋没後の掘り込みである。

051SKの形状は、隅丸長方形の深い部分とその南側に取り付く台形の浅い部分とで構成される。土層断面（C2Pq-C2Pq'）によると両者は重複関係にはない同一遺構と認識され、深い部分の南西端も浅い階段を介して上端に至っていることから、何らかの上部構造に関わる形状と考えられる。深い部分は、長軸3.05m、幅1.17m遺構面からの深さ0.54mである。検出段階から多数の土器・石器剥片や焼土・炭化物が埋土に含まれていた。土層断面（C2Pr-C2Pr'）は、北東端付近のみしか図示されていないが、これは遺物の取り上げと小片遺物抽出目的で埋土を採取したためで、土層の大半は1層である。この層は051SK廃絶後の凹みを利用した廃棄土坑で、直接的には051SKの機能に関わらないものと考えられる。3層は黄褐色シルトブロックを多く含み、埋め戻しがなされたことがうかがえる。そしてその下位には厚さ約2cmの炭化物層（5層）がほぼ均一に底面を覆っている。ただしこの層に焼土は含まれず、底面も被熱による赤色化はしていない。それは壁面も同様である。なお051SK機能時期については、3・5層から土器がほとんど出土しなかったため不明である。しかしながら1層から出土した　弥生土器壺・深鉢がA～B期であることから、そこから大きく遡ることはないと考えられる。その用途は、底面が安定しているので貯蔵穴などが考えられる。

097SX　調査区南部に位置する遺構である。028SBや051SKと方位の揃う竪穴建物の北西・北東辺とみられるラインを検出した。しかしながら掘り下げてみるとそれに伴う位置に壁溝は確認されず、それぞれ約40cm内側で壁溝状の小溝（138SD・173SD）が検出された。そのため竪穴建物平面形の再検討が必要となったが、その間にも磨製石斧3点がまとまって出土した長方形土坑（093SK）や鳥形土器の出土した円形土坑（123SK）などが検出され、複雑な遺構の重複であったことが判明した。その中で097SXより後になるのは093SKで、それ以外は先行する遺構群と考えられる。また竪穴建物の可能性が高いのは上記した小溝に囲まれた空間のみである。遺物は

ほとんどがD期に該当し、028SB・035SBの時期と併行する。

123SK　097SXの下位で検出された楕円形の土坑である。明瞭な掘り込みでその底部から鳥形土器（E07Cc121）が出土した。出土状況から意図的に投入されたと考えられる。D期の土器が共伴する。

・07Cd区（第12図・第26図・第27図）

概観

07Cc区南東隅は、機材搬入のために一旦調査をせずCc区完了後に実施した。これを07Cd区とよぶ。遺構は不明瞭で上位で竪穴建物らしき265SBを検出したが、これはCc区の溝状遺構093SXと方位が同じえこれに関わる遺構と考えられる。そしてその下位で267SKを検出した。

267SK　竪穴建物の一部の可能性がある遺構である。その南東辺には壁溝が伴う。一方北東辺も検出されたが265SBに削平されており全体に不明瞭であった。しかもこの延長上の07Cc区で続きとなる遺構が検出されておらず、確実なのは南東辺のみといえる。南東辺については07Cc区の壁溝とみられる小溝（138SD･173SD）が相応しい位置関係にあり、それぞれ北西辺・北東辺とみれば一辺約3.8mの竪穴建物を想定することができる。この竪穴建物の方位は07Cc区028SB・035SBとほぼ同じである。顕著な出土遺物はなかったが、上位で掘削した265SBからはD期の土器が出土している。

・07D北区（第28図）

概観

名神高速道路すぐ北側に設定した調査区で、幅1m以下という狭小なトレンチになっている。地表面から約1.3mまで造成土や旧耕作土がみられ、基盤砂層上面で遺構が検出された。遺構は竪穴建物003SB以外に小ピットがある。

003SB　調査区北端で検出された竪穴建物である。土層断面SP33-SP34およびSP34-SP35における状況から、概ね竪穴建物の南西隅部が検出されたものと考えられる。規模は一辺0.5m以上、深さは0.15mである。掘り方部分が検出されたものであろう。遺物からD期と考えられる。

023SD　003SBの底面で検出された、屈曲する小溝である。その形状から竪穴建物の壁溝と考えられる。方位は003SBとほぼ同じであるが、003SBの壁面立ち上がりから約20cm内側に位置しているため、別の竪穴建物に関わる可能性もある。

・07D南区（第28図）

概観

07D区中部は、水道管の埋設が確認されたため調査不能となった。結果その南側のわずか2㎡を07D南区として調査した。地表面下約1.2mまでが表土層で、基盤砂層上面を検出面とした。

022SD　調査区南端で検出された溝である。土層SP37-SP38によるとV字形に近い断面形状をしており、環濠の可能性もある。遺物は少なかったが弥生土器からD期と考えられる。

・07E区（第13図）

概観

名神高速道路の側道の南で、県道の西に位置する調査区で、調査区が店舗の敷地と県道の間にあたるため、幅狭の南北に細長いものになった。表土の盛土と現代の旧水田耕作土が1m以上に及び、脆弱であったため、遺跡基盤砂層まで機械により掘削し、地表より1.6m～1.7m下の標高9.7m前後にて、遺構検出を行った。確認できた遺構は近世後期以後の旧水田耕作土の上から掘削される溝2条（003SD・004SD）と土坑1基（005SK）、近世以後の旧水田耕作土の下にて確認できた溝1条（001SD）・調査区の基盤砂層ともなる自然流路（006NR）である。001SDは幅0.7m以上、深さ0.35mの丸底の東北東から西南西の方向にのびる溝で、埋土は灰オリーブ粘土質シルトであった。006NRは調査区の北端を流路の北肩とするもので、黄灰色細粒砂の堆積をもとに認識した。

・07Fa区（第13図）

概観

07E区から道を挟んで南にある調査区で、地表から1.15m下の標高10.1m前後にて遺構検出を行い、溝4条を確認した。

005SD・006SD　どちらも幅1.0m前後のほぼ東西方向に走る溝で、005SDが深さ0.3mの黄褐色粘土質シルトの埋土の溝、006SDが深さ0.15mのオリー

ブ褐色粘土質シルトの埋土の溝で、どちらもやや平底のものであった。

007SD　北東から南西にのびる溝で、この溝の南側にある近世以後の旧水田耕作土に伴う可能性がある。幅 0.6m、深さ 0.3m の丸底で、008SD と平行するようである。弥生土器片が出土しているが、中世以後の遺構と思われる。

008SD　調査区の南端で近世以後の旧水田耕作土の下から検出できた溝で、黒褐色粘土質シルトの埋土である。07Fb 区 001SD と同一の溝である可能性が高い。

・07Fb 区（第 13 図・第 29 図）

概観

07Fa 区の南に隣接する調査区で、地表から 1.5m 下の標高 9.7m 前後にて遺構検出を行い、溝 1 条、水田遺構 1 筆、土坑 1 基を確認した。

001SD　北北東から南南西にのびる溝で 008SD の下層部分にあたり、位置から同一の溝と考えられる。南東側に 001SD の堤となる 003SX が上面幅 0.6m 程であり、その南東側に深さ 0.2m の水田遺構と考えられる 002ST がある。これらの遺構の埋土は、暗オリーブ褐色～黒褐色粘土質シルトで類似したものであった。弥生時代中期の土器が出土しているが、時期は中世後半以後であろう。

004SK　002ST と 003SX の下から検出された遺構で、形状から土坑と認識して調査を行ったが、遺構の北西側上端が 001SD の軸線とほぼ共通することから、001SD と同様な溝の可能性が高い。遺構の北東側上端しか確認できていないが、幅 1.3m 以上、深さ 0.6m 以上のものである。弥生時代中期の土器が出土しているが、時期は中世以後のものであろう。

・07Fc 区（第 14 図）

概観

今次発掘調査において最も南端に位置する調査区である。掘削深度と面積の兼ね合いから通常の検出作業は不可能であったため、3 カ所のトレンチ（Fc（1）～（3）区）を掘削し土層の状況を確認した。結果、いずれも地表面から約 1.5 ～ 2m 下まで現代の撹乱・造成土が入っており、その下で造成前の水田耕作土が確認できた。しかしそれ以上の掘削は不能であったため基盤となる砂層を見いだすことはできなかった。また遺物の出土もなかった。

・07Ga 区（第 15 図）

概観

県道の東にある最も北端の調査区で、表土となる盛土と現代の旧水田耕作土を機械により掘削した後、標高 10.4m 前後にて、遺構検出を行った。その結果、基盤砂層である黄褐色極細粒砂層の中に暗オリーブ褐色粘土質シルトの入る落ち込む部分を 048SK・049SK として調査したが、遺物は出土しなかった。遺跡基盤層である礫層と黄褐色極細粒砂層は調査区の北側で下がる状況が観察でき、遺跡のひろがりの北端部分にあたるものと思われた。

・07Gb 北区（第 15 図）

概観

07Ga 区の南に隣接する調査区で、表土となる盛土と現代の旧水田耕作土を機械により掘削した下、標高 10.4m 前後にて、遺構検出を行った。その結果、基盤砂層である黄褐色極細粒砂～灰黄褐色細粒砂層の上面にて灰黄褐色粘土質シルトの部分を 044SD、暗灰黄色粘土質シルトの部分を 045SK として調査した。045SK から南部系山茶碗片が出土し、中世以後の土坑と思われる。

・07Gb 中区（第 15 図・第 30 図）

概観

07Gb 北区の南に隣接する調査区で、表土の盛土と現代の旧水田耕作土下の第 1 面で溝 10 条、土坑 15 基、第 1 面の堆積を除去した下面にて第 2 面にて弥生時代中期後半以後の自然流路 1 条を確認した。

【第 1 面】

近世後半以後の旧水田耕作土より新しい 017SD・020SK・039SK は 039SD において土師器の焙烙・施釉陶器・山茶碗等が出土し、近代にかかる新しい時期の遺構と思われる。また 017SD より新しい 016SD はより新しい時期の耕作関連の溝と思われ、016SD と類似する埋土と形態であった 011SD・013SD も同様な時期のものである。これらの遺構より古い。018SD・019SK・023SK からは弥生土器片が少し出土したのみで、時期を決めることはできないが、中世～近世頃の時期の可能性がある。038SK

は南部系山茶碗片と北部系山茶碗片が出土する楕円形の土坑、042SK は調査区北西隅に検出された須恵器甕片と灰釉陶器壺片が出土する土坑であるが、同様な時期の可能性が高い。

028SD・029SK・035SK・036SD　暗灰黄色・灰オリーブ色極細粒砂の埋土とするもので、調査区北側東壁沿いに検出できた遺構である。028SD と 036SD の南北方向から東に折れる幅 0.4m、深さ 0.25m の形状から、一辺 2.2m 程の小型方形状平面の竪穴建物の周溝と考えられるものである。出土遺物がなく時期は不明である。また調査区中央部の東壁セクション SP61-SP62 にかかる土坑状堆積も、遺構平面では確認できなかったが、同様な遺構の可能性が推定できるものである。

【第２面】

043NR　第１面の下に南東から北西に流れると考えられる自然流路で、灰色～黄灰色のシルト質粘土・粘土質シルト・極細粒砂が互層となる堆積であった。第１面の 015SD は黒褐色粘土質シルトの埋土のものを認識したものであるが、軸線が 043NR とほぼ同一であるので、043NR の最上層の堆積と考えられる。015SD からは E 期と思われる弥生土器片が出土していて、古墳時代前期までには埋没していた可能性が高い流路である。

・07Gb 南区（第 16 図・第 30 図）

概観

07Gb 中区の南に隣接する調査区で、表土の盛土と近世後期以後の旧水田耕作土の下の第１面で東西方向からやや東北東から西南西にはしる溝２条、その下にて検出した第２面で溝３条、土坑６基を確認した。07Gb 中区にて確認した 043NR の南上端は確認できなかった。

【第２面】

010SD　001SD の下にて検出した東西方向の溝で、001SD とやや軸線が異なるので別遺構とした。出土遺物はない。

003SD　西から南に折れる隅部分にあたる可能性がある溝である。005SD とは 003SD との間に別の軸線をもつ 004SK の堆積が確認できたので別遺構と考えた。出土遺物はなし。溝の形状から方形周溝墓の周溝の可能性があるものである。

047SU　特に遺構らしき落ち込みはなかったが、灰釉陶器壺片、南部系山茶碗片、北部系山茶碗片が出土した。

・07Ha 区（第 16 図・第 31 図・第 38 図）

概観

07Gb 区の道路を挟んで南に位置する調査区で、表土下の第１面で近世後期以後の水田跡２筆と溝１条、土坑２基、第１面の水田遺構の堆積を除去した下面にて第２面・第３面の弥生時代中期後半以後の溝 10 条、土坑１基と自然流路の堆積を確認した。第２面・第３面の基盤となる自然流路の堆積と思われる細粒砂層中から弥生時代中期後半頃の双口壺（E07Ha005）と高杯（E07Ha004）が出土した。

【第２面・第３面】

020SD ～ 030SD　弥生時代中期後半以後の溝で、東西方向に流れる 021SD・022SD・023SD・024SD・028SD・029SD・030SD と南北方向から東に曲がる溝 020SD・025SD・027SD がある。これらの溝の掘削・埋没の順序は 029SD → 020SD → 021SD → 023SD → 022SD、030SD → 023SD 、030SD　→ 028SD → 024SD、027SD → 025SD → 024SD の順になり、025SD の位置から考えると 025SD は 030SD より新しくて、023SD・028SD より古い可能性が高い。出土遺物は、掘削・埋没の古い 029SD・030SD から新しい 022SD ～ 024SD まで、弥生時代中期の C 期～ D 期の遺物が出土している。溝の規模では、幅が 1.0m 前後の 020SD ～ 022SD、幅 2.0m 前後の 023SD ～ 025SD・028SD・030SD、2m 以上の 029SD で、020SD・022SD・023SD・025SD・028SD は深さ 0.4m ～ 0.6m 程の断面丸底、021SD・024SD は 0.7m ～ 0.8m 程の断面丸底、029SD・030SD は深さ 1.0m 前後の断面「V」字状の３タイプに分かれる。埋土は掘削・埋没の新しい溝である 022SD に黒褐色粘土質シルトが入るが、それより古い 020SD・021SD・023SD・024SD・028D では明度が中間色の粘土質シルトが入り、一番古い掘削・埋没の 029SD・030SD、南側の 025SD・027SD は中間色の極細粒砂～細粒砂と古い溝程、粒度が粗くなる

傾向がある。また 024SD は 07Bb 北区 030SD と 028SD は 07Bb 北区 029SD と東西の位置関係から同一の遺構の可能性がある。南北方向から東に曲がる溝 020SD・025SD・027SD は溝が方形状にめぐる可能性があり、弥生時代後半の方形周溝墓の一部である可能性がある。

・07Hb 区（第 17 図・第 32 図）

概観

07Ha 区の南側に隣接する調査区で、表土下の第１面で近世後期以後の水田跡２筆、それに伴う畦や溝２条、水田遺構の埋土を除去した下面である第２面にて溝４条、土坑４基がある。第１面の水田遺構はほぼ東西方向にのびる溝と水田遺構は軸線が東にやや振れる。

【第２面】

005SD　南北方向の溝で、南北の両端で東に折れるような形状である。南北両端で深さ 0.7m ～ 0.8m の断面丸底の溝である。005SD の北端部では暗色粘土質シルトが堆積しており、南側ではやや明るい中間色粘土質シルトが堆積していた。出土遺物は C 期～ D 期の弥生土器が出土した。

006SD・009SD　006SD が北東から南東に折れる溝、009SD が北西から南西に折れる形で検出されたもので、006SD の方が新しい。溝の幅はどちらも 2.0m ～ 2.5m で、深さは 006SD が 0.7m 程、009SD が深さ 1.0m を測る。埋土は 006SD が明色粘土質シルトで、009SD は暗色粘土質シルトと明色粘土質シルトが互層となるような埋没状況であった。出土遺物は 006SD が D 期、009SD が C 期の弥生土器が出土している。溝が方形状にめぐる可能性があり、弥生時代後半の方形周溝墓の一部になる可能性がある。

010SD　東西方向の溝で、幅 2.0m 程、深さ 0.6m の溝で、上部の埋土は中間色粘土質シルトである。遺構の新旧関係では 012SK より古く、D 期の弥生土器が出土した。

007SK・011SK・012SK　007SK と 011SK は径 0.6m ～ 0.7m 程の丸底の土坑で弥生時代中期頃の土坑である。012SK は大型の土坑で、南東側に広がる溝になる可能性もある。007SK は遺構の新旧関係から、006SD より新しい。

・07Ia 北区（第 18 図・第 33 図）

概観

07Hb 区より道を挟んで南に位置する調査区で、表土直下にて弥生時代の遺構を検出した。調査区の北端部と南側は遺構検出面が標高 10.3m ～ 10.5m と比較的高いが、中央部から北側では最近の旧水田耕作土が存在したため、遺構検出面が標高 10.2m ～ 10.4m と低くなった。遺構は 076SD の南側にて竪穴建物や土坑がみつかり、076SD の北側では東西方向の溝が４条、自然流路１条がみつかり、現在の地形環境を反映するようにもみえる。

【第２面】

076SD　調査区中央部にある東西方向の溝で、幅 1.4m、深さ 0.7m で、暗色粘土質シルトの埋土であった。出土遺物は D 期のものが多いが１点 E 期のものと思われる弥生土器片が含まれた。県道西側の 07Ca 中区の 187SD と対応するものと思われる。

085SB・113SB・086SB　076SD の南側の高くなった地点に検出された竪穴建物とも思われる遺構で、炭化物が少量入る黒褐色粘土質シルトの部分で長方形状の範囲を検出した。床面は平坦で、遺構検出面からは 10cm 前後と比較的浅い。113SB と 086SB は 104SK に切られているが、同一の遺構である可能性が高い。この付近に 090SK ～ 092SK・099SK ～ 102SK・105SK ～ 107SK などのような径 0.2m ～ 1.0m 程の平面円形の土坑を多数検出した。

095SK　幅 0.7m 程の溝状の土坑である。深さは 0.2m で暗オリーブ褐色粘土質シルトの埋土である。

097SK　幅 1.4m、深さ 0.6m 程の溝状丸底の土坑、当初溝の可能性も考えたが、県道西側の 07Ca 中区において続きとなる溝が検出されていないので土坑とした。D 期の弥生土器が出土した。

111SU・114SD　東西方向の溝で、07Ca 北区の 177SD の続きとなる可能性がある。深さ 0.8m 程で、上層で弥生土器片が集積していた部分を 111SU として取り上げた。D 期の弥生土器が多く出土した。

112SD・115SD・118NR　中間色粘土質シルトの堆積を 118NR とし、その下に 112SD と 115SD が検出できた。112SD の方が古く、07Ca 中区

の 226SD と対応する可能性がある。出土遺物は 112SD・118NR から B 期の弥生土器が、115SD から C 期の弥生土器片が少数出土している。

・07Ia 南区（第 18 図・第 33 図）

概観

07Ia 北区の南に隣接する調査区で、第 1 面の調査区南側にて近世後期以後の 2 筆の水田跡、第 2 面の調査区北側にて竪穴建物 2 棟、土坑 20 基を確認した。

【第 2 面】

127SB　幅 0.2m、深さ 0.1m ～ 0.2m の周溝のみ検出したもので、長辺 3.0m 以上、短辺 1.8m 程の小型平面台形状のプランになるものと思われる。

133SB　短辺 2.0m の隅丸方形状の平面プランになる竪穴建物で深さ 0.05m 程残存していた。埋土は黒褐色の粘土質シルトを主体とするものである。C 期の弥生土器が出土している。

130SK　径 0.7m 程の丸底の土坑で B 期の弥生土器が出土した。

145SK　長径 1.0m、短径 0.7m、深さ 0.35m の丸底の不整楕円形の土坑で、D 期の細頸壺が出土した。

・07Ib 北区（第 34 図）

概観

表土直下にて弥生時代の遺構面となった。溝 1 条・土坑 4 基を確認した。

056SD　07Cc 区 003SD・07Id 区 004SD からなる方形周溝墓の北東側溝にあたるもので、深さ 0.2m 程残存していた。

058SK・059SK　径 0.2m 前後の柱穴で、059SK からは内部断面にて柱痕跡を確認できた。058SK が深さ 0.17m、059SK が深さ 0.32m 程である。

・07Ib 南区（第 34 図）

概観

表土直下にて遺構検出を行った。2 基の土坑 053SK・054SK を確認した。054SK から北部系山茶碗片が出土した。

・07Ic 区（第 34 図）

概観

表土直下にて遺構検出を行った。5 基の土坑を確認した。149SK・150SK から弥生土器が出土した。

149SK　短径 1.1m、長径 2.0m 程の隅丸長方形の土坑で、深さ 0.25m を測る。土坑の底面と基盤層とした暗灰黄色極細粒砂と黒褐色極細粒砂が互層となる堆積層を土坑に含むか基盤層とするか区別が難しかった。

・07Id 区（第 19 図・第 34 図）

概観

07Ic 区の南に隣接する調査区で、第 1 面にて近世後期以後の水田跡 3 筆、第 1 面の水田遺構を掘り下げた後検出した第 2 面にて方形周溝墓の周溝 1 条、竪穴建物 4 棟、土坑 40 基を確認した。

【第 2 面】

004SD　07Cc 区 003SD の続きとなる方形周溝墓の周溝で、南東側溝が幅 3.4m、深さ 0.5m、南西側溝が幅 4.2m、深さ 0.5m を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトに灰色から黄灰色極細粒砂が混じるもので、弥生中期の土器片、石鏃などの石製品が多く出土した。遺構の時期は弥生時代後期（E 期）から古墳時代初頭（F 期）の土器が少量出土したことから、E 期の遺構と考えられる。

005SB・006SB　平面隅丸方形のプランをもつ竪穴建物で、006SB 床面にて地床炉と思われる焼土面が確認できた。時期は D 期である。

031SK・032SK　平面円形の土坑が重複して確認できた。031SK の方が古く、長径 1.0m、短径 0.8m、深さ 0.3m の土坑で、C 期の弥生土器が出土した。032SK は径 0.7m、深さ 0.1m の土坑である。どちらの土坑も灰色粘土質シルトを主体とする埋土に焼土と炭化物が少量混じるものである。

034SB　平面隅丸方形の形態の竪穴建物と思われるもので、黒褐色粘土質シルトの埋土であった。時期は D 期である。この遺構の下から黒色粘土質シルトの埋土で深さ 0.22m の 042SK と灰色粘土質シルトの埋土で深さ 0.18m の 050SK が検出された。034SB に伴う遺構である可能性がある。

・07Ie 北区（第 19 図）

概観

07Id 区の南と 07Ie 南区の北に隣接する調査区ではあるが、調査区に北側が近年の掘削により残存しておらず、南端部のみ調査できた。表土直下にて東西方向の溝 084SD と土坑 083SK を確認した。どちら

の埋土も黒褐色～オリーブ黒色粘土質シルトで、出土遺物からD期の遺構と考えられる。

・07Ie 南区（第19図）

概観

07Ie 北区の南に隣接する調査区で、南に名神高速道路がある。表土下にて近世後期以後の水田耕作土を確認し、その堆積を除去した後暗オリーブ褐色～オリーブ黒色極細粒砂の部分を平面長方形状の竪穴建物やその周溝、土坑を検出した。ただし調査後土色観察では竪穴建物の周溝と思われたものは中間色の暗灰黄色や灰黄色の極細粒砂に分類され記録されている。これらの遺構は深さ0.10m～0.15m程と浅く、竪穴建物などは不明瞭な部分もあり、規模は不明である。

072SK・073SK・110SK　070SB・071SBの　下にて確認できた土坑で、深さ0.3m～0.5mある明瞭な土坑である。互いに重複し、072SKは径1.5m程、110SKは断面にて径1.5m程を測る。072SK・073SKにてA期の弥生土器が出土した。

・07Ja 北区（第20図）

概観

名神高速道路の側道の南に位置する調査区で、調査区が幅狭の南北に細長いもので、表土の盛土が1m以上に及び、脆弱であったため、遺跡基盤砂層まで機械により掘削し、土層断面の観察・調査のみを行った。調査の結果、表土の盛土の下に現代の旧水田耕作土があり、地表より1.4m～1.5m下の標高10.0m前後にて、近世後期以後の遺構面があった。調査区西壁の堆積にて確認できる遺構は水田耕作土1筆と畦畔跡､溝か土坑の落ち込み2カ所が深さ0.3m～0.7mの堆積であった。1カ所の落ち込みは水田遺構より古いものと観察できた。これらの遺構は基盤層となるにぶい黄色細粒砂と黄褐色極細粒砂の大きな互層からなる自然流路の堆積の上に形成されたもので、埋土は黄灰色・黄褐色・暗灰黄色粘土質シルトからなるものであった。

・07Ja 中区（第20図・第35図）

概観

07Ja 北区の南に隣接する調査区で、表土の盛土の下に現代の旧水田耕作土があり､地表より1.0m～1.2m下の標高10.5m前後にて、近世後期以後の水田耕作土3筆と畦畔跡2カ所、溝1条、土坑状の落ち込み1カ所が深さ0.4m～0.7mの堆積であった。埋土は調査区南端で確認した004SKが黒褐色粘土質シルト･極細粒砂の斑土、調査区北側の水田遺構はオリーブ灰色極細粒砂、調査区南側で検出できた002ST・001SDなどは暗灰黄色～灰オリーブ色の粘土質シルトで、基盤層は灰オリーブ色粘土質シルトと同色極細粒砂の互層となる自然堆積であった。001SDは東西方向の溝で幅2.2mを測る。

・07Ja 南区（第20図）

概観

07Ja 中区の南に隣接する調査区で、表土の盛土とその下にある近代以後の旧水田耕作土を除去した標高10.0m前後にて遺構検出を行った。狭い調査範囲ではあったが、弥生時代中期前葉（A期）の竪穴建物1棟、溝2条、土坑2基を確認し、008SBの規模を確定するために、南側を拡張して調査を行った。

006SD　北北東から南南西にはしる幅1.2m、深さ0.45mの丸底の溝で、埋土は灰オリーブ色・オリーブ褐色粘土質シルトである。007SDとほぼ平行してはしる。北部系山茶碗片が出土した。

007SD　北北東から南南西にはしる幅0.7m、深さ0.3mの丸底の溝で、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。出土遺物はなかったが、時期は中世から近世と思われる。

008SB　一辺2.2mの方形プランの竪穴建物で、床面直上にてA期の貝殻描き太頸壺が出土した。埋土は暗灰黄色粘土質シルト・極細粒砂である。

009SK　長径1.0m程、短径0.5m、深さ0.25mの平面楕円形丸底の土坑で、埋土は黄褐色粘土質シルトである。006SDより古く、D期の弥生土器片が出土している。

・07Jb 1区・2区・3区（第20図・第21図）

概観

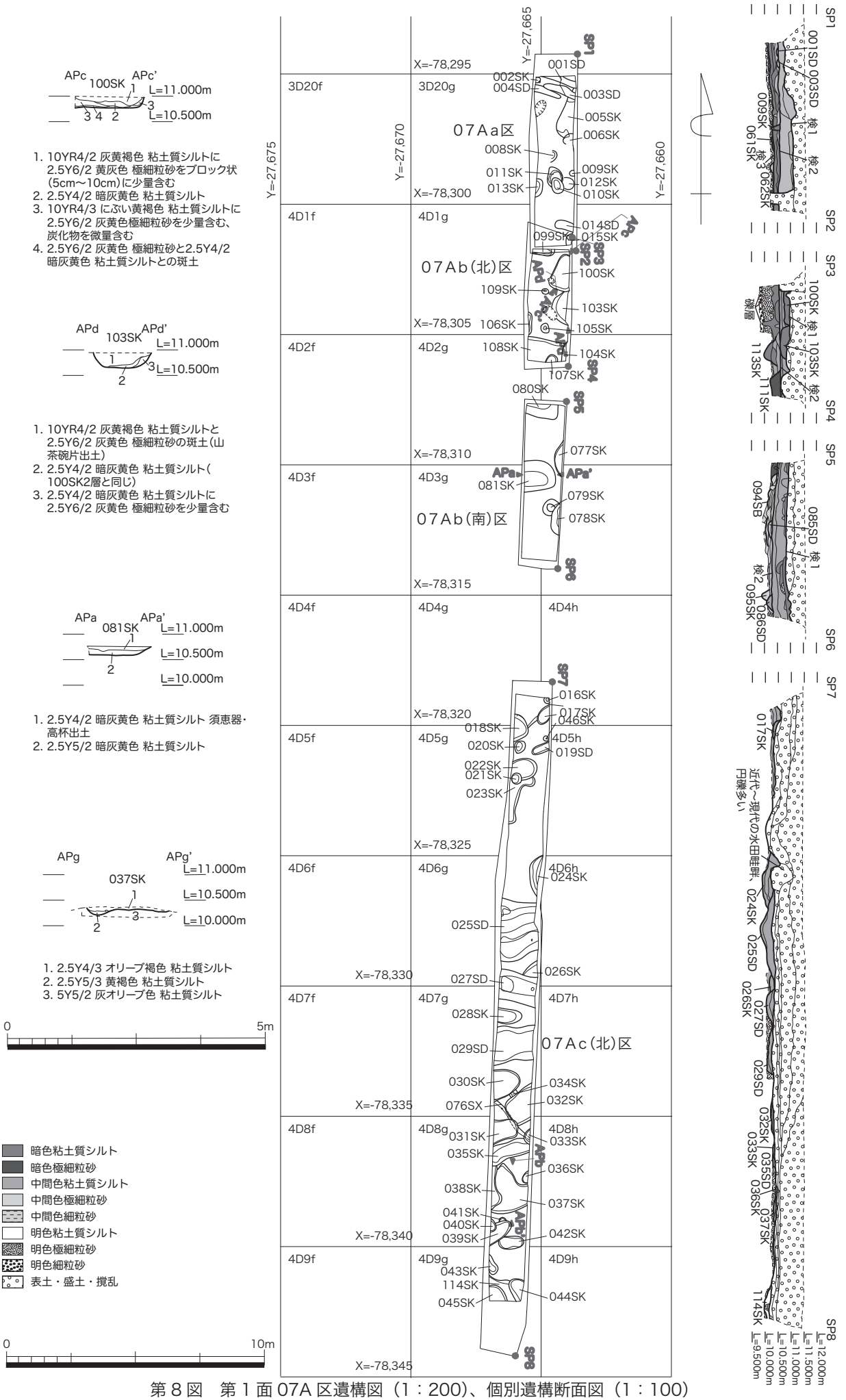
07Ja 南区の南に位置する調査区で、県道の東に営業する店舗の出入り口等を除く地点を発掘調査した。07Jb3区は07Ja 南区の南に隣接する調査区で表土の直下にて遺構検出を行ったが、遺構は確認できず、「検出1」として包含層掘削を行い、弥生土器片が

出土した。その後その下にて遺構検出を行い、北北東から南南西に走る幅 1.4m、深さ 0.7m、丸底の溝 013SD を確認した。013SD の埋土は黒褐色粘土質シルトである。07Jb2 区は 07Jb3 区の南 5m 程にあり、表土の盛土が脆弱であったため、機械により近世以後の旧水田耕作土まで掘削し、基盤層である灰オリーブ極細粒砂層上面にて遺構検出を行ったが、遺構・遺物はなかった。07Jb1 区は 07Jb2 区の南約 13m にあり、07Jb2 区と同様に表土の盛土が脆弱であったため、機械により近世以後の旧水田耕作土まで掘削し、褐色粘土質シルト層上面にて遺構検出を行い、011SK を検出した。011SK は一辺 0.75m 以上の隅丸方形の土坑で、深さ 0.25m 程のもので、埋土は褐色粘土質シルトと暗灰黄色粘土質シルトの斑土である。

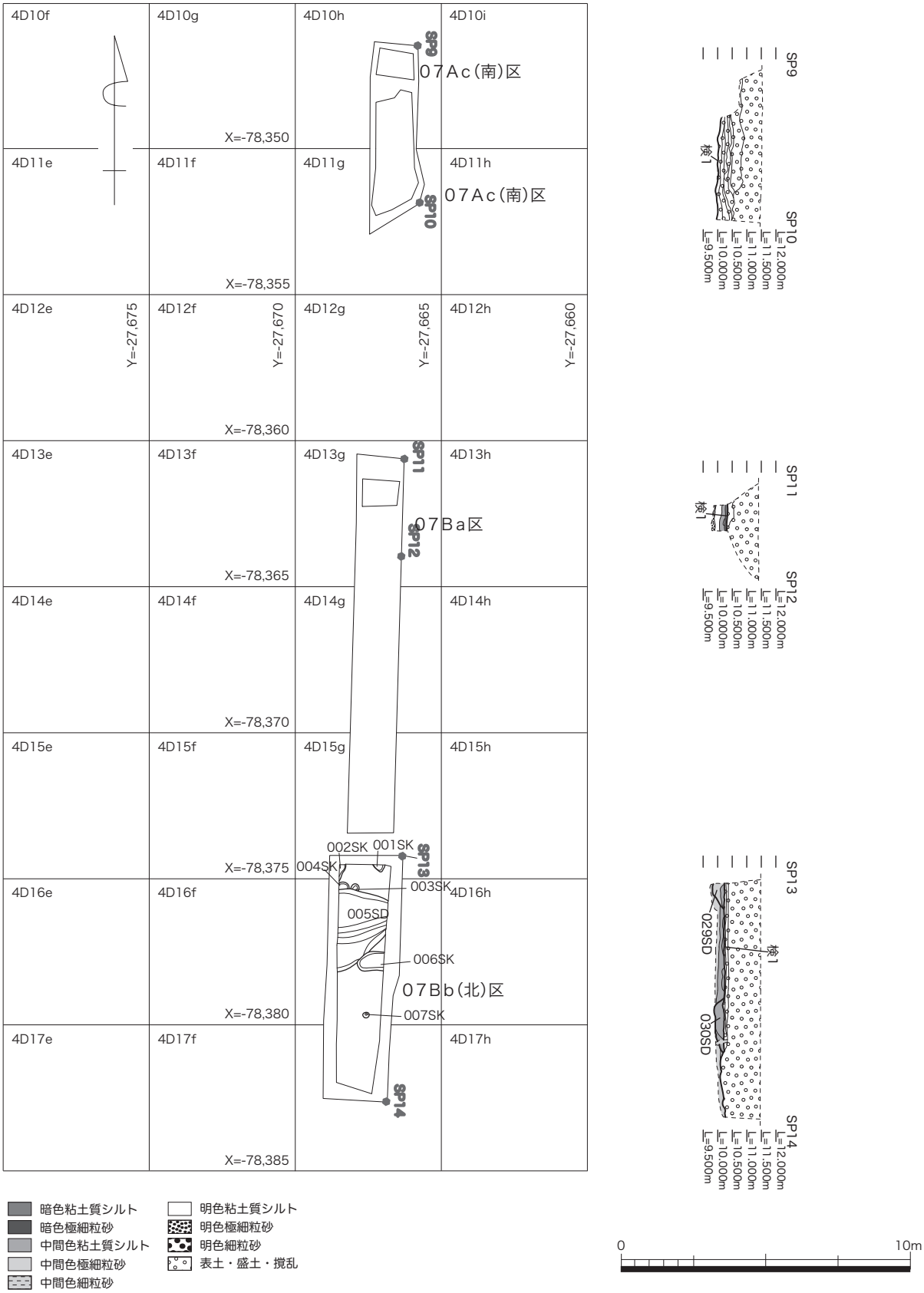
・07Jc 1 区・2 区・3 区（第 21 図）

概観

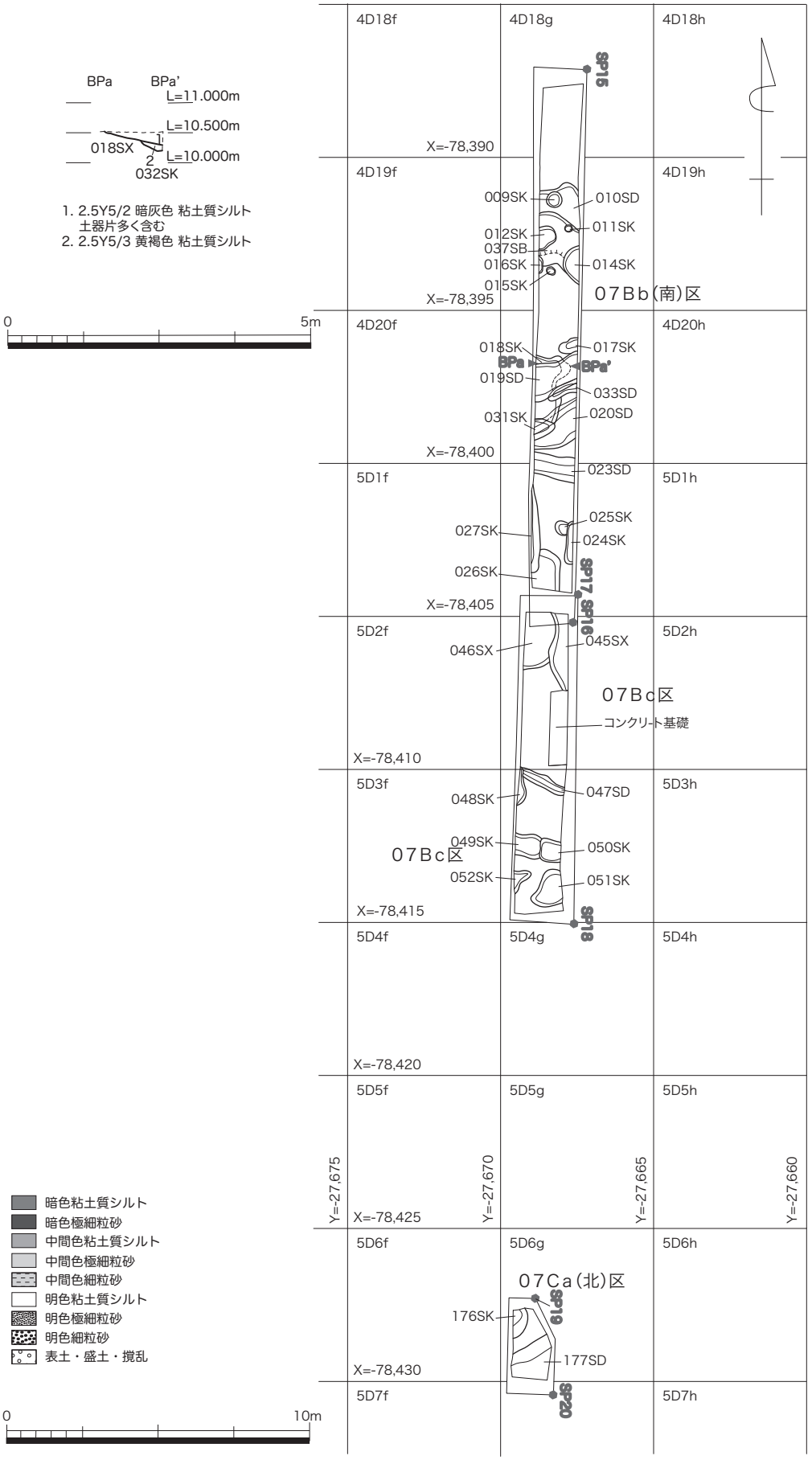
07Jb1 区の南に位置する調査区で、県道の東に営業する店舗等の出入り口等を除く地点を発掘調査した。07Jc1 区は表土と近代以後の新しい旧水田耕作土を機械により除去した標高 9.4m 前後にて遺構検出を行い、010SK を調査した。010SK の規模は不明であるが、深さ 0.25m の丸底の土坑で、埋土は黒渇色粘土質シルトに少量の灰色粘土質シルトが混じるものであった。Jc2 区も表土と近代以後の新しい旧水田耕作土を機械により除去した標高 9.3m 前後にて遺構検出を行ったが、遺構・遺物はなかった。07Jc3 区は表土を機械により除去した標高 10.0m 前後にて遺構検出を行い、東南東から西南西にはしる溝 012SD と近世以後の水田遺構を検出した。012SD は幅 1.0m、深さ 0.85m の丸底の溝で、埋土は褐灰色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトなどが細かい斑土状になる堆積が互層に堆積していた。



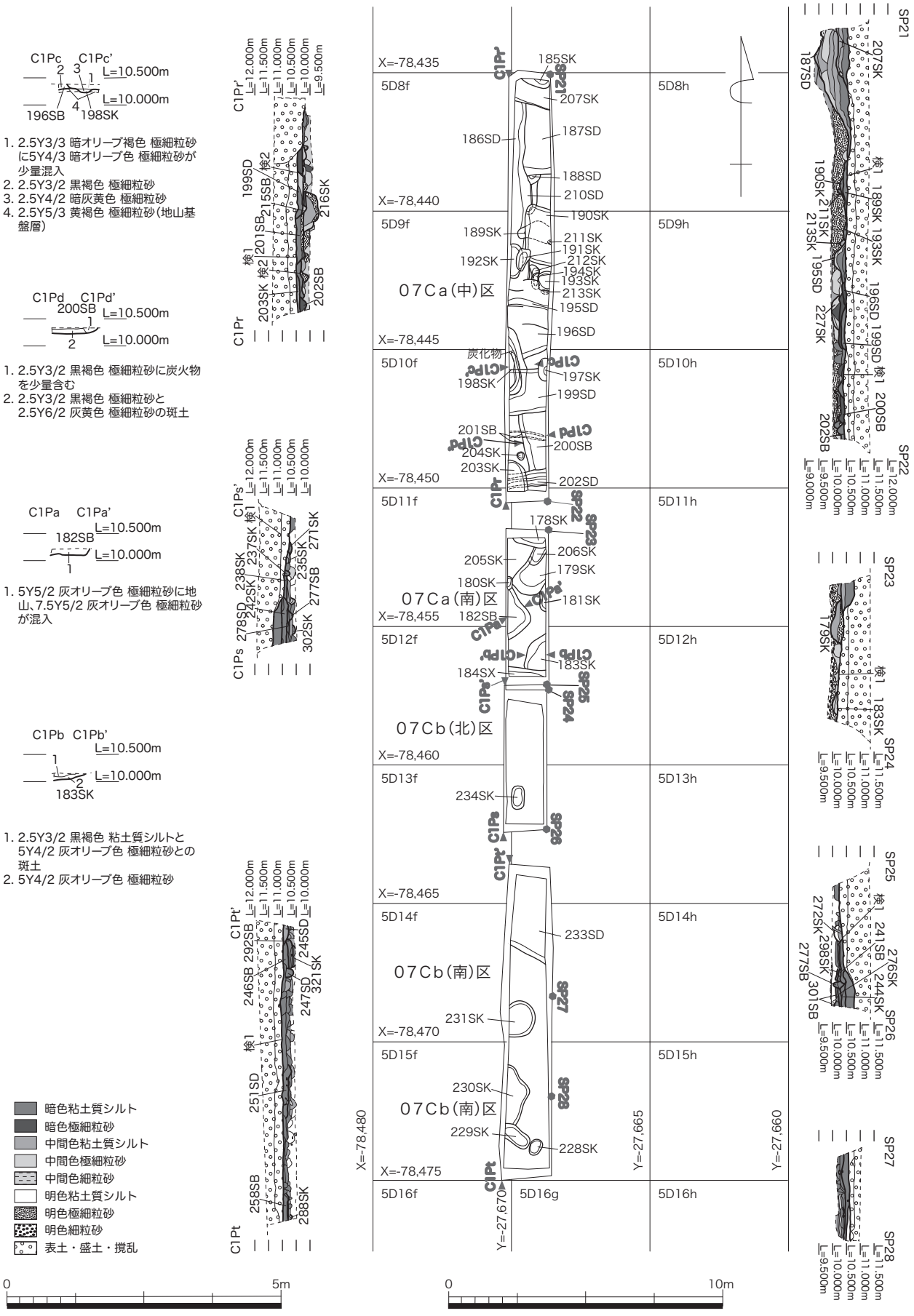
第８図 第１面 07A 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



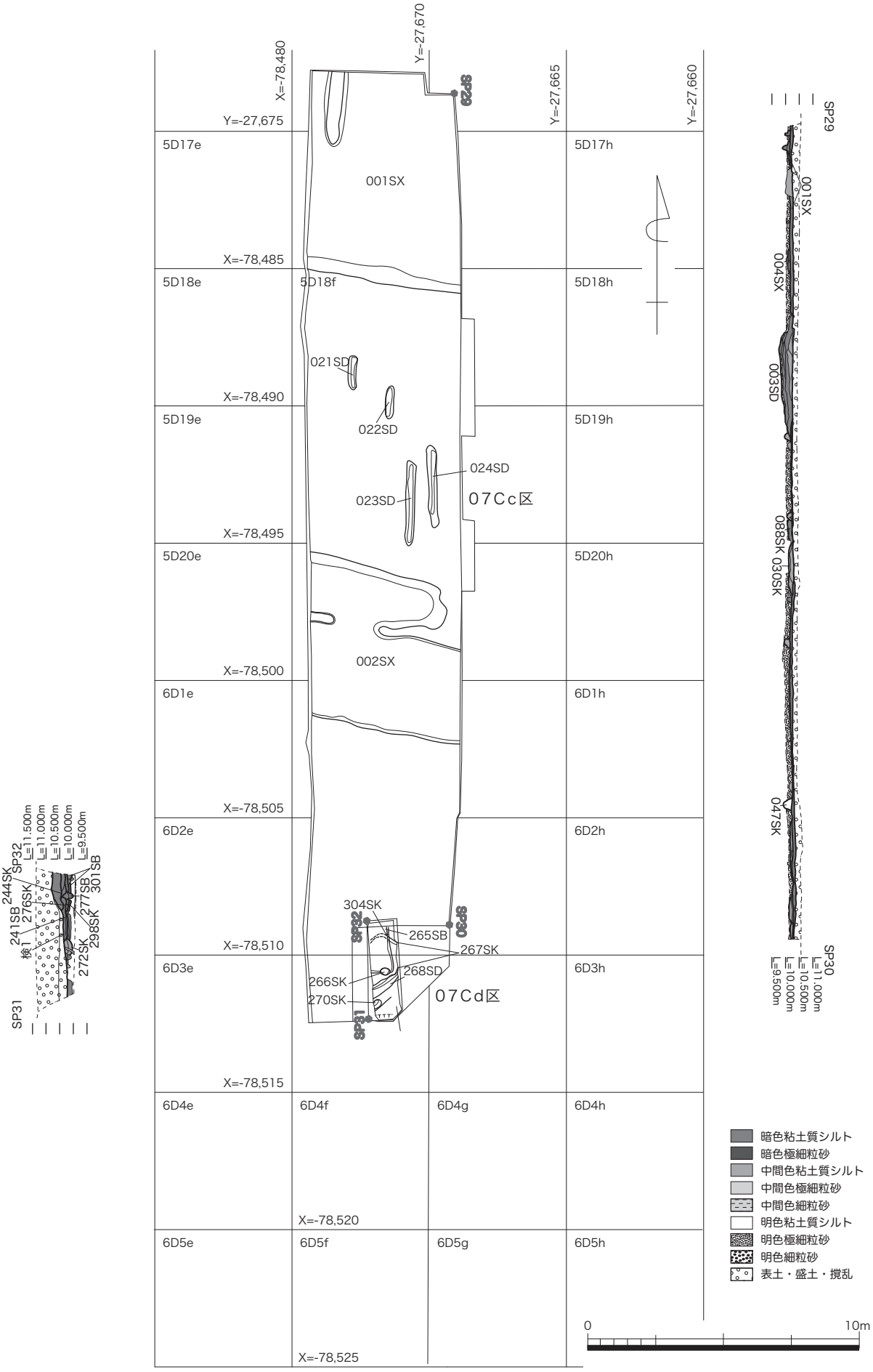
第 9 図　第 1 面 07A 区・07B 区遺構図（1：200）



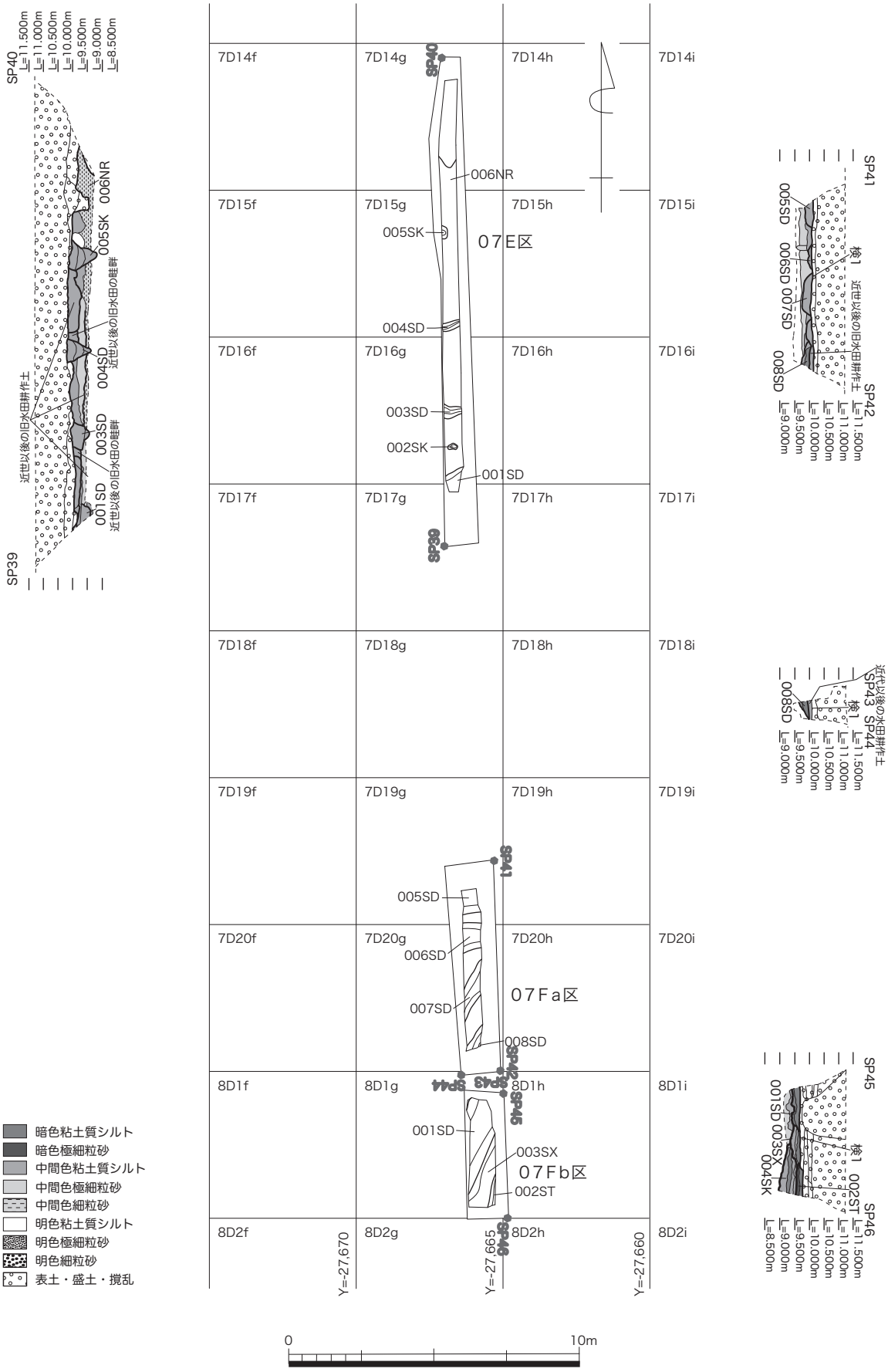
第 10 図　第 1 面 07B 区・07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



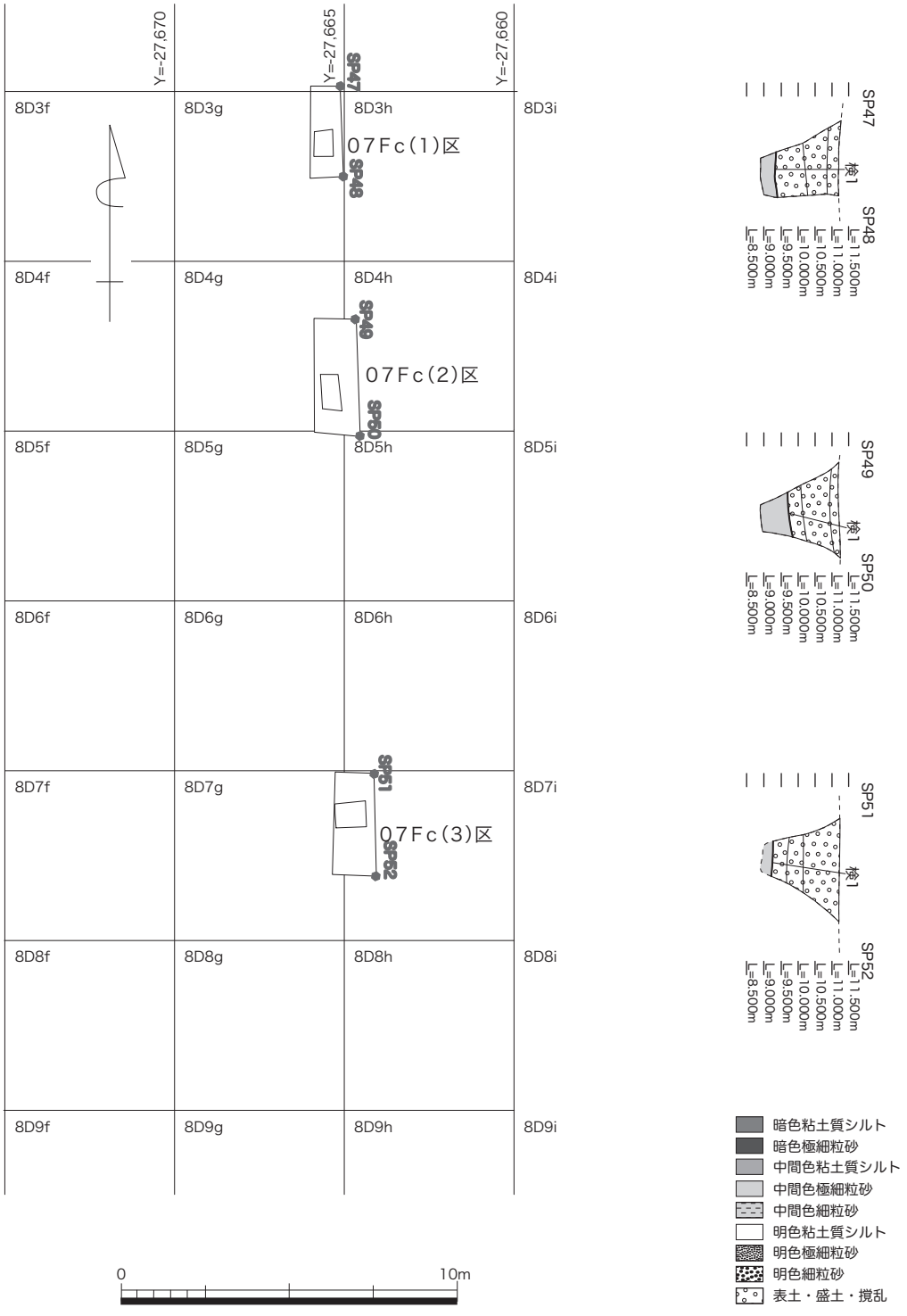
第 11 図　第 1 面 07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



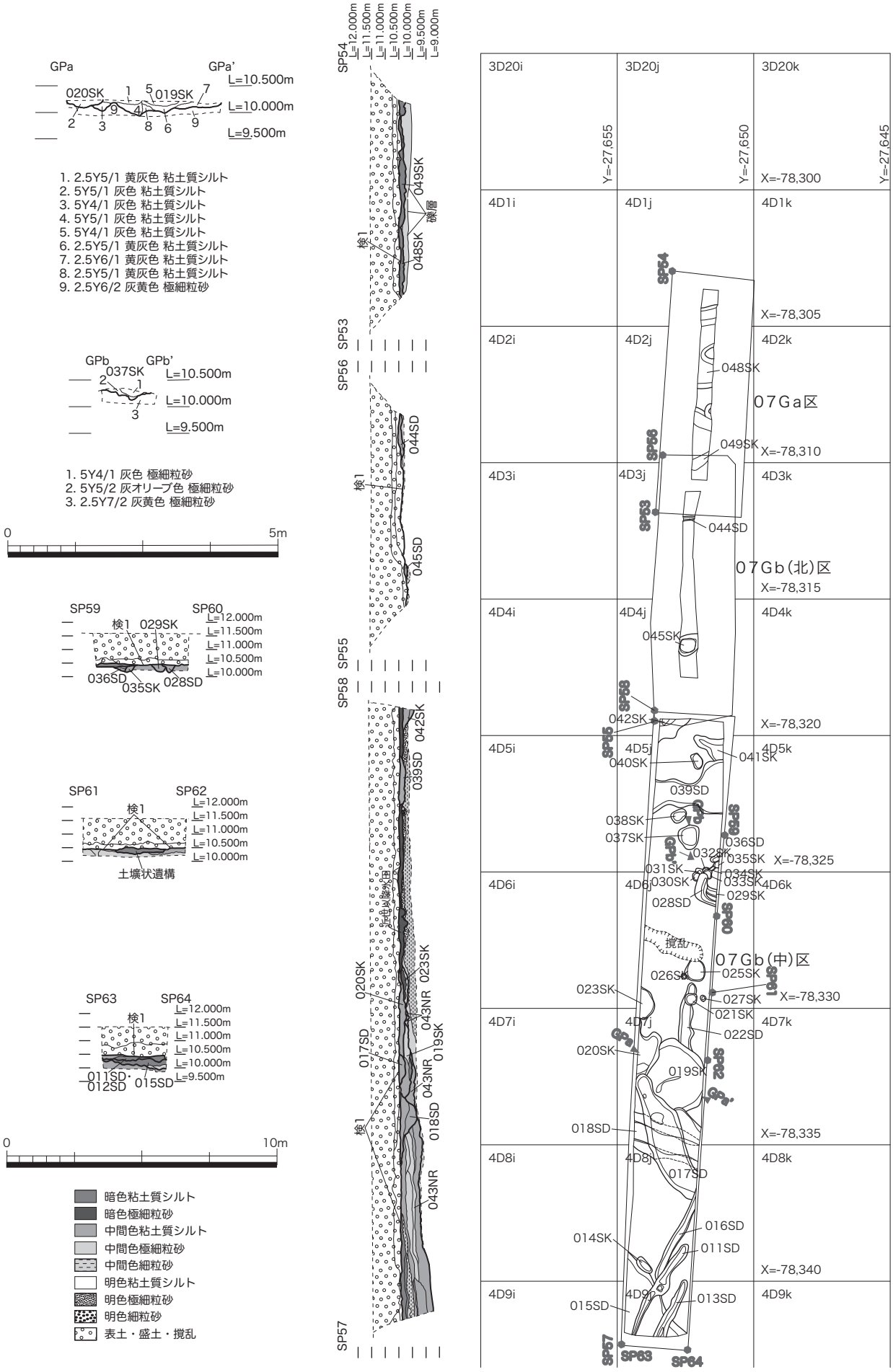
第 12 図　第 1 面 07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



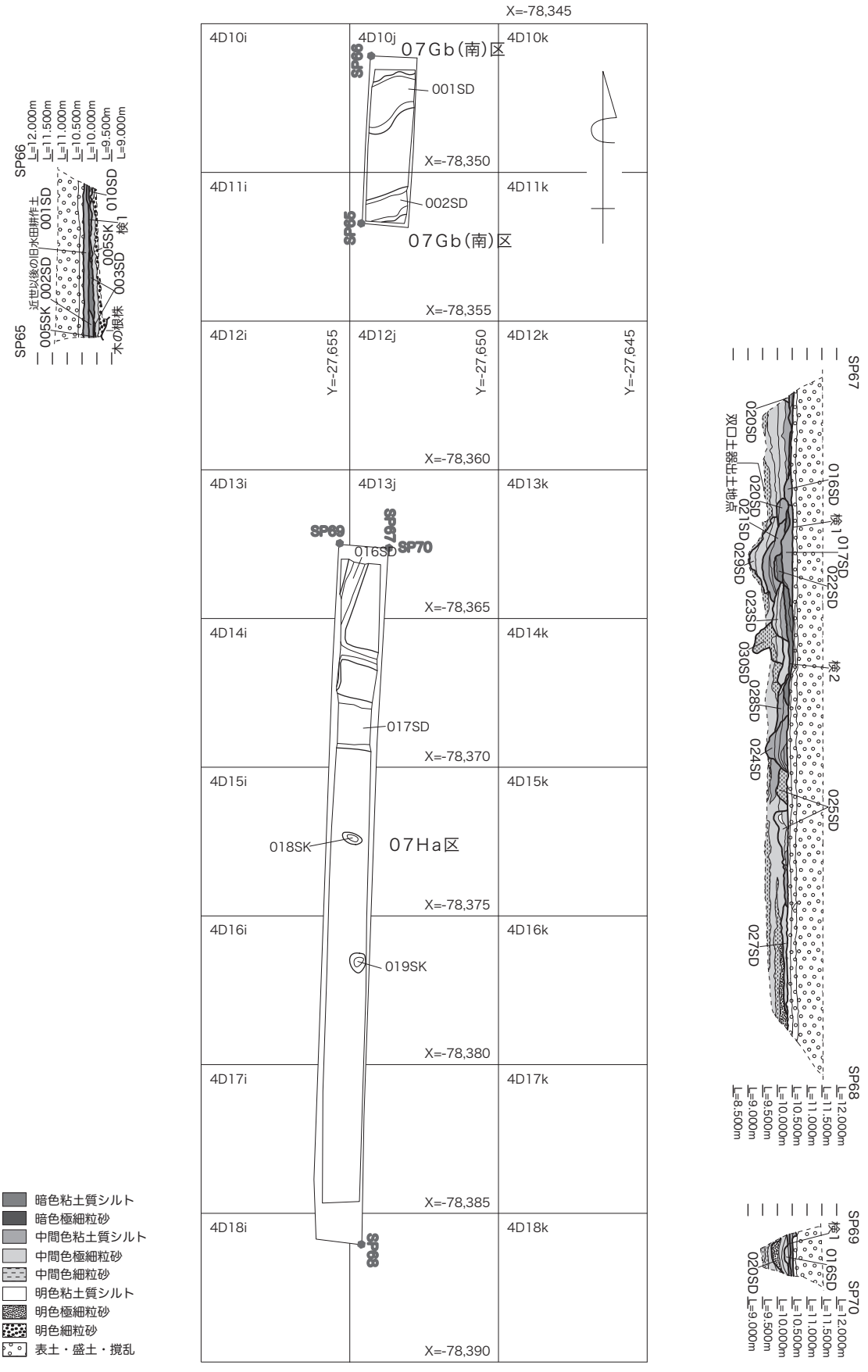
第 13 図　第 1 面 07E 区・07F 区遺構図（1：200）



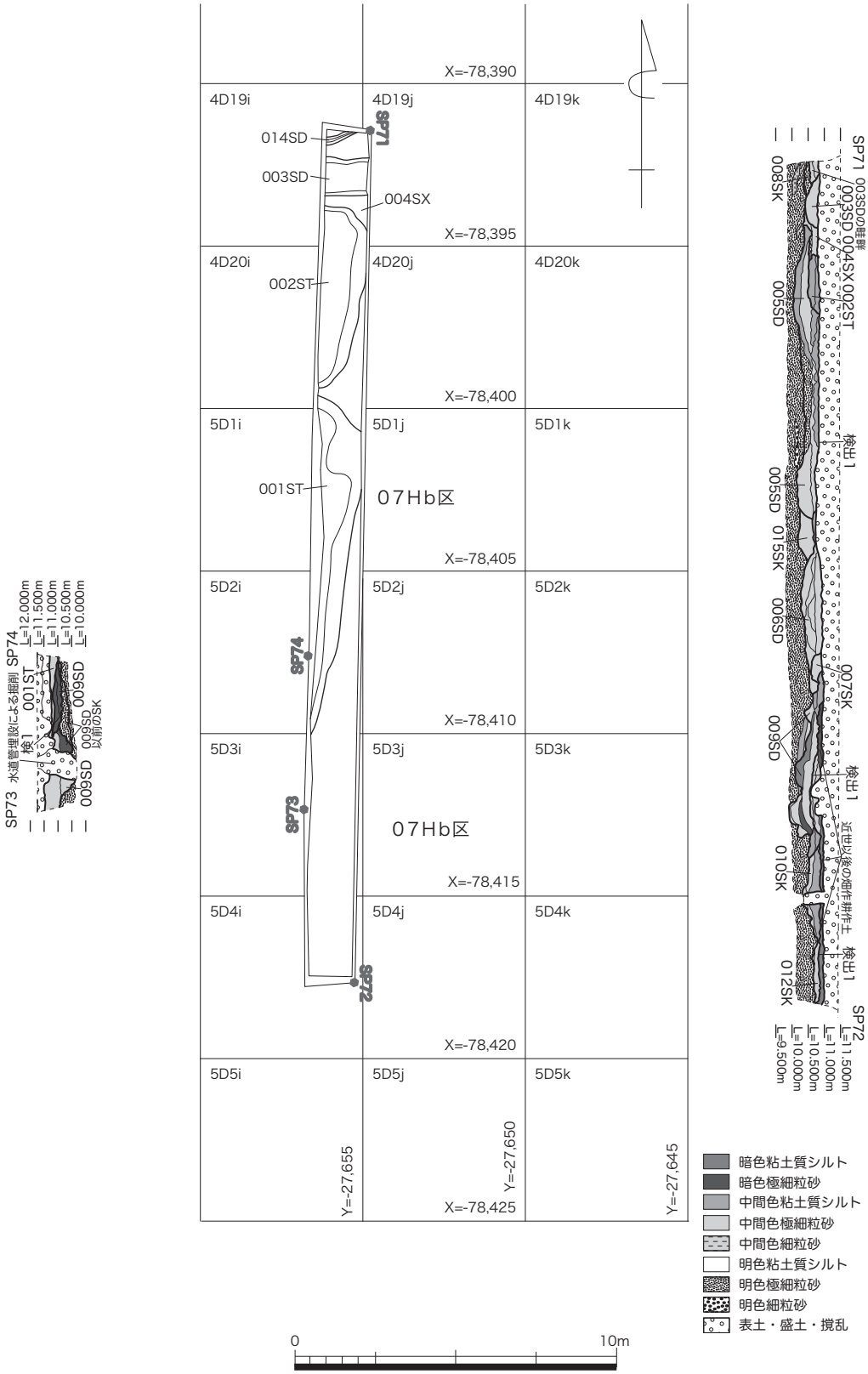
第 14 図　第 1 面 07F 区遺構図（1：200）



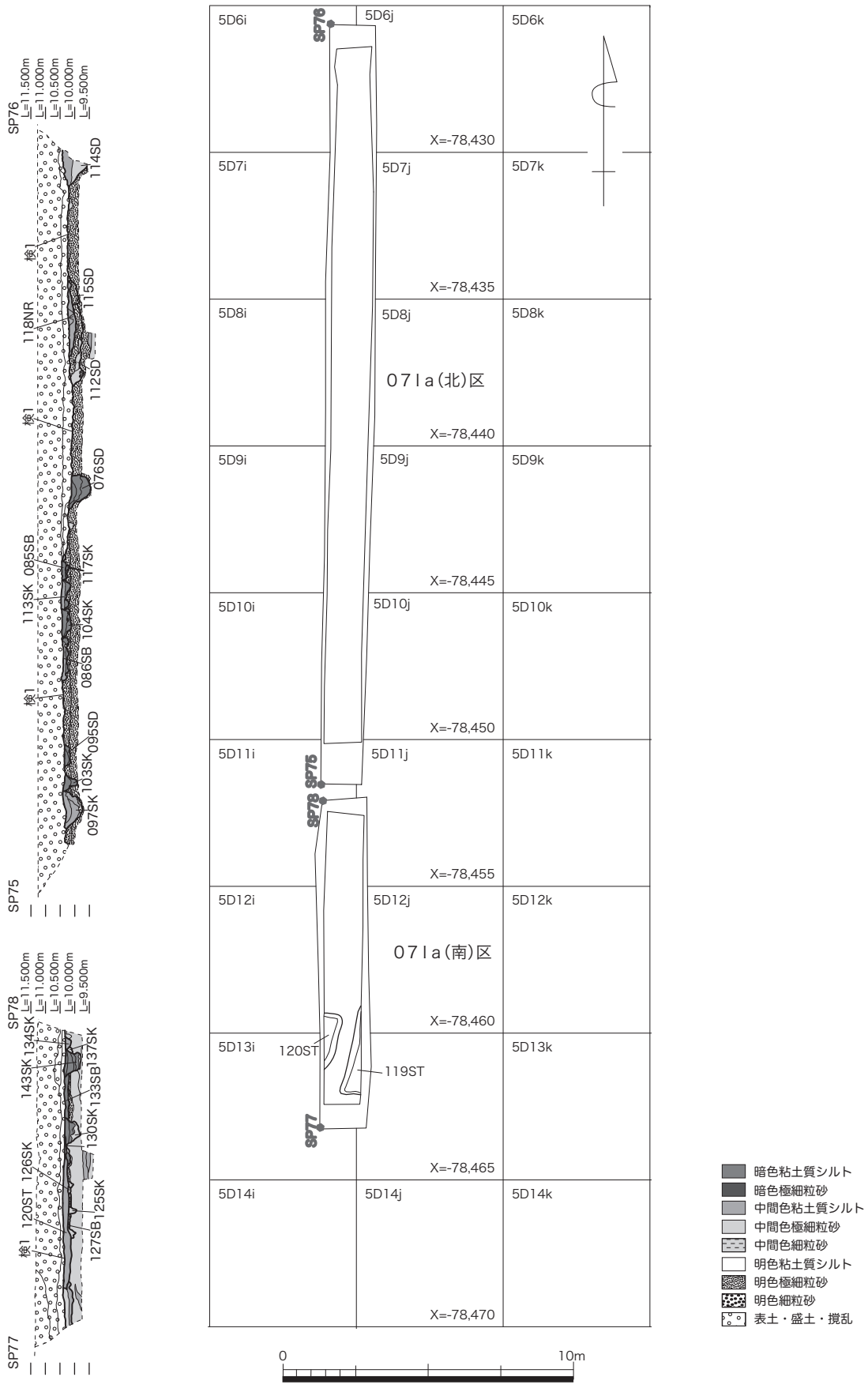
第 15 図　第 1 面 07G 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



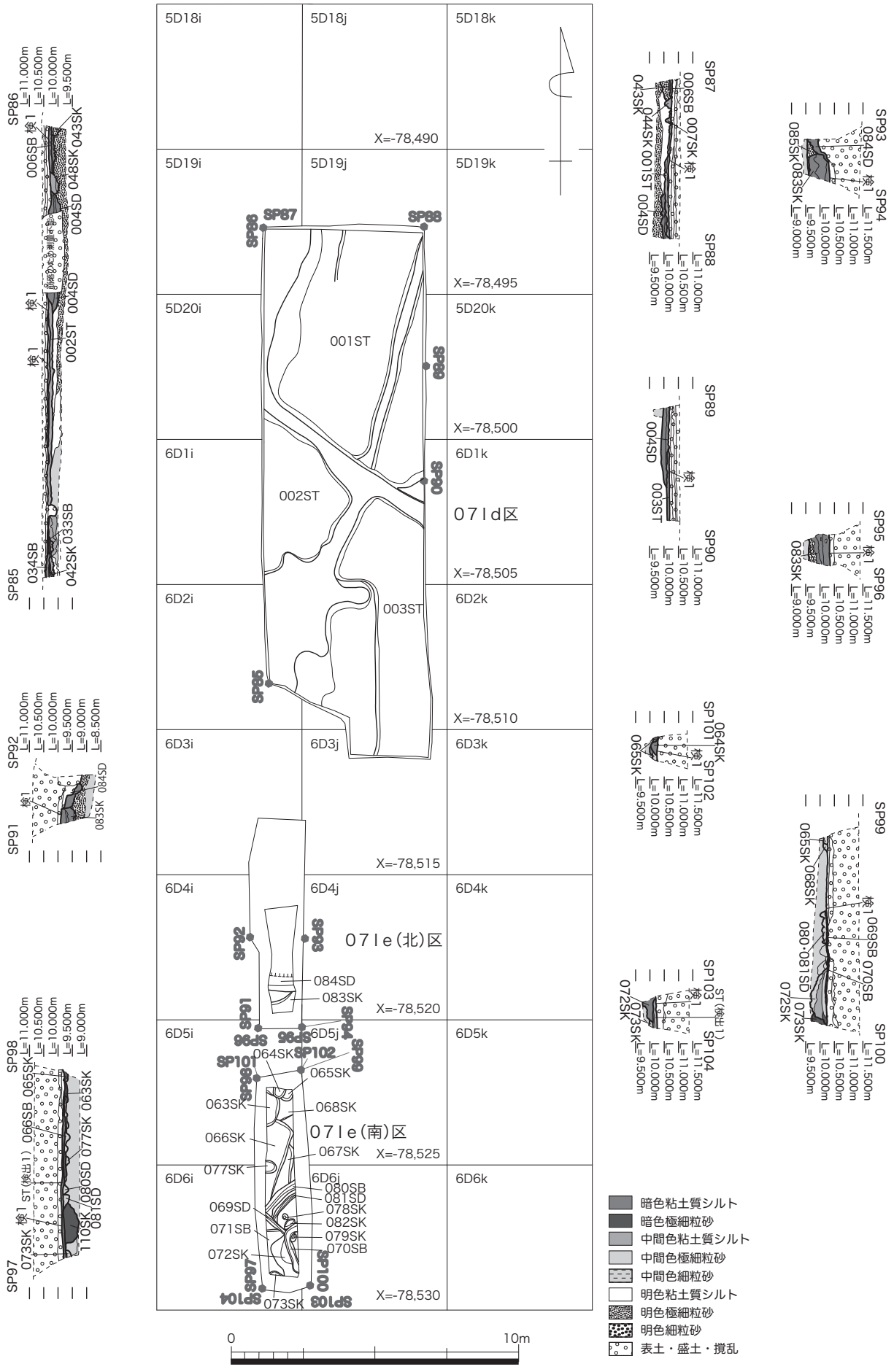
第 16 図　第 1 面 07G 区・07H 区遺構図（1：200）



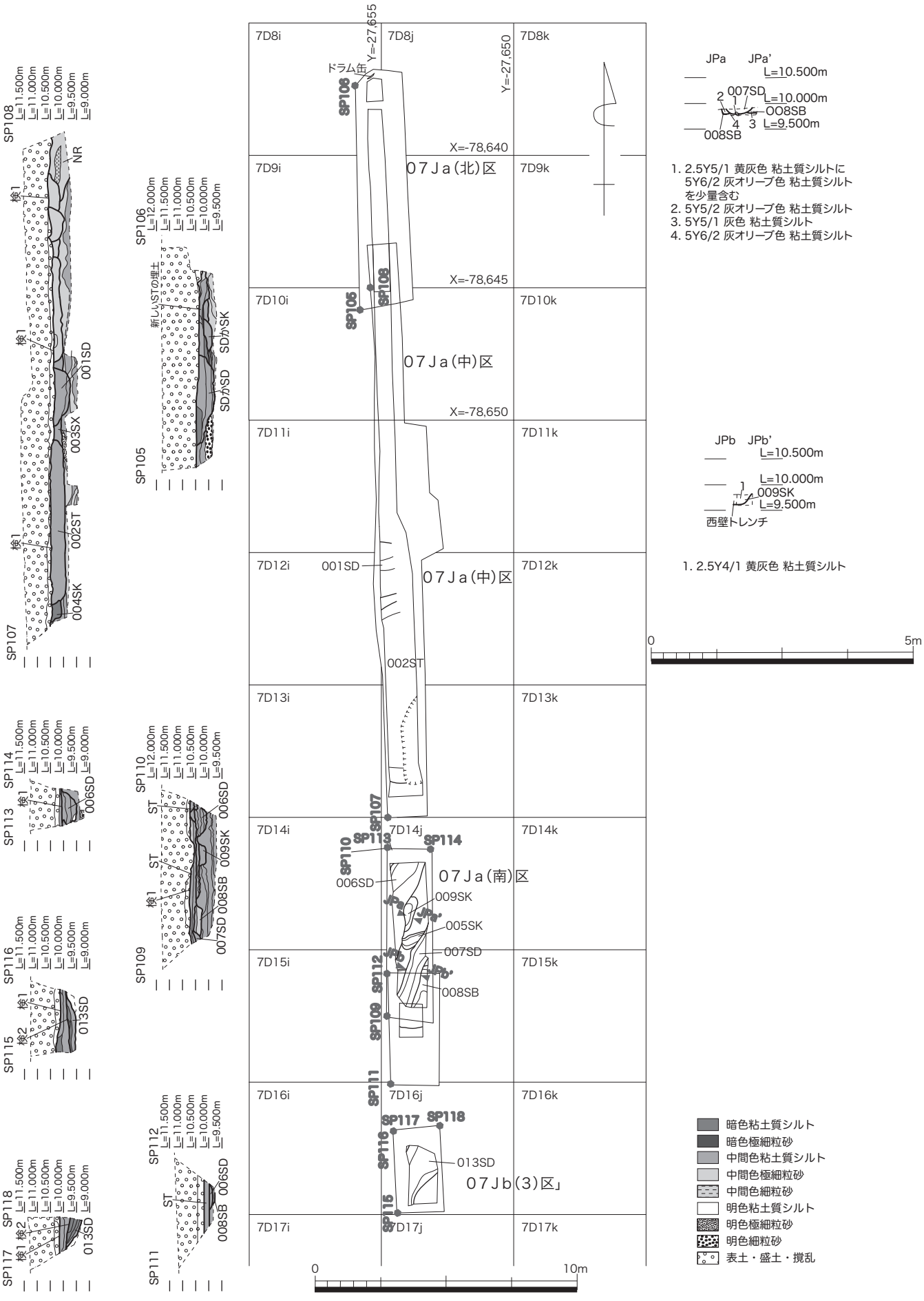
第 17 図　第 1 面 07H 区遺構図（1：200）



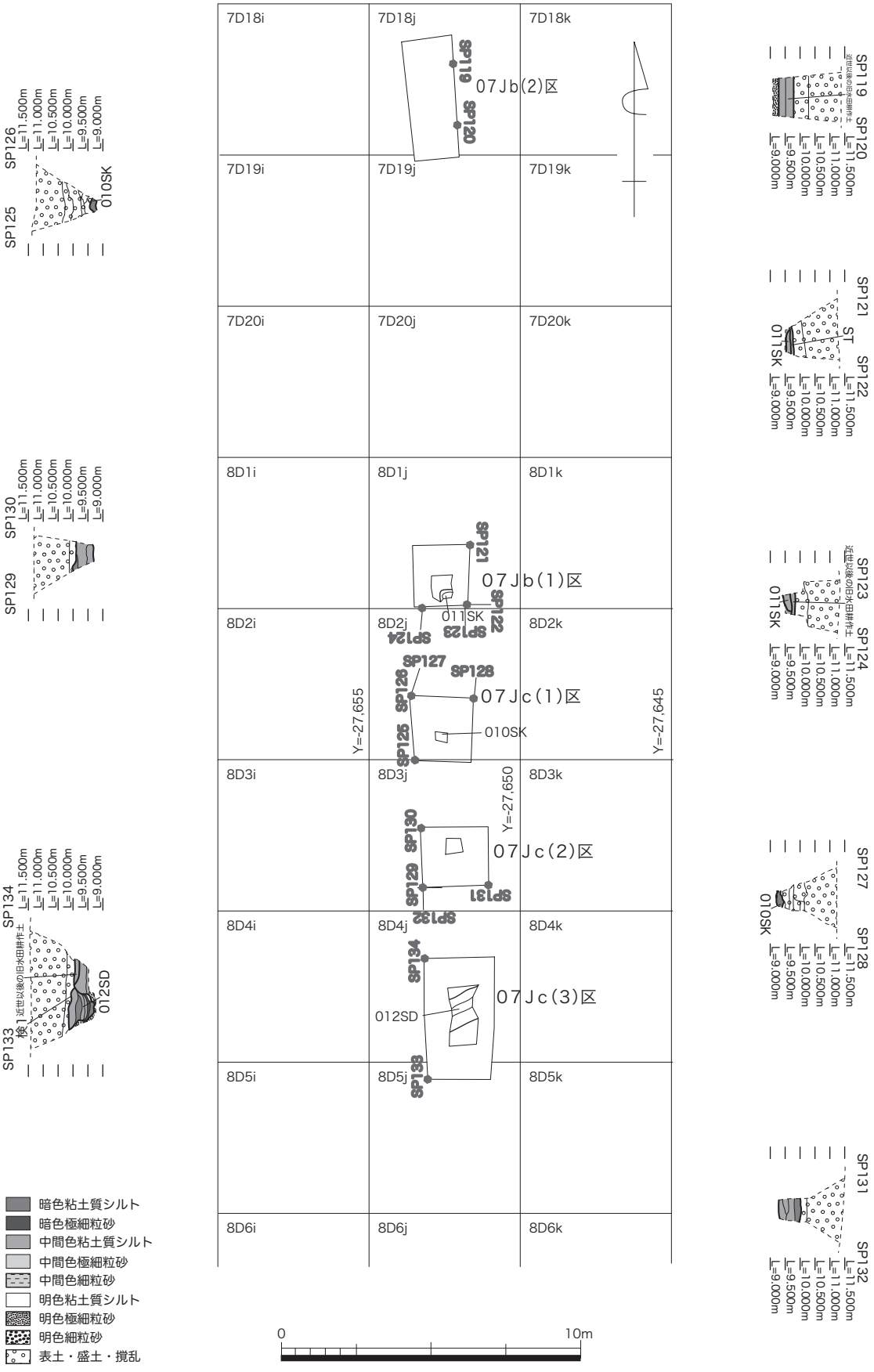
第 18 図　第 1 面 07I 区遺構図（1：200）



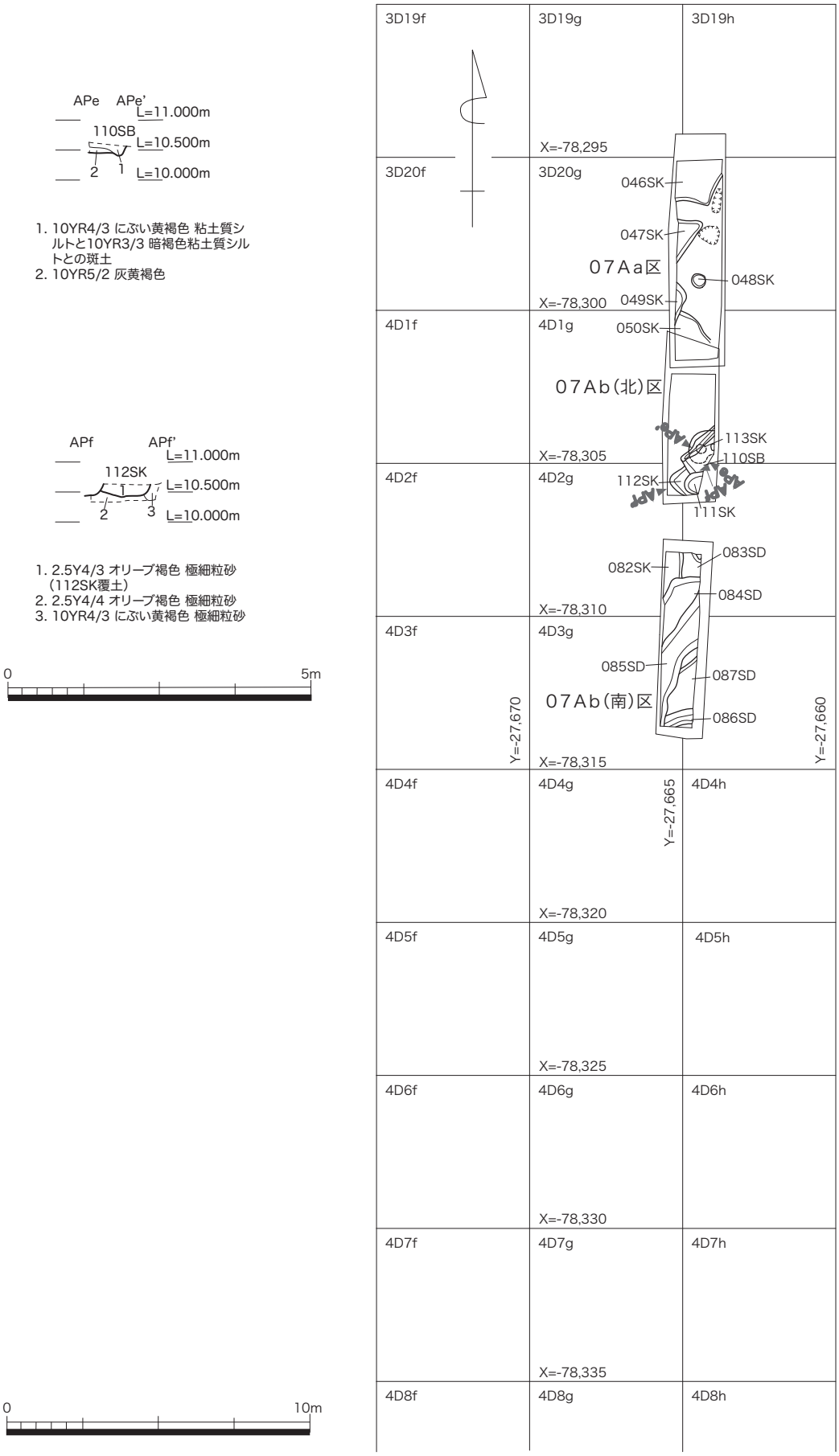
第 19 図　第 1 面 07I 区遺構図（1：200）



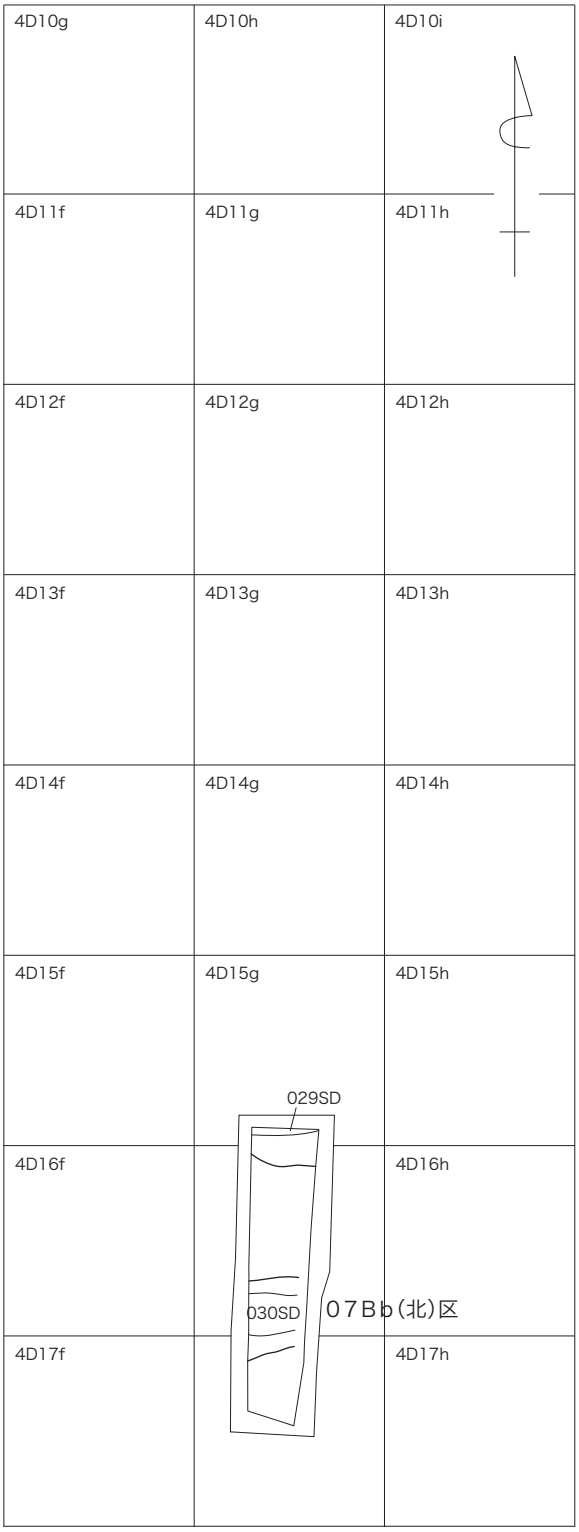
第 20 図　第 1 面 07J 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



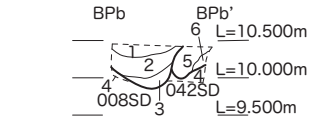
第 21 図　第 1 面 07J 区遺構図（1：200）



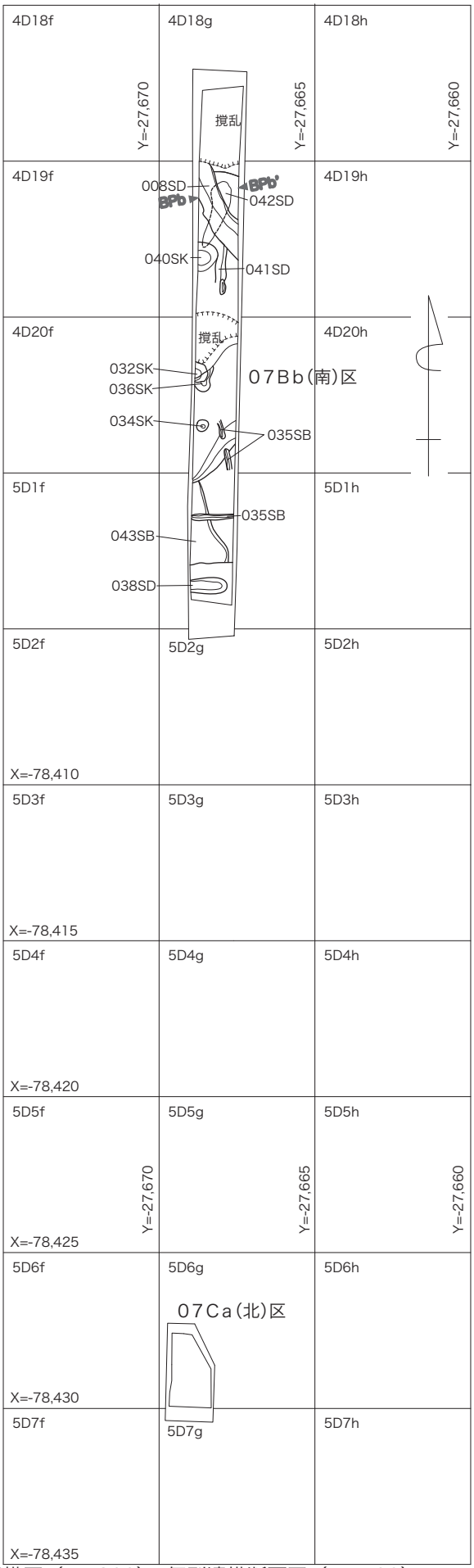
第 22 図　第 2 面 07A 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



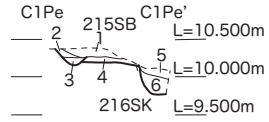
第 23 図　第 2 面 07B 区遺構図（1：200）



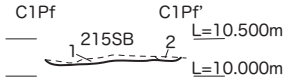
1. 2.5Y5/3 黄褐色 極細粒砂
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂
3. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂
4. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂
5. 2.5Y5/3 黄褐色 極細粒砂
6. 2.5Y5/4 黄褐色 極細粒砂



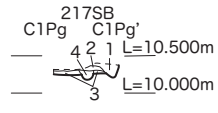
第 24 図　第 2 面 07B 区・07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



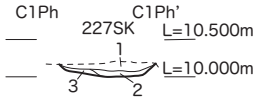
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂
2. 2.5Y3/2 黒褐色 極細粒砂
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細粒砂(周溝)
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細粒砂
5. 2.5Y3/2 黒褐色 極細粒砂
6. 2.5Y4/1 黄灰色 極細粒砂



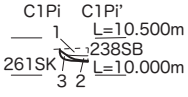
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細粒砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂



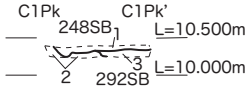
1. 2.5Y3/2 黒褐色 極細粒砂、炭化物多い
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細粒砂、炭化物含む、217SBの貼床の可能性が高い
3. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂と2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトの斑土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂



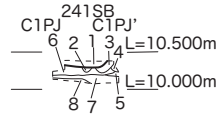
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂
2. 2.5Y5/3 黄褐色 極細粒砂に2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂が少量混入、炭化物若干あり
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂



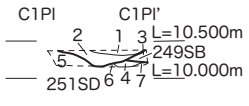
1. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト、下層に2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を含む
3. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルト



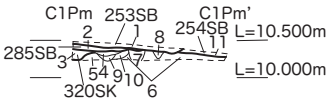
1. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト、炭火物・焼土を含む、2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂粒をやや多く含む
2. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂粒をやや多く含む
3. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂粒をやや多く含む、炭化物を少量含む



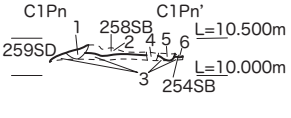
1. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルト、炭火物多い
2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト、炭火物あり
3. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト、炭火物を少量含む
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルト、炭火物を少量含む
5. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 黄灰色 極細粒砂を少量含む
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂
7. 2.5Y4/1 黄灰色 極細粒砂
8. 2.4Y6/2 灰黄色 極細粒砂



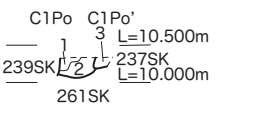
1. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト
2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルトと2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂との斑土
3. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルト
6. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色 極細粒砂



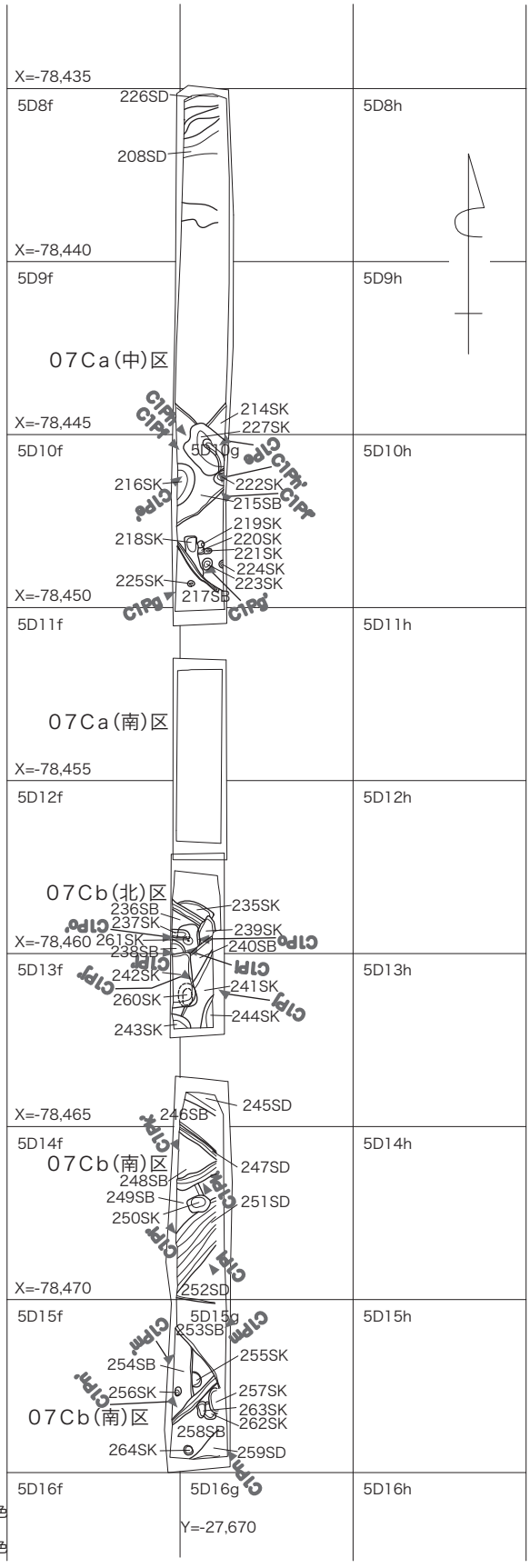
1. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘土質シルトブロックを多く含む
2. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト
3. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂粒を多く含む、焼土を含む
4. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルトに2.5Y6/2灰黄色 極細粒砂ブロック含む
5. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂と2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルトとの斑土
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂
7. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトと2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトとの斑土
8. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトと2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂との斑土
9. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト
10. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルトと2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂との斑土
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂と2.5Y4/2暗灰黄色 粘土質シルトとの斑土



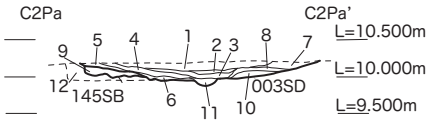
1. 10YR3/2 黒褐色 極細粒砂と2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂との斑土
2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト
3. 5Y5/2 灰オリーブ色 極細粒砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色 粘土質シルトとの斑土
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘土質シルトと2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトとの斑土
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂



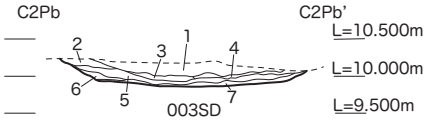
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂粒を多く含む、炭火物を少量含む
2. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂ブロックを多く含む、炭火物を少量含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を少量含む



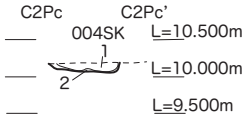
第 25 図　第 2 面 07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



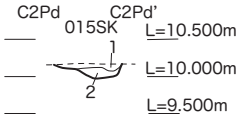
1. 5Y2/2 オリーブ黒色 極細粒砂混じり粘土質シルト(003SD上層)
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD中層)
3. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD中層)
4. 2.5Y4/1 黄灰色 粘土質シルト、上層に比べやや砂質(003SD下層)
5. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト(003SD下層)
6. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂をやや多く含む粘土質シルト(003SD下層)
7. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD上層)
8. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD下層)
9. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂を含む粘土質シルト(145SB)
10. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂を含む粘土質シルト(003SD下層)
11. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD下層)
12. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂(地山)



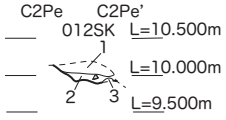
1. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂が混じる(003SD上層)
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD上層)
3. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD中層)
4. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト(003SD中層)
5. 5Y4/1 灰色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を含む(003SD下層)
6. 2.5Y4/1 黄灰色 粘土質シルト、上層に比べやや極細粒砂に近い(003SD下層)
7. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト(上層に比べやや極細粒砂に近い)に2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を含む(003SD下層)



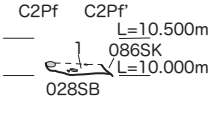
1. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、微量の炭火物含む。極細粒砂含む
2. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂に黒色粘土質シルトが混じる



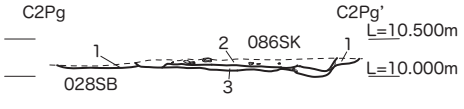
1. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂に炭火物少量混じる、黒色・灰色粘土質シルト混じる
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂に炭火物少量混じる、黒色粘土質シルト混じる



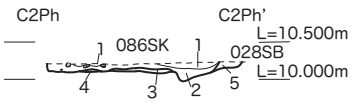
1. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物含む
2. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト、炭火物含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、炭火物・黒色粘土質シルト少量含むが地山が主体



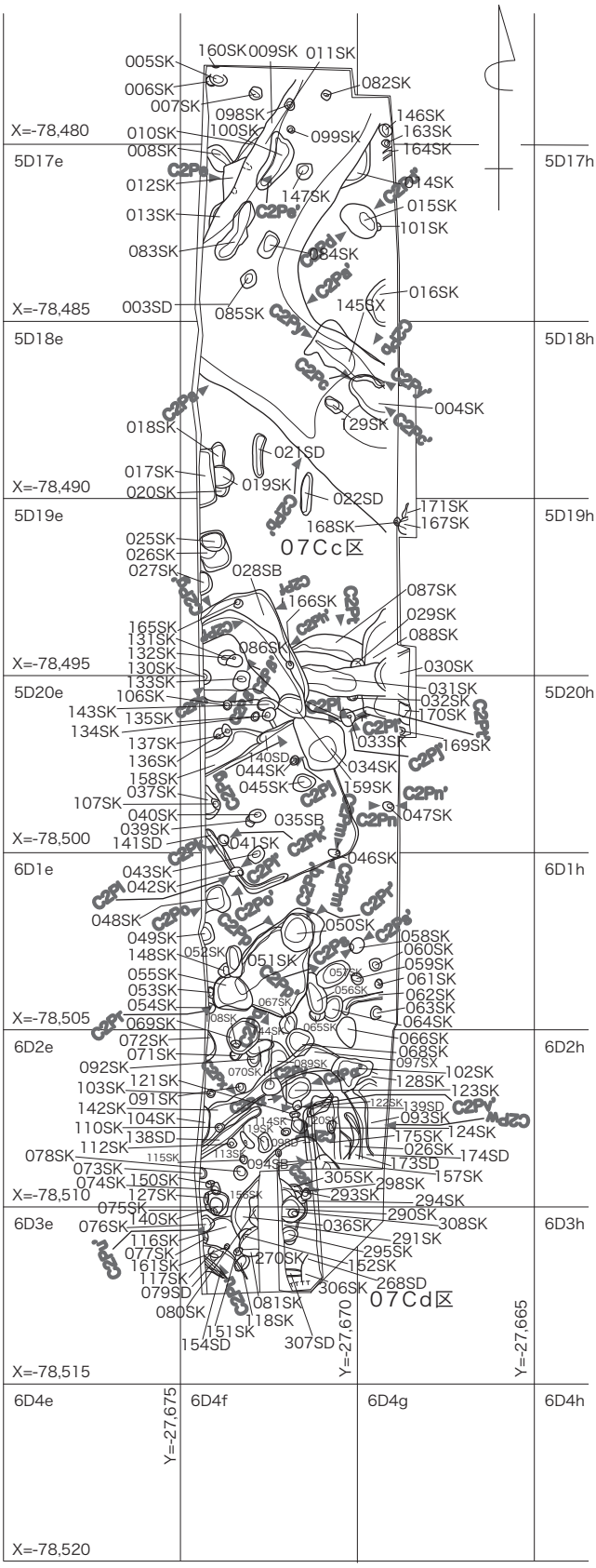
1. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト



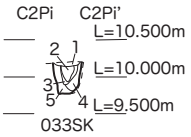
1. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト(028SBの覆土もしくは貼床)
2. 2.5Y3/2 黒褐色 極細粒砂を少量含む粘土質シルト、炭火物を少量含む(086SK)
3. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂をブロック状に含む粘土質シルト(028SBの貼床)



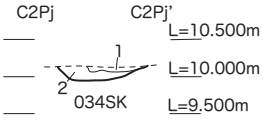
1. 5Y5/1 灰色 粘土質シルト、炭火物・焼土を微量含む(086SK)
2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト、炭火物・極細粒砂を少量含む(086SK)
3. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂をブロック状に含む粘土質シルト(028SBの貼床)
4. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト(028SBの貼床)
5. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト(028SBの覆土もしくは貼床)



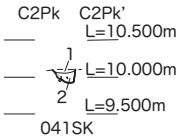
第 26 図　第 2 面 07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



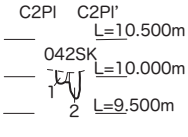
1. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト、炭火物を微量含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂ブロック含む 粘土質シルト
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂黒色粘土質シルト混じり、しまり強
4. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂ブロック含む 粘土質シルト
5. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、3層より黒色粘土質シルト多く含む



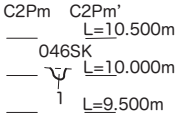
1. 5Y4/1 灰色 極細粒砂ブロック(2cm以下)を含む 粘土質シルト
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭化物含む、土器片多数含む



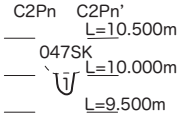
1. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト
2. 7.5Y4/1 灰色 粘土質シルトに地山の極細粒砂をブロック状に含む



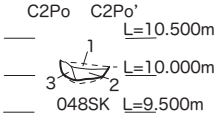
1. 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物を少量含む



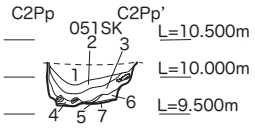
1. 5Y4/1 灰色 極細粒砂混じり粘土質シルト



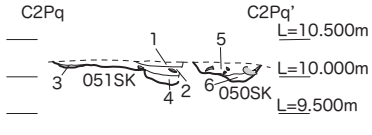
1. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト



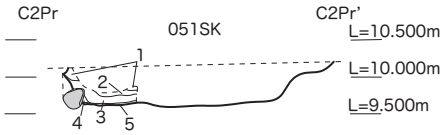
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂
2. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂に黒色粘土質シルトが帯状に混入
3. 5Y3/1 オリーブ黒色 極細粒砂が混じる粘土質シルト



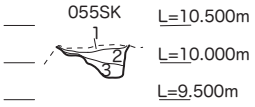
1. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物・焼土を少量含む
2. 5Y2/2 オリーブ黒色 極細粒砂を帯状に含む 粘土質シルト、炭火物を多含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、黒色・灰色粘土質シルトとの斑土
4. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物を少量含む
5. 5Y5/1 灰色 極細粒砂
6. 5Y5/2 灰オリーブ色 極細粒砂(地山壁面が崩壊したもの)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂、黒色粘土質シルト混じる、炭火物を多く含む



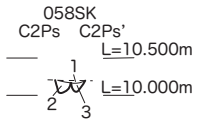
1. 5Y5/1 灰色 粘土質シルト
2. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト
3. 7.5Y5/1 灰色 極細粒砂をブロック状に含む 粘土質シルト、炭火物を微量含む
4. 5Y4/1 灰色 極細粒砂をブロック状に含む 粘土質シルト
5. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト
6. 5Y5/1 灰色 粘土質シルト

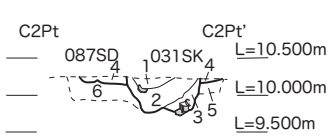


1. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物・焼土を少量含む
2. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物多含む、極細粒砂帯状に含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、黒色・灰色粘土質シルトとの斑土
4. 5Y5/2 灰オリーブ色 極細粒砂(地山壁面が崩壊したもの)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂、黒色粘土質シルトを混じる、炭火物多く含む

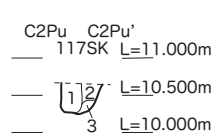


1. 2.5Y5/1 灰色 極細粒砂ブロックを少量含む粘土質シルト
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂ブロックを少量含む粘土質シルト
3. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト

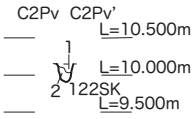




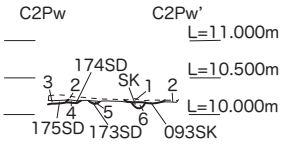
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルト
2. 2.5Y5/1 黄灰色 極細粒砂
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細粒砂
4. 5Y4/2 灰オリーブ色 極細粒砂
5. 2.5Y7/2 黄灰色 極細粒砂、黒色粘土質シルトを含む
6. 5Y7/2 黄灰色 極細粒砂(地山)



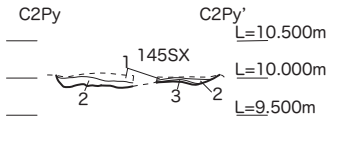
1. 5Y4/1 灰色 極細粒砂粒を多く含む粘土質シルト、炭火物を多く含む
2. 2.5Y2/1 黒色 極細粒砂粒を多く含む粘土質シルト、炭火物を多く含む
3. 2.5Y5/3 黄褐色 極細粒砂



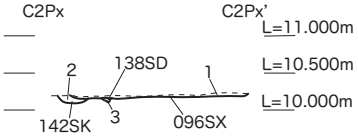
1. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト
2. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト



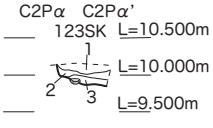
1. 5Y5/1 灰色 粘土質シルト、炭火物を微量含む
2. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、灰色粘土質シルト多く含む
4. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、灰色粘土質シルト多く含む
5. 5Y4/1 灰色 極細粒砂を少量含む粘土質シルト
6. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト



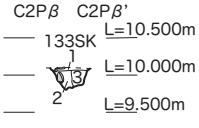
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、2層との境で炭火物を帯状に含む、焼土を微量含む
2. 5Y5/2 灰オリーブ色 極細粒砂、炭火物を少量含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂、黒色粘土質シルトをブロック状(10cm以下)に含む



1. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト
2. 2.5Y5/1 黄灰色 粘土質シルト
3. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト

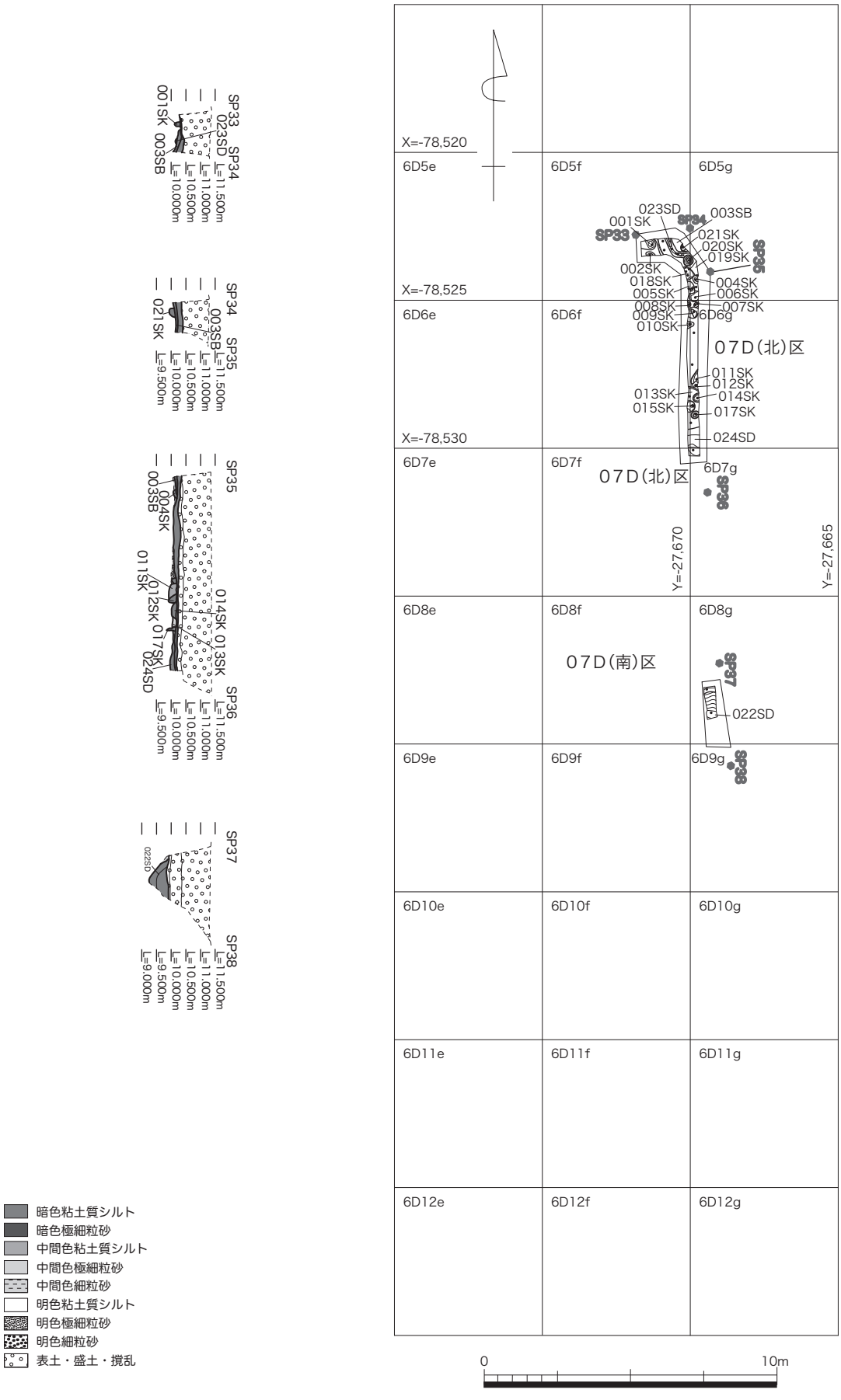


1. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物を少量含む、焼土を微量含む
2. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルト、炭火物少量含む
3. 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルトと極細粒砂との斑土

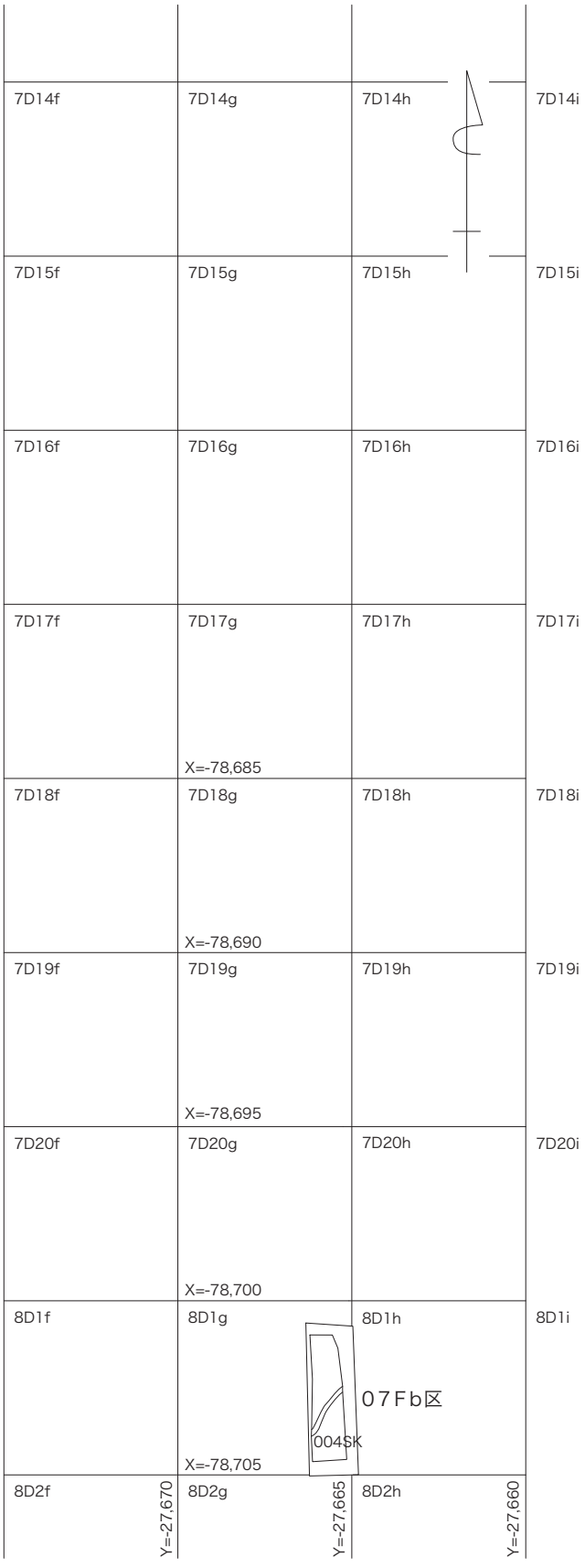


1. 5Y3/2 オリーブ黒色 極細粒砂をブロック状に含む粘土質シルト
2. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト、炭火物を微量含む
3. 5Y4/1 灰色 粘土質シルトと極細粒砂との斑土、炭火物を微量含む

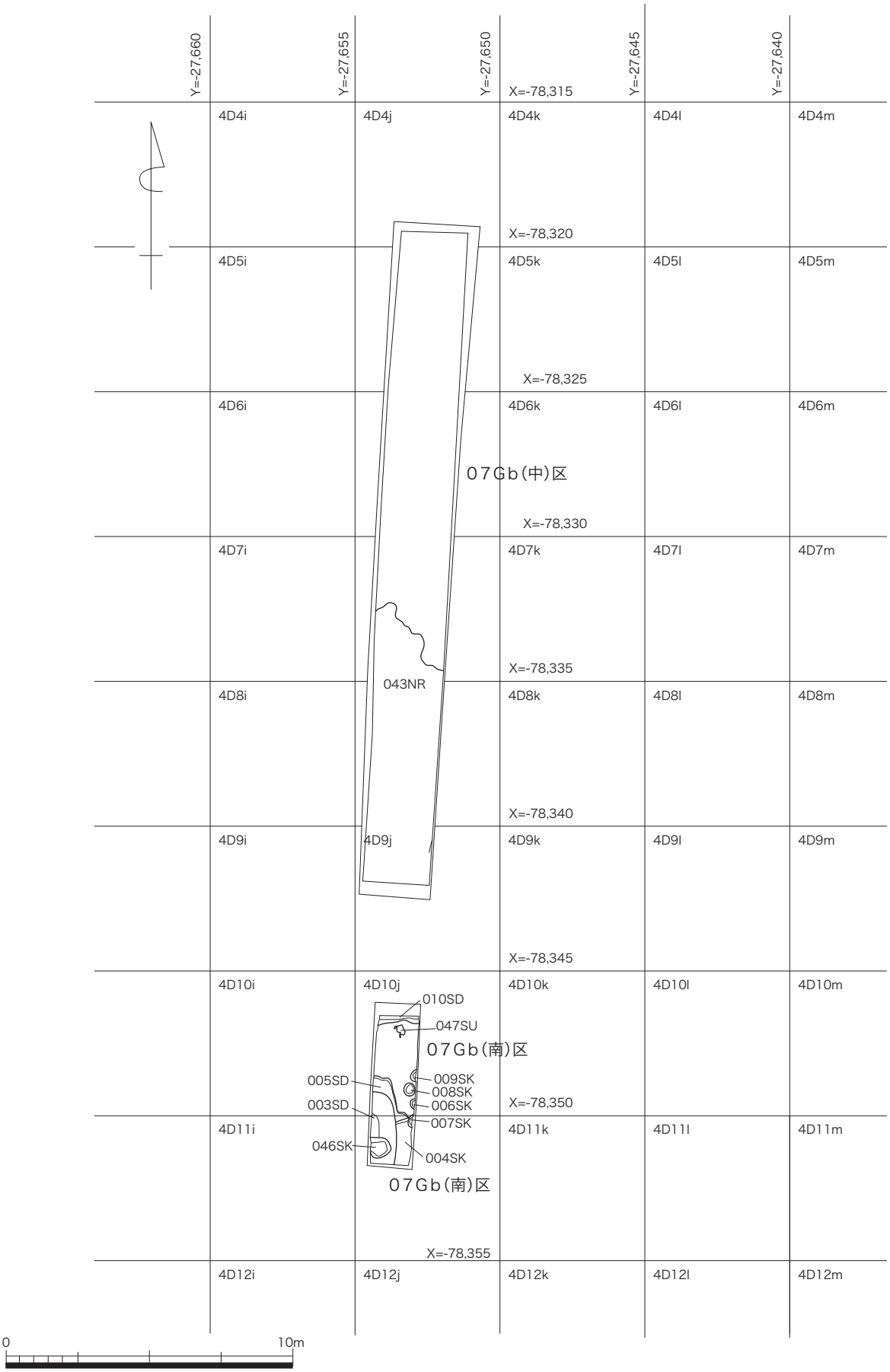
第 27 図　第 2 面 07C 区個別遺構断面図（1：100）



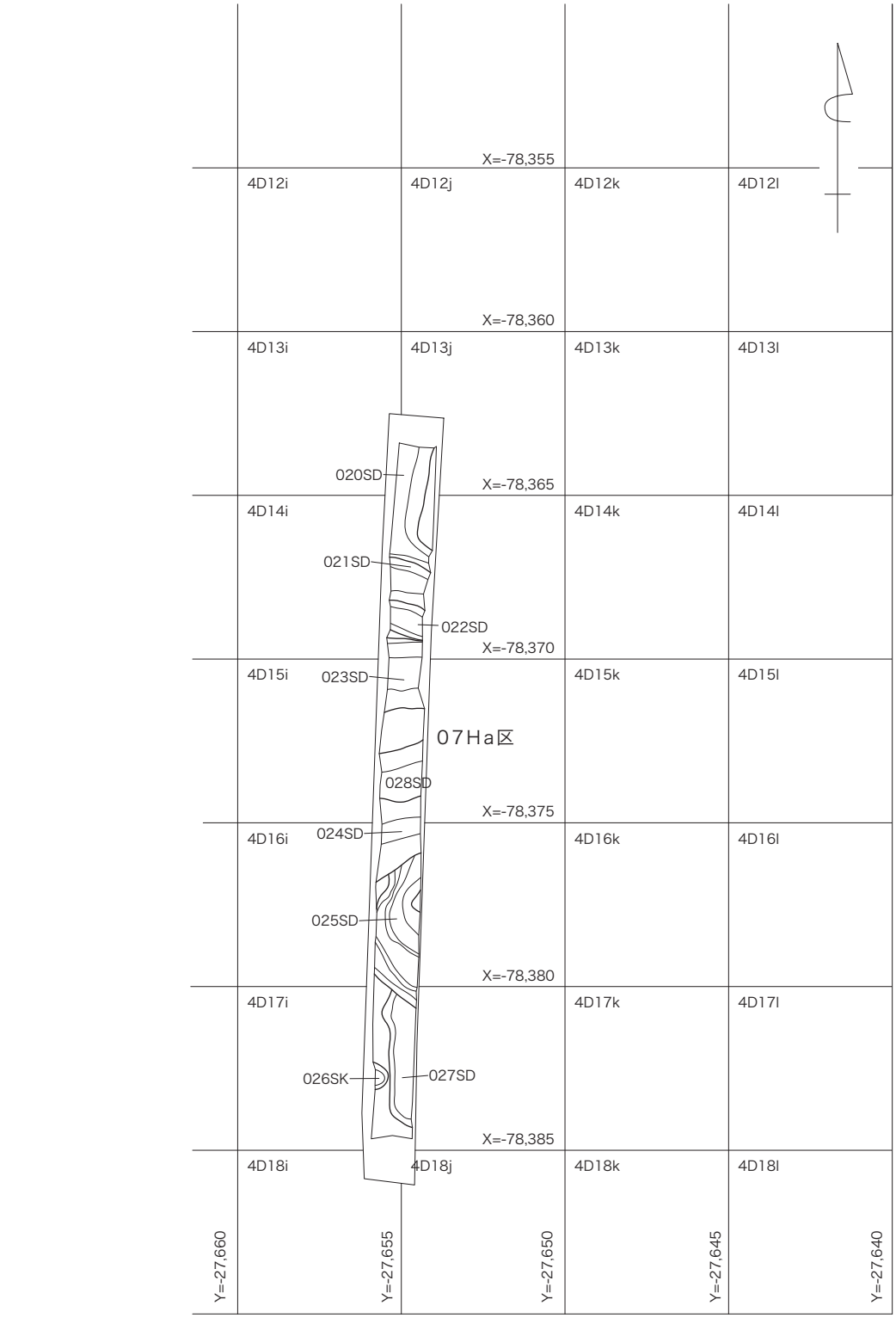
第 28 図　第 2 面 07D 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



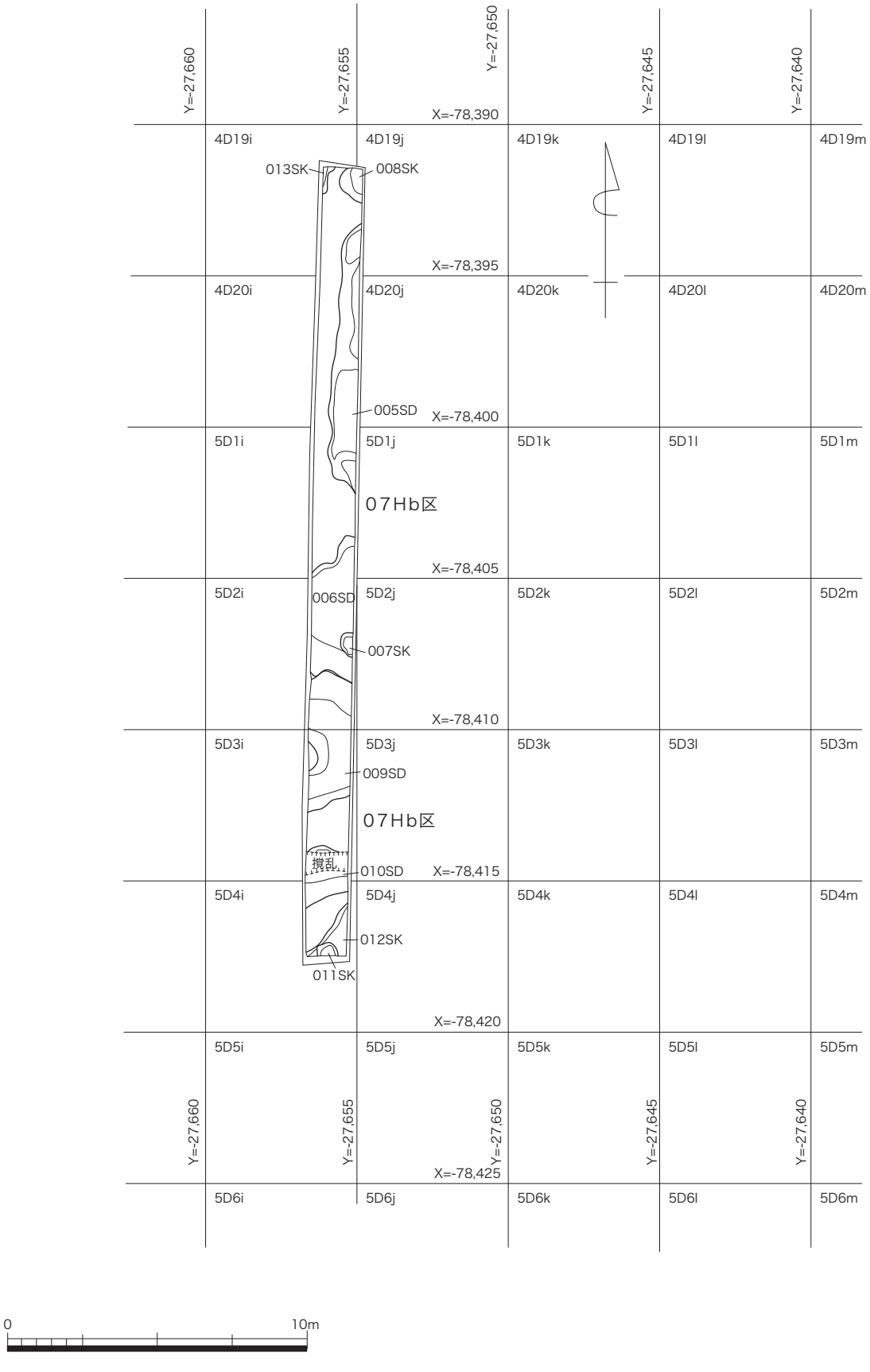
第 29 図　第 2 面 07F 区遺構図（1：200）



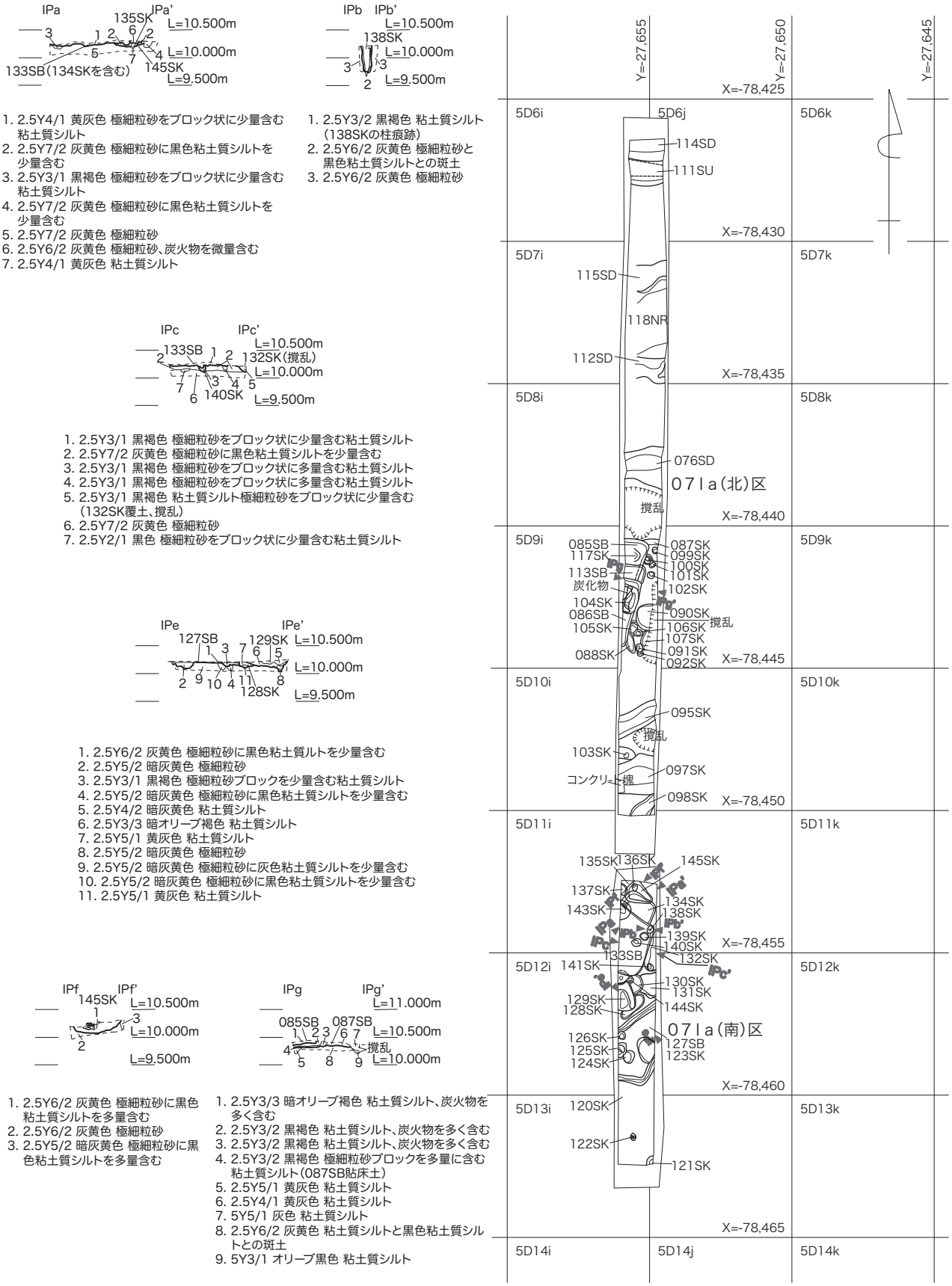
第 30 図　第 2 面 07G 区遺構図（1：200）



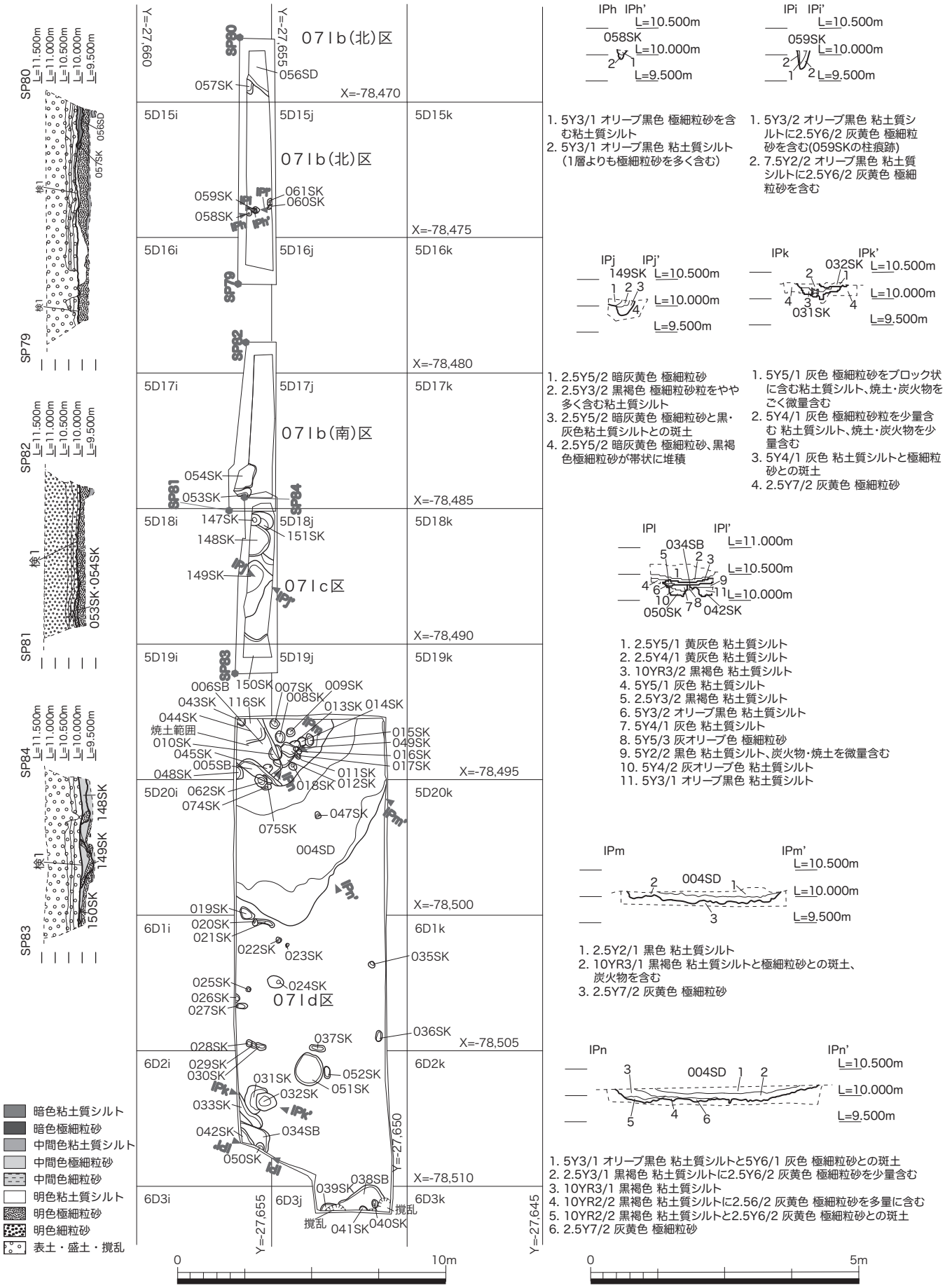
第 31 図　第 2 面 07H 区遺構図（1：200）



第 32 図　第 2 面 07H 区遺構図（1：200）



第 33 図　第 2 面 07I 区遺構図（1：200）



1. 5Y3/1 オリーブ黒色 極細粒砂を含む粘土質シルト
2. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト（1層よりも極細粒砂を多く含む）

1. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を含む(059SKの柱痕跡)
2. 7.5Y2/2 オリーブ黒色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を含む

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂
2. 2.5Y3/2 黒褐色 極細粒砂粒をやや多く含む粘土質シルト
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂と黒・灰色粘土質シルトとの斑土
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂、黒褐色極細粒砂が帯状に堆積

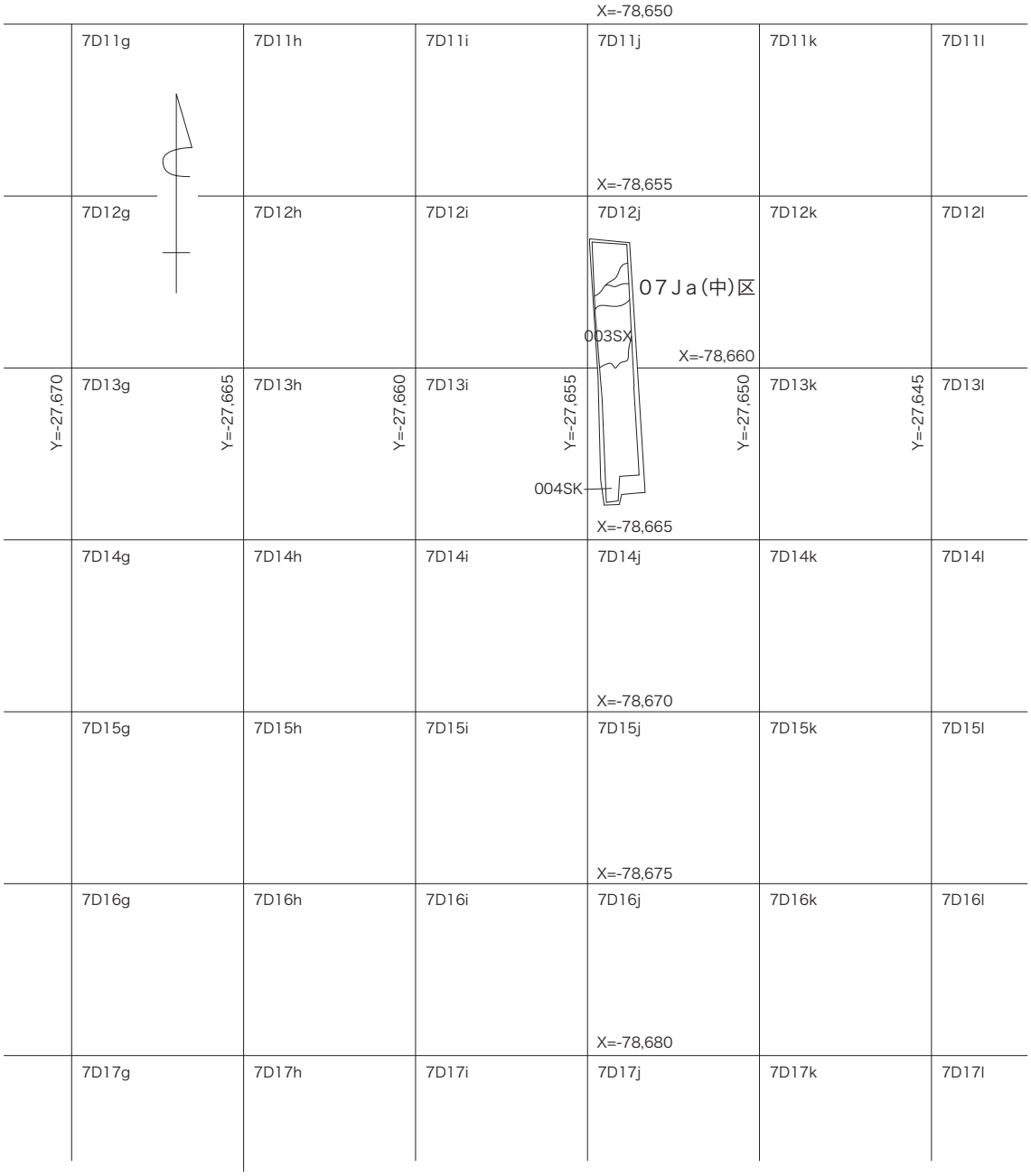
1. 5Y5/1 灰色 極細粒砂をブロック状に含む粘土質シルト、焼土・炭火物をごく微量含む
2. 5Y4/1 灰色 極細粒砂粒を少量含む 粘土質シルト、焼土・炭火物を少量含む
3. 5Y4/1 灰色 粘土質シルトと極細粒砂との斑土
4. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂

1. 2.5Y5/1 黄灰色 粘土質シルト
2. 2.5Y4/1 黄灰色 粘土質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト
4. 5Y5/1 灰色 粘土質シルト
5. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト
6. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト
7. 5Y4/1 灰色 粘土質シルト
8. 5Y5/3 灰オリーブ色 極細粒砂
9. 5Y2/2 黒色 粘土質シルト、炭火物・焼土を微量含む
10. 5Y4/2 灰オリーブ色 粘土質シルト
11. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト

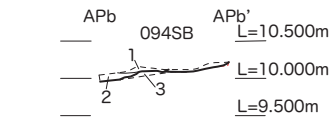
1. 2.5Y2/1 黒色 粘土質シルト
2. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルトと極細粒砂との斑土、炭火物を含む
3. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂

1. 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルトと5Y6/1 灰色 極細粒砂との斑土
2. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を少量含む
3. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト
4. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルトに2.56/2 灰黄色 極細粒砂を多量に含む
5. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルトと2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂との斑土
6. 2.5Y7/2 灰黄色 極細粒砂

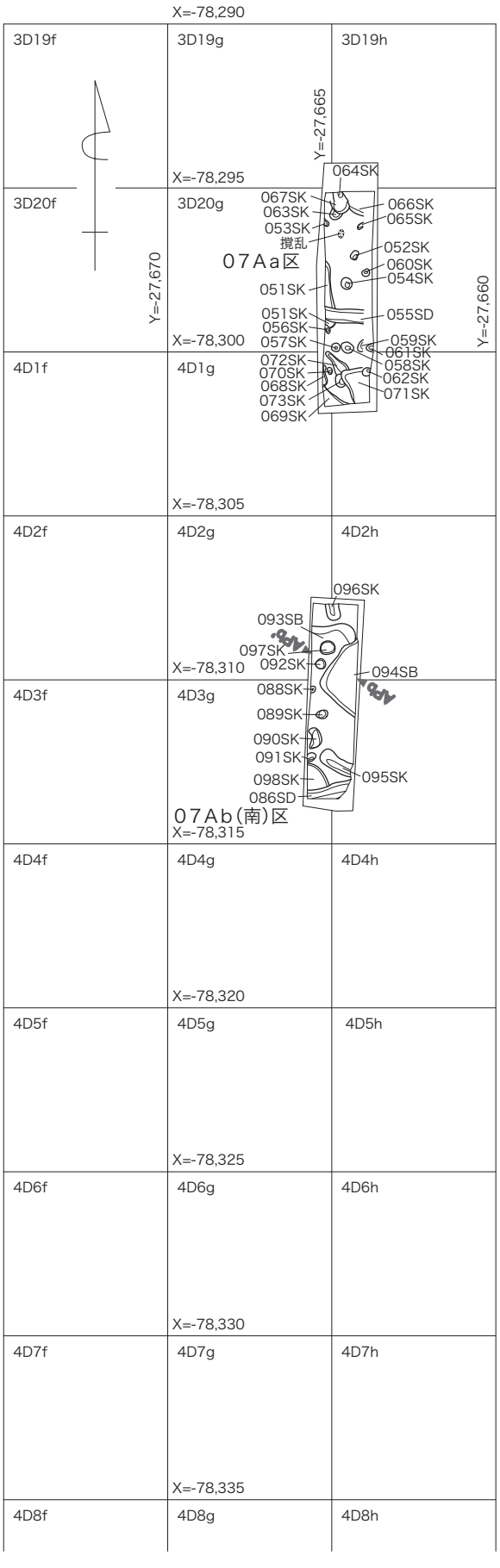
第 34 図　第 2 面 07I 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



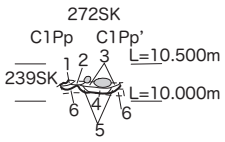
第 35 図　第 2 面 07J 区遺構図（1：200）



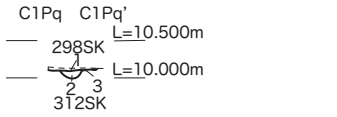
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂に2.5Y4/4褐色極細粒砂を少量含む(094SB覆土)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細粒砂 (094SB貼床)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細粒砂 挙大円礫多く含む基盤層



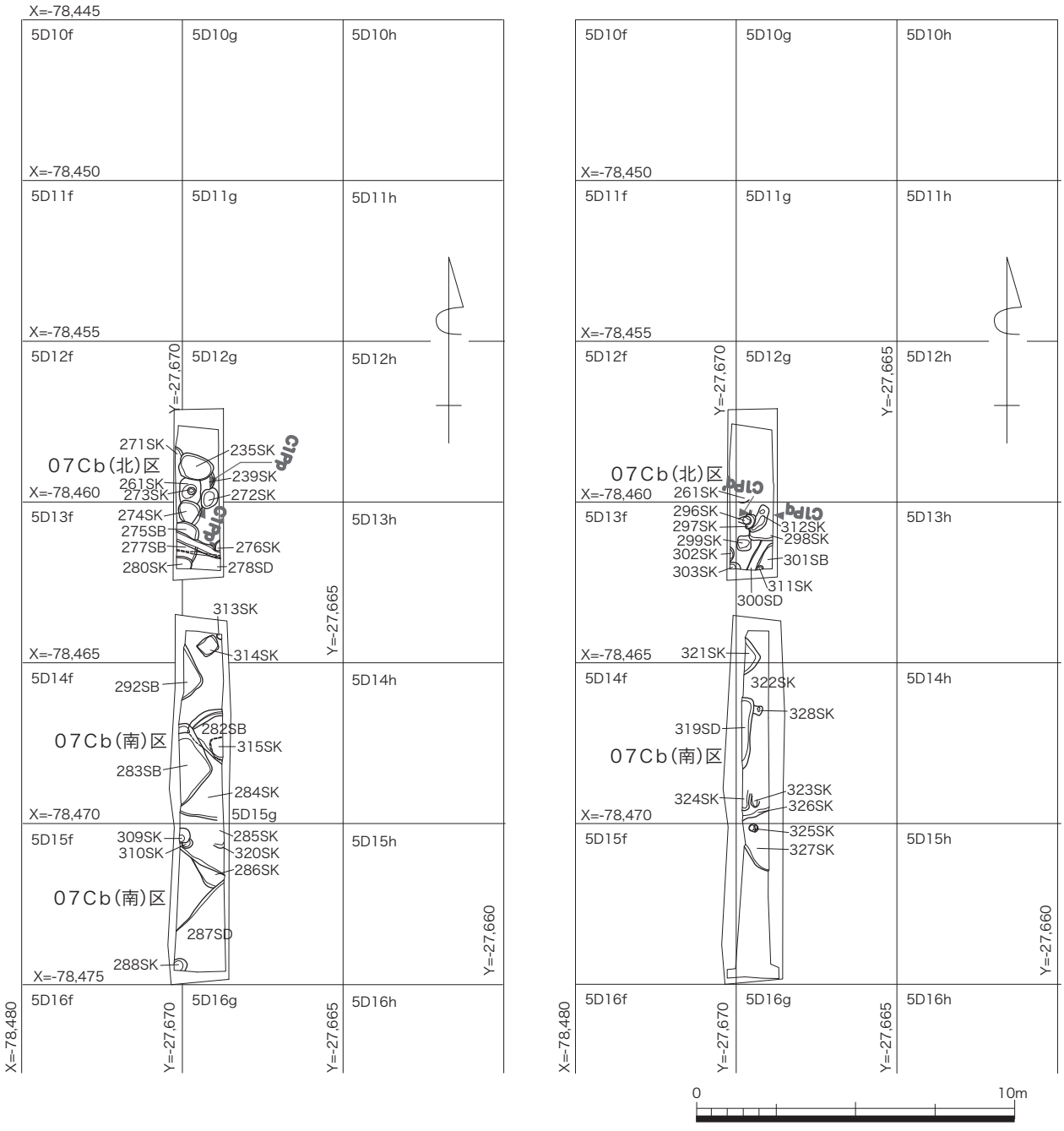
第 36 図　第 3 面 07A 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



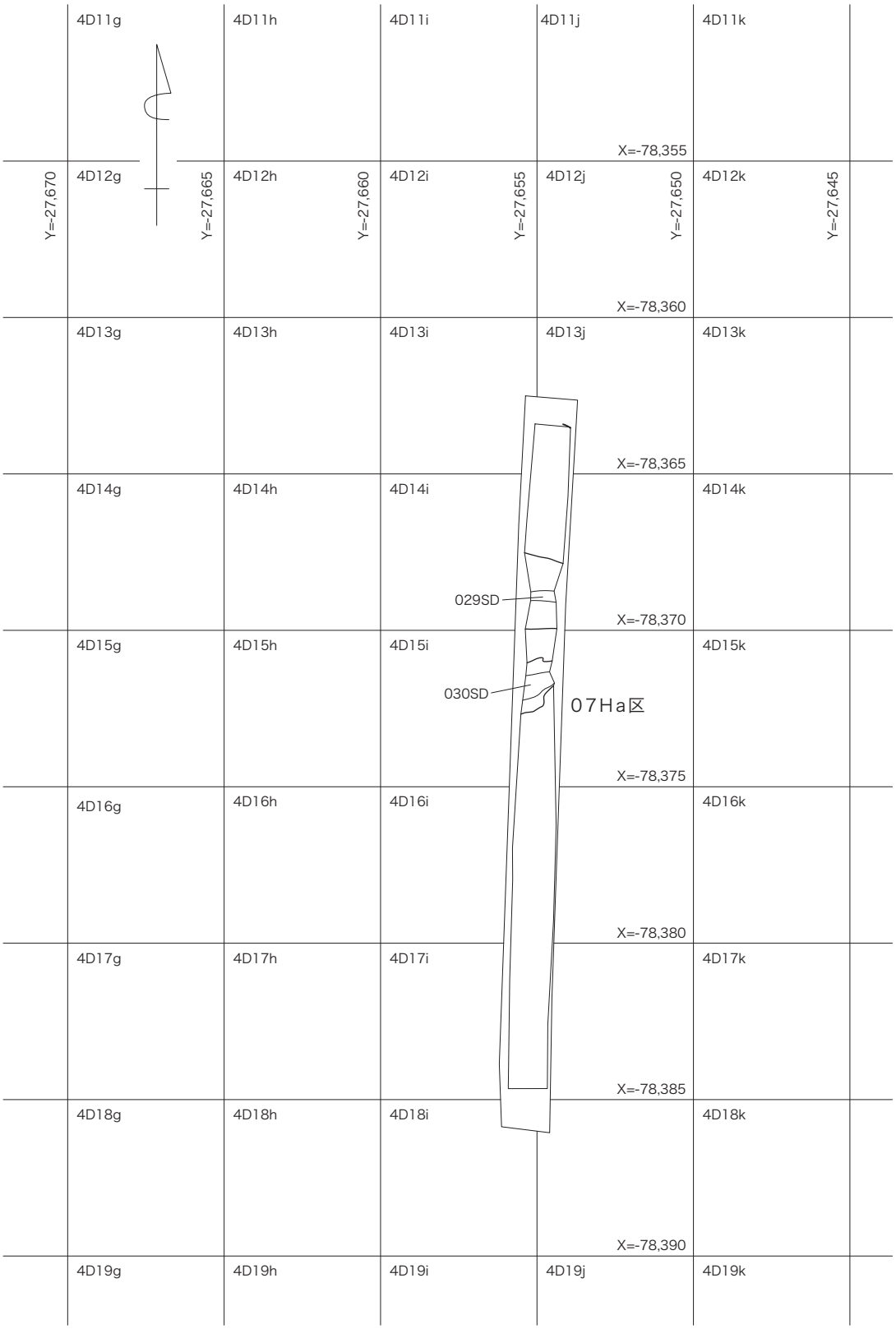
1. 2.5Y3/2 黒褐色 極細粒砂と2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂との斑土
2. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト
4. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂(地山)と2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトとの斑土
5. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を少量含む
6. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルト



1. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を多く含む、炭火物・焼土を少量含む
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂を少量含む、炭火物を少量含む
3. 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂



第 37 図　第 3 面・第 4 面 07C 区遺構図（1：200）、個別遺構断面図（1：100）



第 38 図　第 3 面 07H 区遺構図（1：200）

第３章　出土遺物

今回の遺物出土量はコンテナ約 50 箱であり、一次整理として発掘調査現場から出土した土器・石器などを水洗洗浄し、弥生土器・土師器・陶磁器と石器について分類を行い、各調査区における遺構の変遷を考えるべく全出土土器について、弥生土器・土師器・陶磁器の取り上げ単位毎、つまり遺構、層位毎の出土土器の大まかな時期的偏り（集中度）と混在性を明らかにした。この際、同時に出土遺物の接合作業を進め、遺構の時期を示す資料や特徴的な形態のある資料の抽出を行い、実測・トレースを実施した。また、石器などについては、石器を抽出し、実測・トレースを行い、石器以外のものに関しても、石材を分類し、計測・カウントなどを行い、後の分析資料になるように整理した。ここでは、先に第１節 弥生土器・土師器・陶器の報告を行い、その後に第２節 石器、第３節 ガラス製品の報告をする。

第１節　弥生土器・土師器・陶器（第 39 図～第 59 図）

ここでは弥生土器・土師器・陶器の報告にあたり、弥生土器・土師器については、大まかな時期について遺構ごとの資料を抽出し、主要な形態について述べる。その後須恵器・灰釉陶器・山茶碗について述べる。

（１）弥生時代中期前葉：Ａ期

二枚貝による貝殻施文の太頸壺（広口口縁のものと受口口縁のものがある）、同じく貝殻による調整を行う貝殻条痕調整の太頸壺（受口口縁か内湾口縁の口縁部で体部の貝殻条痕調整後に沈線施文・管状施文を施すもの）の太頸壺（有稜の受け口口縁や内湾する口縁のものが多いか）、貝殻条痕調整の深鉢と厚口鉢、櫛条痕調整の深鉢、沈線施文を主体とする文様間をミガキ調整する太頸壺（いわゆる「大地式壺」）、ハケ調整深鉢の存在等により分類している。したがって深鉢や貝殻施文受口口縁太頸壺ではＢ期のものを含む可能性がある。

Ａ期の弥生土器が出土した多数あるが、Ａ期の遺構では 07Cc 区 055SK・同 131SK・07Ia 区 118NR・同 136SK・07Ie 区 110SK・07Ja 区 008SB があり、他にＢ期の遺構ではあるが、Ａ期の土器がまとまって出土した遺構として 07Cc 区 050SK・051SK がある。

貝殻施文太頸壺　二枚貝の貝殻を施文具とした文様がナデ調整や施文後のミガキ調整の中に施されるもので、貝殻直線文や小刻みな貝殻波状文が口縁端部、頸部、体部上半にみられる（E07Cc058 ～ E07Cc060・E07Cc064 ～ E07Cc071・E07Ia045・E07Ja001 など）。口縁部は頸部から外反して受口口縁になるもの（E07Cc002）とそのままひらいておわる広口口縁になるもの（E07Cc058・E07Cc059・E07Cc064 ～ E07Cc067・E07Cc069 ～ E07Cc071・E07Cc073・E07Ia045・E07Ja001・E07Ja003 など）があり、口縁端部の上端や下端を棒や指頭などで刻むものが多い。体部は E07Ja003 のように底部から体部中位ほどが最も膨らみ頸部に細くなるやや縦長の形をするものが多いか。体部上半の貝殻施文の幅は比較的ひろい。

貝殻施文無頸壺　E07Cc038 は口縁部径 20.0cm 程の無頸壺で、口縁部外面に貝殻直線文と貝殻垂下直線文がみられる。

沈線施文太頸壺　ナデ調整や施文後のミガキ調整の中にやや太い沈線による施文がみられるもので、いわゆる大地式土器の一群になる。沈線による方形区画文（E07Cc003・E07Cc124）や弧文（E07Cc037・E07Ia073）、山形文（E07Ie007）の他、直線文、平行沈線直線文（E07Ia073・E07Ie006）がみられ、貝殻直線文と共伴するもの（E07Ca037）や縄文と共伴するもの（E07Ia073）もみられる。E07Ia064 は口縁部径 15.4cm の内湾口縁の鉢の形状になるものと思われる。E07Id025 はＤ期の遺構から出土したものであるが、体部に沈線に近い櫛描波状文を施す。

貝殻条痕調整太頸壺　口縁部から体部下半まで、貝殻条痕により調整される太頸壺で、貝殻条痕調整後沈線や平行沈線による直線文・山形文・波状文などが描かれるものが多い。口縁部は EIa071 などのように受口

口縁になるものと E07Ic001・E07Id001 などのように内湾口縁のなるものがある。

貝殻条痕調整太頸壺　外面に貝殻条痕調整を施す太頸壺である。E07Ia071 は、口縁部径 25.0cm で口縁部が受口口縁になるもので、口縁部上端面に貝殻押し引き文、口縁受口部に貝殻描弧文がみられる。E07Id001 も同様な形態のものである。E07Ia054 は体部片で、外面に平行沈線山形文が、E07Id026 には体部に平行沈線波状文がみられる。E07Ic001 は口縁部上端面に貝殻押し引き文のある内湾口縁の形態のもので、口縁部径 13.0cm。E07Ja002 は体部の中位程に膨らみのある丸みのあるもので、体部径 29.0cm 程、頸部の跳ね上げ状の貝殻条痕とヨコ貝殻条痕があり、体部にはタテ羽状貝殻条痕の後平行沈線波状文と垂下直線文が施されている。E07Id026 は D 期の遺構から出土したものであるが、体部上半を貝殻条痕で調整し、その上に平行沈線波状文を描く。

貝殻条痕調整厚口鉢　07Cc 区 086SK から出土した E07Cc103 の 1 点のみがあり、内湾する口縁部の端部のみが出土した。口縁端部の折り返しは大きくなく、口縁部径 14.0cm 程である。

貝殻条痕調整深鉢　底部からやや膨らみをもって立ち上がり、口縁部が外反しておわる深鉢で、E07Cc062 が口縁部径 22.0cm、E07Id036 が口縁部径 30.0cm 程、E07Id050 が口縁部径 28.0cm で口縁部内面に貝殻描直線文、口縁部端面に貝殻押し引き文がみられる。E07Ia056 は体部片で、外面に貝殻押圧文のある浮線文がみられる。

櫛条痕調整深鉢　棒状のやや柔らかい櫛状調整具により外面を整えるもので、底部からやや膨らみをもって立ち上がり、口縁部が外反しておわる深鉢で、底部外面に布圧痕がみられる。口縁部内面の比較的上端に近い範囲で連続した櫛条痕刺突文列がみられる。内面はヨコナデ調整を基本とする。E07Cc043 は底部径 8.0cm の底部片、E07Cc061 は口縁部径 28.0cm のもので体部から左上がり斜めの櫛条痕調整がみられる。E07Ia053 は口縁部片で口縁部径 35.0cm、E07Ia057 は底部片で底部径 7.5cm である。E07Id027・E07Id029 は D 期の遺構から出土したものであるが、A 期から B 期のものである可能性が高いものである。

ハケ調整深鉢　体部から口縁部が外反しておわる深鉢形で、外面ハケ調整で、内面ヨコナデ調整のものである。E07Cc082 と E07Cc093 があり、E07Cc082 が口縁部径 25.0cm、E07Cc093 が口縁部径 26.0cm で口縁端部下端を 1 箇所刻んでいる。E07Cc082 は B 期に属する可能性がある。

（２）弥生時代中期中葉前半：B 期

櫛施文（付加沈線磨消手法のもので多くは外面が黒色のもの）の受口口縁細頸壺（無頸壺が少数ある）、櫛施文太頸壺、沈線施文（太い沈線文のものを含む）と縄文等を組み合わせた渦巻文や弧状文の壺、ハケ調整甕、櫛条痕調整深鉢、鉢状の高杯がある。ハケ調整甕については、A 期のハケ調整深鉢と区別できていないものがあり、一部は A 期に属する可能性がある。

B 期の弥生土器が出土した遺構は多数あるが、B 期の遺構では 07Bb 区 017SK・07Ca 区 216SK・07Cc 区 025SK・同 027SK・同 050SK・同 051SK・07Ia 区 086SB・同 104SK・07Id 区 007SK がある。

櫛施文受口口縁細頸壺　口縁部が受口口縁で細頸の形態のもので、体部が下半に稜をもつ程に張って頸部にすぼまる（E07Id045 にみられる）。全体に黒色に焼成されるものが多く、櫛描直線文後その上下に沈線文を施し、櫛描直線文の外側をヨコミガキ調整する付加沈線磨消技法がみられる、その上に赤色の彩色文がみられるものがある。口縁部の資料には E07Bb004・E07Ca040 があり、E07Bb004 は口縁部外面に細かく揺れる櫛描波状文があり、口縁部から頸部にかけて櫛描直線文でうめる、口縁部径 9.6cm である。E07Ca040 は口縁受口部に櫛描波状文後その上に櫛描垂下文、口縁受口部下端に貝殻刻み後棒状浮文２個１組があり、この資料は 07Ca 区 198SB 出土土器と接合した。体部の資料では、E07Cc019・E07Cc020・E07Cc075・E07Ia019・E07Id043・E07Id045・E07Id047・E07Ie003 などがあり、すべての資料に付加沈線磨消技法がみられ、櫛描直線文の上に E07Id043 には櫛描垂下直線文が、E07Id045・E07Ie003 には櫛描弧文、E07Id047 には櫛描垂下波状文が２条～４条で１組の単位でみられる。E07Cc055 は底部片で、体部外面側にタテハケ調整後のヨコミガキ痕がみられ、底部外面に布圧痕が残る。E07Cc075

は出土した 07Cc 区 051SK が A 期からの貝殻施文・貝殻条痕調整の弥生土器を主体とする中で、B 期の遺構であることを示す資料である。

櫛施文太頸壺　口縁部が外反しておわる太頸壺で、口縁部端部が面をもって垂下する形態のもので、E07Cc056・E07Cc057・E07Cc072・E07Ia021・E07Id046 などがある。E07Cc056 は口縁部端面に櫛描波状文を施し、貝殻施文のある E07Cc058 と類似する。E07Cc057 は口縁端面に櫛描直線文がみられ、その上・下端にハケ刻みを施す。E07Cc072 は口縁部径 33.0c、頸部径 16.0cm で、文様構成は貝殻施文太頸壺に類似する。櫛描直線文が口縁部端面・頸部・体部にあり、口縁部上・下端にハケ刻みを施す、頸部は櫛描直線文の上に櫛描垂下直線文を 2 帯 1 組で 4 方に描き、丸みのある体部に 3 帯ある櫛描直線文には追加した弧文が描かれて疑似流水文となっており、櫛描文の外側を細かいヨコミガキ調整で埋める。E07Ia021 は体部上半の部分で、櫛描直線文後沈線斜格子文をほどこす。E07Id046 は表面が摩滅して櫛描文は確認できないが、あまり大きく外反して開かない口縁部から緩やかに頸部がすぼまって体部下半に稜をもつ器形で、口縁部上端に刻みがみられる。

櫛施文高杯　E07Id028 は D 期の遺構から出土したものであるが、杯部内面に櫛描直線文と波状文を描く、A 期に属する可能性がある。

沈線施文壺　貝殻条痕調整やミガキ調整、ナデ調整の上に沈線によって文様を描く壺で、太頸壺から細頸壺に至るものがあり、口縁部は外反しておわるものが多い。出土資料の中では全体を復元できるものはなく、頸部から体部片のものがある。E07Ia020 は体部下半の部分で沈線円形文後円形文の中に沈線直線文を描き、その後ミガキ調整を施す。E07Id044 は太頸壺の体部で、丸みを帯びた体部を貝殻条痕調整後太沈線で楕円形や弧文形を描く。E07Ie004 は頸部片と思われるもので右上がり斜め沈線文後太沈線直線文を施す。E07Id048 は体部下半の部分で、外面に貝殻条痕調整がみられる。

ハケ調整甕　体部から口縁部が外反しておわる深鉢形で、外面ハケ調整で、内面ヨコナデ調整のものである。A 期の部分で述べた E07Cc082 は B 期に属する可能性がある。その他にはあまり良い資料がない。

櫛条痕調整深鉢　A 期の櫛条痕調整深鉢で述べた特徴と同様のもので、E07Cc083 は器高 26.0cm、口縁部径 31.8cm、底部径 6.7cm をはかるもので、口縁部内面の上端に面をもつように櫛条痕刺突文列、体部外面にヨコ羽状櫛条痕調整、底部に布圧痕がみられる。E07Cc085 は、底部片で、外面体部を櫛条痕調整、内面をヨコナデ調整、底部外面に布圧痕を残す。

（3）弥生時代中期中葉後半：C 期

弥生土器の櫛施文受口口縁細頸壺、櫛施文太頸壺、ハケ調整甕、櫛条痕調整深鉢などがある。ハケ調整の甕や櫛条痕調整深鉢については B 期と D 期のものを含む可能性があり、基準が不明瞭な部分を含んでいる。貝殻調整の甕、ハケ調整の台付き甕をこの時期のものには含めていない。

C 期の弥生土器が出土した遺構が多数あるが、C 期の遺構では 07Ab 区 084SD・07Bb 区 008SD・同 038SD・07Hb 区 006SD・同 009SD・07Ia 区 085SB・07Id 区 032SK・同 037SK がある。

櫛施文受口口縁細頸壺　形態は B 期のものと類似するが、体部最大径をもつところが B 期より下に移り、底部から体部が皿状に緩く立ち上がる形態になる。また B 期に比べて付加沈線研磨手法のもので外面の色調が黒色でないものや付加沈線研磨手法の櫛施文の省略されたものが目立つようになり、ミガキ直線文のもの、細頸壺の頸部外面に櫛描直線文が細かい波状文になるものがみられる。E07Aa001 は口縁部径 11cm 前後のもので、口縁受口部下端に刻みがある、E07Ab005 は体部片でハケ調整後ミガキ直線文を施す。E07Cc030 は頸部の部分で、タテハケ調整後体部の沈線直線文後沈線文間にヨコミガキ調整を施す。E07Cc051 は口縁部径 9.5cm のもので、口縁受口部下端に刻みがみられる。E07Ia011 は体部片でハケ調整後沈線直線文を施し、その周囲をヨコミガキ調整する、E07Ia011 は体部片でタテハケ調整後に沈線直線文をめぐらすが、ミガキ調整は省略されている。E07Id033 は口縁部径 9.5cm、頸部径 5.4cm のものでタテハケ調整後口縁受口部下端に刻みを施し、体部の沈線直線文後沈線文間にヨコミガキ調整を施す。E07Id039 は体部片で沈線直線文とヨコミガキ調整がみられるものである。

櫛施文太頸壺　形態ではＢ期のものを引き継ぐが、口縁部が外反しておわる広口壺のタイプで、頸部がやや細く短くなり、頸部外面の無文化、沈線施文に変わる傾向がみられる。E07Ab004 は広口口縁で、やや細い頸部からやや明瞭な境を経て丸みのある体部にいたるもので、口縁端部外面に櫛刻み、口縁部内面に山形浮文、頸部外面に沈線直線文４条、体部外面に沈線直線文がみられる、沈線文はハケ調整面の上に施されている。E07Bb001 ～ E07Bb003 は 07Bb 区 008SD 出土のもので、E07Bb001 は頸部外面のタテハケ調整の後櫛描直線文を施し、口縁部端面に刻みを施す、E07Bb002・E07Bb003 は口縁部上・下端に刻みをいれる。E07Ia067 は口縁端部下端に刻みをいれる広口口縁にやや短くなった頸部を経て体部下半に稜をもって膨らみをもつもので、ハケ調整後体部上半にヨコミガキ調整がみられる。

櫛施文細頸壺　その他の櫛施文細頸壺を一括したもので、受口口縁になるものと広口口縁になるものがあり、櫛施文太頸壺の形態と類似するものと思われる。文様では、体部外面に沈線施文（太沈線文のものを含む）と貝殻刺突文等を組み合わせた渦巻文や弧状文の存在が特徴である。E07Hb005 は広口口縁になる細頸壺の体部片と思われ、外面に２条の沈線弧文とその間を貝殻刺突文列でうめる。E07Ia009 は広口口縁になるもので、口縁部内面に円形浮文２個、口縁端部上・下端に刻みがある。

ハケ調整甕　口縁部から頸部がややくびれて体部にいたる甕形のもので、体部下半からのタテハケ調整がみられる。この時期には口縁部に指による押圧が１ヶ所～２カ所存在するものが特徴的にみられ、あまり体部の径が頸部より大きくならず、深鉢に近い形態のものが多い。E07Bb007・E07Bb008 は同一遺構の出土で、同一個体の可能性があるもので、E07Bb007 は口縁部を１カ所つまみ上げる口縁部から体部上半のもので、口縁部径 21.6cm、頸部径 17.6cm をはかる、E07Bb008 は底部片で底部径 6.0cm をはかる。E07Hb001 は口縁部径 18.0cm、頸部径 15.5cm、体部径 15.8cm をはかるもので、内面にヨコナデ調整を行い、口縁部を１カ所つまみ上げる。E07Ia004 は口縁部片で口縁部に大きく指押さえ調整を施す、D 期の遺構から出土しているので、時期が下がる可能性がある。

櫛条痕調整高杯・櫛条痕調整双口壺　E07Ha004 と E07Ha005 は 07Ha 区の北側の自然流路と思われる堆積から２個体のみ出土したもので、器形などの形態とともに特殊な出土状況である。２個体とも外面全体に櫛条痕調整を施すもので、E07Ha004 は脚底部に布圧痕が残る。E07Ha004 は内傾口縁をもつ椀状の杯部に中実の脚部をもつもので、脚部の底はあげ底となっており、杯部はタテ羽状櫛条痕調整、口縁部はヨコ櫛条痕調整、脚部はタテ櫛条痕調整を行い、杯部内面にヨコナデ調整がみられる。杯部口縁部径 9.0cm、脚部径 5.7cm、器高 12.4cm をはかる。E07Ha005 は口縁部径 2.0cm 程の口縁部が２つある壺で、体部径 8.5cm、器高 9.2cm をはかる。外面全体に櫛条痕調整する中で、口縁部から体部上半に櫛条痕描波状文を施している。底部外面はナデ調整である。口縁部の一つに抉れがあり、液体の注ぎ口とも考えられる。体部上半に赤彩の痕跡が少し残る。

櫛条痕調整深鉢　形態はＢ期のものとあまり変わらないが、口縁部内面の櫛条痕刺突文列が幅広になり、外面の口縁端部下にナナメ櫛条痕調整をするものがみられる。E07Ab006 は口縁部径 40.0cm をはかるやや大型のもので、体部外面を体部からのヨコ羽状櫛条痕調整後口縁部のヨコ櫛条痕調整をして、口縁端部下をさらにヨコ櫛条痕調整により整えている。内面は体部からのヨコナデで、口縁部内面に櫛条痕刺突文列と櫛条痕描波状文を施す。E07Ia013 は口縁部片で外面にヨコ櫛条痕調整の後口縁端部をナナメ櫛条痕調整で整える、内面はヨコナデ調整後ナナメ櫛条痕刺突文列をめぐらす。

（４）弥生時代中期後葉：Ｄ期

この時期の弥生土器についてＣ期からの櫛施文を主体に施す土器群と櫛条痕調整を施す深鉢、ハケ調整甕に、Ｄ期になり主体となるいわゆる凹線文を口縁部等に施す壺・高杯とタタキ調整を体部成形に施す甕（壺にもみられる）が新たに加わる。

Ｄ期の弥生土器が出土した遺構は多く、07Bb 区 040SK・07Ca 区 183SK・同 198SB・同 199SD・同 200SB・同 201SD・同 208SD・同 217SB・07Cb 区 240SB・同 241SB・同 242SK・同 248SB・同 249SD・

同 251SD・同 281SB・同 285SB・同 292SB・07Cc 区 028SB・同 031SK・同 034SK・同 035SB・同 057SK・同 068SK・ 同 086SK・ 同 087SK・ 同 093SK・ 同 104SK・同 117SK・同 123SK・同 130SK・同 132SK・同 145SX・ 同 158SK・07Cd 区 265SB・ 同 291SK・07D 区 020SK・ 同 022SD・07Ha 区 029SD・07Ia 区 090SK・同 097SK・同 111SU・同 112SD・同 114SD・同 133SB・07Id 区 005SB・同 010SK・同 024SK・同 045SK・07Ie 区 065SB・同 083SK などがある。

凹線文受口口縁細頸壺　報告する出土資料では全形が残るものがないが、受口口縁に凹線文を 1 条から 4 条程めぐらし、沈線直線文や櫛描直線文で施文する頸部を経て無文で体部中央付近に膨らみをもつ形態のもので、体部外面等の成形にタタキ調整の後に体部下半のケズリ調整、その後に全体を整えるハケ調整がみられる。E07Ca036 は口縁部から頸部の部分で、受口口縁に凹線文を 2 条めぐらし、頸部に櫛描直線文がみえる。E07Ca038 は体部中央から底部の部分で、櫛描直線文がみられないことから、受口口縁細頸壺に分類した。E07Cb002・E07Cb006・E07Cc028・E07Cc044・E07Cc119・E07Ia042 は口縁部片で受口口縁に凹線文を 1 条から 2 条めぐらす。

凹線文内湾口縁細頸壺　報告する出土資料では全形が残るものがないが、口縁部が外に膨らむ内湾口縁に凹線文を 1 条から 4 条程めぐらし、その下に主に櫛刺突羽状文や櫛描直線文、ナナメ櫛刺突文列めぐらす頸部を経て、複合櫛施文による櫛描直線文や波状文を数帯めぐらす体部が特徴のもので、体部は中央やや下付近に膨らみをもつ形態である。体部外面等の成形にタタキ調整の後に体部下半のケズリ調整、その後に全体を整えるハケ調整がみられる。E07Ca024 は頸部から体部上半の部分で、頸部と体部の境に帯状浮文を貼り付け、その下にナナメ櫛刺突文列、その下に複合櫛施文の櫛描直線文、波状文を上から施す。体部外面等の成形にタタキ調整の後に体部下半のケズリ調整、その後に全体を整えるハケ調整がみられる。E07Ca043 は体部片で、ハケ調整後体部上半に複合櫛施文の櫛描直線文が 3 帯みられる。E07Cb014 は体部片で複合櫛施文による櫛描直線文と波状文の後に櫛描垂下直線文を施している。E07Ia022 は口縁部を欠損するが、頸部側から櫛描き直線文、ナナメ櫛刺突文列、櫛描波状文、櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文でおわるもので、体部上半の櫛描文が直線文と波状文が交互に施文される点と直線文が一番下に施文されている点から、D 期の一番新しい形態のものである。E07Ia023 は頸部の櫛刺突羽状文がみられるもので、E07Ia024 は体部片で、櫛描直線文と櫛描波状文がみられる。E07Ie011 は口縁部に凹線文を 4 条めぐらすもので、その下から頸部にかけてナナメ櫛刺突文列が 2 帯、体部との境に櫛描直線文がみられる、D 期の新しい段階の資料である。

凹線文受口口縁太頸壺　E07Ca019 は頸部の部分で、タテハケ調整後、頸部と体部の境に櫛描廉状文を施し、その下の体部上半に櫛描直線文がみられる。E07Cb016 は受口部に櫛刺突文列後に凹線文を 1 条めぐらす。E07Cc117 は頸部のみであるが、体部との境に 2 条の断面三角形状の帯状浮文を貼付け、その上・下に円形刺突文列をめぐらす。

凹線文内湾口縁太頸壺　内湾口縁に凹線文を数条めぐらす口縁部から櫛描文を施す頸部を経て体部上半を櫛描直線文や櫛描波状文などで飾るもので、体部は中央付近に膨らみをもつ形態である。E07Ca041 は頸部から体部上半の部分で、頸部に櫛描廉状文がめぐり、体部に複合櫛施文による櫛描直線文がみられる。

凹線文広口口縁太頸壺　全体を復元できるものはないが、E07Cc116 は口縁部端面がややひろくなり、凹線文が 3 条めぐらした後 6 個 1 組の円形浮文があり、口縁部内面に櫛刺突羽状文が 2 帯めぐる。

凹線文高杯　木製品を写した口縁部が杯部から水平に外に出て下垂する端面を形成する鍔付皿形高杯と鉢状の杯部を鉢形高杯がある。脚部はどちらの形態も中空のものである。鉢形高杯は形態上類似する凹線文鉢と成立過程が同じであれば D 期の後半に位置づけられるものである。凹線文顎付皿形高杯は図化できる資料がなかった。E07Cb022 は口縁部に 5 条の凹線文をめぐらす鉢状の高杯で、鉢の可能性もあるものである。E07Ie016 は口縁部に凹線文を 3 条めぐらす鉢形高杯で、杯部外面にヨコタタキ調整後タテヘラケズリ調整を行い最後に下からのタテハケ調整で器面を整えている、内面はタテハケ調整が残り、杯部底面を充填して成形している。

凹線文鉢　図化できた資料が少ないが、E07Cc050 は口縁部に凹線文を１条めぐらすもので、D 期の後半に位置付けられるものである。

櫛施文細頸壺　凹線文を口縁部に施さない細頸壺である。口縁部が広口口縁になるものと受口口縁になるものがあり、体部は比較的丸みを帯びた形態になるものである。底部がやや突出する形態である。E07Ca042 は体部片で外面に櫛描直線文と櫛刺突山形文をめぐらす。E07Cb008 は受口口縁になるもので、口縁部径 10.0cm 程である。E07Cc029 は頸部から体部にいたる部分のもので、ハケ調整後沈線直線文と貝殻刺突文列がみられる。E07Cc032 は体部片で、外面に貝殻刺突文列、その上・下端に沈線文を施す。E07Cc048 は口縁部の受口が不明瞭な受口口縁の壺で、口縁部から頸部の外面に櫛描直線文がみられるもので、口縁受口部下端に刻みを施すものである。E07Cc097 は口縁部断面がほぼ斜め上にあがっておわる直口口縁の壺で、内・外面にハケ調整を施す、口縁部上端面が上を向く形状から D 期の中で古いタイプのものである。E07Ia043 は受口口縁になるもので、受口部外面にヨコ羽状刻みをいれる。E07Ia051 は口縁部断面がほぼ斜め上にあがっておわる直口口縁の壺で、外面を細かい櫛描波状文が口縁部から頸部にかけてめぐる。E07Ie010 は受口口縁になるもので、受口部下端に貝殻刻みをめぐらすものである。

櫛施文太頸壺　C 期から続く形態のもので、広口口縁の口縁部からやや細くなる頸部を経て体部中央やや下付近に膨らみをもつ形態のもので、底部はやや突出するものがある。E07Ca021 は広口口縁のもので、口縁部端面に櫛描波状文、頸部に櫛描直線文、口縁部内面に櫛描直線文と櫛刺突文列がめぐる。E07Ca025 も広口口縁になるもので、口縁部端面に貝殻刺突文列、頸部に上から櫛描波状文、櫛描直線文、体部との境に櫛刺突文列を施す、口縁部内面をヨコナデ調整後櫛描波状文がめぐる。E07Cc031 は頸部で、ハケ調整後の櫛描波状文がみられる。E07Cc041 は表面が摩滅して不明であるが、口縁部径 13.0cm、頸部径 9.4cm、底部径 5.6cm、器高 27.6cm をはかるもので、比較的太い頸部から口縁部があまり開かずにおわり、体部が下膨れして底部が突出する形態のものである、形態から C 期末から D 期前半にかけてのものと思われる。E07Cc098 は広口口縁の口縁部片で、内面に三角形刺突文列、口縁端部上・下端に刻みを施している。E07Ie012 は口縁部径 17.0cm をはかる広口口縁のもので、口縁部上・下端に刻みがあり、口縁部内面に刻みのある棒状浮文を貼付ける。E07Ie013 は体部片で、外面に三角形刺突文列が３帯みられる。

三河系壺　全形がわかるものはないが、比較的大型の太頸壺と小型の細頸壺がある。形態は受口口縁になるものと広口口縁で比較的短く広がっておわるものがあり、比較的短い頸部を経て体部下半に大きく膨らんで稜をもち、底部に丸みをもっていたる形態である、底部が突出する。外面の色調が黒みを帯びたもので、文様では沈線文による波状文や直線文、やや柔らかい原体を使ったと思われるササラ状櫛施文による緩やかな波状文や直線文が特徴である。E07Cb015 は太頸壺の体部片で、体部上半にササラ状櫛押し引き文とササラ状櫛波状文、沈線弧文列がみられる。E07Cc039 は広口口縁の太頸壺で口縁部が頸部から短く外反しておわるもので、口縁部端面に３個１組の刻みがある、頸部にササラ状櫛描直線文、体部上半にササラ状櫛施文波状文がみられる。

E07Cc101 は細頸壺の体部片で、体部外面にササラ状櫛描直線文がめぐり、その下をヨコミガキ調整がみられる、体部径 28.0cm 程である。E07Cc120 は広口口縁細頸壺になるもので、口縁端部に多数の刻みがあり、頸部からのササラ状櫛描ハネ上げ文が口縁部にのびる。E07Ia044 は受口口縁太頸壺で、口縁部径 18.2cm、頸部径 10.6cm をはかる、内外面にナデ調整を行い、頸部外面にササラ状櫛ハネ上げ文の後沈線斜め文、櫛刺突文、沈線直線文、沈線波状文をめぐらしている。

ハケ調整甕　形態は口縁部が断面「く」の字状に体部から外反してのびるもので、体部上半がやや膨らんだ後底部にいたる。器面調整は外面にハケ調整、内面はハケ調整とナデ調整がみられ、体部下半にはケズリ調整がみられるものがある。体部上半の最後にヨコハケ調整を直線文のようにいれるものがみられる。底部が平底のものと脚台が付くものがある。E07Cb012 は口縁部端面にハケ刻みを施すもので、外面体部上半にハケ調整後のヨコハケ調整が直線文のようにめぐる、内

面はヨコナデ調整である。E07Cc033 は口縁部下端にハケ刻みを施すもので、口縁部径 20.0cm をはかる。E07Cc109・E07Cc110 は台付甕の脚台部で、外面ハケ調整のものである。E07Cc110 は体部内面にタテケズリ調整がみられるが、底部を充填するものがあるのでハケ調整甕に含めた。E07Cc118 は口縁部端面にヨコハケ調整後刻みをつけるもので、口縁部径 23.6cm をはかる。E07Ia028 は口縁端部下端に刻みのあるもので口縁部径 18.6cm、E07Ia030 は口縁部端面に刻みがあるもので口縁部径 20.0cm をはかる。E07Ia049 は底部径 6.5cm の平底甕で、内面にハケ調整とナデ調整がみられる。E07Ie014 は底部径 5.4cm の平底甕で内面にタテキズリ調整がみられる。

受口口縁甕　全形を復元できるものはないが、外面にハケか櫛による刺突文列がみられる受口の口縁部をもつ甕で、体部上半の比較的体部中央に近い部分で膨らみをもって底部にいたるものである。体部上半にはハケ調整による波状文や直線文のような調整がみられる。E07Cb003 は受口口縁の口縁部から頸部にかけての部分で、受口部にナナメ刺突文列、体部上半に直線文状のヨコハケ調整がみられる。E07Cc104 は緩い受け口になるもので、口縁部上・下端に刻みを施す。

タタキ調整甕　形態は口縁部が断面「く」の字状に体部から外反してのびるもので、体部上半が比較的体部の肩が張るように膨らんだ後、底部にいたる。器面調整は外面にハケ調整後タタキ調整を行い、再びハケ調整、体部下半を底部際からのタテハケ調整で仕上げておわるものが基本で後半のハケ調整は省略がみられるものがある、内面はハケ調整後外面のタタキ調整に伴う押さえ痕がみられ、その後体部下半を下から上へのタテケズリを施す。体部上半の最後にヨコハケ調整を直線文のようにいれるものがみられる。底部が平底のものと脚台が付くものがある。E07Cb004 は口縁部端面にハケ刻みを施し、外面にタタキ調整が残る平底甕で、内面にハケ調整の後に外面のタタキ調整に伴う押さえ痕、体部下半内面にタテケズリ調整がみられる、口縁部径 23.6cm、頸部径 20.2cm、底部径 4.8cm をはかる。E07Cb007 は脚部径 10.6cm をはかる大型の台付甕の脚部、E07Cb009 は外面タタキ調整、内面ケズリ調整の平底甕の底部、E07Cb010 は脚部径 8.0cm の台付甕の脚部である。E07Cb023 は口縁部端面にハケ刻みを施すもので、口縁部径 22.3cm をはかる。E07Cb024 は上げ底の内面ケズリ調整のもので、外面はタテハケ調整がミガキ調整のようにみえる。E07Cb028 は底部片で、外面ハケ調整、内面ケズリ調整の平底甕である。E07Cc105・E07Cc106 は口縁端部下端に刻みのあるもので口縁部径 20.5cm 前後の中型の甕、E07Cc107 は口縁部端面に刻みがある大型のもので口縁部径 31.4cm をはかる。E07Cc108 は内面ケズリ調整のある平底甕である。E07Ha002 は外面のタタキ調整が口縁部にまでいたるもので、その後の体部下半のタテハケ調整がみられる、口縁部端面に刻みを施す。E07Ia029 は口縁端部下端に刻みのあるもので、体部外面に直線文のようなヨコハケ調整を施す。E07Ia047 は口縁端部下端に刻みを施す大型甕で、口縁部径 31.0cm をはかる、E07Ia048 は口縁部端面に刻みを施す中型の甕で、口縁部径 18.0cm をはかる。E07Ia050 は内面ケズリ調整の低脚の台付甕である。E07Ie015 は口縁部径 26.0cm をはかる内面体部下半にタテケズリ調整がみられるもので、口縁部端面に刻みを施す、E07Ie017 は底部径 7.8cm の平底甕で体部下半内面にタテケズリ調整を施す。

櫛条痕調整深鉢　形態は C 期のものとほぼ変わらない。E07Bb009 は体部外面にヨコ羽状櫛条痕文調整をするあまり口縁部が外反しない形のもので、口縁部をヨコ櫛条痕調整で整える、内面はヨコナデ調整を行い、口縁部にやや不整方向の櫛条痕刺突文列がめぐる。E07Cc034 は底部径 7.0cm をはかる底部片で、底部外面に布圧痕が残る。E07Cc042 は口縁部 30.0cm の体部外面にタテ櫛条痕調整のもの、E07Cc043 は底部径 8.0cm のもので、底部外面に布圧痕を残す。E07Cc042 は口縁部内面の櫛条痕刺突文列が口縁端部に比較的偏って施されている点から D 期の遺構から出土しているが、B 期にさかのぼる可能性があるものである。E07Cc049 は口縁端部外面にヨコ櫛条痕調整がみられるもので、口縁部内面に櫛条痕刺突文列がめぐる。E07Ia031 はあまり口縁部が外反しない口縁部径 23.0cm のもので、口縁端部外面にナナメ櫛条痕調整を施す。

加工円盤　土器片を割って成形し円形にしたもの、

また割った後破面を研磨して整えるものである。E07Ca039 は径 2.2cm のもので、ハケ調整が残り、破面を研磨している可能性がある。E07Ia041 は C 期から D 期の壺体部片を加工したもので、側面の研磨が少しみられる、径 2.8cm。

その他　E07Cb025 は口縁部径 6.8cm、底部径 6.0cm、器高 2.6cm の平面円形で丸みある小鉢で、外面をナデ調整、内面をハケ調整、口縁上端面を刻んで整える。E07Cb027 は内傾口縁の鉢で口縁部径 9.8cm をはかる。E07Cc115 は 07Cc 区 104SK から出土した無文高杯で、鉢形にひらく口縁部径が 9.5cm、やや膨らみをもってひらく脚部をもつ、脚台部径が 6.2cm、器高 10.0cm のもので、明確な時期は不明であるが、脚台の形状が台付甕の脚部に類似する点から D 期に含める。E07Cc121 は鳥形土器と思われるもので、頭部（口縁部）を欠損する、全体をハケ調整した後に体部上半に羽状表現と思われる櫛刺突文がみられる、底部は上げ底で、体部径 8.6cm×9.9cm、底部径 4.0cm×5.6cm である。

（５）弥生時代後期：E 期

この時期の弥生土器は出土量が少なく、可能な限り抽出した。今回の報告では、弥生時代中期後葉から弥生時代後期への過渡期の時期にあたる「八王子・古宮式」土器は明瞭な資料を得ることができなかった。D 期の弥生土器と変化しない部分もあるが、器形の変化にあまり連続性がないように見えるので、D 期と E 期の弥生土器の区分については高杯の口縁端部が屈曲するもの（いわゆる「山中式高杯」）の存在やワイン形杯部をもつ高杯の存在（D 期にも存在する形態であるが）、椀形杯部をもつ高杯の存在、器台の存在、外面ハケ調整、内面ケズリ調整の有頸甕の存在、太頸壺から頸部の形態変化した広口壺の存在、赤彩土器の存在等から区分した。

E 期の弥生土器の出土した遺構は少なく、07Cb 区 247SD・07Cc 区 003SD・07Ia 区 130SK・07Id 区 004SD がある。

E07Cb011 は 07Cb 区 247SD 出土の有稜口縁高杯で、口縁部外面に櫛描波状文がみられる。E07Cb026 は 07Cb 区 286SB 出土の広口壺の体部片で山形刺突文列と櫛描直線文がみられる。07Cc 区 003SD と 07Id 区 004SD は同一の方形周溝墓の溝で、E 期の遺構と考えているが、出土土器は A 期から F 期まで含み、A 期から D 期の弥生土器が主体を占める。以下に遺構に関連する E 期から F 期のものについて述べる。E07Cc006 は台付広口壺の脚部で脚部端面に凹線文が 3 条めぐり、外面に赤彩が施される。E07Id004 ～ E07Id006 は広口壺で、E07Id004 は口縁部端面に 2 条の凹線文をめぐらす口縁部、E07Id005 は体部片で頸部との境に帯状浮線文を貼付け、その下に櫛描直線文と櫛刺突文列を交互にめぐらす、E07Id006 は体部上半の部分で上から櫛描直線文、円形刺突文列、櫛描波状文をめぐらす。E07Cc007・E07Cc008・E07Cc011・E07Id007 ～ E07Id010 は「く」の字口縁台付甕で、E07Cc007・E07Cc008・E07Id007 ～ E07Id009 は断面「く」の字状に体部から外反しておわる口縁部をもち、体部内面にヨコケズリ調整を行う（E07Id009 はヨコナデ調整）、E07Cc008 体部外面はヨコナデ調整とともに体部下半にヨコミガキ調整がみられ、E07Id007・E07Id009 は口縁部端面に刻みがみられる、E07Cc011・E07Id010 は脚部で、E07Cc011 は脚部径 8.8cm、E07Id010 は脚部径 11.0cm である。E07Cc009・E07Cc014・E07Cc016・E07Id011 ～ E07Id013 は有稜口縁高杯で、E07Cc009・E07Id012 は口縁部外面に櫛描波状文を施し、ミガキ調整がみられる。E07Cc014・E07Cc016 は円形透かしのある脚部で、E07Cc014 は櫛描直線文と貝殻刺突文列が交互にあり、その後タテミガキ調整がはいり、外面に赤彩が施されているもの、E07Cc016 は櫛描直線文が 3 帯めぐり、脚部下半にタテミガキ調整がみられる。E07Cc010・E07Cc012・E07Cc013・E07Cc015・E07Id014・E07Id015・E07Id017 は内湾口縁高杯で、外面と杯部内面にタテミガキ調整を施すもので、E07Cc010・E07Id014・E07Id015 が口縁部径 23.0cm ～ 26.4cm をはかる杯部、E07Cc012・E07Cc013・E07Cc015・E07Id017 は脚部で円形透かしがあるもので、E07Cc012・E07Cc013 は脚部が屈折するものである。E07Id016 は杯部がワイングラス形になる高杯の杯部から脚部の部分で脚部外面に櫛描直線文がめぐる。E07Id018 は受け部外面に赤彩がみられる器台で口縁部径 13.6cm をはかる。E07Id019 は櫛描直線文をめぐらす長頸壺の頸部であろうか。

E07Ia062 は 07Ia 区 130SK 出土の有稜口縁高杯で口縁部外面に櫛描扇形文がめぐる。E07Ia070 は包含層

出土の赤彩広口壺のであるが、口縁部外面と内面に赤彩が残り、頸部外面に帯状浮文があり、その上・下に円形刺突文列がめぐる、口縁部内面には櫛刺突羽状文と櫛描扇形文がめぐる。

（6）古墳時代前期前半：F 期

土器の E 期から継続する有稜口縁高杯や広口壺、「く」の字口縁台付甕などの器形と、内湾口縁高杯や瓢形壺、「S」字口縁台付甕、器台など F 期から現れる器形がある。しかし、全体にこの時期の土器の出土量は少なく、「S」字状口縁有頸甕を図化できるものはなかった。

F 期の土師器が出土した遺構は、07Ca 区 195SD・同 203SK・07Cb 区 274SK がある。

E07Ca017・E07Ca018 は 07Ca 区 195SD 出土のもので、E07Ca017 は瓢形壺の口縁部片で口縁部径 10.0cm、E07Ca018 は C 期～D 期の細頸壺の底部片である。E07Ca030 ～ E07Ca035 は 07Ca 区 203SK 出土のもので、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の時期のものと思われ、E07Ca030 は体部上半に櫛描直線文がある広口壺、E07Ca032 は瓢形壺の体部下半から底部と思われ、体部下半にヨコミガキ調整がみられる。E07Ca033 は杯部の口縁が大きく外反する有稜口縁高杯で、杯部口縁部に櫛描波状文がみられ、杯部内面にタテミガキ調整を施す、脚部に円形透かしがある。E07Ca034 は有稜口縁高杯の柱状になる脚部で、脚部上半に櫛描直線文が 4 帯めぐり、円形透かしが施される、脚部下半にはハケ調整後のミガキ調整がみられる。E07Ca035 は屈折脚に内湾する杯部が付く高杯で、脚屈折部に円形透かしがあり、外面全体にタテミガキ調整を施す。E07Ca031 は D 期の凹線文太頸壺の体部片である。

E07Cb021 は 07Cb 区 274SK 出土の皿形受け部をもつ器台で口縁部径 9.0cm である。

（7）古代

古代の出土遺物は少なく、実測できたものを述べる。

07Aa 区 010SK 出土の E07Aa002 は須恵器の蓋受け部のある杯身で 7 世紀のもの、07Aa 区 011SK 出土の E07Aa003 は土師器の口縁端部をつまみ上げるハケ調整甕で 6 世紀のものである。07Ab 区 081SK 出土の EAb002 は須恵器の高杯で、丸く立ち上がる椀形の杯身に、拄状で下半が大きく広がる脚部の形態のもの、07Ab 区の包含層から出土した E07Ab008 は E07Ab002 と同様の形態の須恵器の高杯で、7 世紀のものである。

（8）中世

中世の出土遺物も少なく、古代の出土遺物と同様に実測できたものを述べる。

07Cc 区 103SK 出土の E07Cc130 は南部系の山茶碗で、口縁部径 15.8cm をはかる。07Ca 区 190SK 出土の E07Ca016 は南部系山茶碗で高台部径 6.5cm をはかる。07Cb 区 233SD 出土の E07Cb001 は北部系山茶碗で高台部径 5.2cm をはかる。07Cb 北区の包含層から出土した E07Cb033 は灰釉陶器の皿で、口縁部径 16.8cm、口縁部内・外面に灰釉がかかる。07Gb 区 045SD 出土の E-Gb001 は南部系山茶碗で高台部径 8.2cm の断面三角形の高台が付く。

（9）その他

時期は不明のもので主要なものを述べる。E07Id051 は注口状のもの、表面が摩滅している。E07Id052 は紡錘車で、径 4.0cm、厚み 0.9cm の円形の下面が上げ底状に凹むもので、上面と側面に沈線文がみられる。E07Id053 は土錘で、径 1.3cm、孔径 0.4cm のもので、全面ナデ調整である。

第 2 節　石器（第 60 図～第 87 図）

今回の分析では弥生時代中期を中心とした時期の石器が　点出土した。石器には石材表面の加工技術から敲打痕とその後の研磨痕がみられる磨製石器とあまり変形加工を行わない礫石器、打撃により剥離の後、押圧剥離による細部調整（細部変形）を行い製品化する打製石器がある。以下で、1．磨製石器、2．礫石器、3．打製石器に分けて、各石器の主要な形態について述べる。

1．磨製石器

出土した磨製石器には、石剣、両刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、管玉がある。

a．石剣

磨製石剣は 2 点あり、2 点とも泥岩製である。S07Cc002 は刃部の一部が残るのみで形状が不明であ

るが、S07Cc148 は刃部の溝状の樋が存在することから銅剣型有樋式石剣になるものである。

b. 石包丁

S07Cb028 は石包丁と思われる板状のもので、泥岩製である。厚み 0.5cm で、両面穿孔の紐孔が２個確認でき、背面にかけて紐擦れ痕がみられる。紐孔付近に研磨痕がみられる。

c. 両刃石斧

刃部が両刃の磨製石斧でハイアロクラスタイト製のものが６点ある。S07Cc127 は全長 9.6cm、刃幅 5.1cm、厚み 2.9cm のほぼ完形なもので、基部から刃部へ大きく広がる形態で、敲打痕を残すが刃部側を中心に研磨痕がみられる。S07Cc003・S07Cc037 は研磨痕の残る側面部破片、S07Cc116 は敲打痕がみられる基部の破片、S07Cc109 は基部の破片で石斧を柄に緊縛した痕跡が帯状に残る。S07Id001 は基部側の部分と思われるものあるが、基部から刃部にかけての開きが少なく、板状であるので、石斧の再生途上品の可能性がある。

d. 柱状片刃石斧

刃部が片刃で横断面形が方形状の磨製石斧でハイアロクラスタイト製のものが１点ある。S07Bb008 は基部の部分で、柱状の身中央付近に抉りが残る。厚み 3.4cm である。

e. 扁平片刃石斧

刃部が片刃で小型の磨製石斧で、横断面形が偏平な板状の形態のものである。８点出土し、石材は全てハイアロクラスタイトである。S07Cc004 は厚み 1.4cm をはかるもので、刃部の破片である。S07Cc119 は長径 11.2cm、幅 3.3cm、厚み 2.0cm をはかるもので、基部から 3.9cm 程のところに柄をつけたと思われる段があり、その付近で一部欠損している。S07Cc133 は長径 4.3cm、幅 1.6cm、厚み 0.8cm の小型のもの、S07Cc134 と S07Cc135 は長径 7.0cm と 7.5cm、幅 2.5cm と 2.2cm、厚み 1.0cm と 1.2cm の中型のもので、S07Cc134 は基部から刃部にかけて緩やかに幅が広くなっている。07Id002 は長径 3.5cm、幅 3.1cm、厚み 1.0m の小型の長径に対して幅広のもので、基部から 0.75cm 付近までが柄にかかる部分で、刃部の片側の刃減りが著しい。S07Id020 は長径 4.1cm、幅 2.4cm、厚み 0.9cm の小型のもので、刃部の片側がやや刃減りしている。S07Id038 は刃部の破片であるが、大型のものと思われる。

e. 管玉

S07Cc105 は 07Cc 区 058SK から出土したもので、緑色凝灰岩製の管玉である。径 0.45cm の柱状で、長さ 0.9cm 残存している。

２．礫石器

出土した礫石器には、凹み石、敲石、砥石、磨石、粗製剥片石器がある。

a. 凹み石・敲石

石器製作の石材の打撃や堅果など植物性食料の解体・潰し等の機能が考えられるもので、拳大から人頭大までの大きさの円礫・亜円礫・亜角礫を主体に使う。石材表面に打撃による敲打痕が認められるものをタタキ石とした。また敲打痕が密になり集中して凹みを形成したものを凹み石に分類した。出土したものは 34 点あり、磨石から転用されたものが６点ある。石材では安山岩３点、花崗岩２点、凝灰質砂岩２点、砂岩 10 点、濃飛流紋岩 12 点、磨石からの転用品には安山岩１点、花崗岩１点、砂岩２点、濃飛流紋岩２点があり、濃飛流紋岩と砂岩のものが多い。形態では、棒状のもので S07Cb006 や S07Cc013 のような棒状のもので先端部分に敲打痕がよくみられるもの、S07Bb009 や S07Cc007 のように、先端部分と側面の偏った部分に敲打痕による凹みがみられるものがある。棒状のものから亜円礫を用いたものでは、S07Ca003 のようにやや棒状でやや平坦な面に石材の上・下２カ所に敲打痕による線状の凹みがみられるもの、S07Bb005 のようにやや大型の長細い亜円礫を用いたもので、敲打痕による凹みが平坦な面の中央部付近とやや偏った部分にあるものがある。亜円礫から円礫を用いたものでは、S07Bb001 や S07Cc017 のようにやや扁平な円礫の平坦面の中央付近に敲打痕による凹みがみられるものがあり、円礫を用いたものでは S07Ia024 や S07Bb011、S07Bb013 のように、石材の縁辺部に敲打痕が顕著にみられるものがある。

磨石からの転用としては、S07Cc015 のようにやや大型の石材の比較的平坦な面を磨き面とし、石材の稜線上になる部分に敲打痕がみられる。S07Ie002 は扁平な亜円礫を用いた平坦面中央に敲打痕による凹みが若

干あるもので、側面の稜線に対して垂直方向に線状の磨き痕が顕著に残るものである。S07Cb006 の敲打痕のある先端部付近と S07Cc018 の凹みがある周囲に煤付着や変色等の被熱痕がみられる。反対に凹み石からの転用としては、S07Ab001 は棒状のもので、敲打痕による凹みは石材の中央付近にあるが、石材が割れた後か棒状の先端部分に磨き面がみられ、杵状の製品に転用された可能性がある。S07Cc011 は赤色の大型亜角礫を用いたもので、蒲鉾状に割れた石材の平坦面に磨り面と思われる円滑な面があり、自然面が残る側面に長径 4.35cm、短径 3.3cm、深さ 1.0cm の円滑な面をもつ丸い穴状凹みがあり、穴の位置から磨石として使用された以前に凹み石に使用された可能性があるものである。

b. 砥石

元の製品が拳大から人頭大までの大きさの亜角礫・角礫が想定されるもので、石材表面に対象物を研磨したへこみ状の研ぎ面が認められるものである。砥石の可能性のあるものを 8 点資料化したが、全体の形状の分かるものはなく、研磨面が一部分残るのみのものが多い。石材は泥質凝灰岩 1 点（S07Ie006）、凝灰質砂岩 1 点（S07Ca013）、砂岩 3 点（S07Cb016・S07Ia001・S07Id003）、濃飛流紋岩 1 点（S07Id039）、花崗岩 1 点（S07Bb002）、ホルンフェルス 1 点（S07Cc016）がある。S07Id003 は箱形で比較的全体の形状が残るものである。今回の出土遺物の中には、研ぎ面に溝状の条線が認められる有溝砥石はなかった。また濃飛流紋岩の S07Ie006、花崗岩の S07Bb002、ホルンフェルスの S07Cc016 は砥石というより磨石に分類しても良いのかもしれない。

c. 磨石

拳大から人頭大までの大きさの円礫・亜円礫・亜角礫を使ったもので、石材表面に打撃などによる敲打痕はないが、石材表面にややぬめり（磨き痕）のような光沢が認められるものを 16 点資料化した。石材は、安山岩 2 点、濃飛流紋岩 9 点、砂岩 4 点、ホルンフェルス 1 点で、濃飛流紋岩が多い。形態では、やや扁平な板状のものとして S07Ab003・S07Bb010・S07Bb012・S07Cb025・S07Cc088・S07Cc112・S07Ia009 があり、S07Ab003・S07Bb010・S07Bb012・S07Cb025 は平面隅丸方形から隅丸長方形のもので、S07Cc112 は平面円形のものである。次に大型の棒状の石材を使ったものとして S07Cb009・S07Cc068・S07Cc085 があり、棒状のややへこんだ鞍部が滑らかになっている。また S07Cb009・S07Cc085 には被熱痕がみられる。その他には不整形なものがあり、S07Cc078 は大型のもので、へこんだ部分の付近に被熱痕がみられる、S07Ia004 は大型のもので、2 面の磨き面と思われる円滑面がある。S07Ia012 も不整形なもので、長径 9.0cm 程の小型のものなので手持ちで使用されたか。

d. 粗製剥片石器

円礫から亜円礫の表面を扇形に剥離した形態のもので、剥離した鋭利な縁辺が刃部となる。形態から可能性のあるものを 7 点資料化したが、肉眼で使用痕が確認できるのは S07Id031 のみである。S07Id031 は安山岩製のもので、刃部側をやや細かく剥離加工して薄くし、両側辺の部分に抉りを入れるような剥離加工を施す。

e. 炉石

地床炉の内部に置かれて、甕形土器を上に置いて使ったものとかんがえられるもので、平面円形で偏平な亜円礫が用いられる。石材表面に被熱による煤の付着、赤変化がみられるものや平坦な面の中央部分に被熱による変化が少ない部分がみられるものを 5 点資料化した。石材は安山岩 1 点（S07Cc126）、砂岩 1 点（S07Cc082）、濃飛流紋岩 3 点（S07Cc106・S07Cc129・S07Ia003）がある。石材の法量は径 11.0cm～15.0cm、厚み 3.4cm～5.1cm のものである。S07Cc126 は平坦面の縁辺に灰状土壌が付着する。

f. 炉縁石

地床炉の縁辺に置かれたもので、棒状の亜円礫を主体に用いるものである。石材表面の片面に被熱による煤の付着や色調の赤変化などの被熱痕がみられるものを 12 点資料化した。石材は安山岩 1 点（S07Cb027）、砂岩 3 点（S07Cc012・S07Ic001・S07Ie005）、濃飛流紋岩 8 点（S07Ab002・S07Cc005・S07Cc006・S07Cc009・S07Cc086・S07Cc110・S07Cc111・S07Cc120）がある。石材の法量は長径が 9.7cm～25.5cm の 20cm 前後で、短径や厚みが 4.0cm～12.3cm の 5cm～10cm 前後のものである。

S07Cc006 には石材表面の色調の違いによるふきこぼれ痕、S06Cc012 には黒色付着物のふきこぼれ痕が確認できる。

３．打製石器

出土した打製石器には、石鏃、石錐、石小刀、石匙、両極石器・剥片などの石器加工途上品がある。

a．石鏃

打製石鏃が 50 点とその未製品が７点ある。石材は製品では下呂石 41 点、安山岩１点、チャート８点、未製品では下呂石５点、チャート１点、サヌカイト１点である。石鏃の法量では、欠損のないもので S07Cc089 の長径 1.5cm から S0707Cc131 の長径 3.6cm まであり、比較的小型から中型の石鏃が主体である。一部欠損しているものに平面五角形石鏃の形態と推定される S07Bb004 や縦長の剥片から製作されたと思われる細身の S07Cc121 のように長径 4cm を超える程のものはありそうであるが、長径 5cm を超えるような長径で大型の石鏃はない。石鏃の形態では、鏃身先端部が三角形状に徐々に狭まって尖る三角形タイプ（S07Ia023 など）、鏃身先端部が先端からやや急に広がって、一度稜をもって逆刺部にいたる稜タイプ（先端を欠損しているが S07Ia016 が典型、S07Ca018、S07Ia008 など）、その違いが不明瞭なもの、鏃身先端部からやや丸みをもってひろがる不明稜タイプ（S07Cc118、S07Cc124、S07Id043、S07Id047 など）がある。S07Ia023 のような鏃身部の幅が狭いものは三角形タイプに分類できるが、S07Ca017 のような鏃身が細身でないものは不明瞭タイプになるものが多く、また S07Ca018 のように鏃身に先端部から明瞭な稜をもって逆刺部にいたるものは少ない。よって鏃身部の分類上は先端部から広がる稜の不明瞭タイプが主体といえる。基部の分類では、無基式と凸基式があり、凸基式が多く主体的存在である。無基式では S07Ca017 のような平基タイプのものや S07Cc076 のような凹基タイプのようなものがあるが、明確なものは少なく、S07Cc071 のように凸基式を志向しながら、抉りがほとんどなく、平基タイプのようなものもある。凸基式には、S07Ia023・S07Cb008・S07Hb002・S07Ia006・S07Ia008 ように平基状の基部から凸基部を作り出すようにある逆刺タイプのものと S07Cc023・S07Cc118・S07Id043 のように鏃身部が最も幅広になる基部との境から徐々に狭まって凸基部を作り出す滴形タイプがある。凸基式の逆刺タイプには S07Cb008 のように一度の剥離により凸部を形成するものが多く、S07Ia023 のように複数の剥離により比較的丁寧に凸部を形成しようとするものは少ないが、凸基式の滴形タイプは複数の剥離により凸部を形成するものが多い。このことは S07Cc124 や S07Id043 のように複数の剥離により凸基部を作り出すものに滴形タイプと逆刺タイプの中間タイプのものがあることも石鏃製作の技術的連続性を示すものと思われる。滴形タイプは鏃身部に明瞭な稜をもつ稜タイプがほとんどなく、鏃身部と基部のつくりが類似するものといえる。

また基部の逆刺タイプで鏃身部が稜タイプか不明瞭タイプでは、S07Cc070・S07Cc089・S07Hb002 のような長径 1.5cm ～ 2.1cm 前後の小さいものと、S07Ia006・S07Ia008 のような長径 2.8cm ～ 3.0cm 前後のやや大きいものと、法量が違っても同一形を志向したように思われるものがみられる。

他に S07Cb005 は柳葉形に近い不定形なものであるが、先端付近に赤彩部分がみられる。

b．石錐

形態は石鏃の平面無基式のものと柳葉形のものと類似するもので、S07Cb001 や S07Cc063 のような平面形滴形に近い三角形から、S07Cc024 や S07Cc092 のような柳葉形になるものなどがあり、先端部の付近に横方向の研磨痕がみられるものである。石材は全て下呂石で７点ある。

c．石匙

S07Cc080 はチャート製の石匙と思われもので、自然面を残す直線的な背部から刃部が孤状に両面から剥離されて作り出されている。

d．押圧剥離加工品

主に両極打撃により得られた両極剥片から石材縁辺部に押圧剥離による加工が加えられたもので、一部製品化が行われたものである。出土したものは 50 点あり、下呂石のものが 38 点、チャートのものが 12 点である。S07Cc101 が石小刀を志向した加工をしている他は石鏃・石錐を志向したものがほとんどで、石器製作途上で何らかの不具合により放棄されたものと考えられる。

自然面を残すものでは、S07Cc141 のように長径 3.9cm をはかる片面に大きく自然面を残すあまり縁辺加工が進んでいない剥片から石鏃を志向した加工が進められたものや S07Id050 のように長径 2.3cm で背面に自然面を残すが比較的剥離が進んで小型化したものから石鏃を志向した加工を始めるものまである。自然面を残さないものでは、S07Ca015 のように長径 5.2cm、短径 3.5cm、厚み 1.5cm をはかる大型のものでやや凸基部片側と鏃身部の片面を製作したところで止まっているものと S07Ab005 や S07Ca021 のように長径 1.7cm から 1.8cm 程の小型で鏃身部の片面から両面の加工途中で止まっているものなどがある。ただし S07Cc101 の石小刀を志向したもののようにあまり細部加工が進んでいないものでも形態は比較的判明するものが多いので、押圧剥離加工に入る前には大まかな石取りが完了しているのであろう。

e. 両極石器

両極打撃により両極剥片を得るために石材の縁辺を剥離加工したもので、52 点ある。両極石器には両極剥片を再び加工したものを含むものである（両極打撃による剥離技法から作られたと考えられる剥片石器（未製品）については馬場伸一郎 2007「打製石製品の分析」『朝日遺跡Ⅶ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 138 集」の第 2 分冊所収に準拠している）。石材は下呂石 50 点、チャート 2 点である。形態は下呂石製のものとチャート製のもので区別はなく、平面楕円形から隅丸台形・隅丸長方形で、断面は石材中央付近に稜線をもってやや膨らむ形状で、S07Ia014 のように平面菱形に近く成形されたものもある。法量は長径 2.3cm ～ 5.6cm、短径 1.8cm ～ 4.5cm、厚み 0.6cm ～ 2.5cm である。

f. 両極剥片

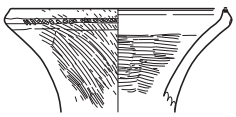
両極石器などの石材から両極打撃により得られた剥片で、46 点ある。石材は下呂石 40 点、チャート 6 点である。形態は S07Cc029・S07Cc040 のように平面形が隅丸台形で、断面でも石材中央付近に稜線をもってやや膨らむものもあるが、S07Cc094 ～ S07Cc098 のように平面形が不整形で、断面も片面が弧状に反った形状（剥片状）のものがみられるのが特徴である。法量では、長径 1.5cm ～ 5.5cm、短径 1.0cm ～ 3.7cm、厚み 0.3cm ～ 1.6cm と、両極石器に比べて全体に少し小型化し、厚みが薄くなる。

g. 直接打撃剥片

両極打撃によるものを含まない剥片で、下呂石の剥片が多数出土しており、チャートの 1 点とサヌカイトの 1 点を含めた 11 点を資料化した。自然面を残すもので下呂石の典型的なものは S07Cc043・S07Cc062・S07Id048 などがあり、下呂石・チャートの縦長の剥片では S07Cc104・S07Id051 などがある。S07Cc102 はサヌカイトの風化面を残すものである。

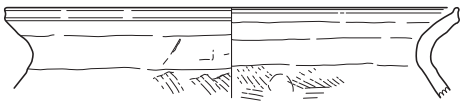
第 3 節　ガラス製品（第 88 図）

弥生時代のものと思われるガラス製品が 1 点ある。G07Cc001 は近代以後の水田遺構である 07Cc 区 001ST から出土したガラス小玉で、色調はコバルト色である。長径 0.50cm、短径 0.45cm、厚み 0.22cm、孔径 0.10cm をはかる。E 期の方形周溝墓に関連するものか。

07Aa 区
005SK

E07Aa001

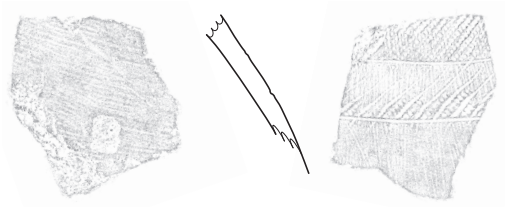
010SK

E07Aa002

011SK

E07Aa003

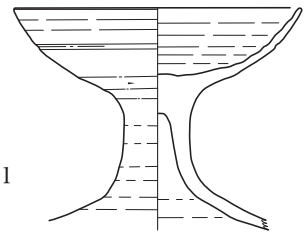
表土

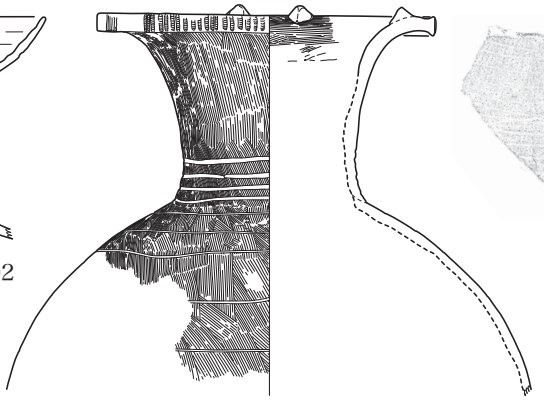
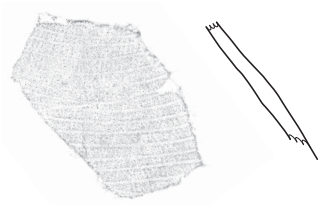
E07Aa004

東壁セクション

E07Aa005

07Ab 区
079SK

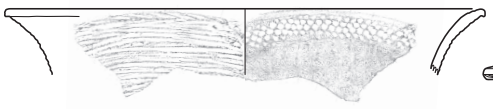
E07Ab001

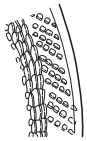
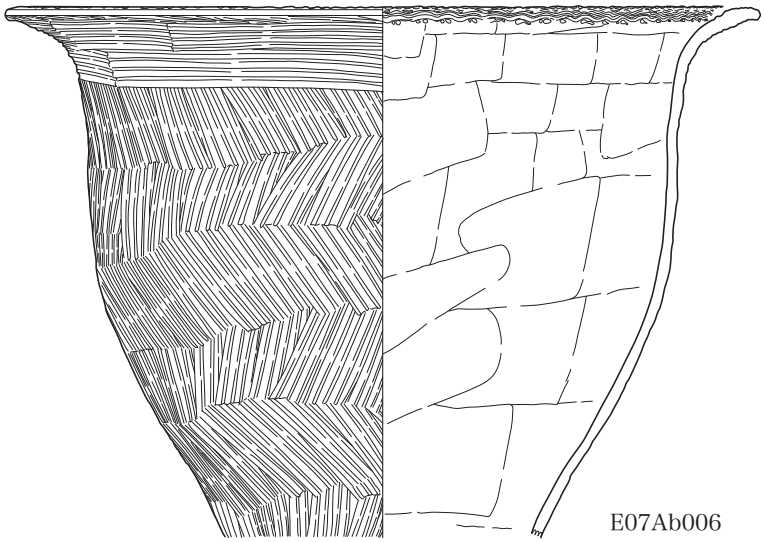
081SK

E07Ab002

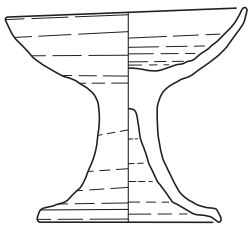
084SD


E07Ab005
E07Ab004

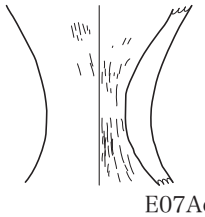
082SK

E07Ab003

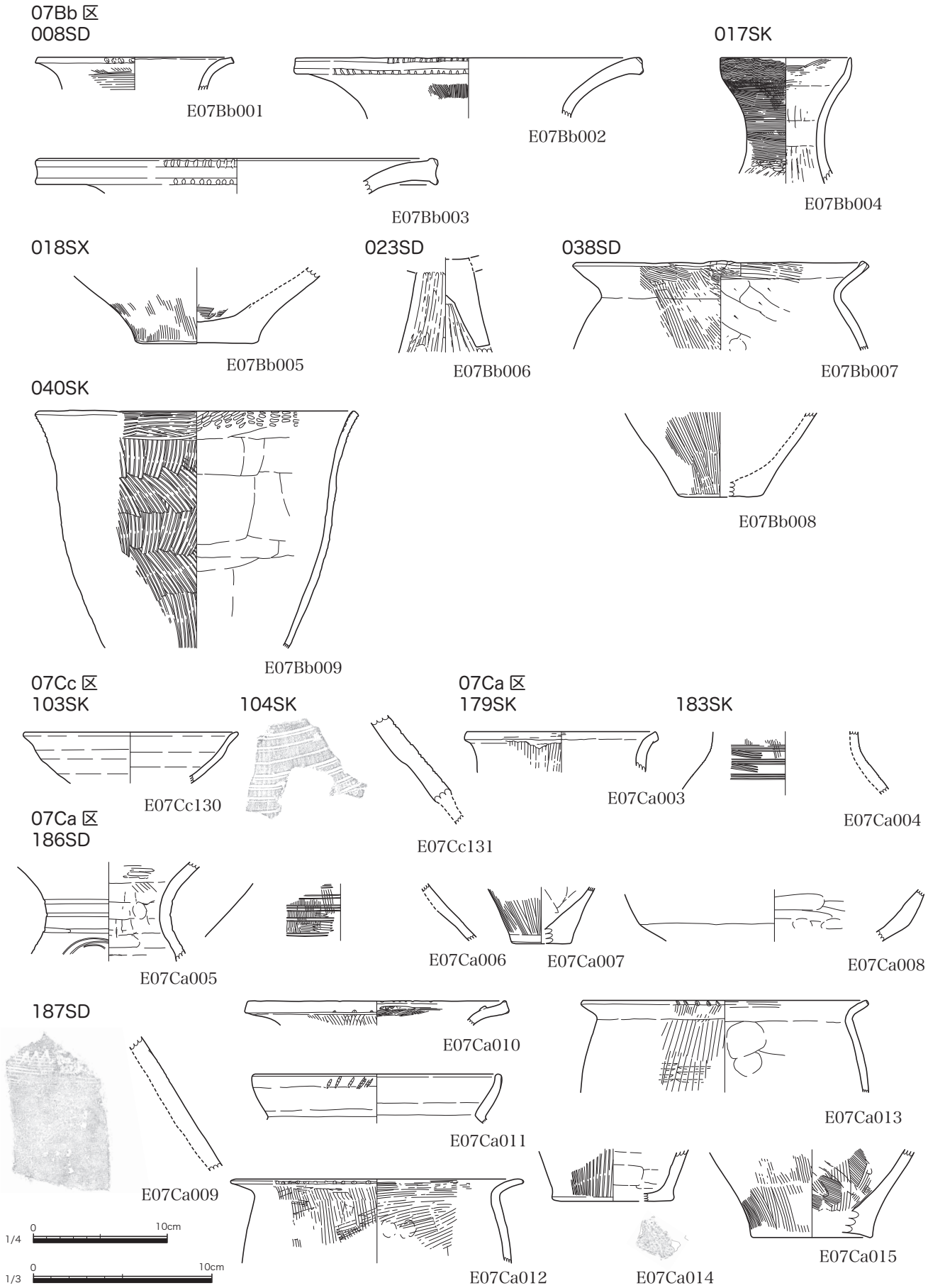
東壁 52 層

E07Ab007



E07Ab006

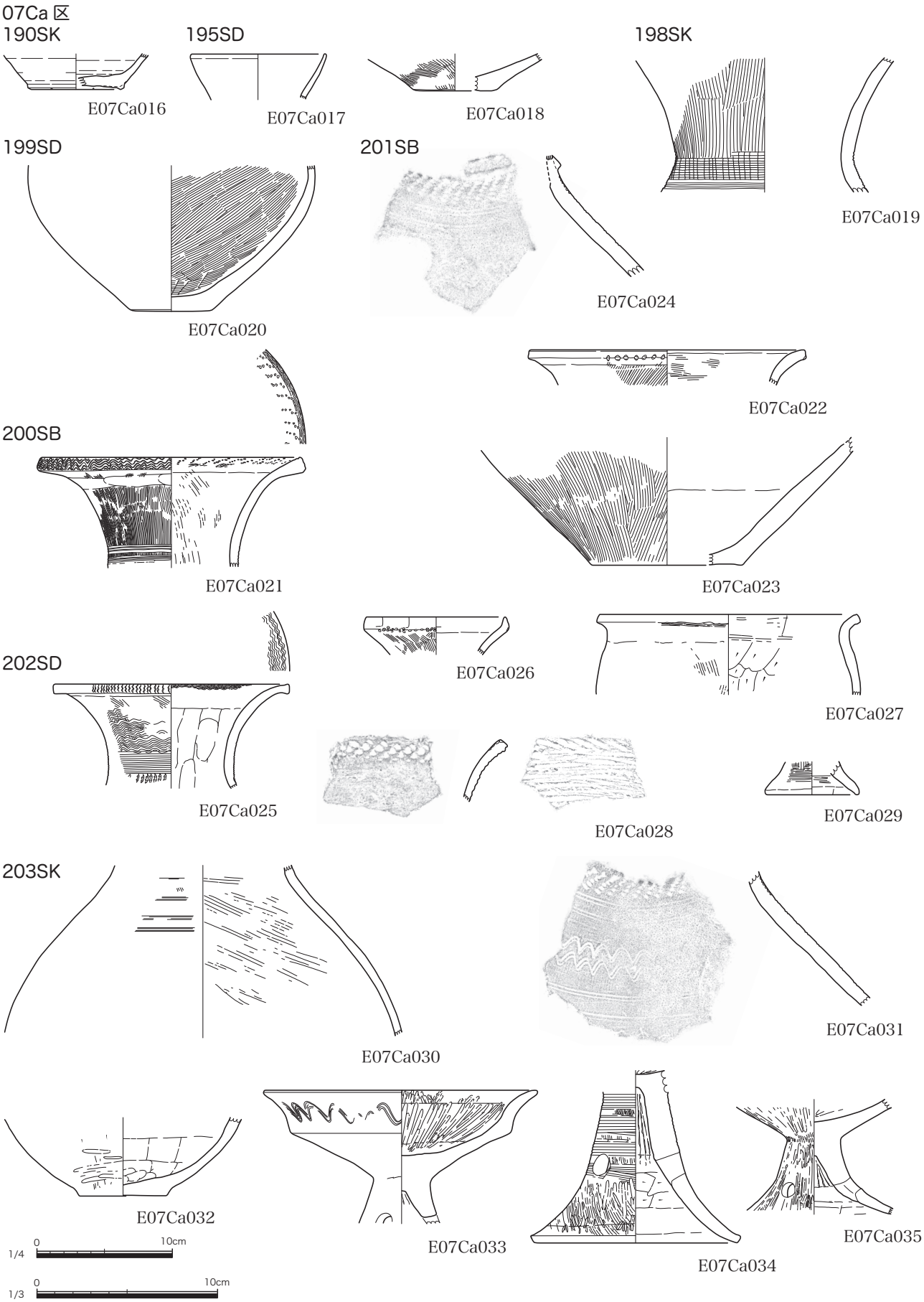
検出 1

E07Ab008

07Ac 区
037SK

E07Ac001

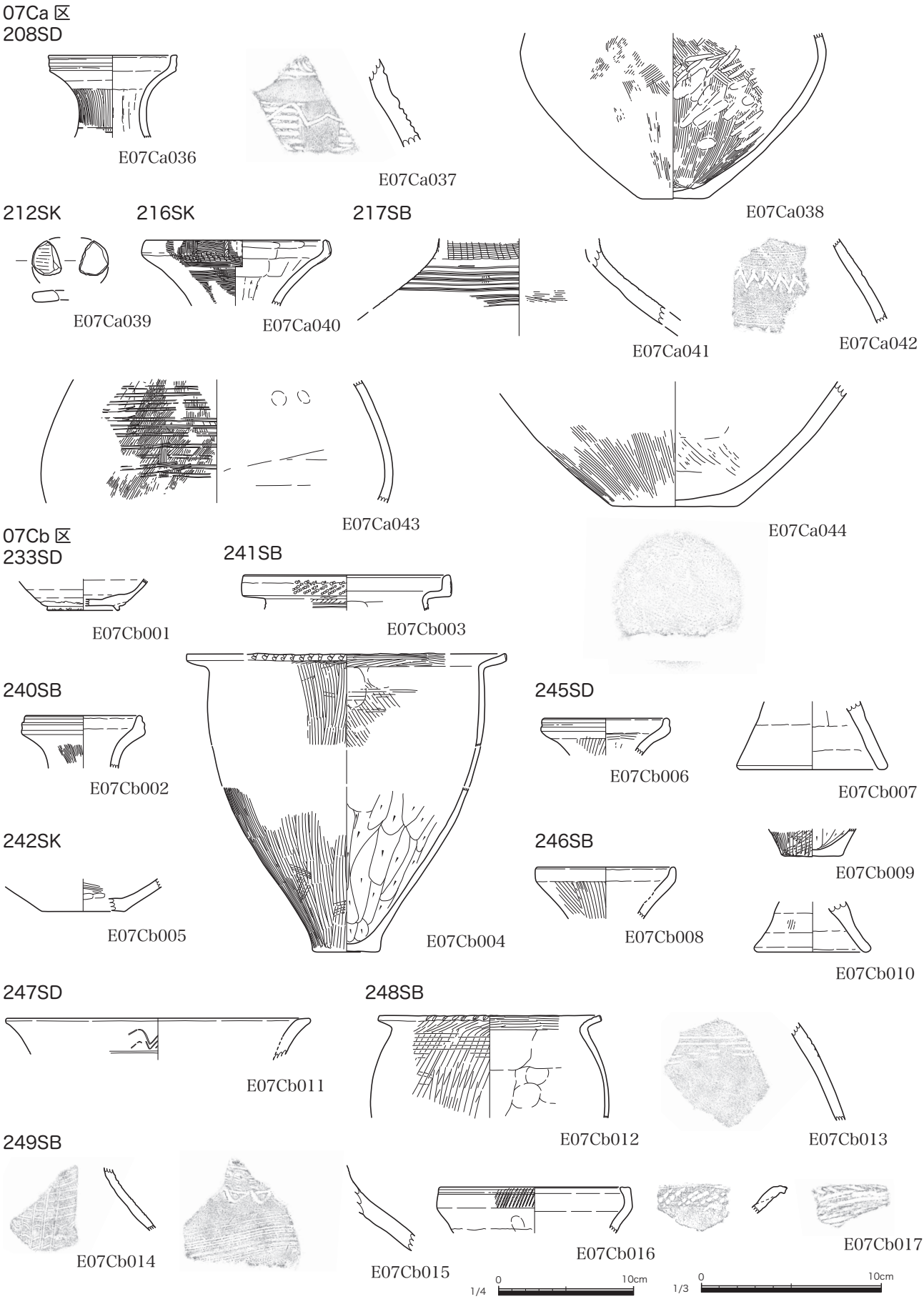
第 39 図　07Aa 区～ 07Ac 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）



第 40 図　07Bb 区・07Ca 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）



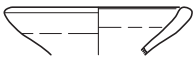
第 41 図　07Ca 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）



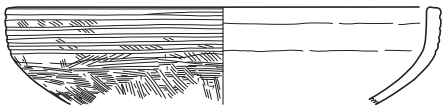
第 42 図　07Ca 区・07Cb 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Cb 区
251SD

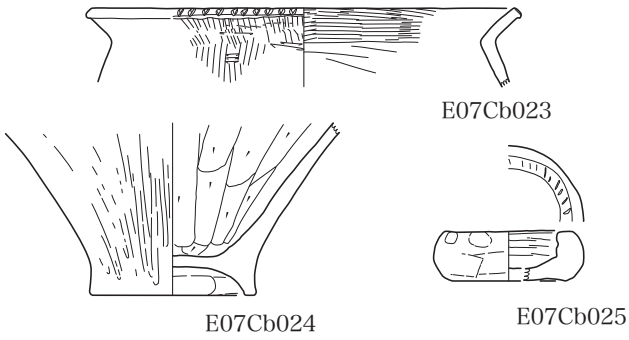
274SK



281SB



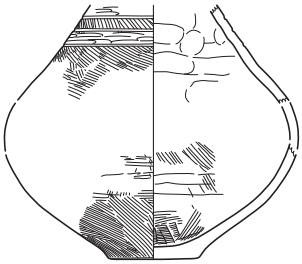
285SK



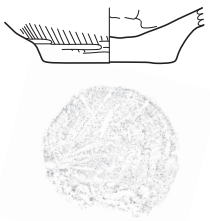
286SK

292SB

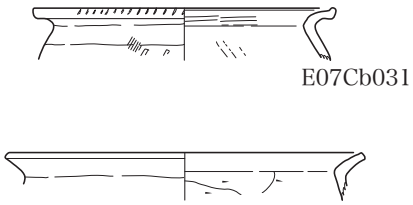
東トレンチ



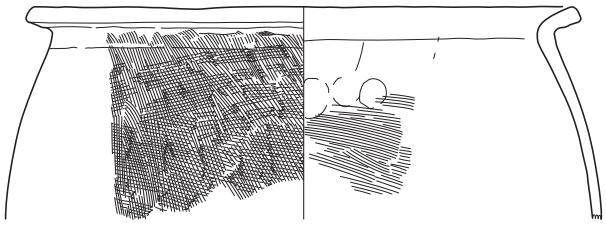
東壁



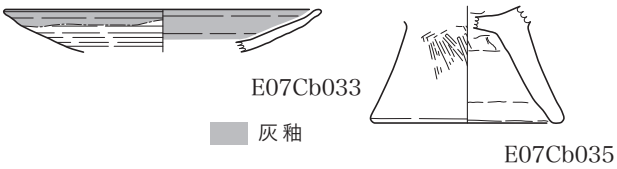
包含層



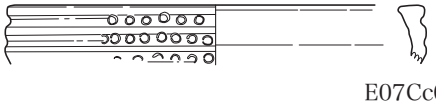
西壁

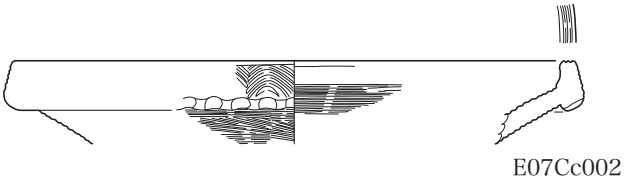


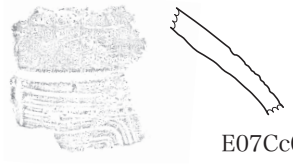
検出 2

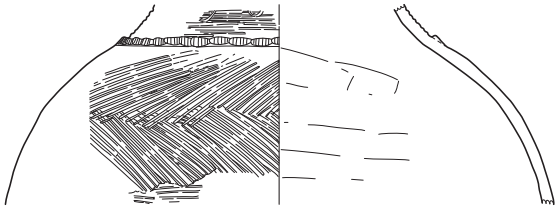


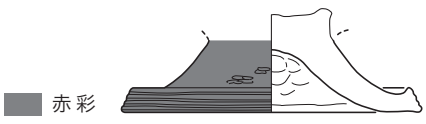
07Cc 区
003SD

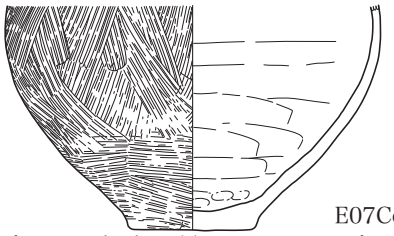




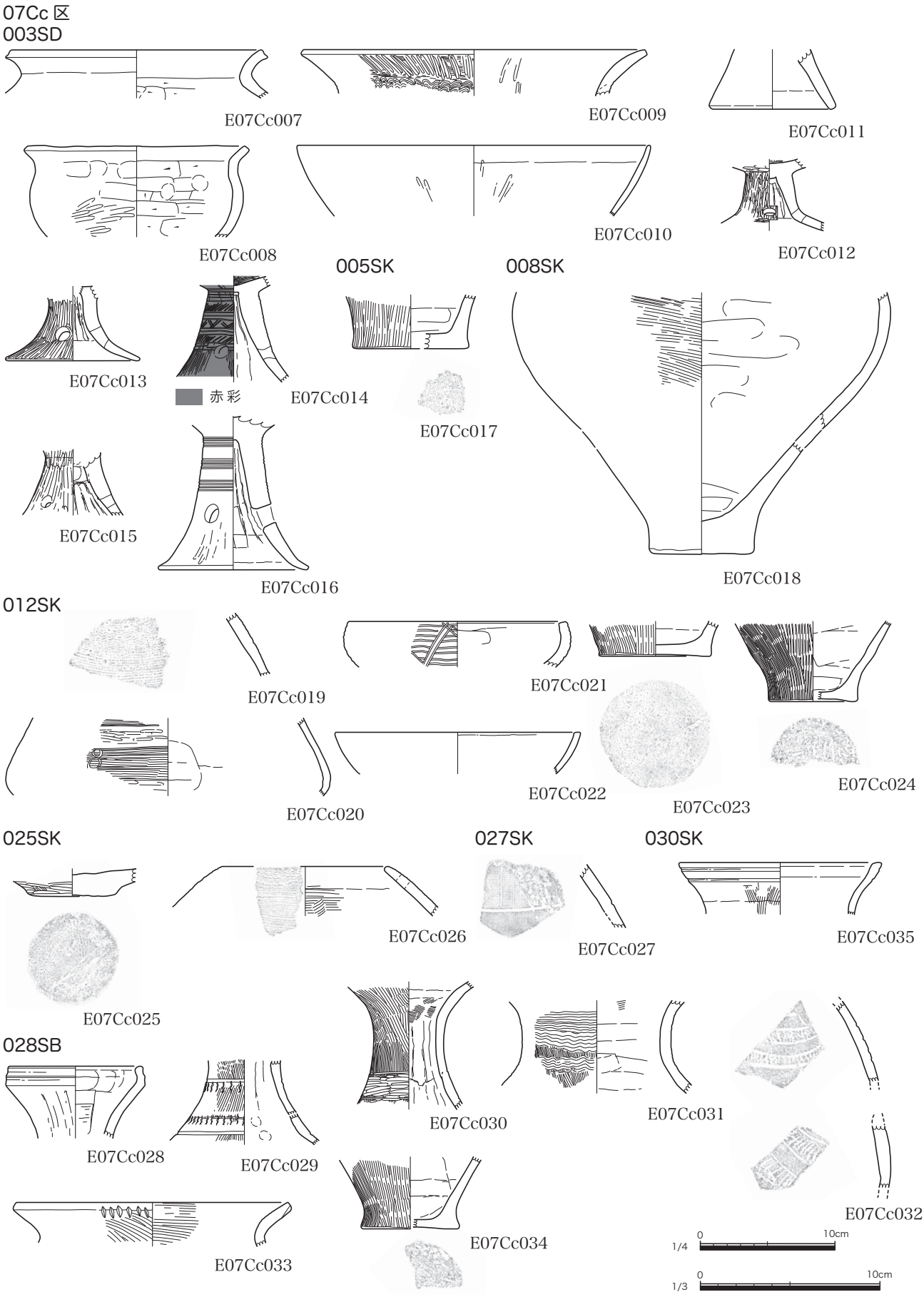






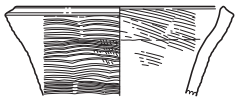


第 43 図　07Cb 区・07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）



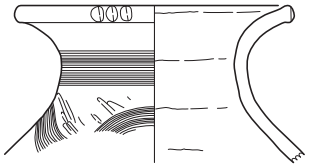
第 44 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（1）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

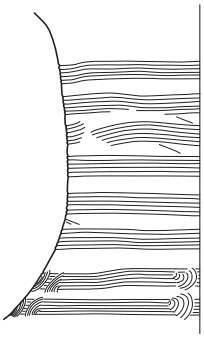
07Cc 区
031SK

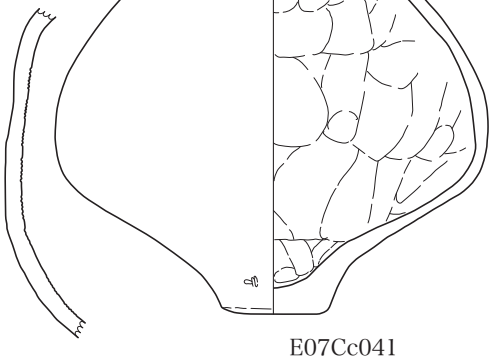

E07Cc036

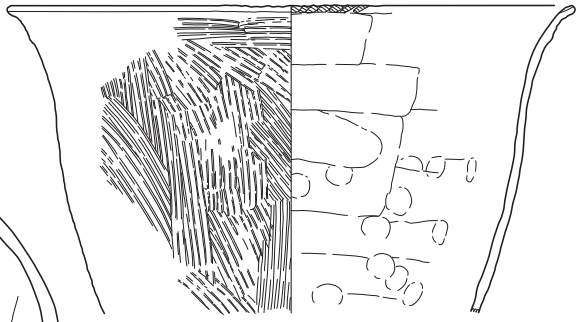
E07Cc037

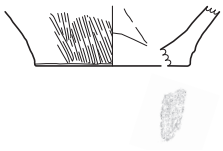
E07Cc038


E07Cc039

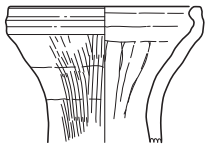



E07Cc040
E07Cc041

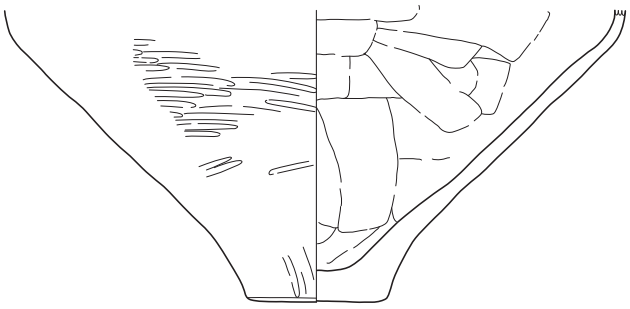

E07Cc042


E07Cc043

034SK

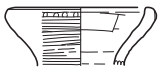

E07Cc044

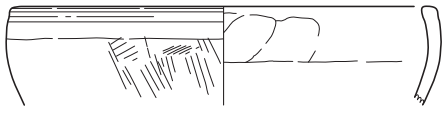
E07Cc047

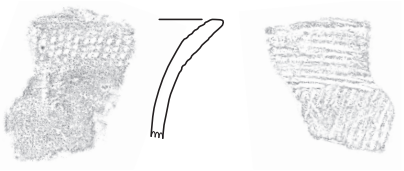

E07Cc045

E07Cc046

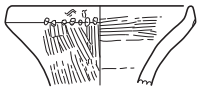
035SB


E07Cc048

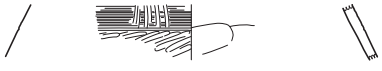

E07Cc050

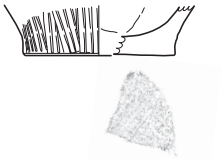

E07Cc049

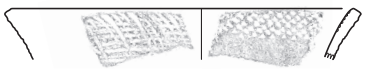
042SK


E07Cc051

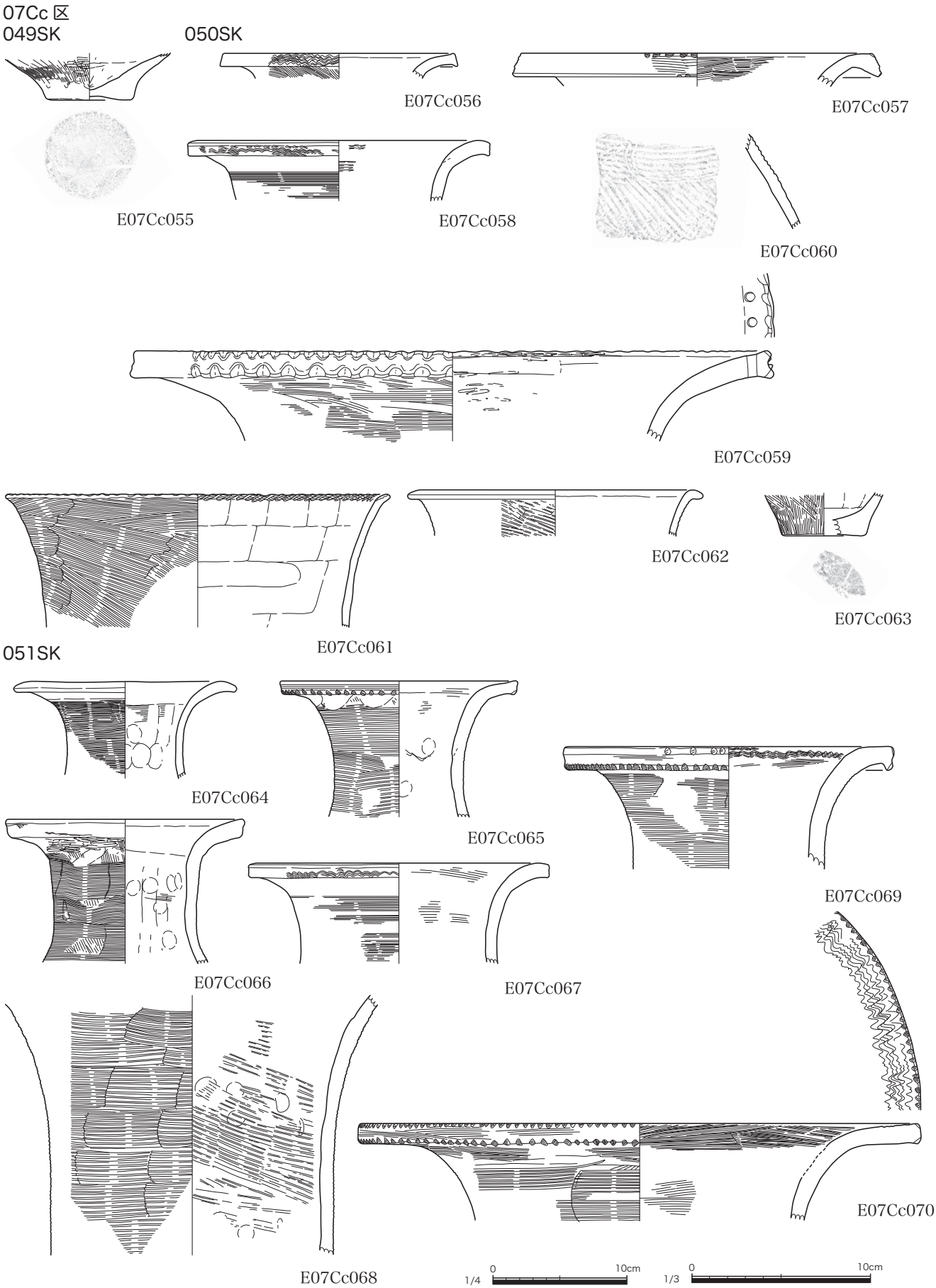
048SK


E07Cc052


E07Cc054

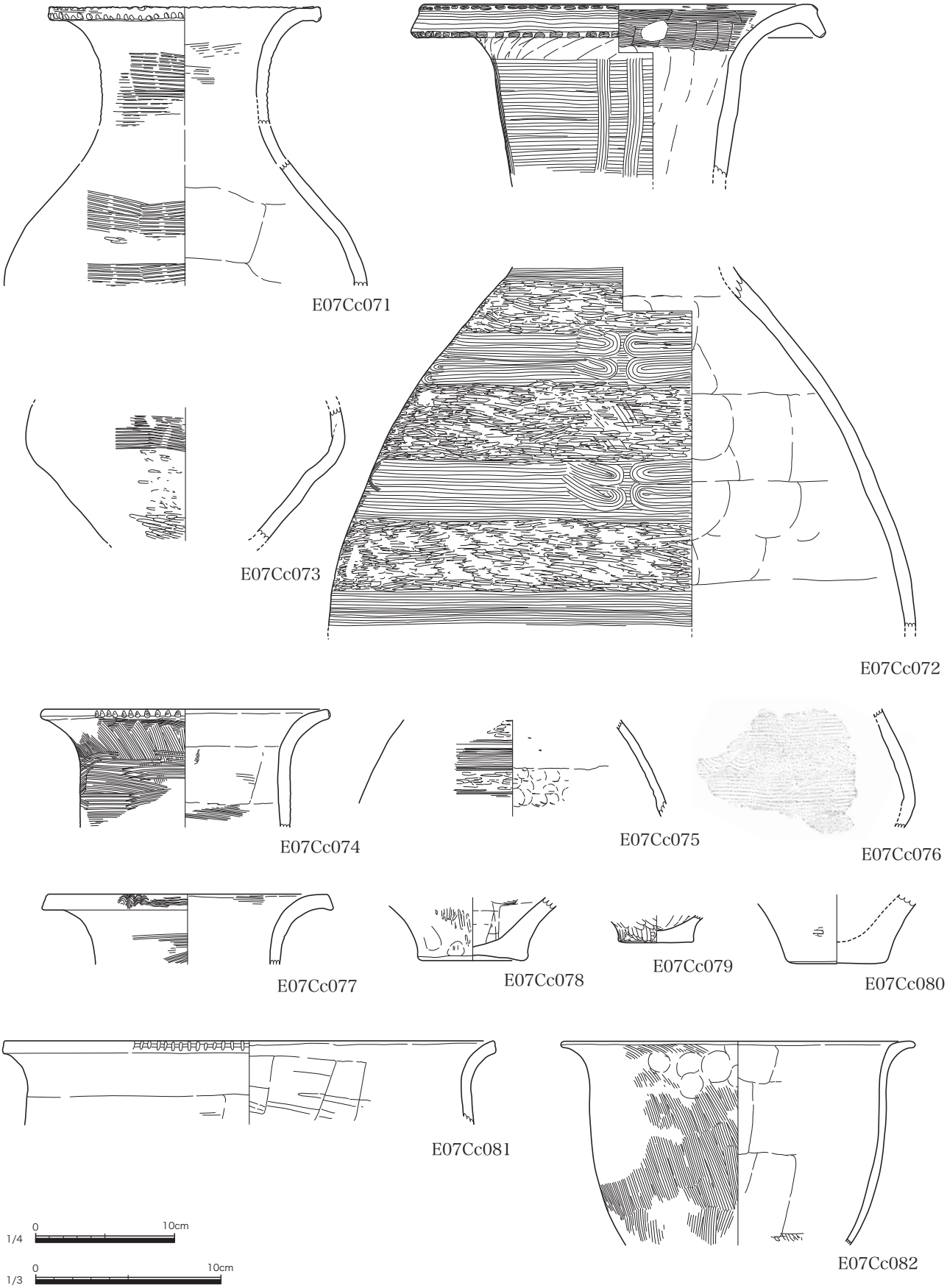

E07Cc053

第 45 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（２）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）



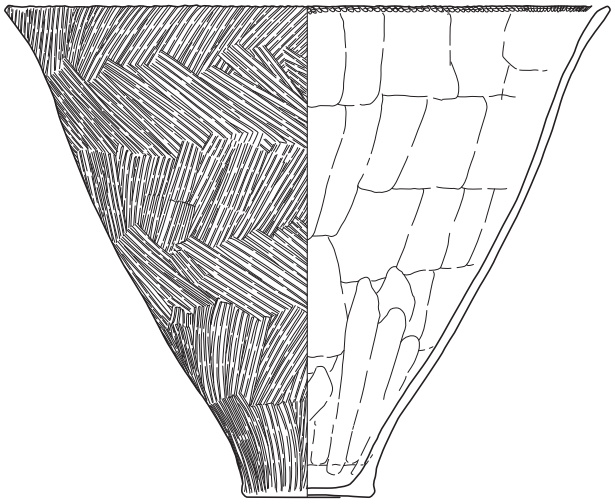
第 46 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（3）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Cc 区
051SK

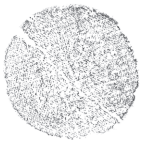


第 47 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（４）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Cc 区
051SK



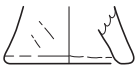
E07Cc083



E07Cc084

E07Cc085

057SK

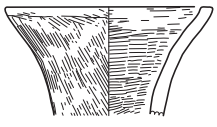


E07Cc092

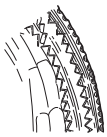
064SK

E07Cc093

086SK

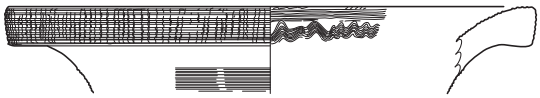


E07Cc097

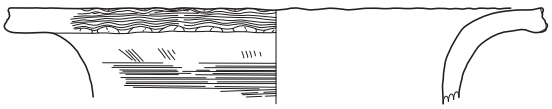


E07Cc098

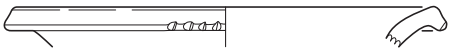
055SK



E07Cc086

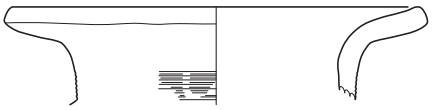


E07Cc087

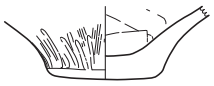


E07Cc088

E07Cc089

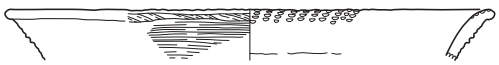


E07Cc090

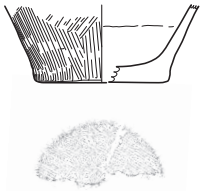


E07Cc091

068SK



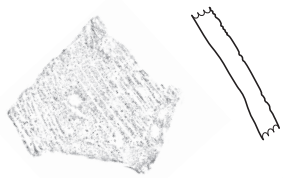
E07Cc094



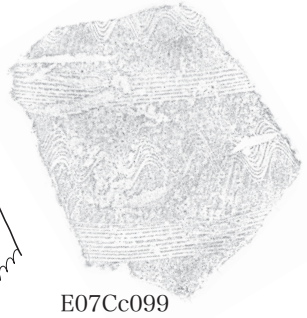
E07Cc095

081SK

E07Cc096



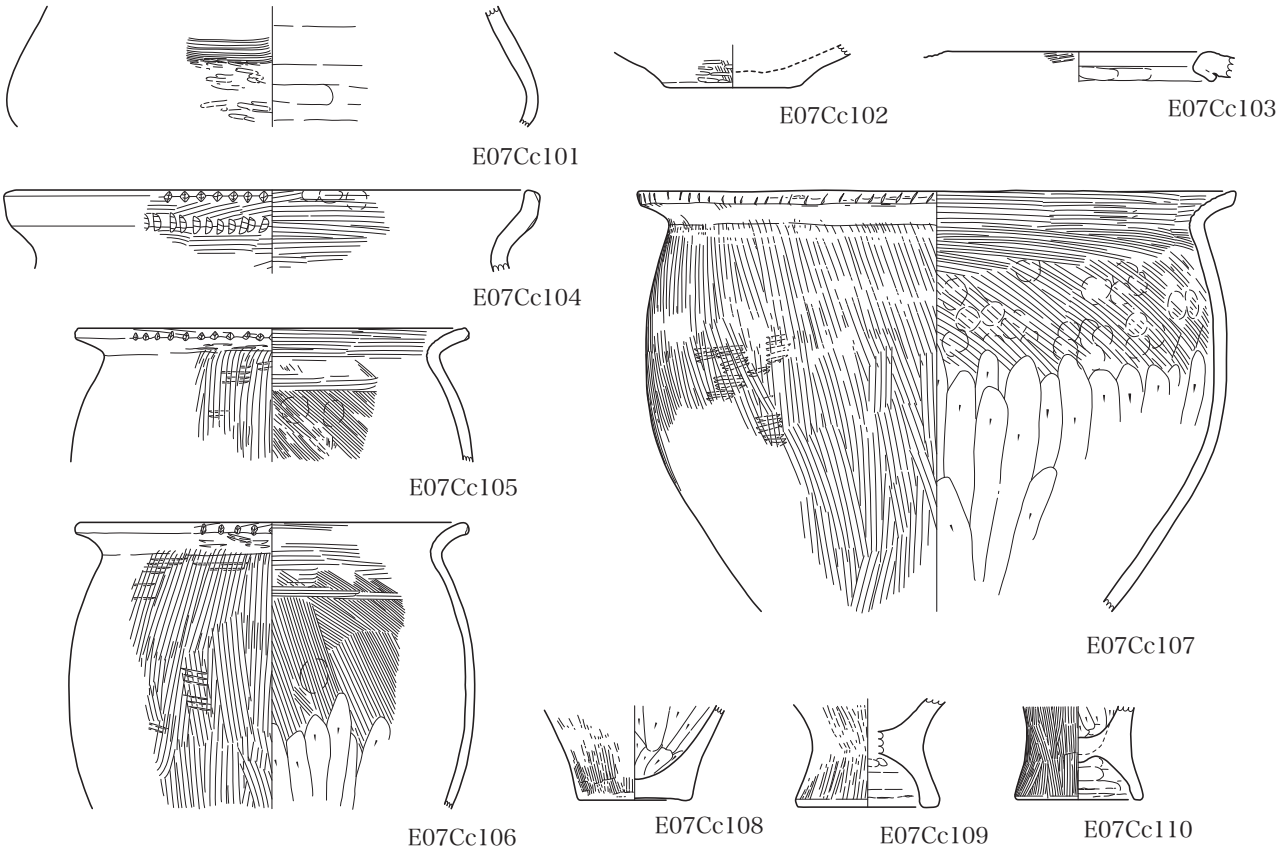
E07Cc100



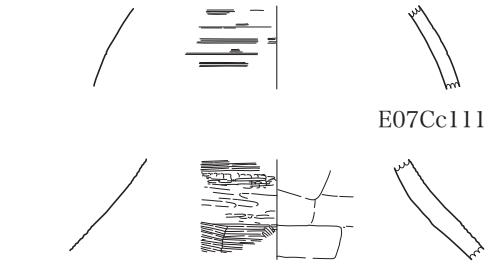
E07Cc099

第 48 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（5）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

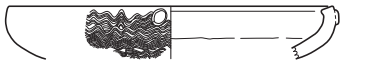
07Cc 区
086SK



087SK

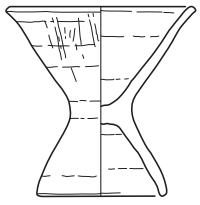


089SK

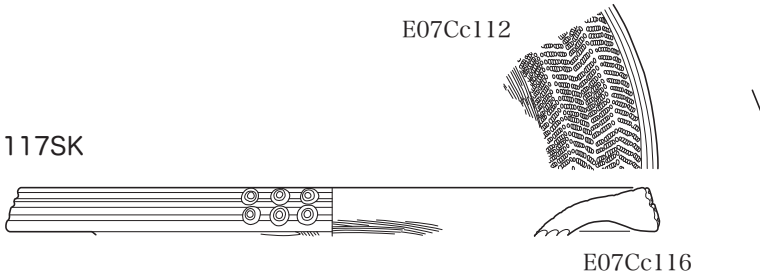


093SK

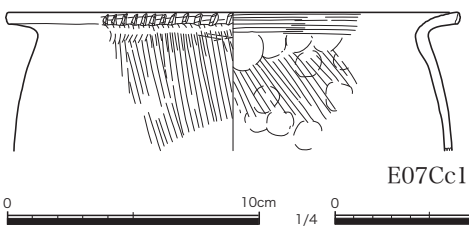
104SK



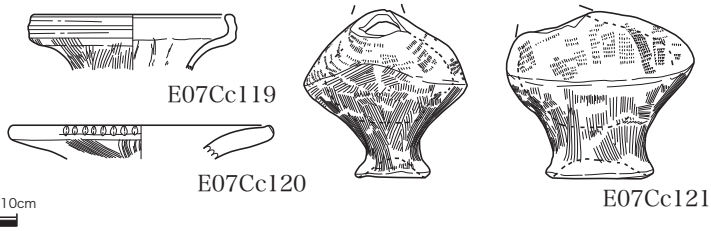
117SK



127SK

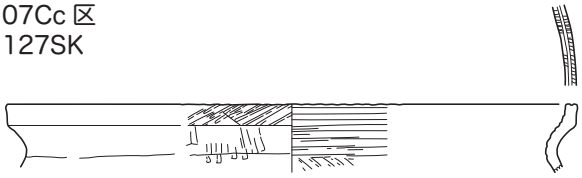


123SK



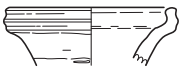
第 49 図　07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（６）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Cc 区
127SK



E07Cc122

130SK



E07Cc123

131SK

E07Cc124

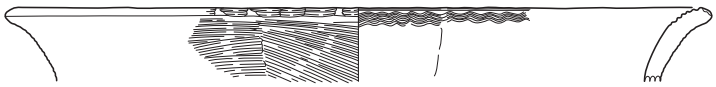
132SK

E07Cc125

138SD

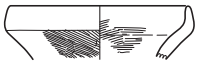
E07Cc126

145SK



E07Cc127

145SK



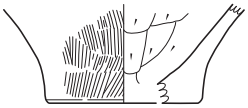
E07Cc128

145SK

E07Cc129

07Cd 区
265SB

E07Cd001

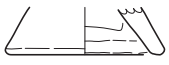


E07Cd003

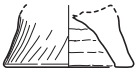
291SK

E07Cd006

E07Cd002

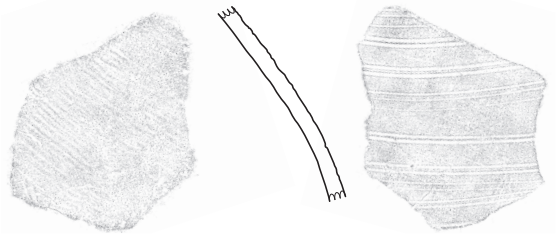


E07Cd004



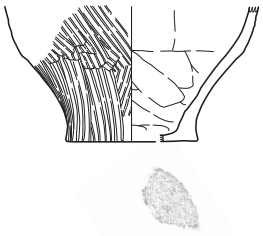
E07Cd005

07D 区
003SB

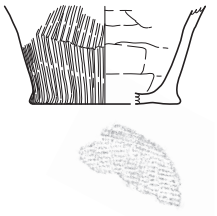


E07D001

020SK

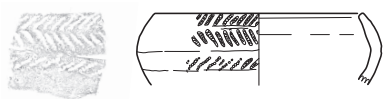


E07D002

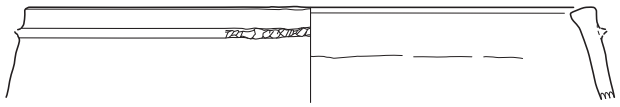


E07D003

022SD

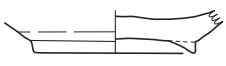


E07D004



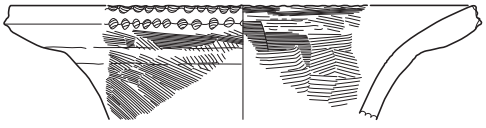
E07D005

07Gb 区
045SK



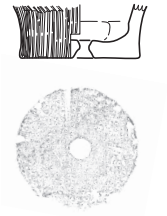
E07Gb001

030SD



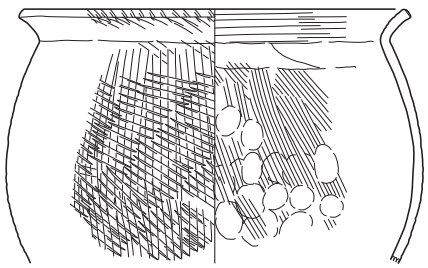
E07Ha003

07Ha 区
024SD



E07Ha001

029SD



E07Ha002

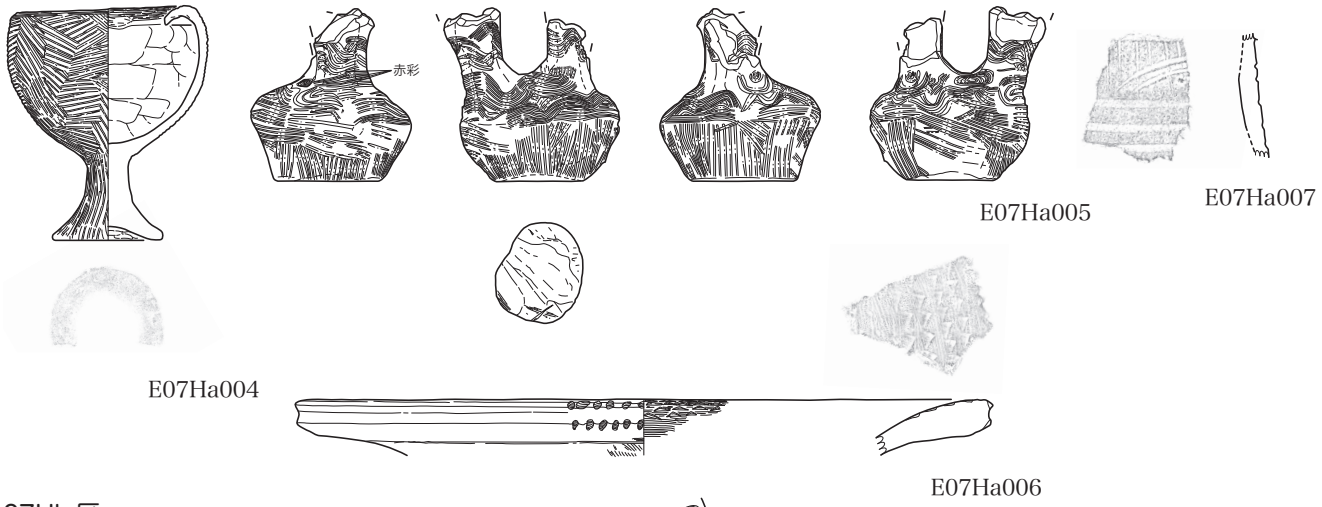
1/3 0 10cm

1/4 0 10cm

第 50 図　07Cc 区・07D 区・07Gb 区・07Ha 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

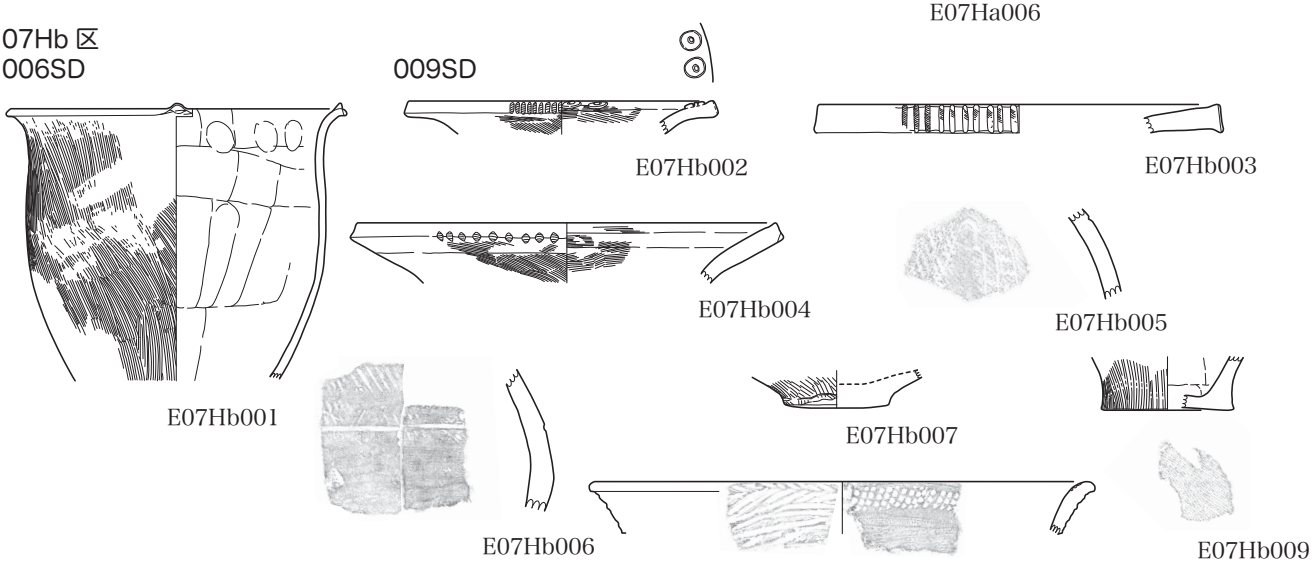
07Ha 区
検出 2

東側トレンチ



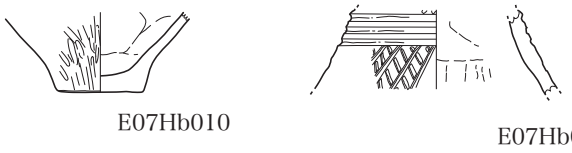
07Hb 区
006SD

009SD

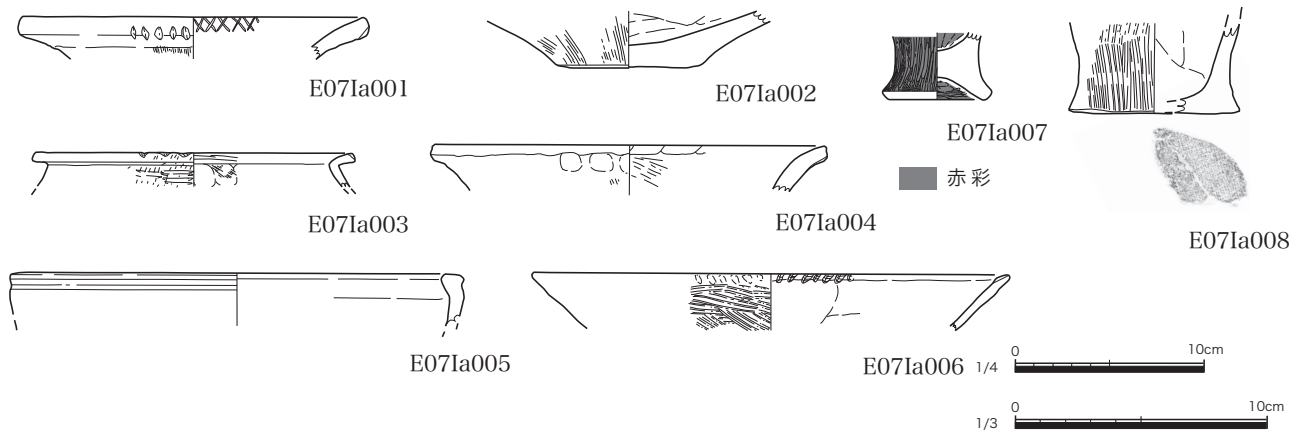


010SD

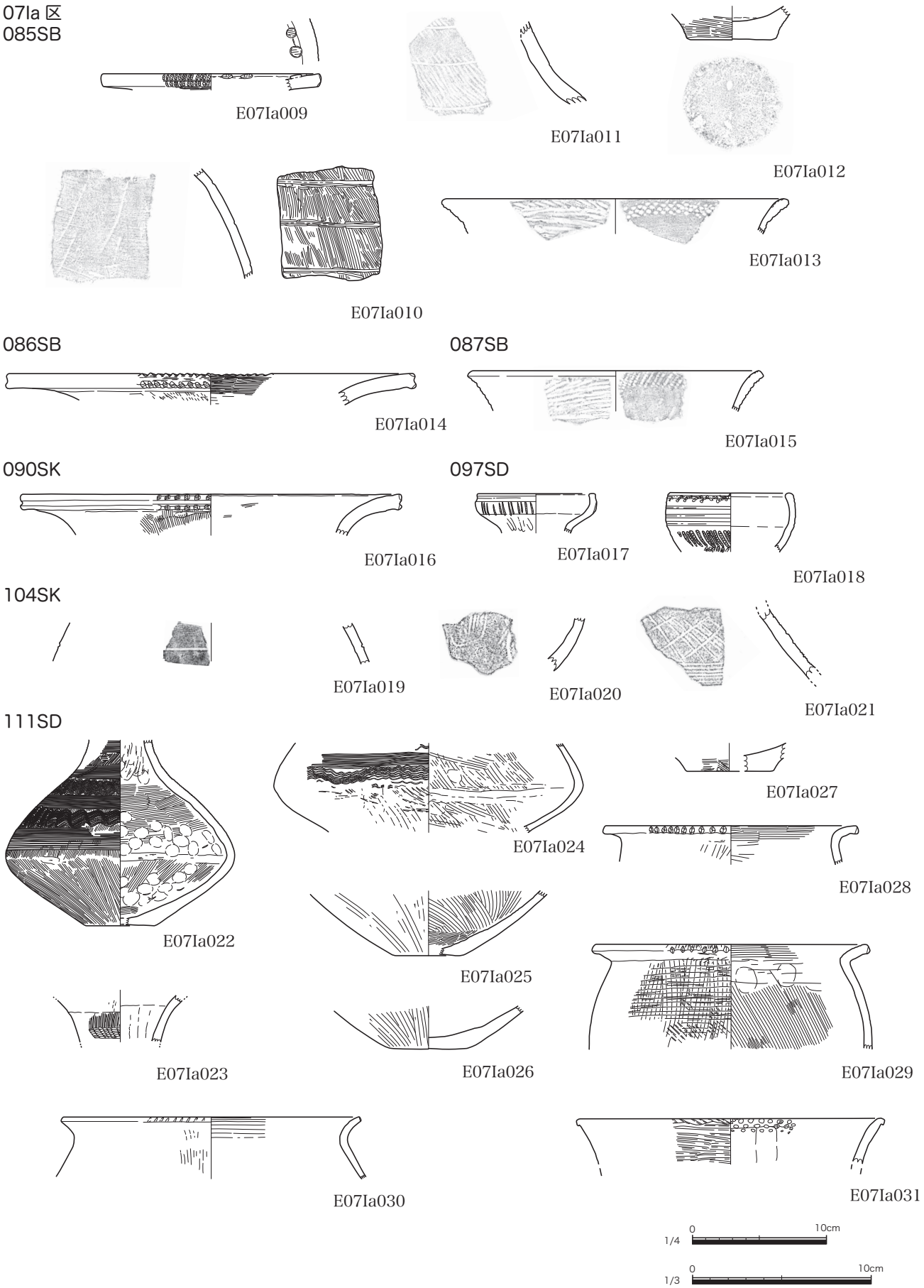
013SK



07Ia 区
076SD



第 51 図　07Ha 区・07Hb 区・07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

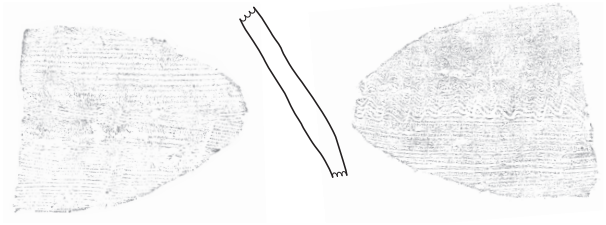


第 52 図　07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器（1）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Ia 区
112SD

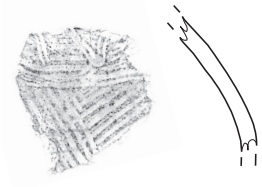
E07Ia032

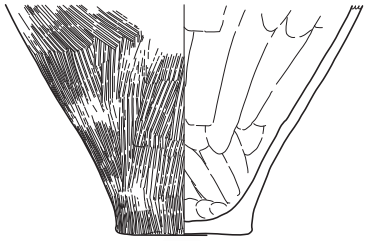
E07Ia032

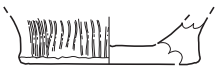

E07Ia035

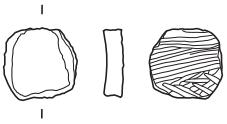
E07Ia034

E07Ia036
E07Ia037

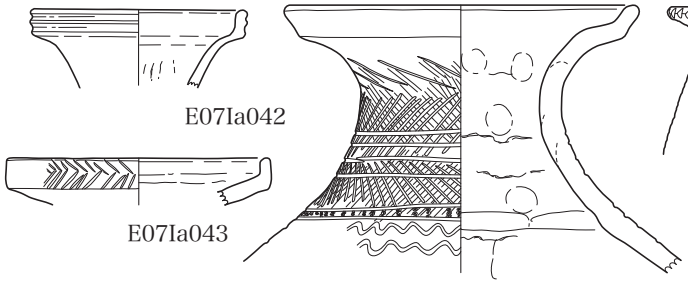

E07Ia038

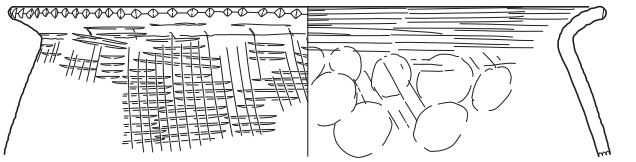

E07Ia039

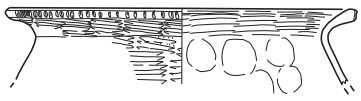

E07Ia040


E07Ia041

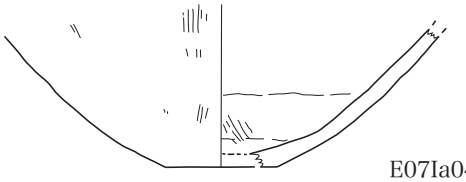
114SD

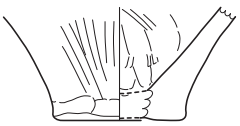

E07Ia042
E07Ia043
E07Ia044


E07Ia047


E07Ia048

E07Ia045

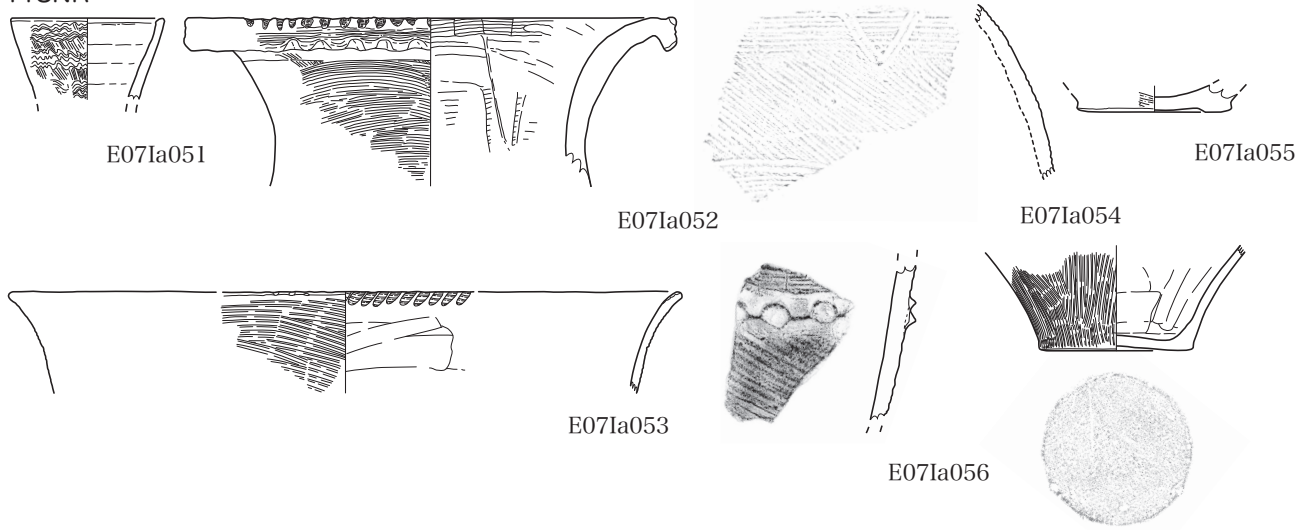

E07Ia046


E07Ia049

E07Ia050

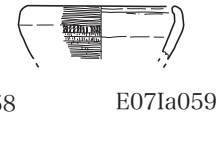
第 53 図　07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器（２）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Ia 区
118NR



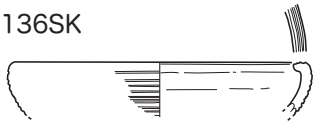
129SK

130SK



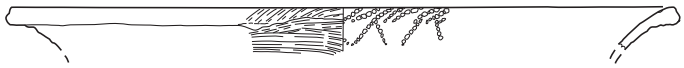
133SB

136SK

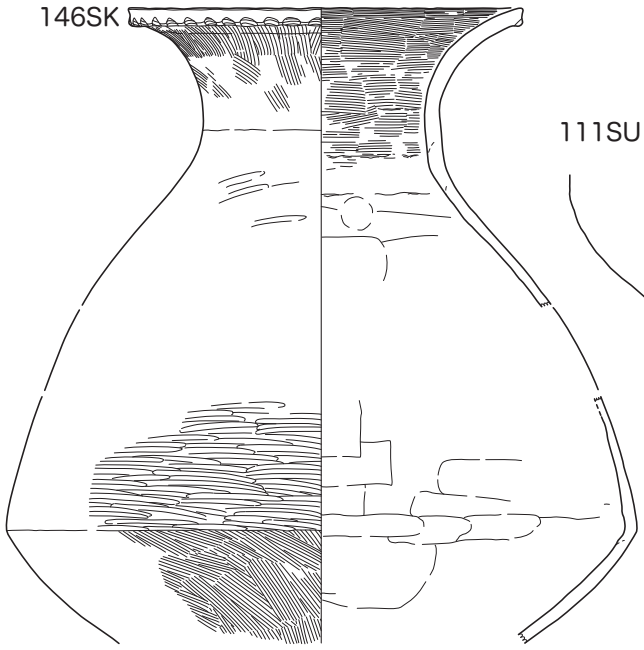


140SK

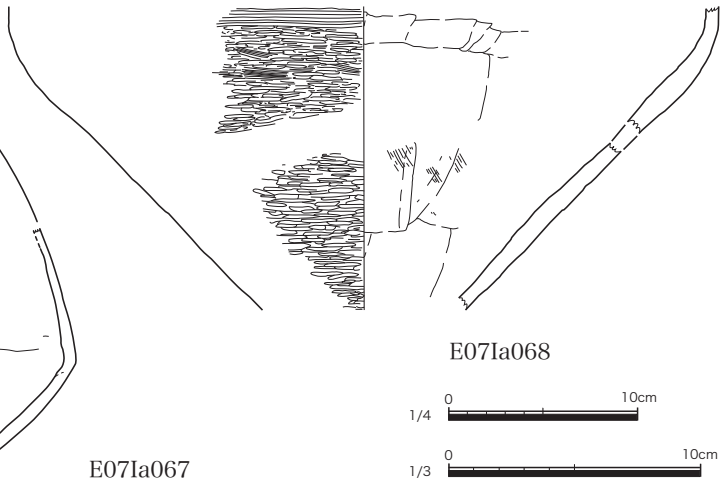
143SK



146SK

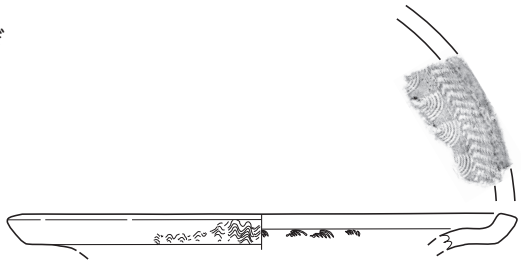


111SU（西壁トレンチ）

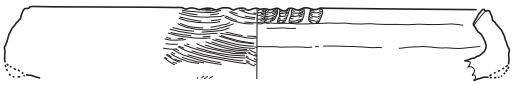


第 54 図　07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器（3）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Ia 区
表土はぎ

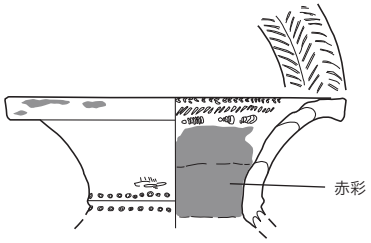


E07Ia069

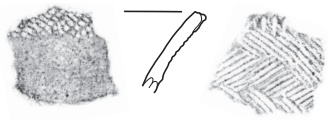


E07Ia071

検出 1



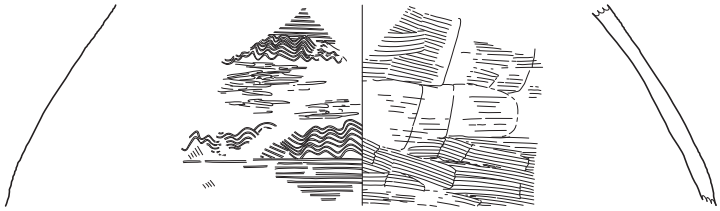
E07Ia070



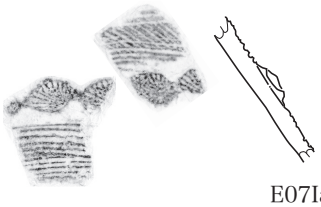
E07Ia072

E07Ia073

E07Ia075

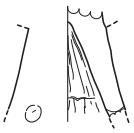


E07Ia074



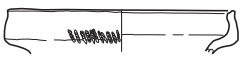
E07Ia076

114SD（西側壁面）



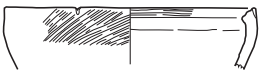
E07Ia077

07Ib 区
056SD



E07Ib001

07Ic 区
149SK



E07Ic001

07Id 区
001ST

E07Id001

002ST

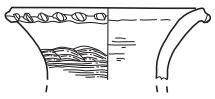
E07Id002

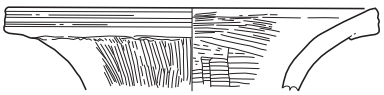
1/4 0 10cm

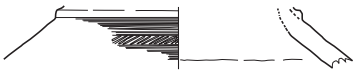
1/3 0 10cm

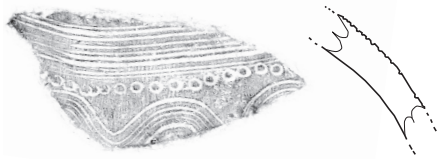
第 55 図　07Ia 区～ 07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

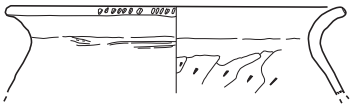
07Id 区
004SD

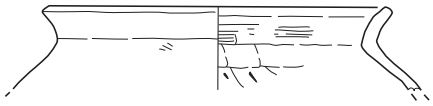

E07Id003

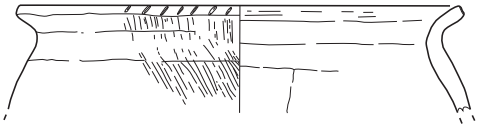

E07Id004

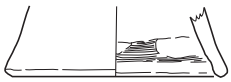

E07Id005

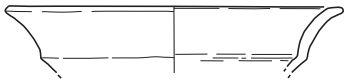

E07Id006

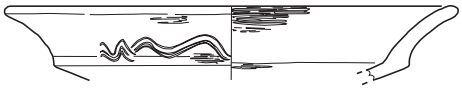

E07Id007

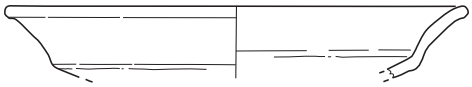

E07Id008


E07Id009

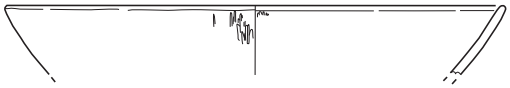

E07Id010


E07Id011

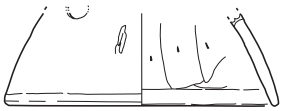

E07Id012

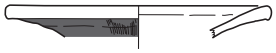

E07Id013

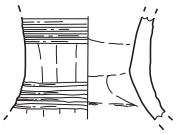
E07Id014


E07Id015

E07Id016

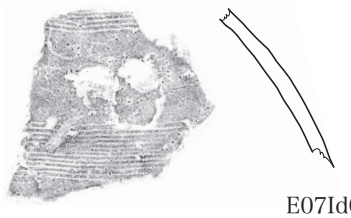

E07Id017

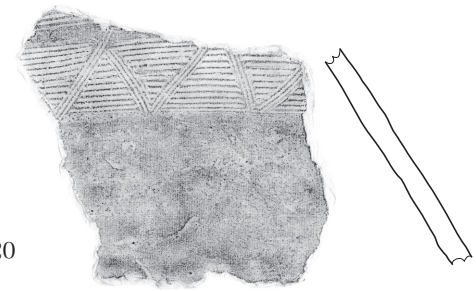

E07Id018


E07Id019

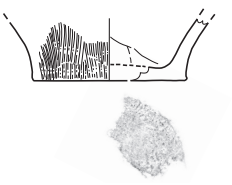
赤彩

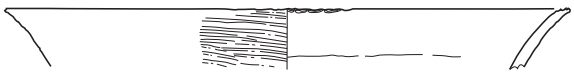
005SB


E07Id020


E07Id021

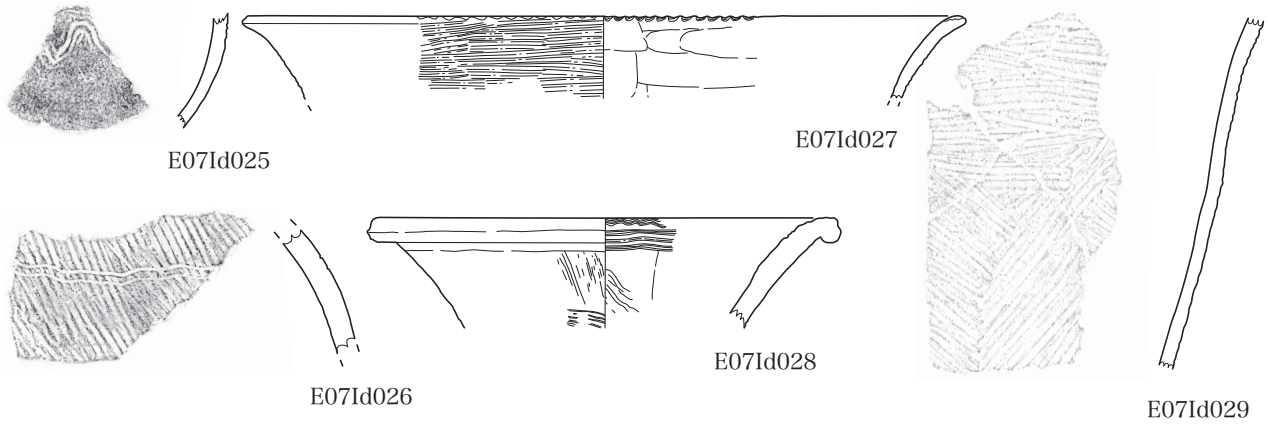
E07Id023


E07Id024


E07Id022

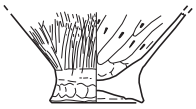
第 56 図　07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器（1）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Id 区
006SB

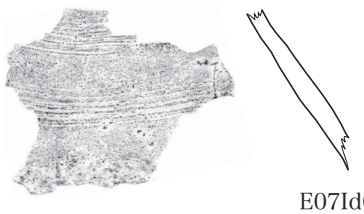


007SK

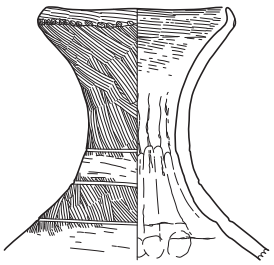
024SK



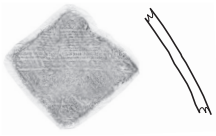
010SK



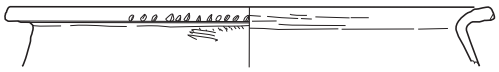
031・032SK

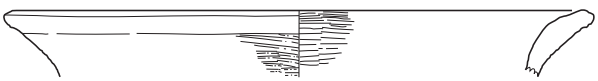


032SK

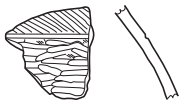


034SB

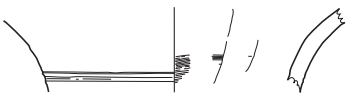




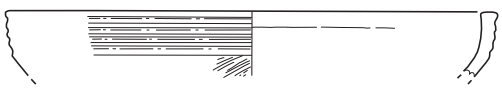
037SK

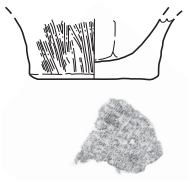


042SK

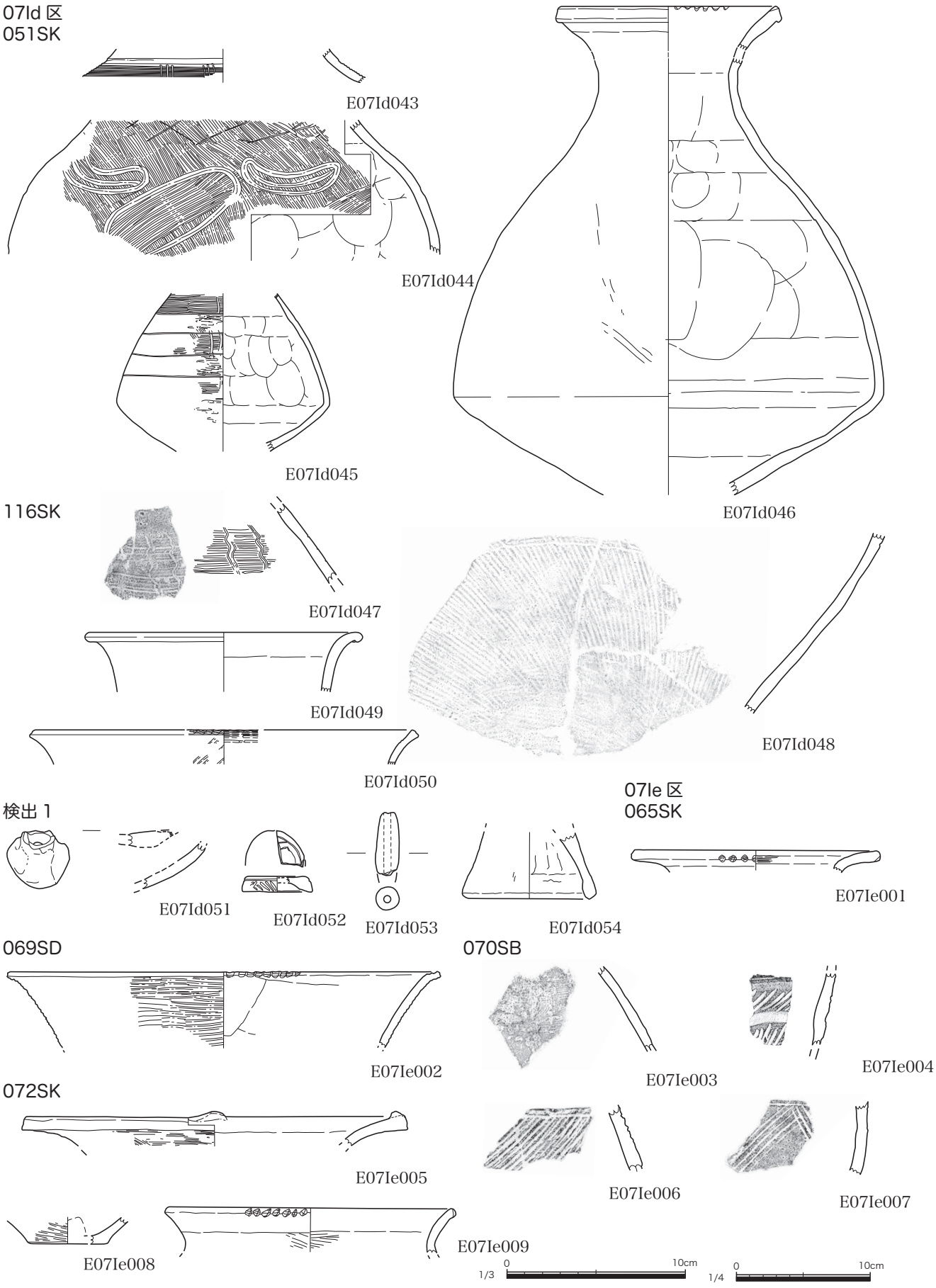


045SK



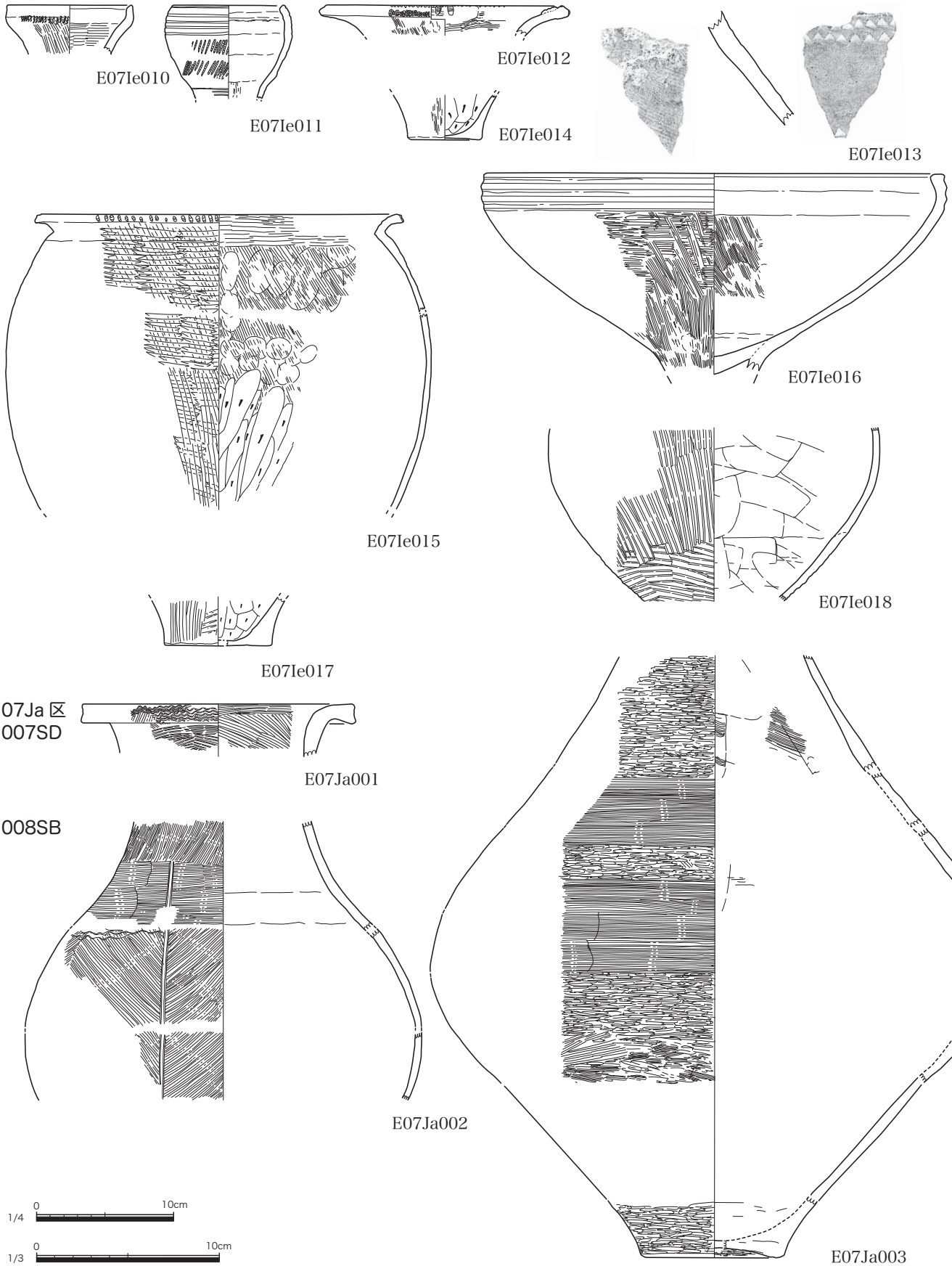


第 57 図　07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器（２）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）



第 58 図　07Id 区・07Ie 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Ie 区
083SK



第 59 図　07Ie 区・07Ja 区出土弥生土器・土師器・陶器　（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

07Ia 区
090SK

S07Ia023
下呂石

097SK

S07Ia024
濃飛流紋岩

07Ab 区
検出 2

S07Ab003
濃飛流紋岩

S07Ab004
チャート

S07Ab005
下呂石

087SD

磨り面

被熱変色部分　黒色化

やや酸化変色部分

S07Ab002
濃飛流紋岩

S07Ab001
砂岩

1/3 0 10cm

1/2 0 5cm

第 60 図　07Aa 区・07Ab 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

07Bb 区
008SD

S07Bb001
安山岩

S07Bb002
花崗岩

018SX

010SD

S07Bb003
下呂石

S07Bb005
濃飛流紋岩

017SK

S07Bb004
下呂石

S07Bb006
下呂石

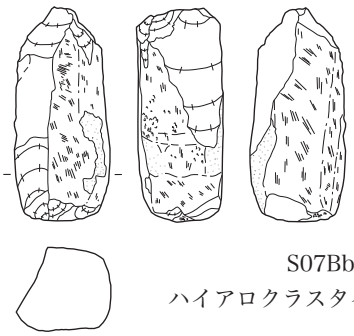
020SD

S07Bb007
下呂石

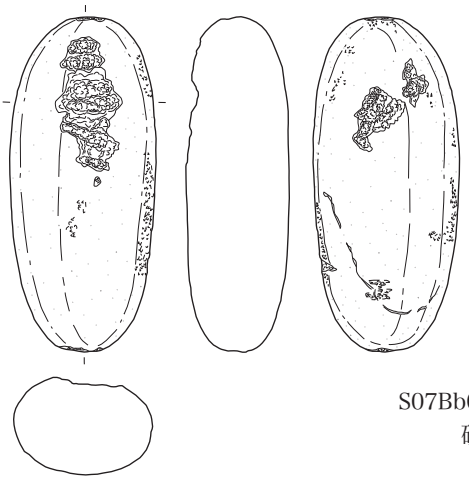
1/3 0 10cm
1/2 0 5cm

第 61 図　07Bb 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

07Bb 区
023SD

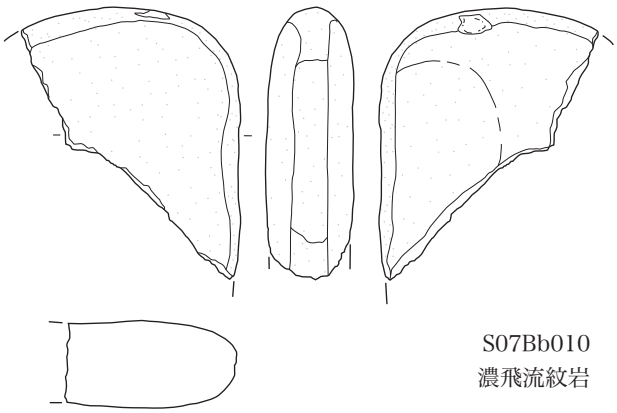


S07Bb008
ハイアロクラスタイト



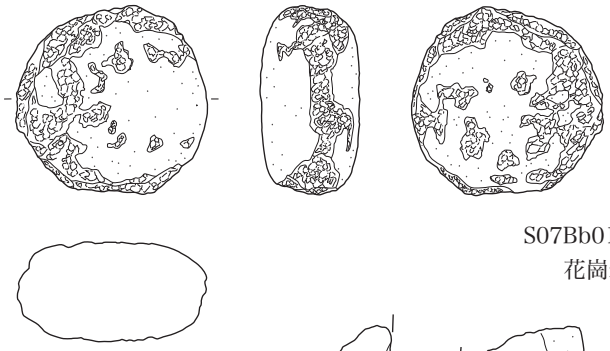
S07Bb009
砂岩

037SB

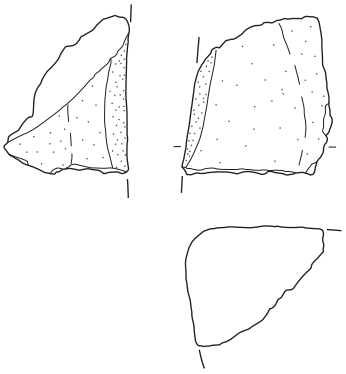


S07Bb010
濃飛流紋岩

038SB

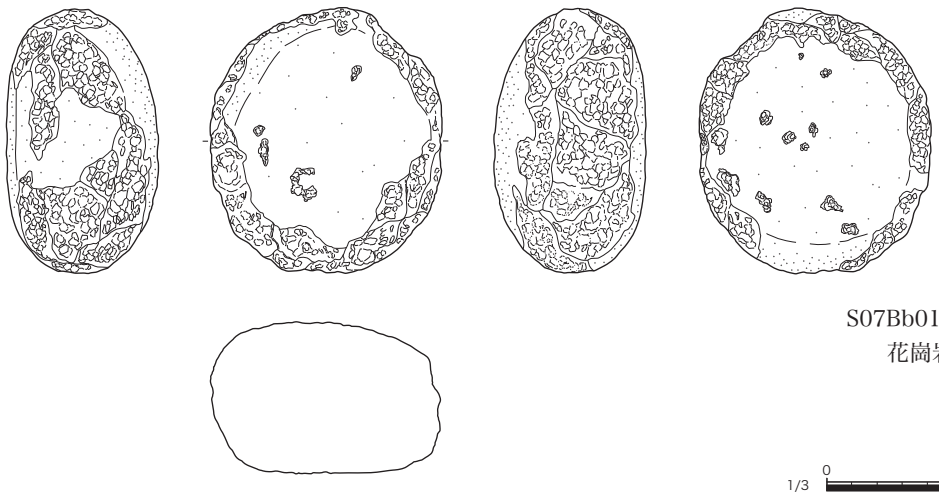


S07Bb011
花崗岩



S07Bb012
濃飛流紋岩

040SK

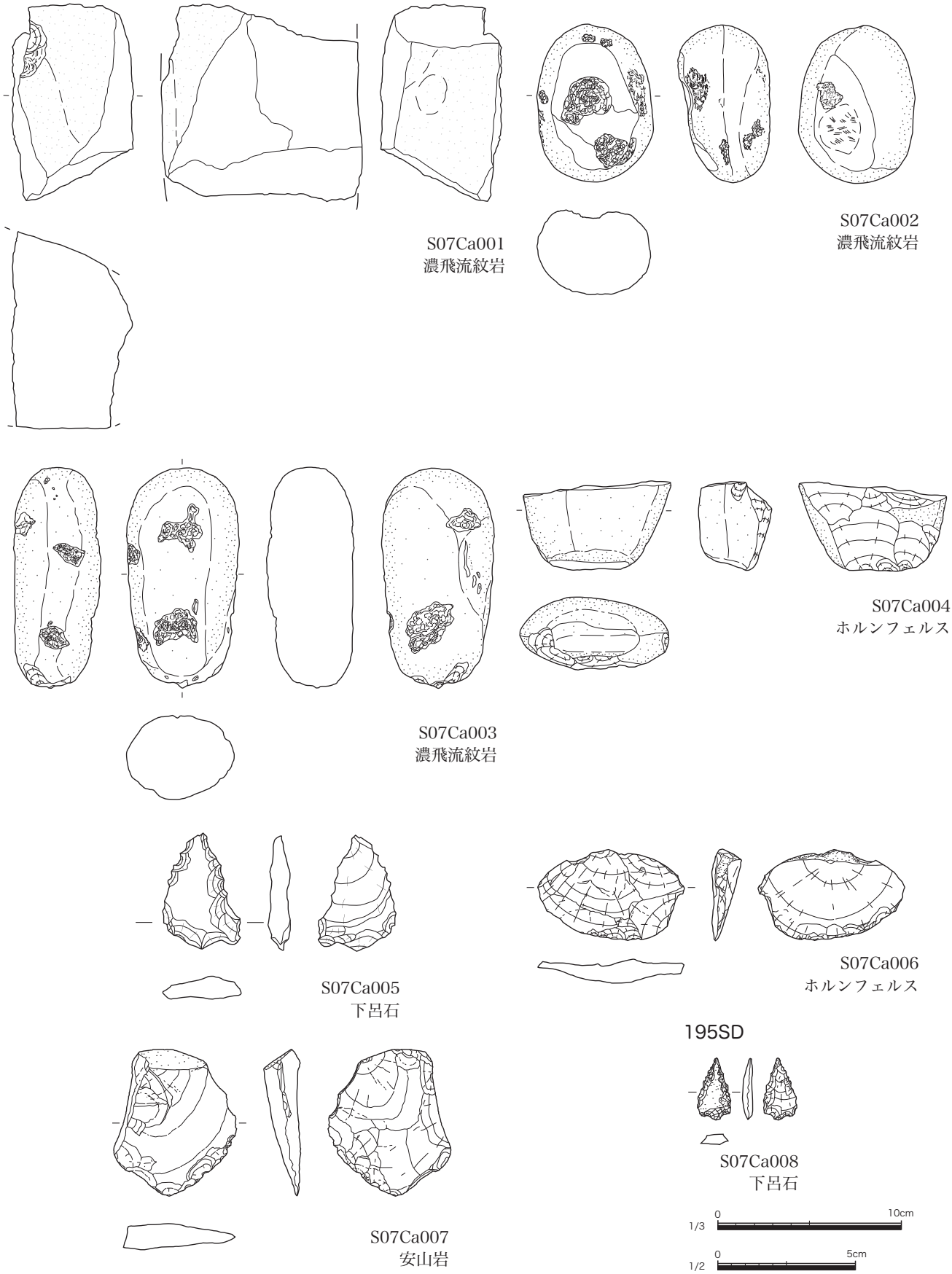


S07Bb013
花崗岩

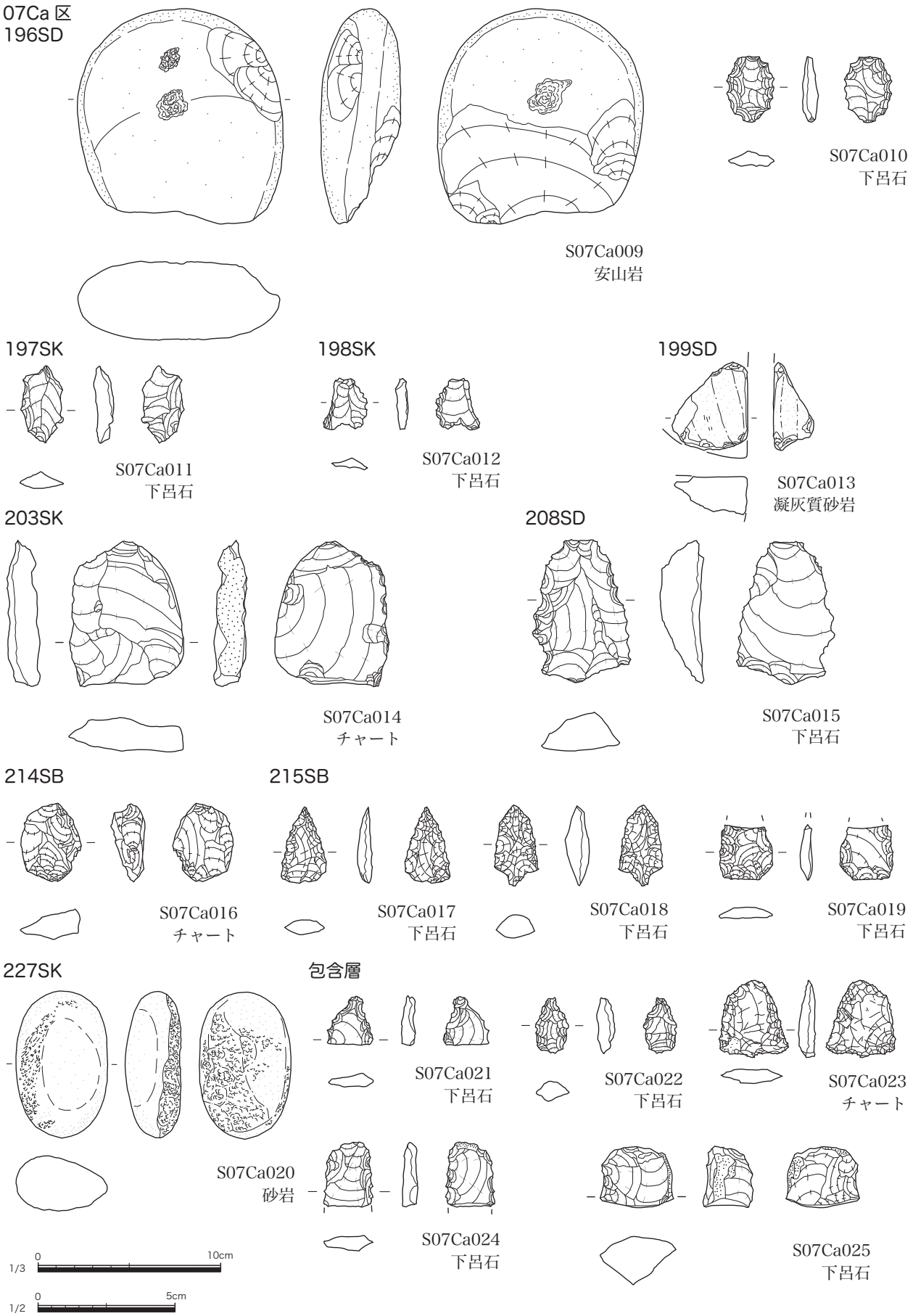
1/3 0 10cm

第 62 図　07Bb 区出土石器（2）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

07Ca 区
187SD



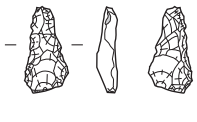
第 63 図　07Ca 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）



第 64 図　07Ca 区出土石器（2）（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

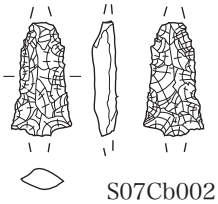
07Cb 区

230SK



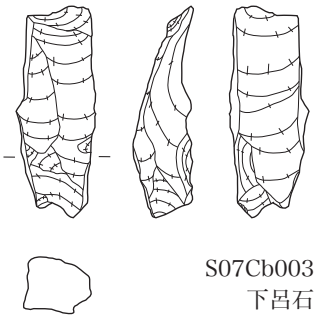
S07Cb001
下呂石

231SK



S07Cb002
下呂石

234SK

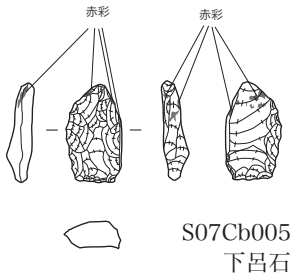


S07Cb003
下呂石

236SB

S07Cb004
下呂石

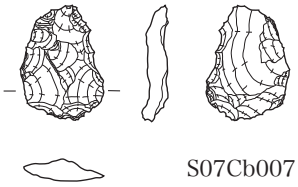
240SB



S07Cb005
下呂石

246SB

S07Cb006
濃飛流紋岩

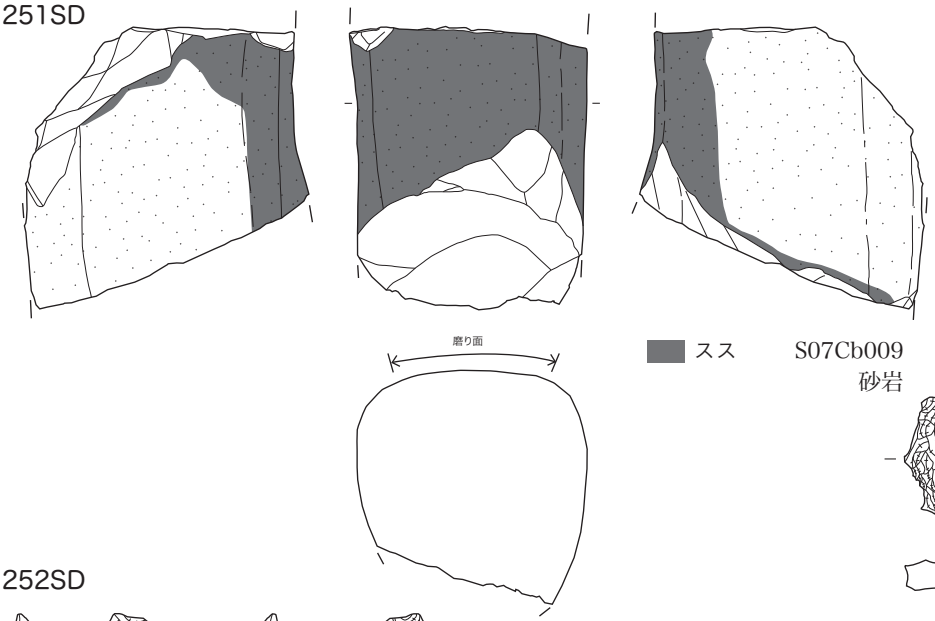


S07Cb007
下呂石

248SB

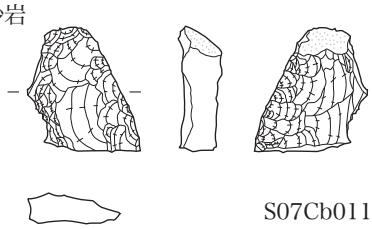
S07Cb008
下呂石

251SD



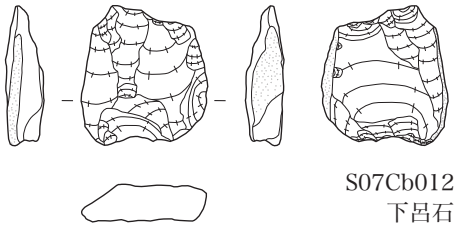
S07Cb009
砂岩

S07Cb010
下呂石



S07Cb011
下呂石

252SD

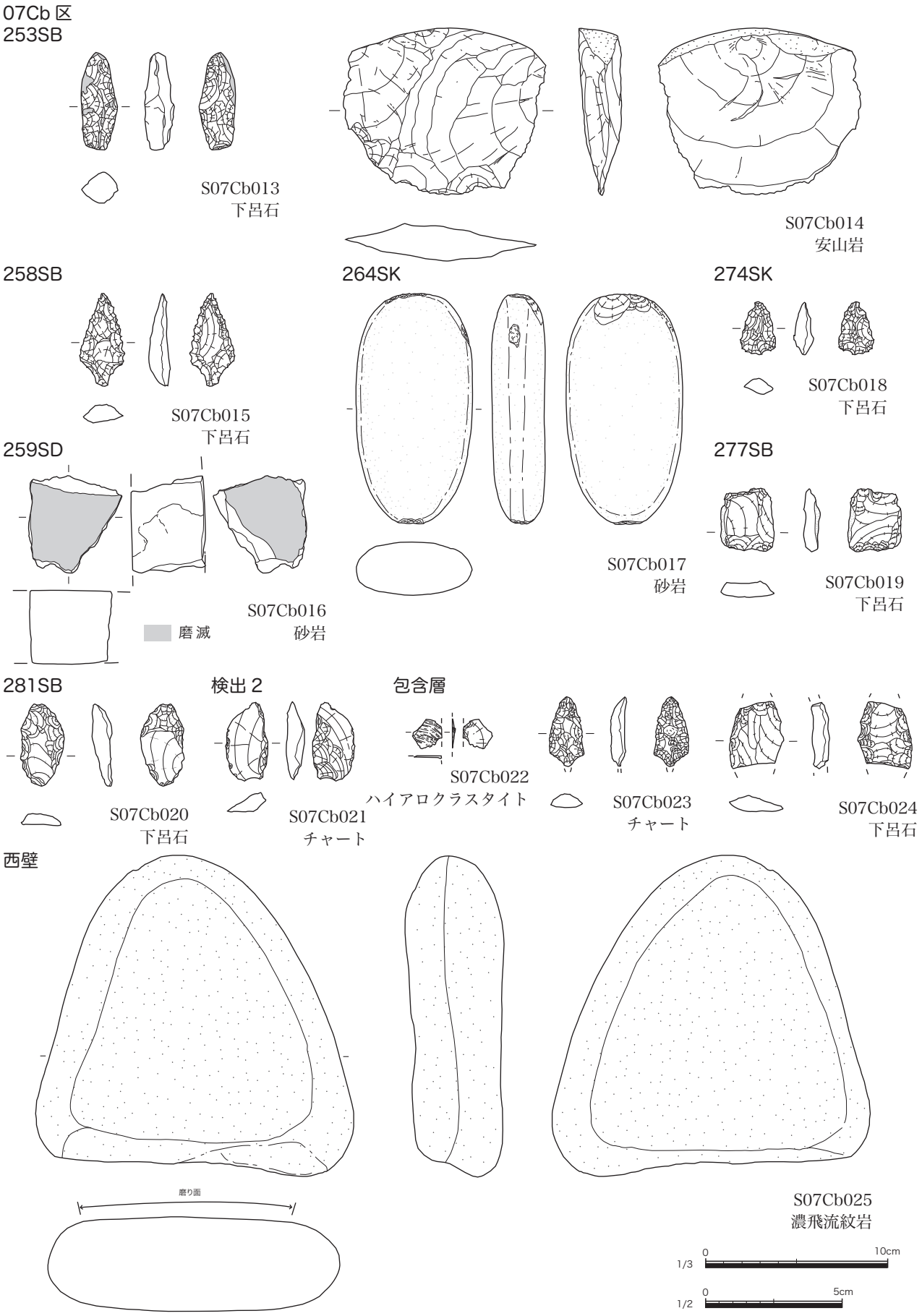


S07Cb012
下呂石

1/3 0 10cm

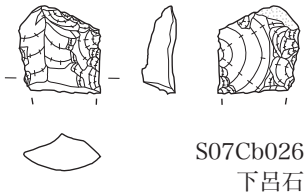
1/2 0 5cm

第 65 図　07Cb 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）



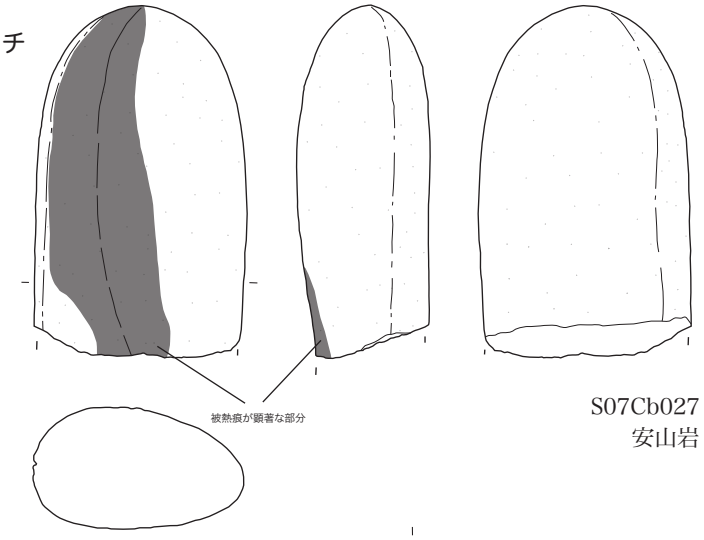
第 66 図　07Cb 区出土石器（2）（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

07Cb 区
南壁下層



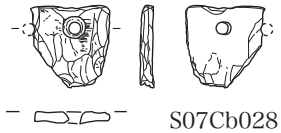
S07Cb026
下呂石

東トレンチ

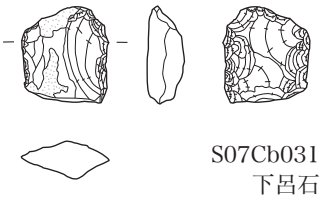


S07Cb027
安山岩

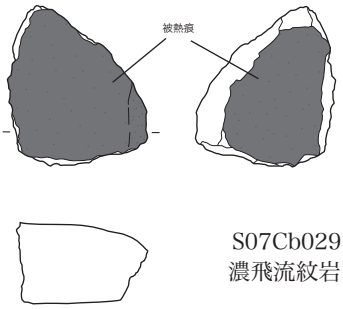
表土



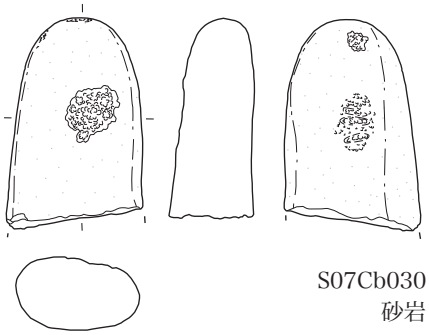
S07Cb028
泥岩



S07Cb031
下呂石

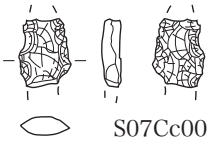


S07Cb029
濃飛流紋岩



S07Cb030
砂岩

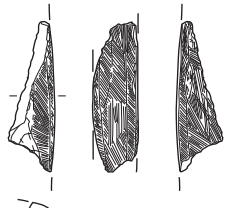
07Cc 区
002ST



S07Cc001
チャート

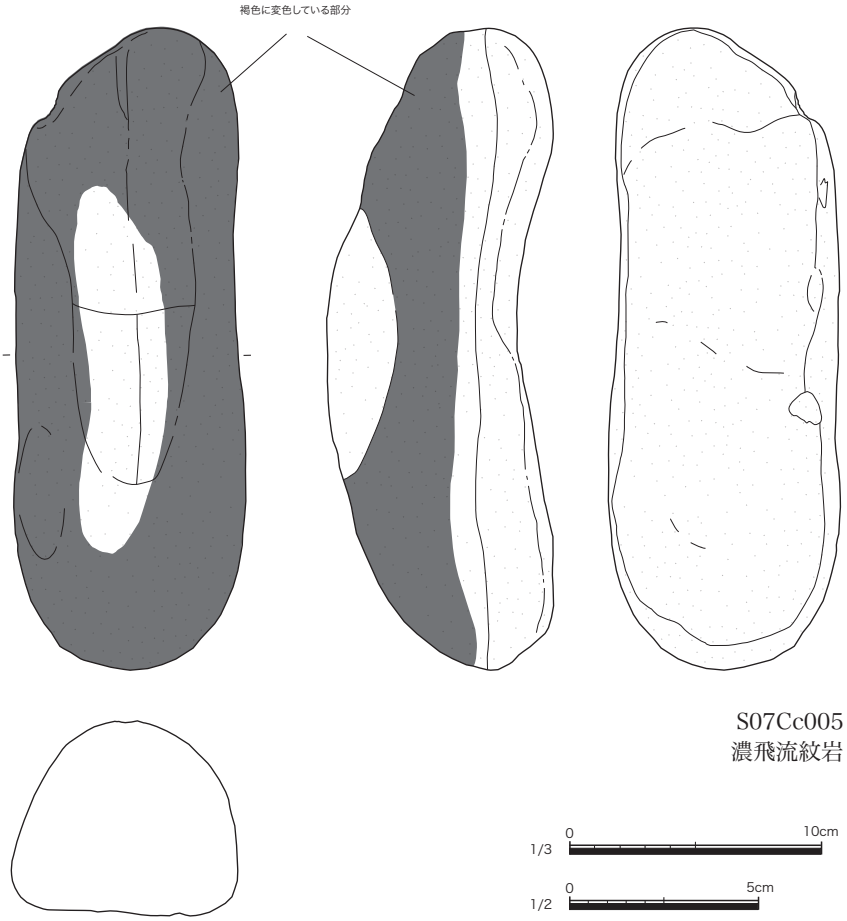
S07Cc002
泥岩

003SD



S07Cc003
ハイアロクラスタイト

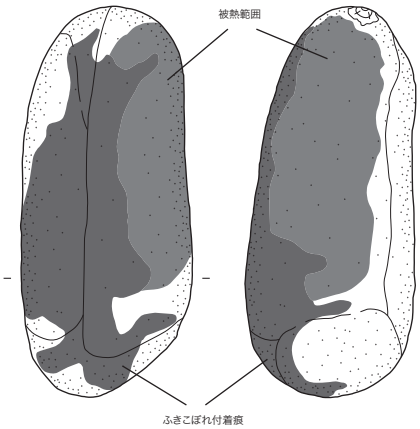
S07Cc004
ハイアロクラスタイト

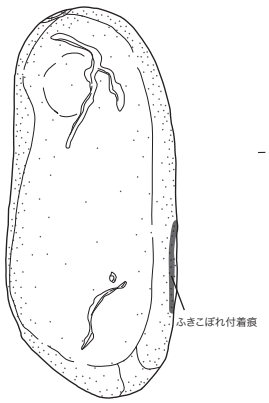


S07Cc005
濃飛流紋岩

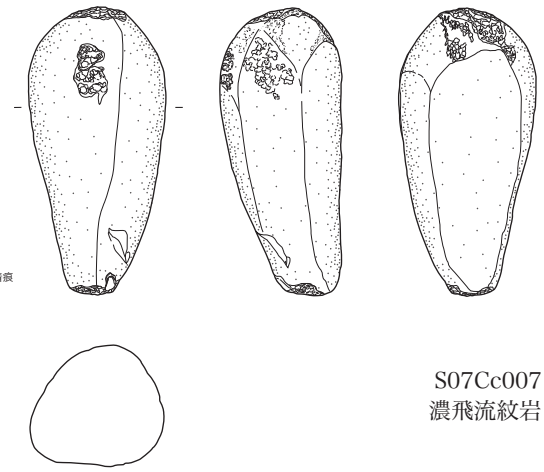
第 67 図　07Cb 区・07Cc 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

07Cc 区
003SD

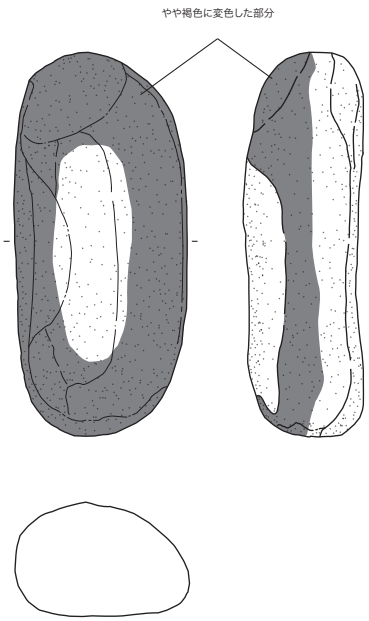




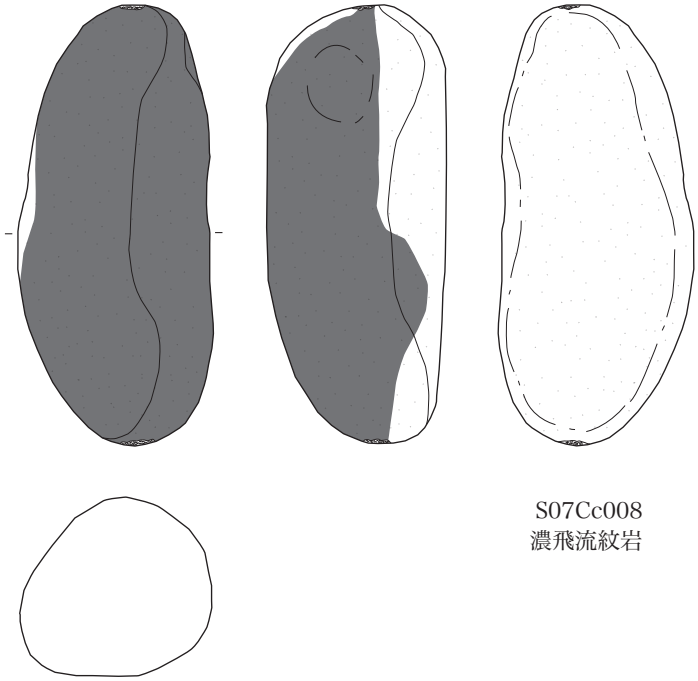
S07Cc006
濃飛流紋岩



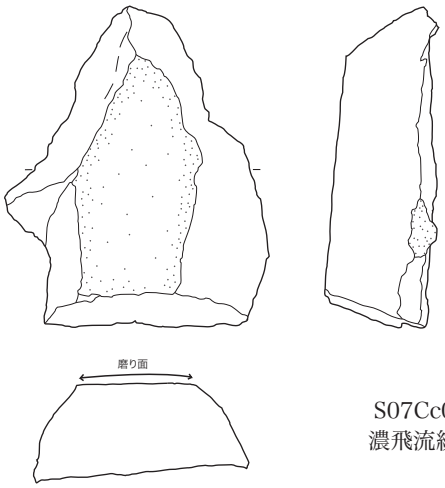
S07Cc007
濃飛流紋岩



S07Cc009
濃飛流紋岩



S07Cc008
濃飛流紋岩

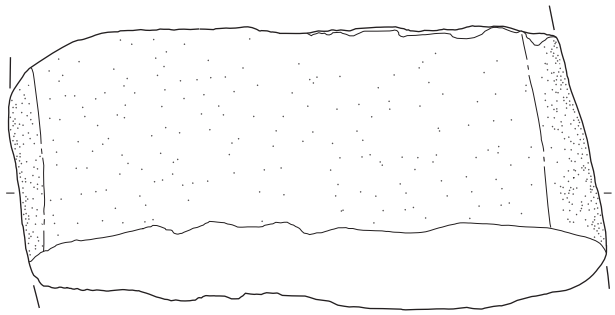


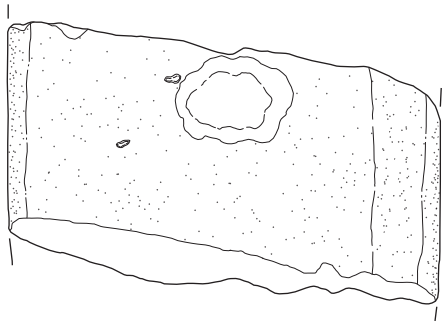
S07Cc010
濃飛流紋岩

1/3 0 10cm

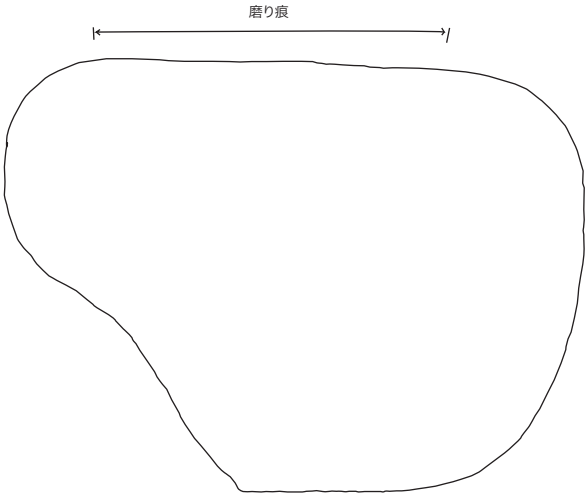
第 68 図　07Cc 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

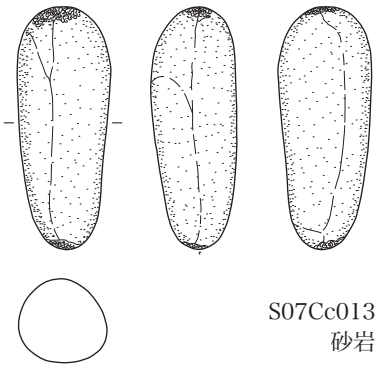
07Cc 区
003SD



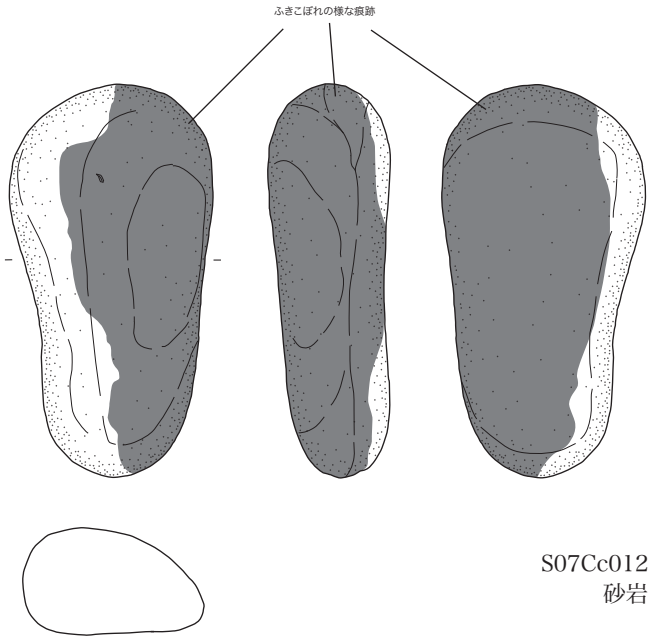


S07Cc011
濃飛流紋岩

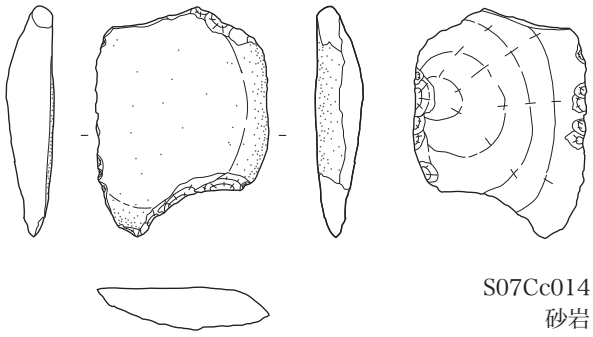




S07Cc013
砂岩



S07Cc012
砂岩

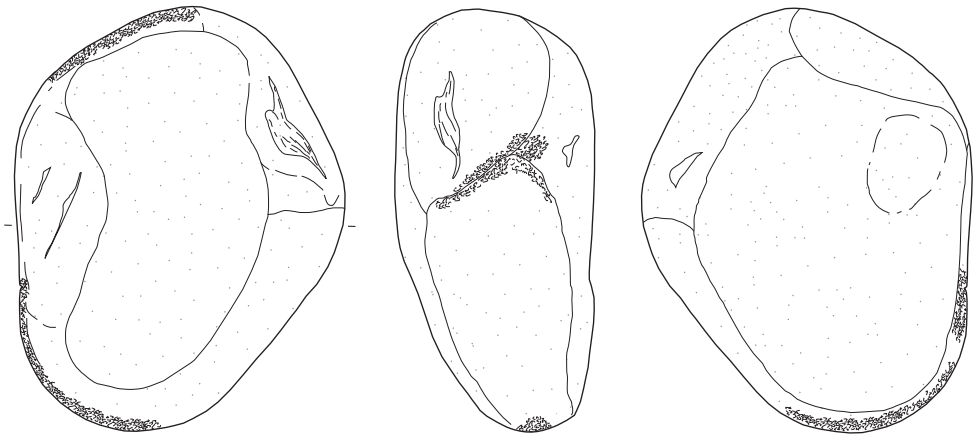


S07Cc014
砂岩

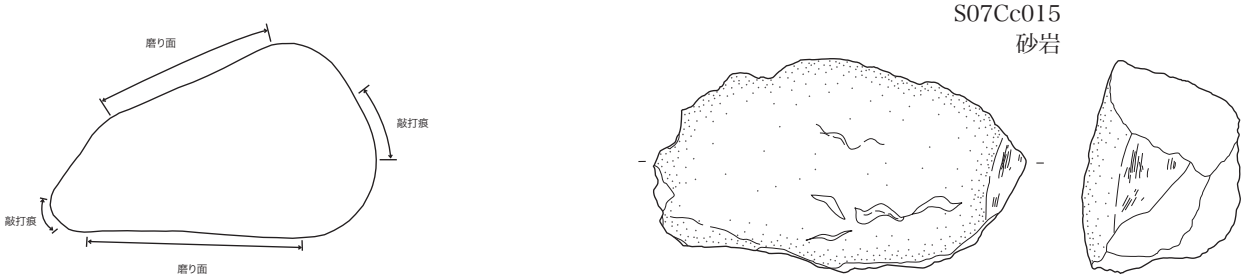
0　10cm
1/3

第 69 図　07Cc 区出土石器（２）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

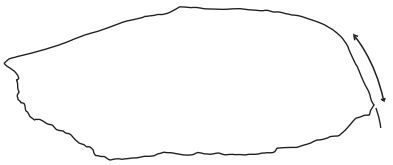
07Cc 区
003SD

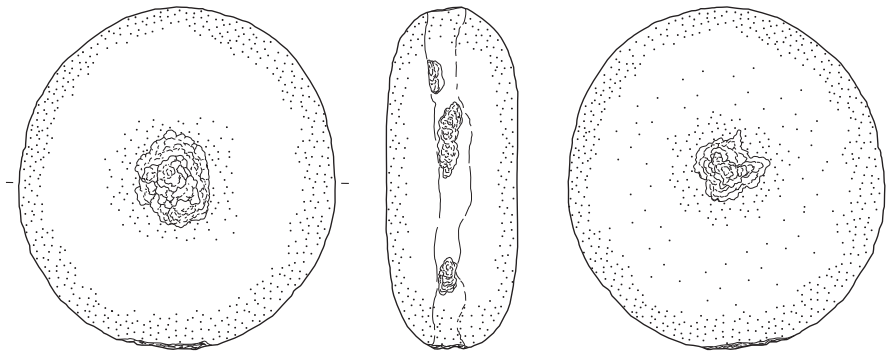


S07Cc015
砂岩

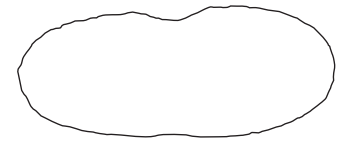


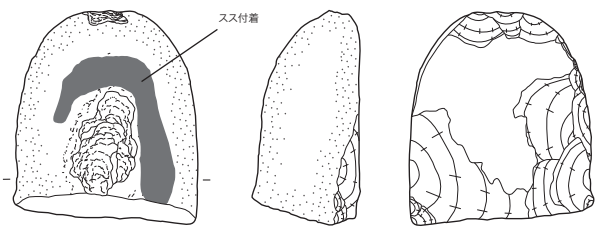
S07Cc016
ホルンフェルス



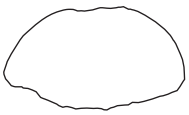


S07Cc017
花崗岩



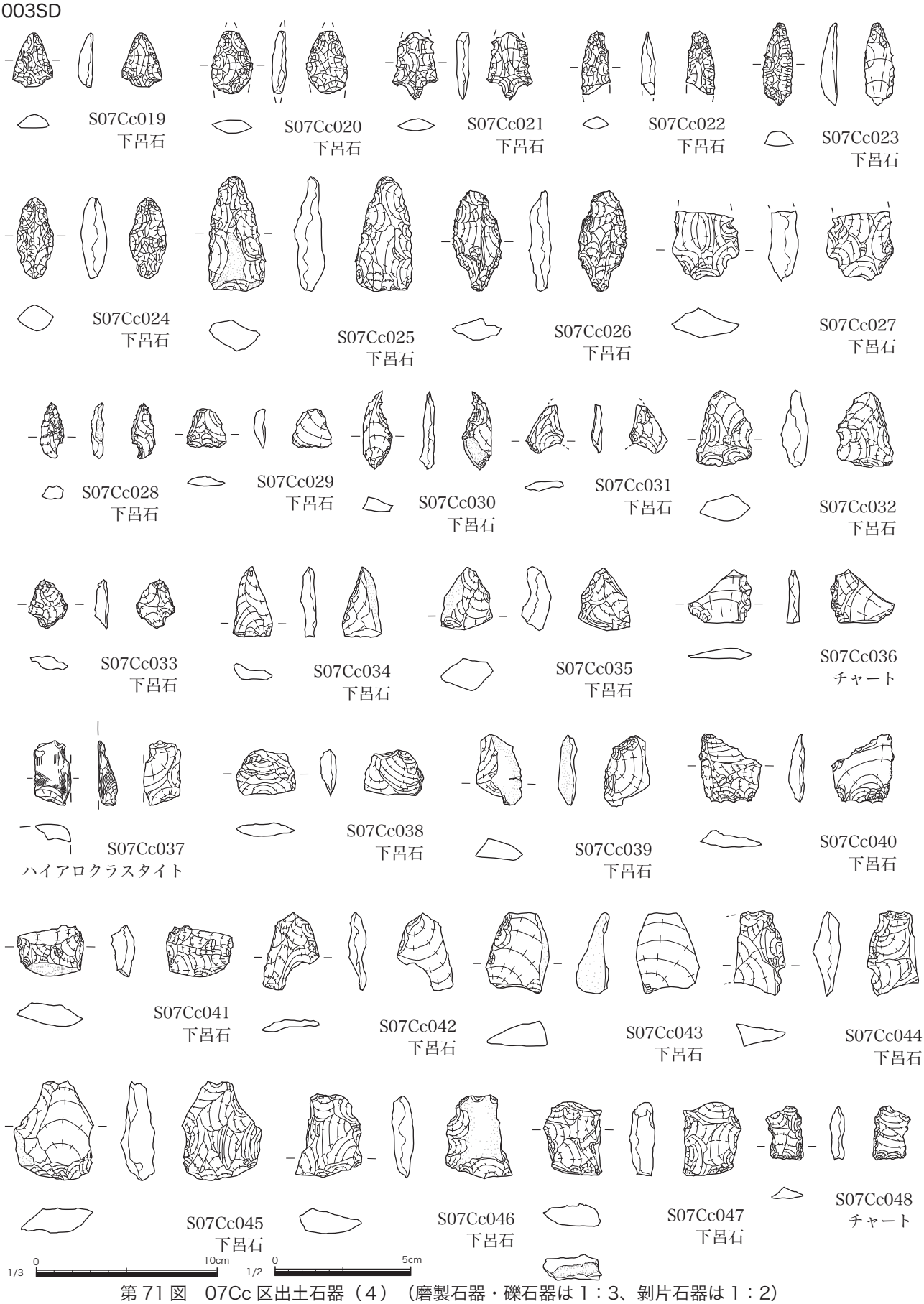


S07Cc018
凝灰質砂岩



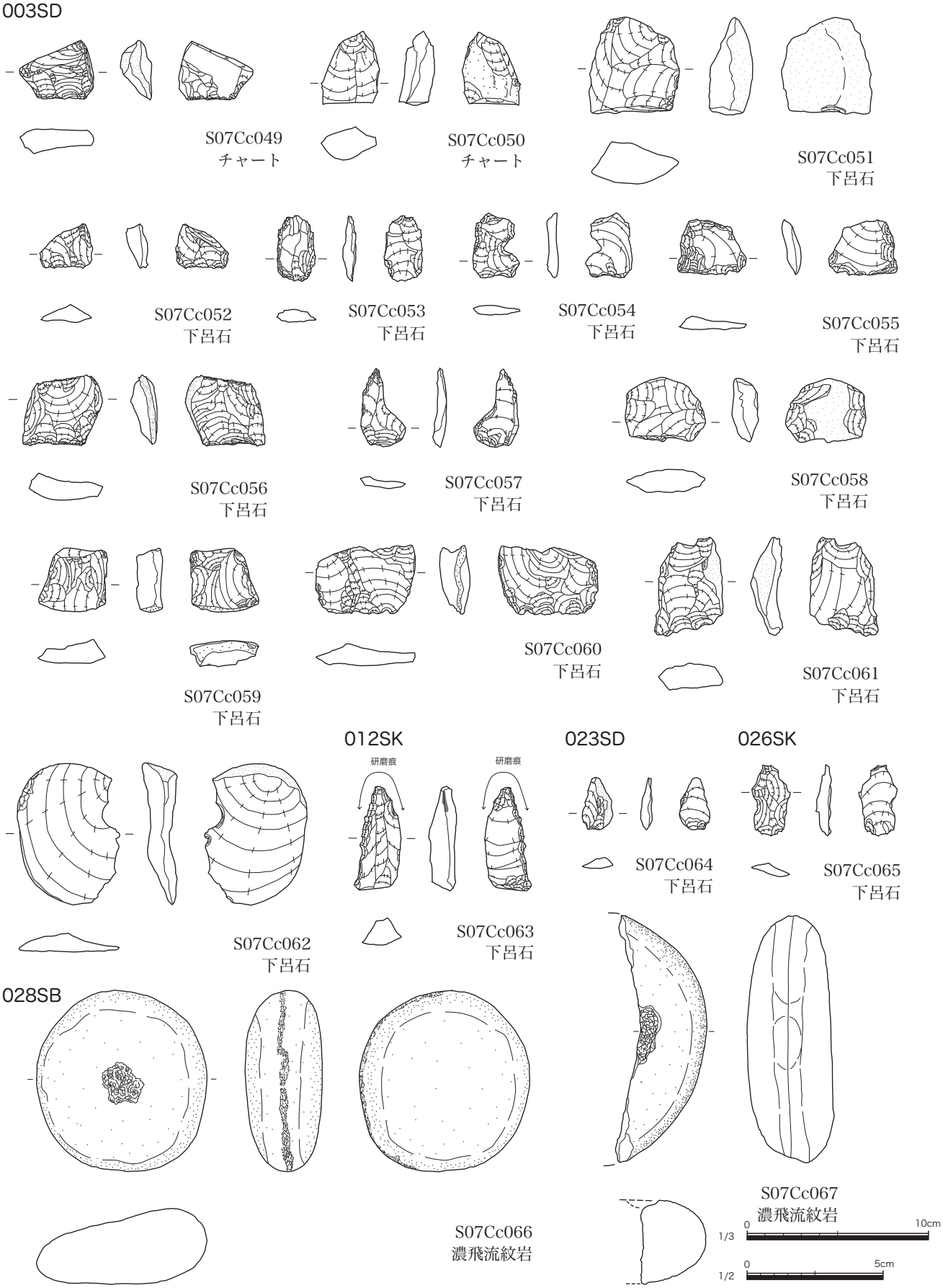
第 70 図　07Cc 区出土石器（3）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

07Cc 区
003SD



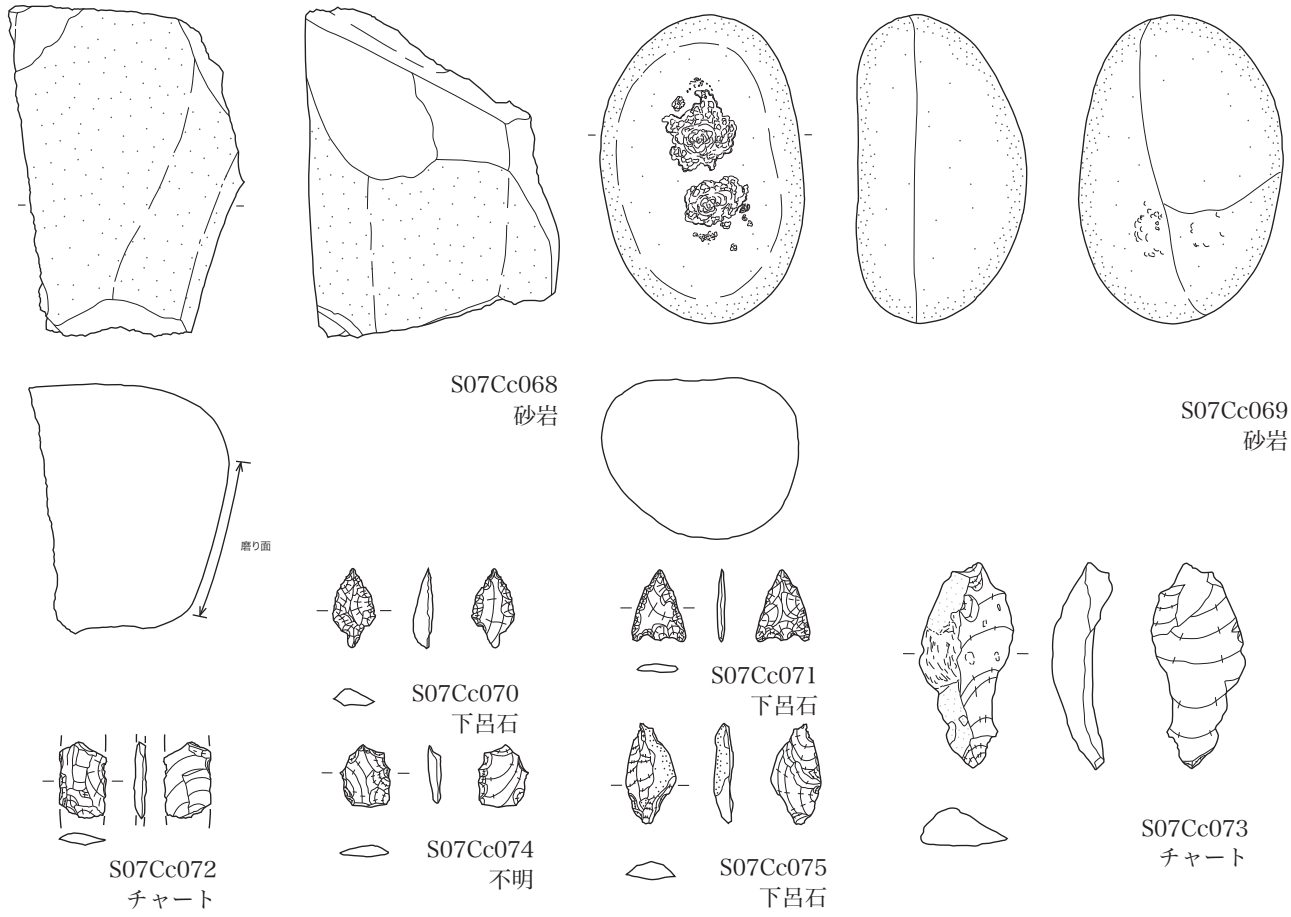
第 71 図　07Cc 区出土石器（４）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

07Cc 区
003SD

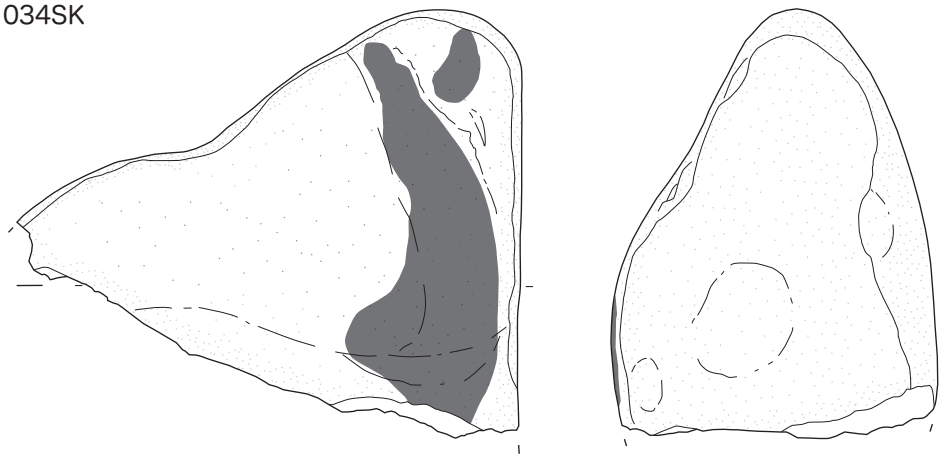


第 72 図　07Cc 区出土石器（5）（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

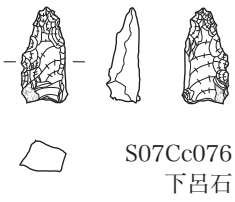
07Cc 区
028SB

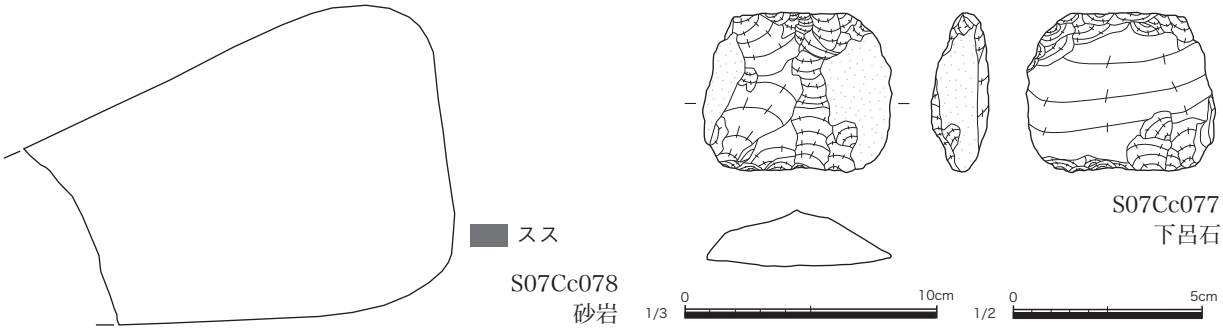


034SK



031SK





第 73 図　07Cc 区出土石器（６）（磨製石器・礫石器は１：３、剥片石器は１：２）

07Cc 区
035SB

S07Cc079
下呂石

S07Cc080
チャート

039SK

S07Cc081
不明

048SK

ススス付着

S07Cc082
砂岩

049SK

ススス付着範囲

研磨面

S07Cc083
砂岩

S07Cc084
下呂石

050SK

磨面

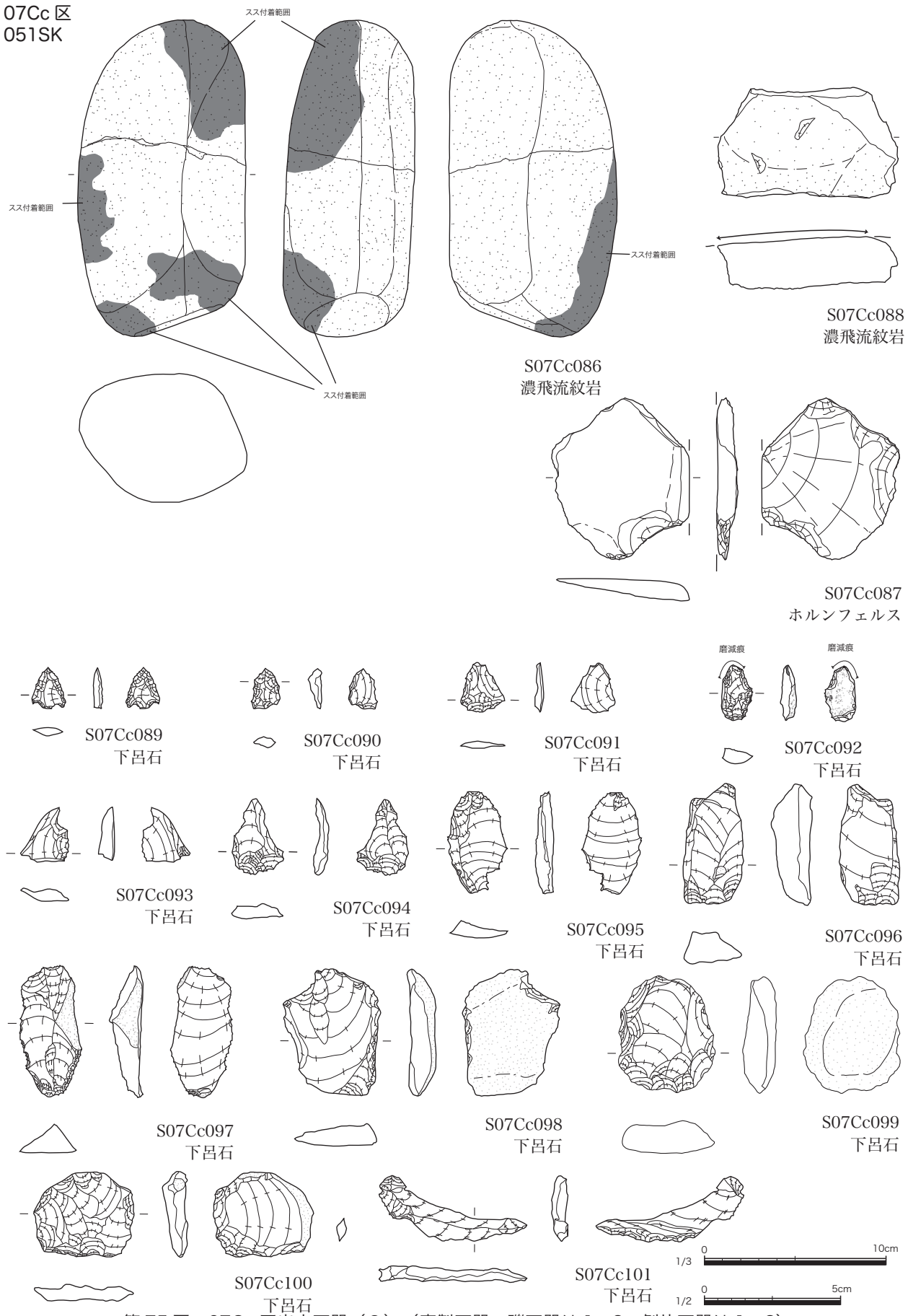
顕著な被熱痕

S07Cc085
濃飛流紋岩

1/3 0 10cm

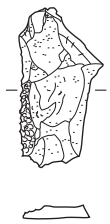
1/2 0 5cm

第 74 図　07Cc 区出土石器（7）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）



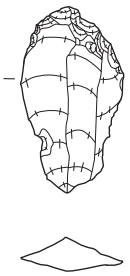
第 75 図　07Cc 区出土石器（８）（磨製石器・礫石器は１：３、剥片石器は１：２）

07Cc 区
055SK



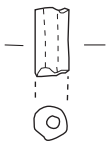
S07Cc102
サヌカイト

S07Cc103
下呂石



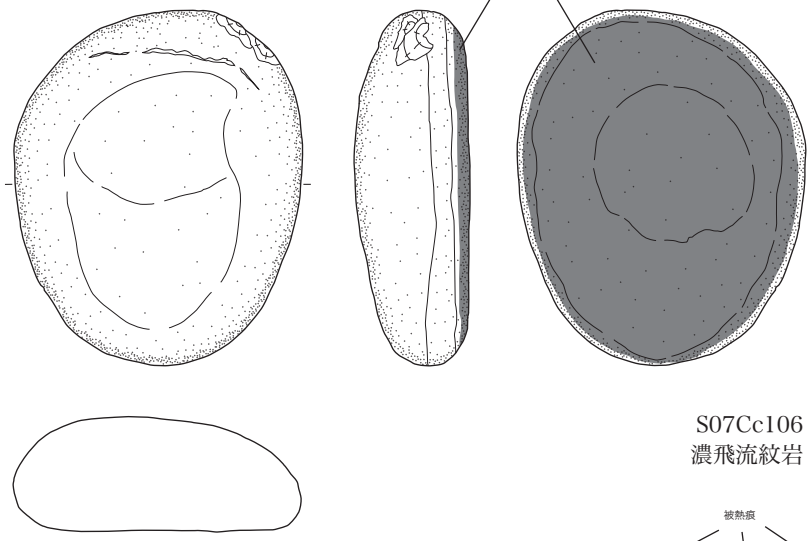
S07Cc104
下呂石

058SK

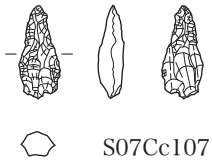


S07Cc105
緑色溶結凝灰岩

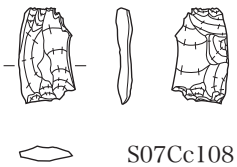
068SK



S07Cc106
濃飛流紋岩

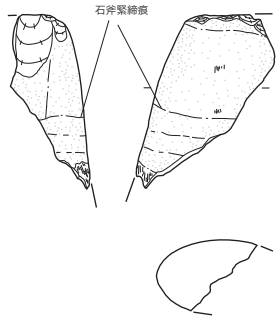


S07Cc107
下呂石

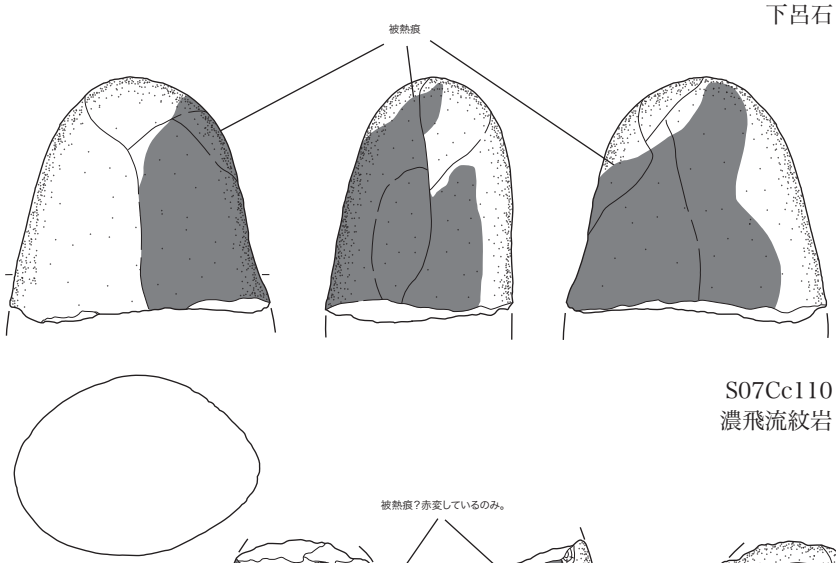


S07Cc108
下呂石

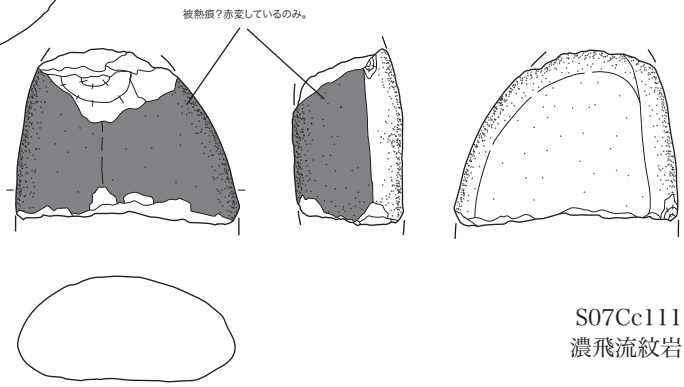
086SK



S07Cc109
ハイアロクラスタイト



S07Cc110
濃飛流紋岩



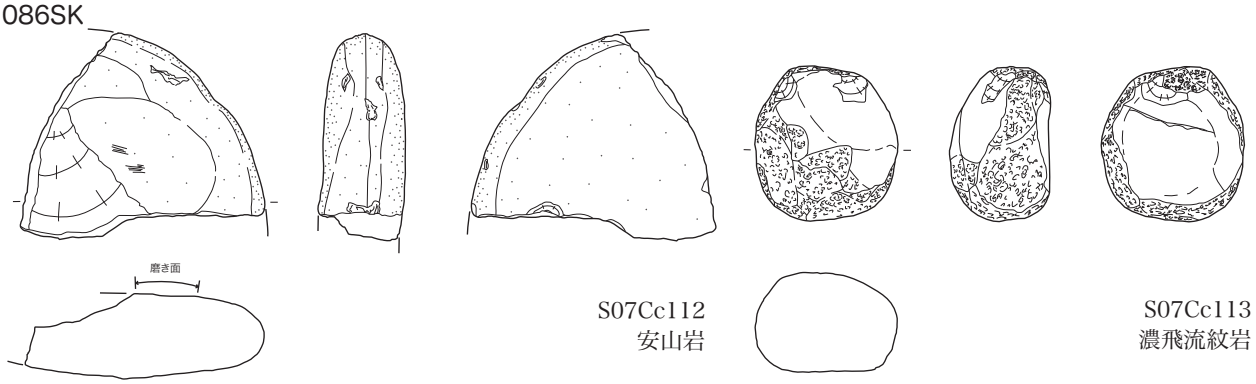
S07Cc111
濃飛流紋岩

1/3 0 10cm

1/2 0 5cm

第 76 図　07Cc 区出土石器（9）（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

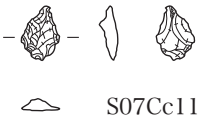
07Cc 区
086SK



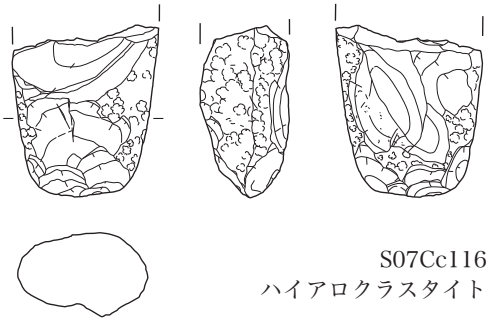
S07Cc112
安山岩

S07Cc113
濃飛流紋岩

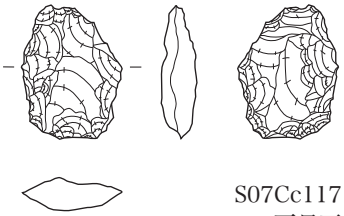
S07Cc114
チャート



S07Cc115
下呂石

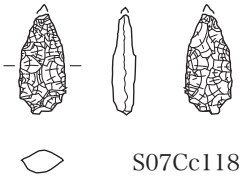


S07Cc116
ハイアロクラスタイト



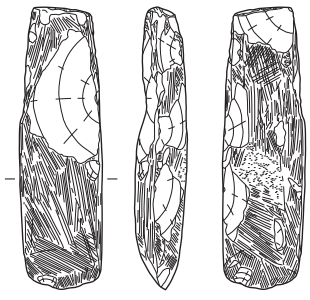
S07Cc117
下呂石

088SK

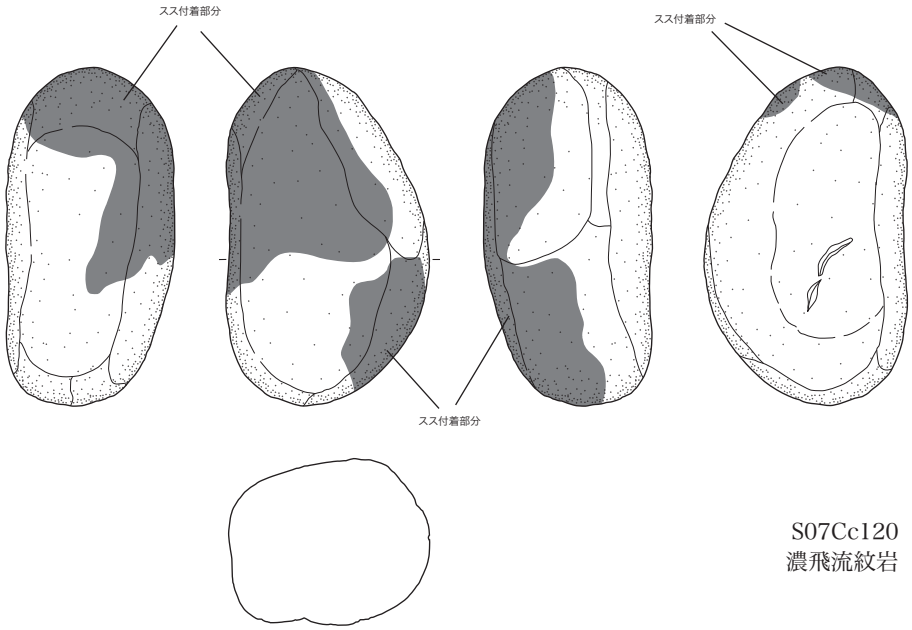


S07Cc118
チャート

093SK

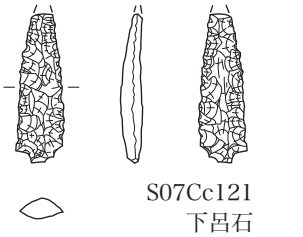


S07Cc119
ハイアロクラスタイト

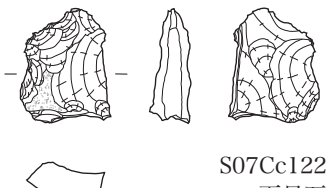


S07Cc120
濃飛流紋岩

093SD



S07Cc121
下呂石

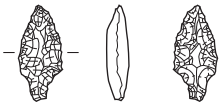


S07Cc122
下呂石

第 77 図　07Cc 区出土石器（10）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

07Cc 区
094SB

S07Cc123
下呂石

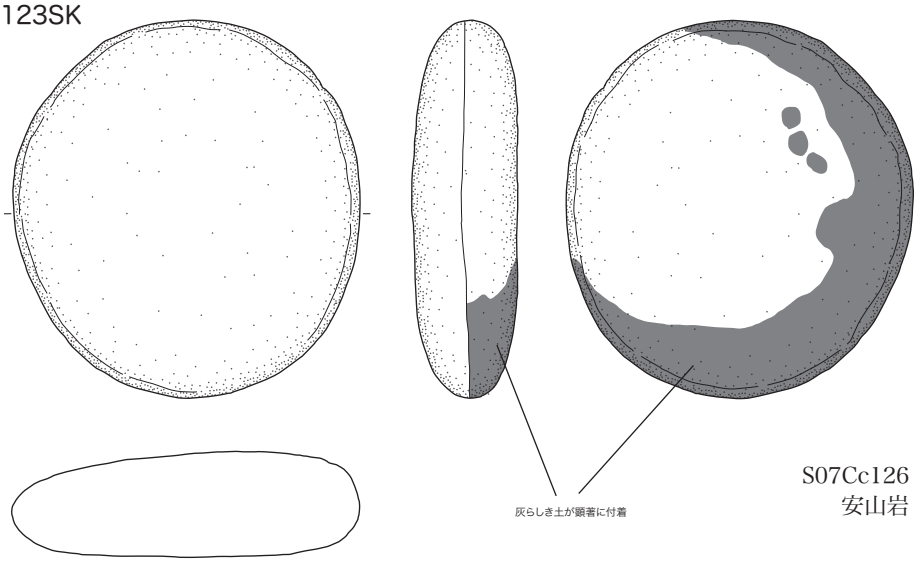


S07Cc124
下呂石

116SK

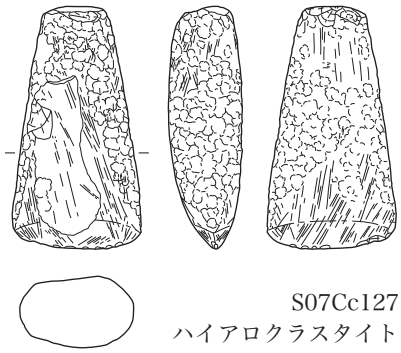
S07Cc125
下呂石

123SK



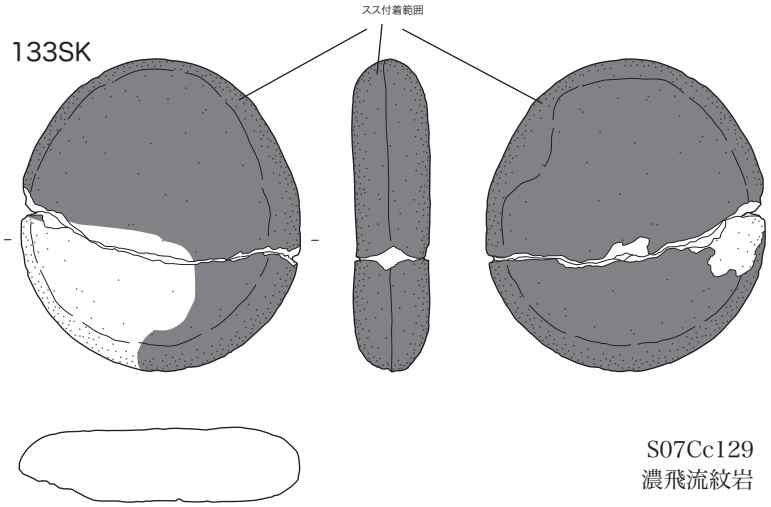
S07Cc126
安山岩

126SK



S07Cc127
ハイアロクラスタイト

133SK

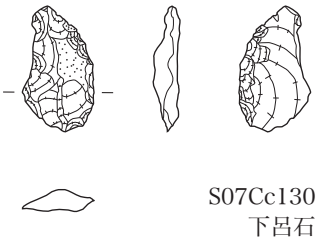


S07Cc129
濃飛流紋岩

129SK

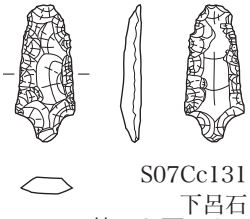
S07Cc128
下呂石

136SK



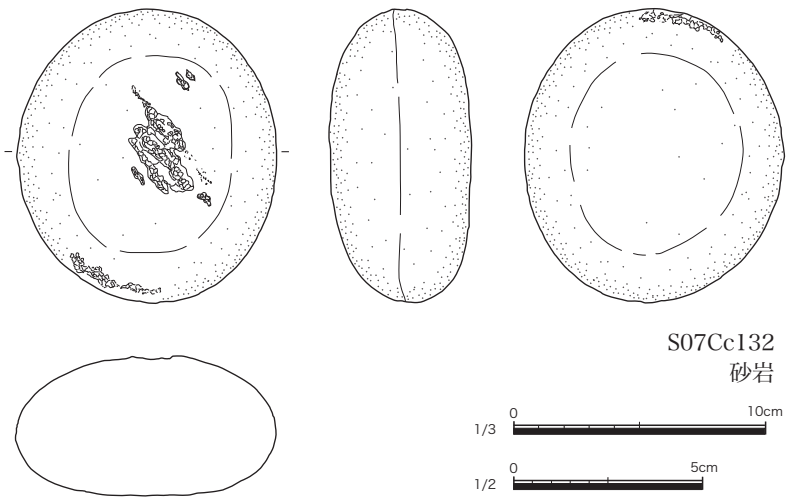
S07Cc130
下呂石

144SK



S07Cc131
下呂石

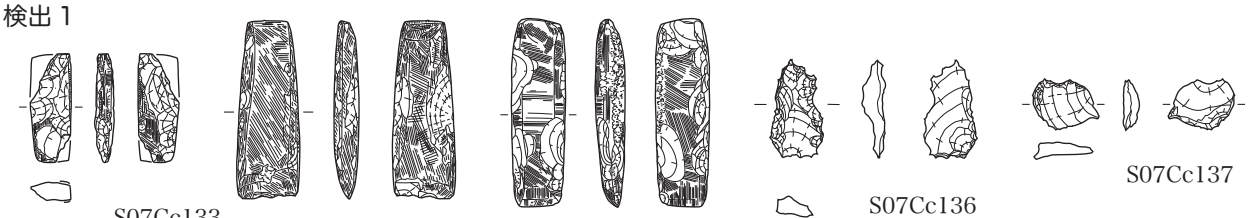
145SK



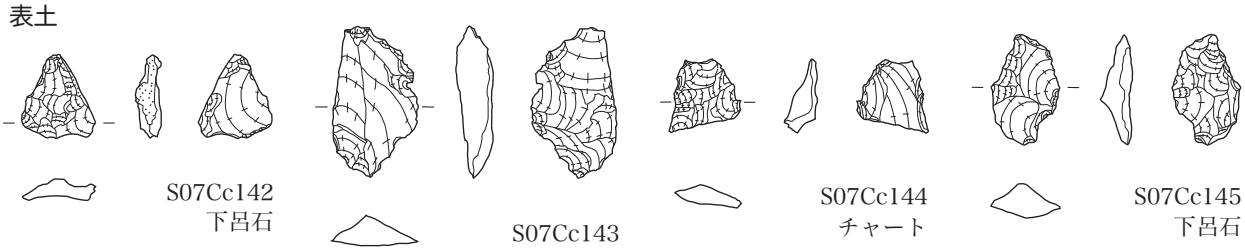
S07Cc132
砂岩

第 78 図　07Cc 区出土石器（11）（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

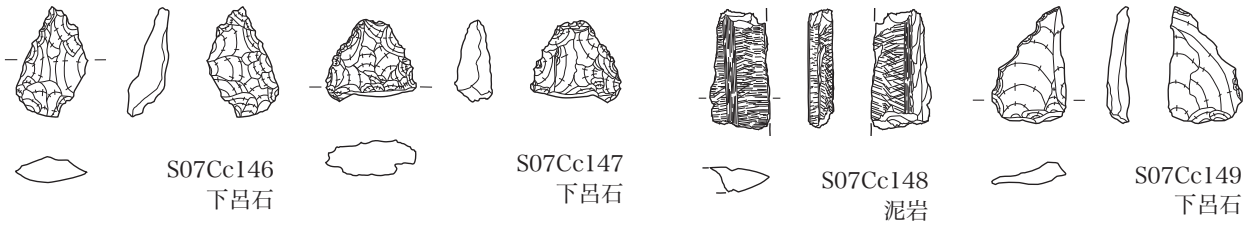
07Cc 区
検出 1



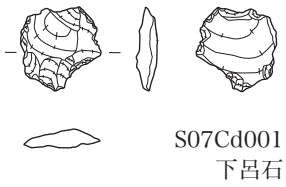
表土



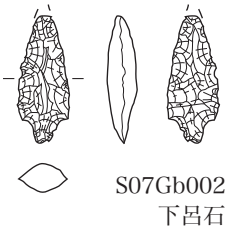
2 トレンチ



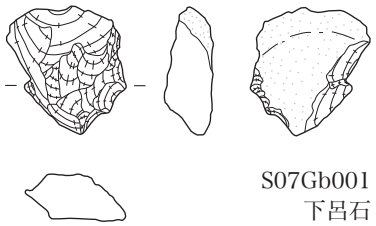
07Cd 区
東トレンチ



07Gb 区
047SU

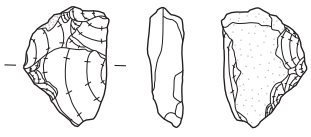


039SD



07Ha 区
020SD

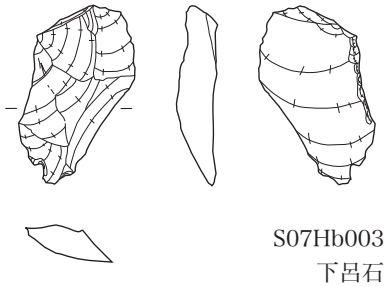
07Hb 区
002ST



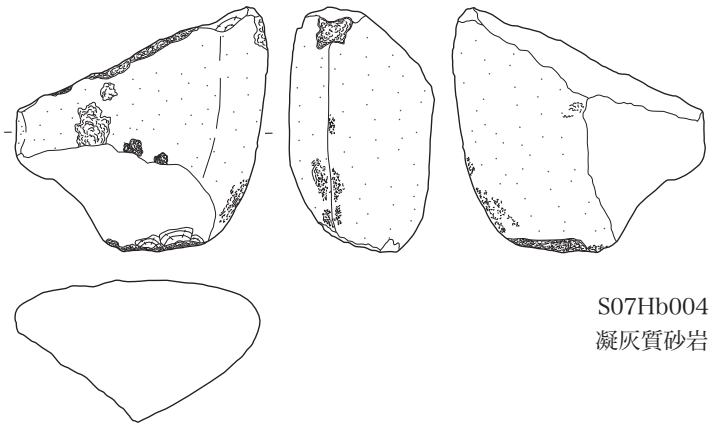
005SD

第 79 図　07Cc 区・07Cd 区・07Gb 区・07Ha 区・07Hb 区出土石器（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

07Hb 区
020SD

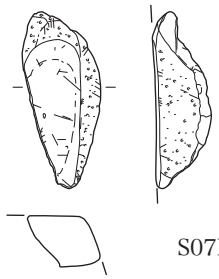


S07Hb003
下呂石

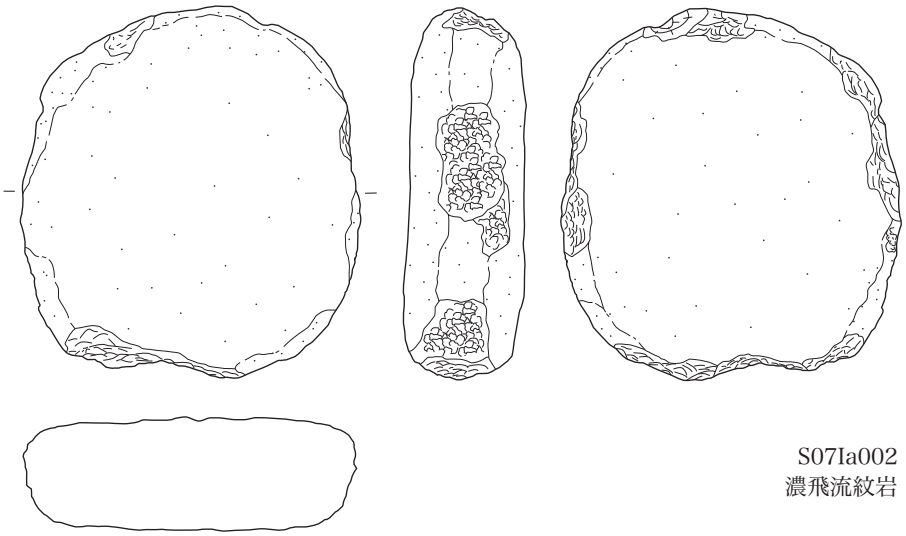


S07Hb004
凝灰質砂岩

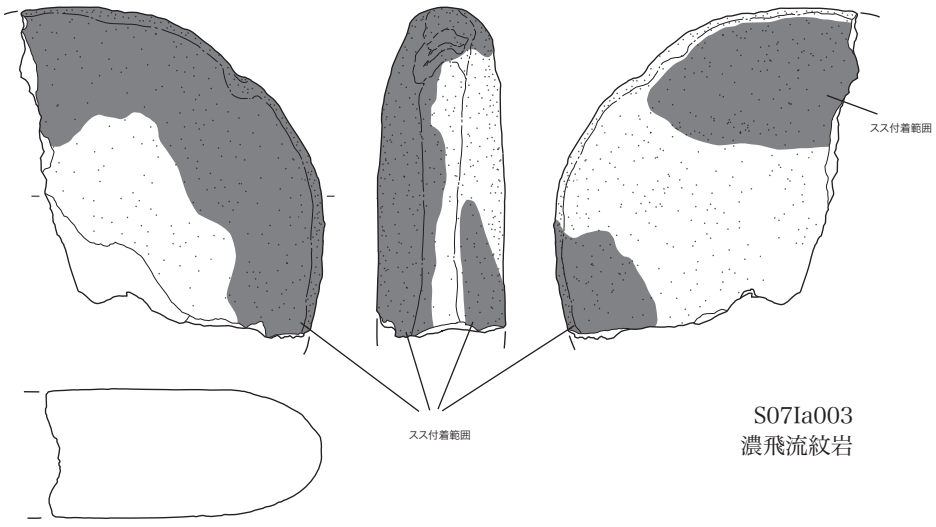
07Ia 区
076SD



S07Ia001
砂岩



S07Ia002
濃飛流紋岩

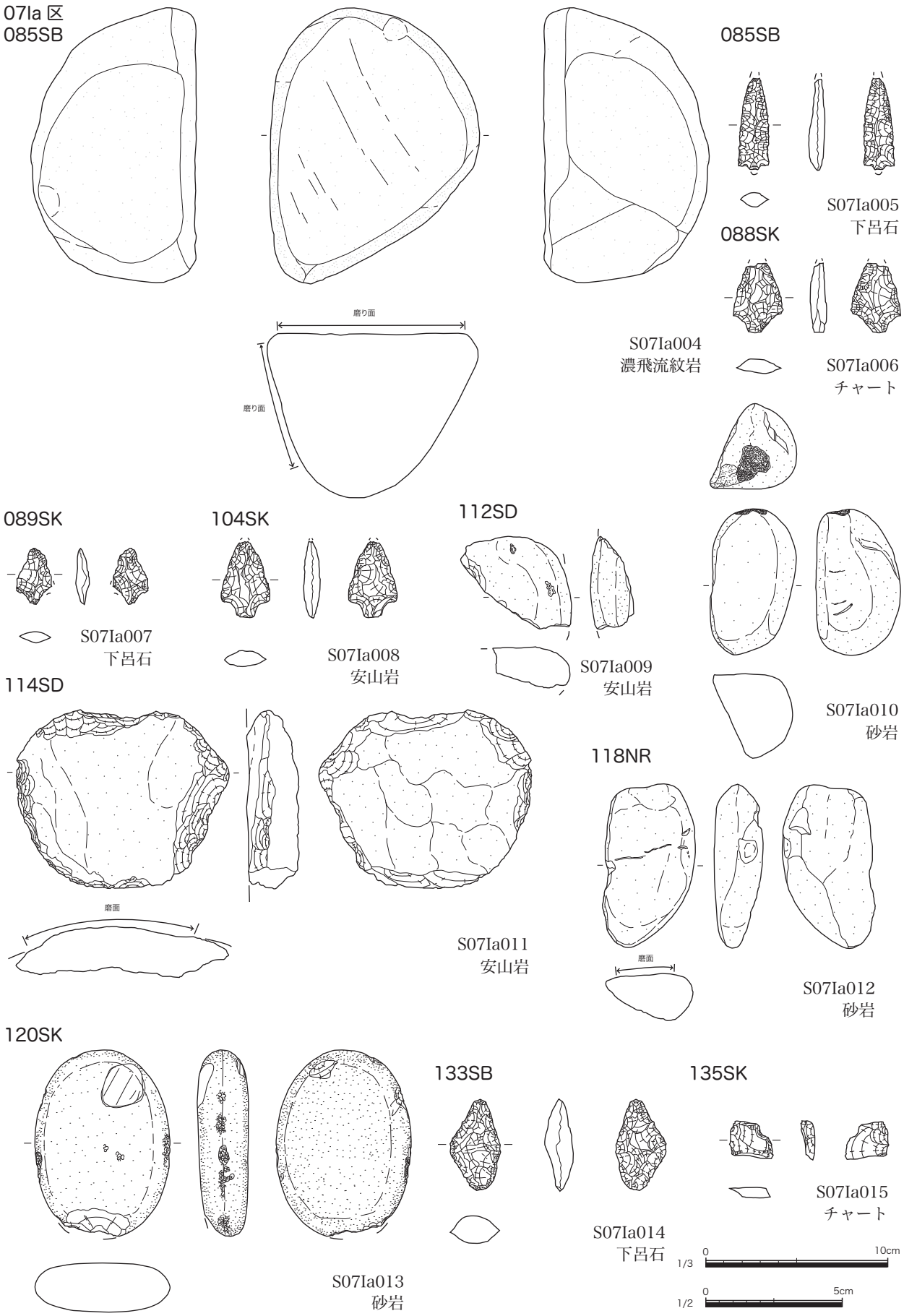


S07Ia003
濃飛流紋岩

1/3 0 10cm

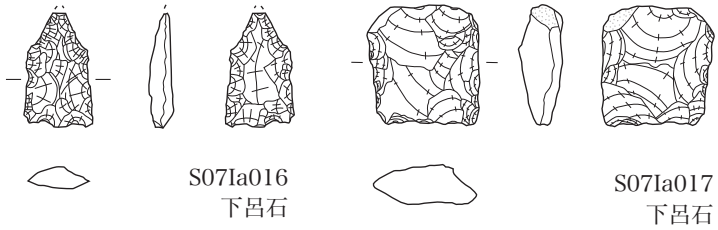
1/2 0 5cm

第 80 図　07Hb 区・07Ia 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）



第 81 図　07Ia 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

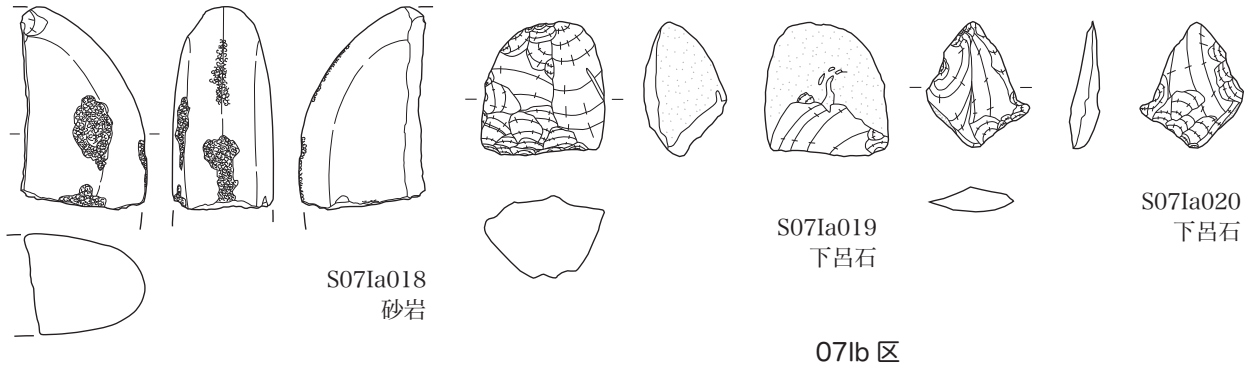
07Ia 区
検出 1



S07Ia016
下呂石

S07Ia017
下呂石

表土はぎ

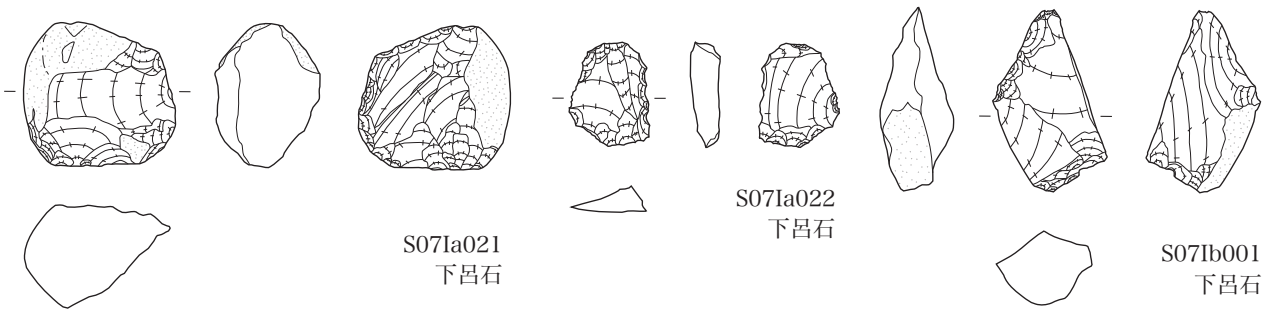


S07Ia018
砂岩

S07Ia019
下呂石

S07Ia020
下呂石

07Ib 区
056SD

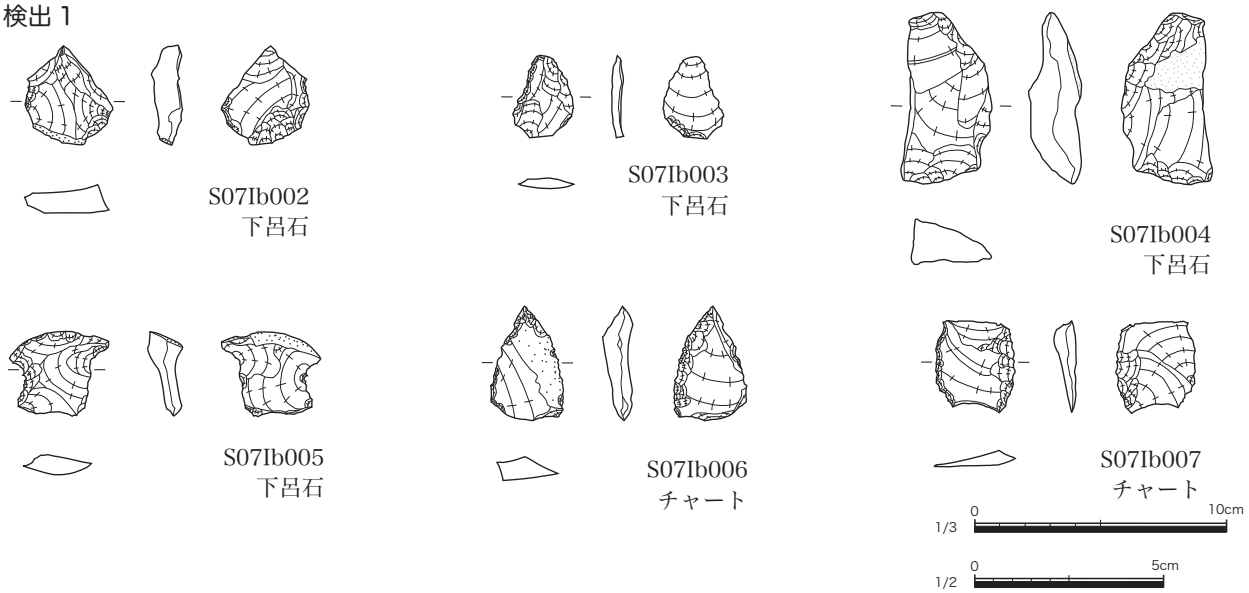


S07Ia021
下呂石

S07Ia022
下呂石

S07Ib001
下呂石

検出 1



S07Ib002
下呂石

S07Ib003
下呂石

S07Ib004
下呂石

S07Ib005
下呂石

S07Ib006
チャート

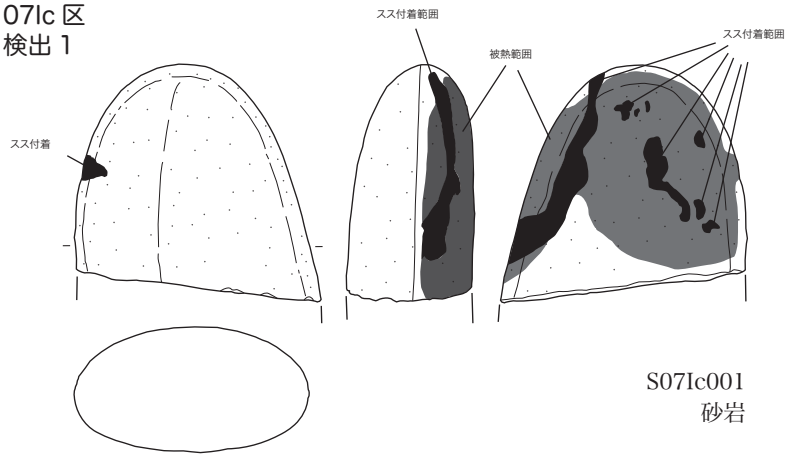
S07Ib007
チャート

1/3 0 10cm

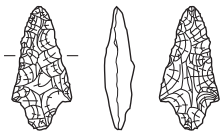
1/2 0 5cm

第 82 図　07Ia 区・07Ib 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）

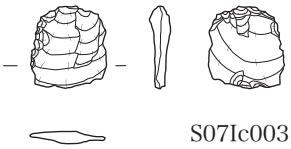
07Ic 区
検出 1



S07Ic001
砂岩

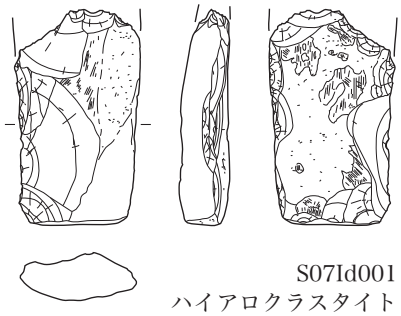


S07Ic002
下呂石



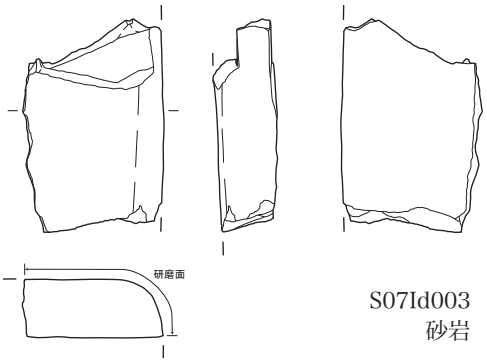
S07Ic003
下呂石

07Id 区
001ST

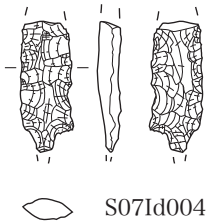


S07Id001
ハイアロクラスタイト

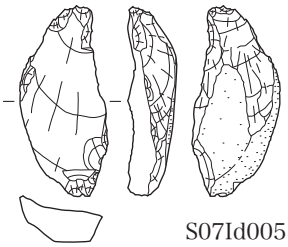
S07Id002
ハイアロクラスタイト



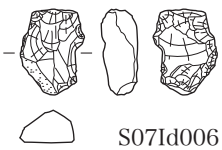
S07Id003
砂岩



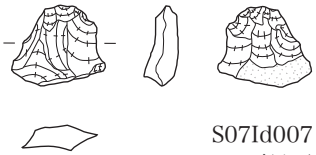
S07Id004
チャート



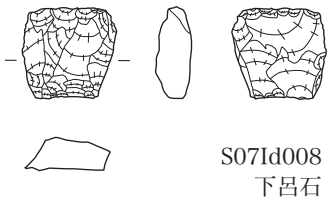
S07Id005
下呂石



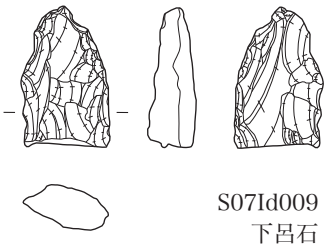
S07Id006
チャート



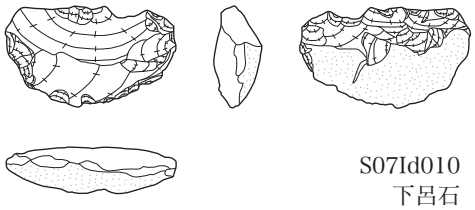
S07Id007
下呂石



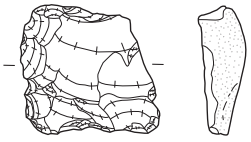
S07Id008
下呂石



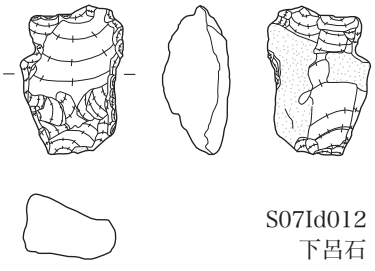
S07Id009
下呂石



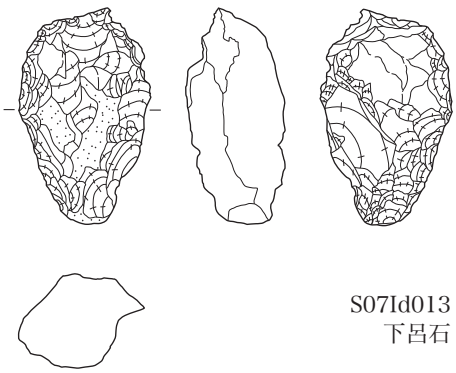
S07Id010
下呂石



S07Id011
下呂石



S07Id012
下呂石



S07Id013
下呂石

第 83 図　07Ic 区・07Id 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

07Id 区
002ST

S07Id014
下呂石

S07Id015
下呂石

S07Id016
下呂石

003ST

S07Id017
下呂石

S07Id018
チャート

S07Id019
チャート

004SD

S07Id020
ハイアロクラスタイト

004SZ

S07Id021
砂岩

S07Id022
チャート

004SD

S07Id023
チャート

S07Id024
下呂石

S07Id025
下呂石

S07Id026
下呂石

S07Id027
下呂石

S07Id028
下呂石

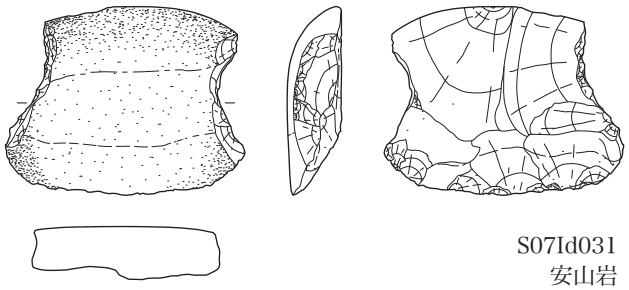
S07Id029
チャート

S07Id030
下呂石

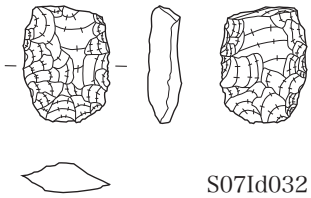
1/3 0 10cm
1/2 0 5cm

第 84 図　07Id 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

07Id 区
005SB

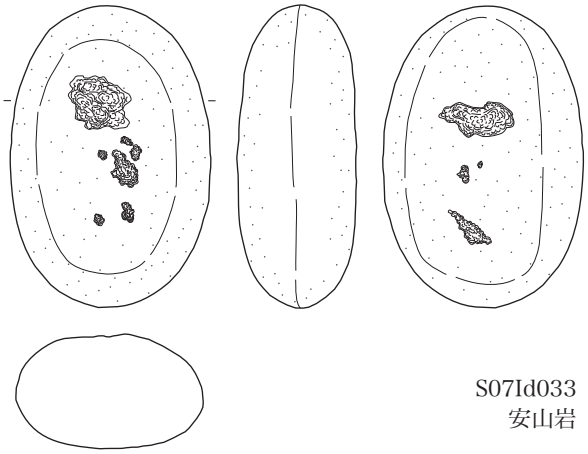


S07Id031
安山岩



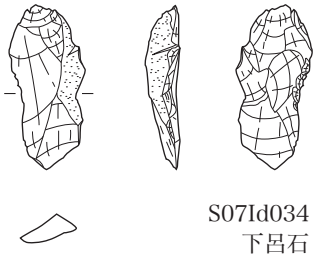
S07Id032
下呂石

006SD



S07Id033
安山岩

007SK

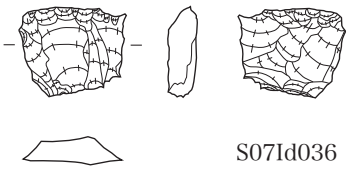


S07Id034
下呂石

010SK

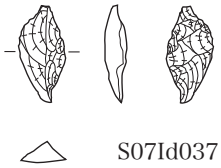
S07Id035
下呂石

012SK



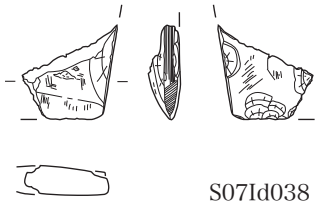
S07Id036
下呂石

075SK

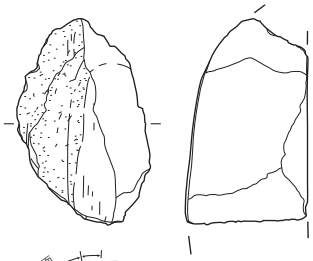


S07Id037
下呂石

検出 1



S07Id038
ハイアロクラスタイト

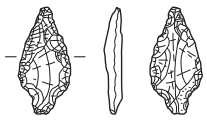


S07Id039
濃飛流紋岩

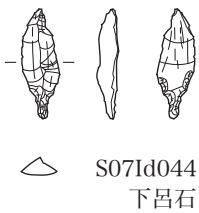
S07Id041
下呂石

S07Id040
チャート

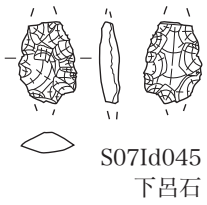
S07Id042
下呂石



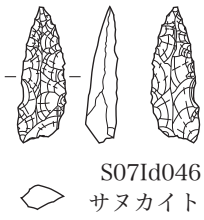
S07Id043
下呂石



S07Id044
下呂石

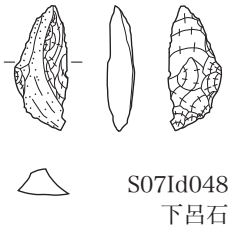


S07Id045
下呂石

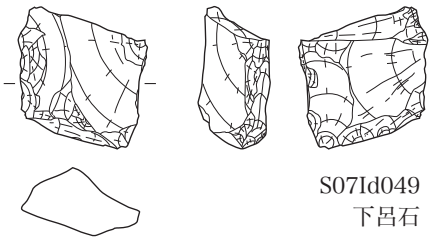


S07Id046
サヌカイト

S07Id047
チャート



S07Id048
下呂石

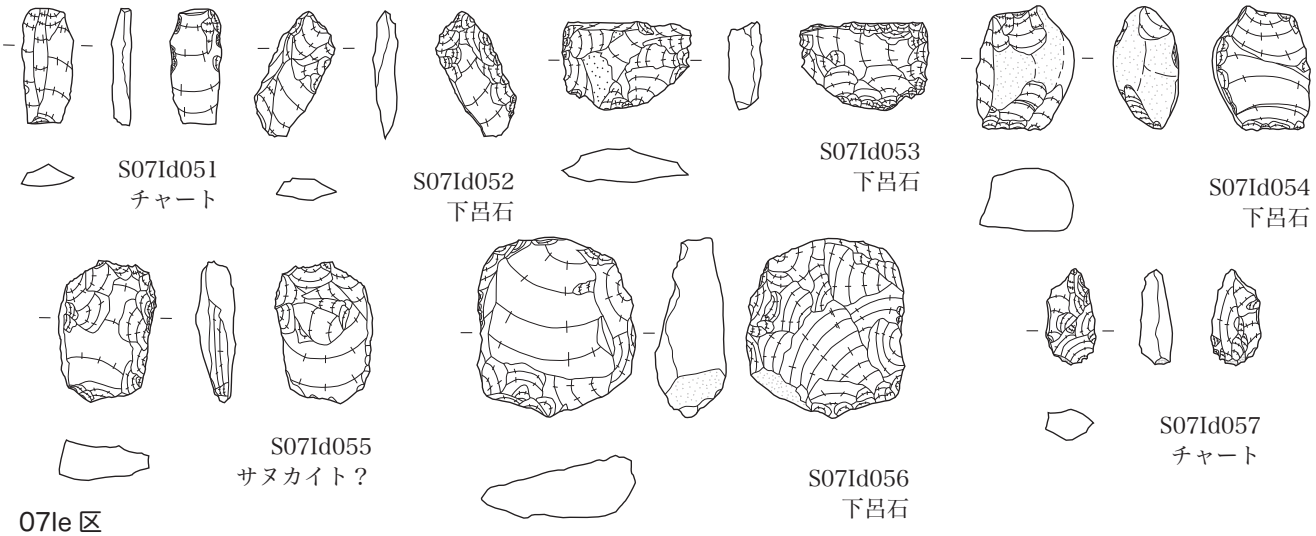


S07Id049
下呂石

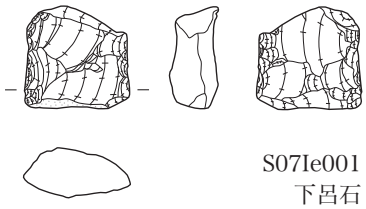
S07Id050
チャート

第 85 図　07Id 区出土石器（2）（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

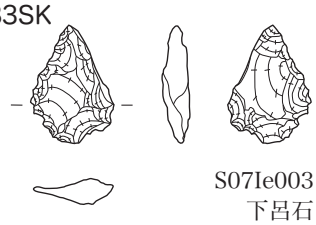
07Id 区
検出 1



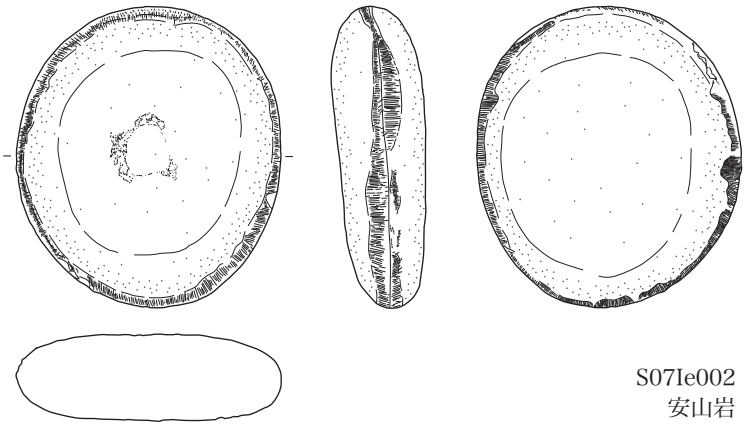
07Ie 区
072SK



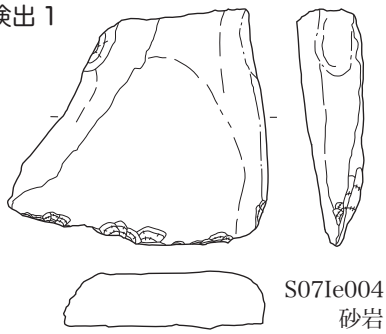
083SK



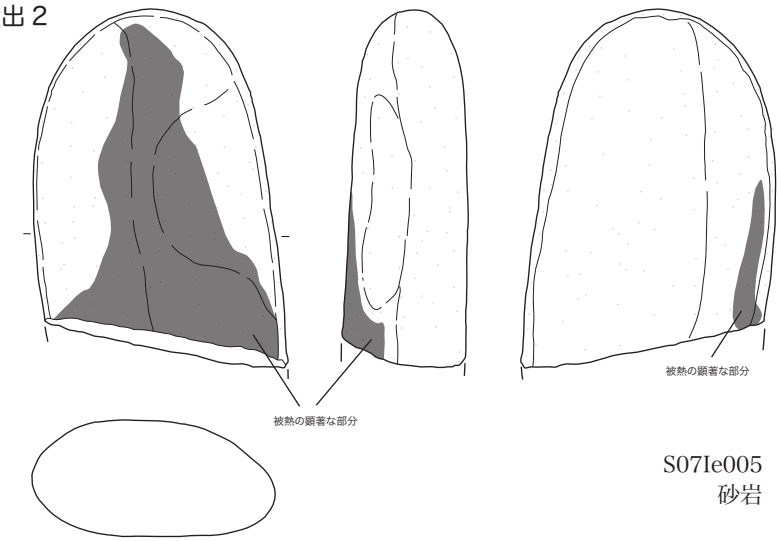
080SD



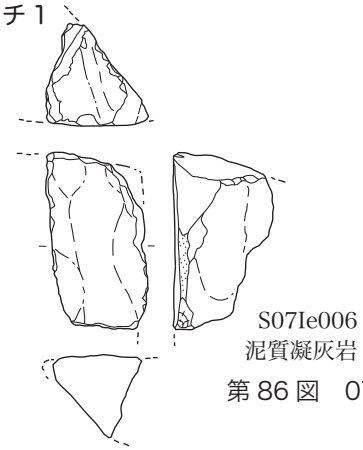
検出 1



検出 2

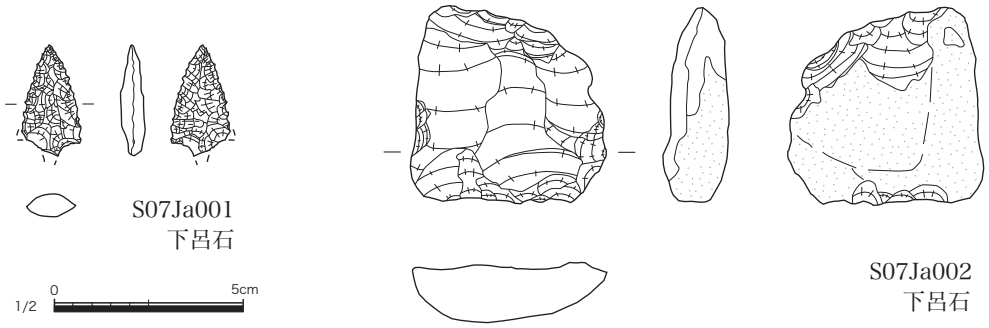


トレンチ 1

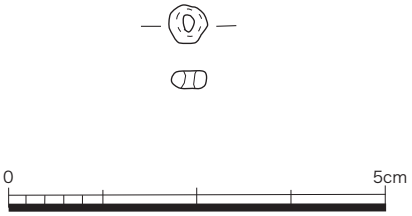


第 86 図　07Id 区・07Ie 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剥片石器は 1：2）

07Ja 区
005SK



第 87 図　07Ja 区出土石器　（磨製石器・礫石器は 1：3、剝片石器は 1：2）



第 88 図　ガラス製品（1：1）

第4章　総　括

第1節　遺構の変遷

今回の調査成果をふまえて、遺構の時期別変遷を辿りたい（第89図～第91図）。

（1）A期（弥生時代中期前葉）

比較的確実にこの時期の遺構と考えられるものは少なく、竪穴建物1棟（07Ja南区008SB）、土坑6基がある。この時期の遺構は、北側の07Ca中区・07Ia南区から07D区・07Ie区を経て、南側の07Ja南区にいたる範囲においてみられる。ただし、07D区・07Ie区と07Ja区の間には南北100m以上の名神高速道路などの未調査地があり、名神高速道路の南にある07Ja区北区･同中区には遺構が確認できていないので､07D区･07Ie区と07Ja南区の間には遺構の空白地がある可能性がある。名神高速道路の北にある07Ca中区・07Ia南区から07D区・07Ie区の範囲には、A期の弥生土器が多く出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。また07Ja南区において確認できた竪穴建物008SBはA期の遺物が伴う確実なもので、名神高速道路の南に弥生時代の遺構が展開することを示す重要な資料である。

（2）B期（弥生時代中期中葉前半）

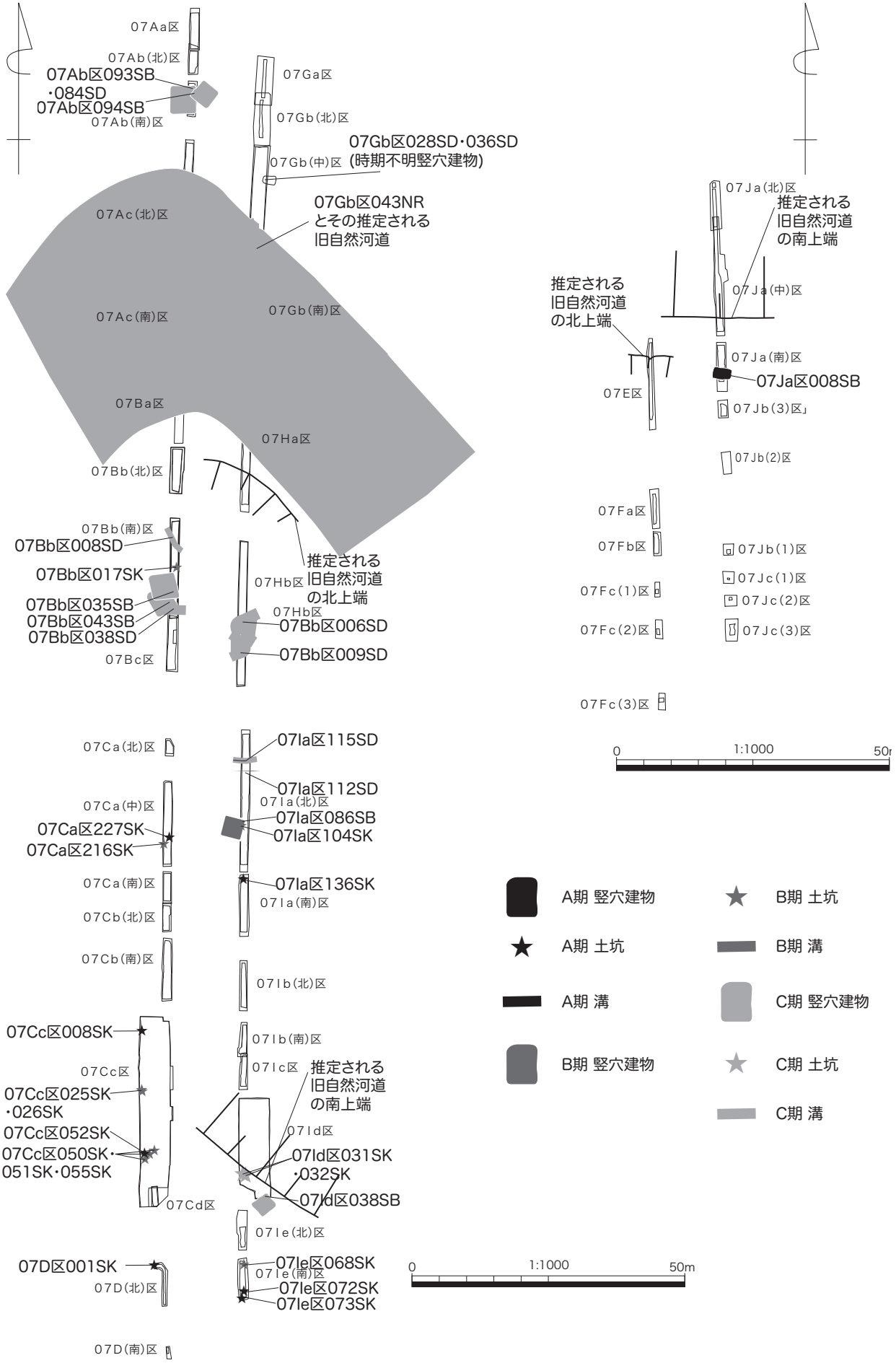
この時期の遺構も比較的少なく､竪穴建物1棟（07Ia北区086SB）、土坑8基、溝1条（07Ia北区112SD）がある。この時期の遺構は、北側の07Bb南区・07Ia北区から南側の07Cc区・07Ie北区にいたる範囲においてみられる。名神高速道路の南にある地点では遺構が確認できていない。名神高速道路の北にある07Bb南区・07Ia北区から07D区・07Ie区の範囲には、B期の弥生土器が多く出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。この時期の遺構は竪穴建物07Ia北区086SBと土坑07Cc区051SK（050SKと055SKは本来同一遺構の可能性がある）を中心に遺構がやや集中する地点がみられる。07Ia北区112SDは幅2.7m以上あり、C期の溝とほぼ重複して流れることから、B期からC期にかけての区画溝になる可能性がある。

（3）C期（弥生時代中期中葉後半）

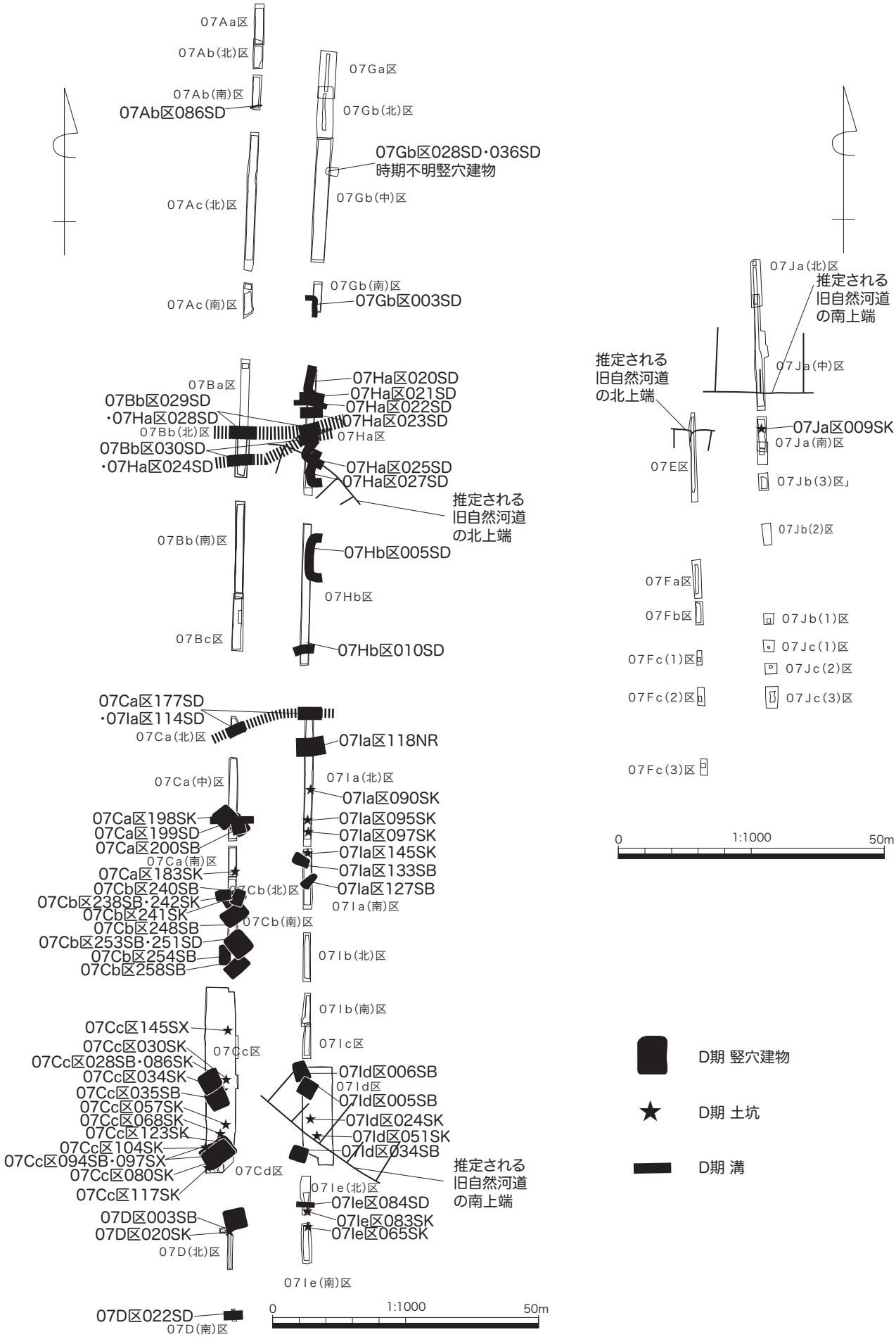
この時期の遺構も比較的少なく､竪穴建物5棟(07Ab南区093SB・同094SB・07Bb南区035SB・同区043SB・07Id区038SB)、土坑2基、溝5条がある。この時期の遺構は、北側の07Ab南区から07Bb南区と07Hb区を経て、南の07Id区にいたる範囲においてみられる。名神高速道路の南にある地点では遺構が確認できていない。名神高速道路の北にある07Bb南区・07Ia北区から07D区・07Ie区の範囲には、C期の弥生土器が出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。この時期の特徴は3つあり、一つ目は竪穴建物07Ab南区093SB・094SBにみられる遺跡の北側に遺構が大きく展開することである。これは竪穴建物07Id区038SBがあるB期にも遺構が存在した07Cc区付近とは別に居住域が大きく二つに分かれることを示している。もう一つの特徴は、07Ia北区115SDがB期から引き続き区画溝が形成されており、その北側に溝07Bb南区008SD・07Hb区006SD・07Hb区009SDのように軸線が類似する鍵手状にめぐる溝が確認できることで、これらの溝は方形周溝墓の可能性が推定でき、先に述べた一つ目の居住域が大きく二カ所に分かれることと関連するものと考えられる。三つ目の特徴は、明確な遺構には確認できていないが、07Ha区の北側にてみつかった櫛条痕による施文・調整がみられる内傾口縁高杯と双口壺が出土した砂層堆積がある。この砂層堆積は出土した弥生土器からC期の自然河道による堆積と考えられ、続くD期における07Ha区の遺構展開とあわせて考えると、C期に07Ab南区・07Gb北区と07Bb南区・07Hb区の間にある自然河道が埋没した可能性が高い。

（4）D期（弥生時代中期後葉）

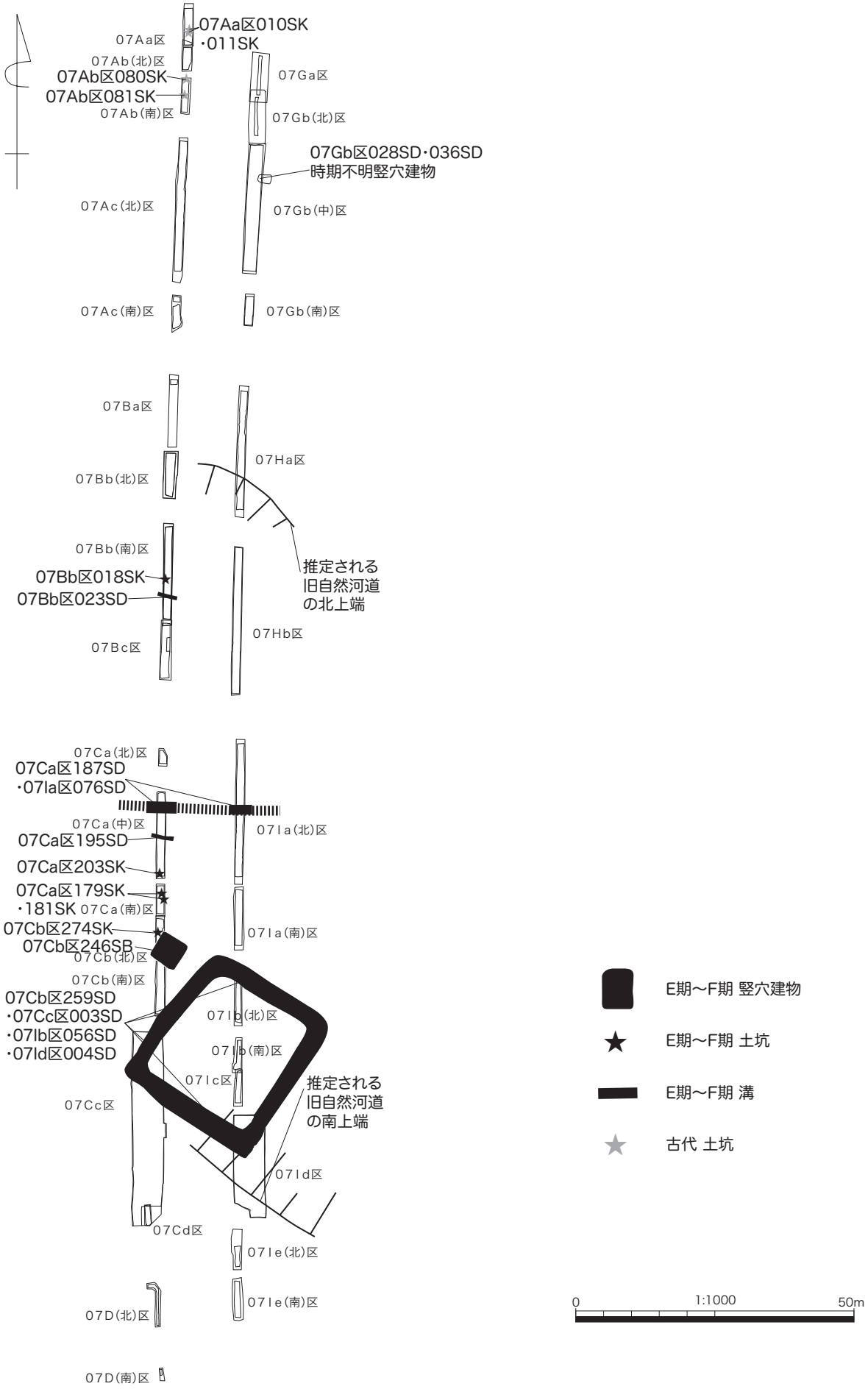
この時期の遺構は非常に多く、竪穴建物20棟、土坑19基、溝15条、自然流路1条がある。この時期の遺構は､北側の07Gb南区から07Cc区･07Id区を経て、南側の07Ja南区にいたる範囲においてみられる。名神高速道路の北にある07Ca中区・07Ia北区から07D区・07Ie区までの範囲には、他にもD期の弥生土器が出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。この時期の特徴は3つあり、一つ



第 89 図　A 期～ C 期の遺構（1：1,000）



第 90 図　D 期の遺構（1:1,000）



第 91 図　E 期・F 期と古代の遺構（1：1,000）

目は竪穴建物が確認できた地点は 07Ca 中区・07Ia 南区から 07D 北区までの南北約 80m の範囲に集中し、土坑もやや南北に広がるが、ほぼ同じ範囲にみられることである。遺跡の北側の居住域は不明瞭になる。二つ目は、この竪穴建物の分布に関連してか、竪穴建物の分布域の北と南に溝が多数みつかる範囲がひろがることである。溝は北側の 07Gb 南区から南側の 07Ca 北区・07Ia 北区北側までに鍵手状や「コ」の字状にめぐる溝や東から西にはしる溝があり、方形周溝墓の周溝や区画・用水などの溝が多数存在した可能性が高い。C 期の遺構の特徴で述べたように、07Bb 南区・07Hb 区に展開した方形周溝墓の周溝と考えられる鍵手状にめぐる溝から D 期に連続して形成されたものと考えることができる。三つ目は名神高速道路の南にある 07Ja 南区において土坑 07Ja 区 009SK があり、遺跡が名神高速道路付近の未調査区域の空白部分をはさみ、遺跡の南側地点に展開することである。

（5）E 期・F 期（弥生時代後期～古墳時代前期前半）

この時期の遺構は少なく、竪穴建物 1 棟（07Cb 区 246SB）、土坑 3 基、溝 3 条がある。この時期の遺構は、北側の 07Ca 中区・07Ia 北区から南側の 07Cc 区・07Id 区にいたる範囲においてみられ、D 期に比べて遺構の広がる範囲が小さくなる。名神高速道路の南にある地点では遺構が確認できていない。この時期の遺構は竪穴建物 07Cb 区 246SB とその周辺にみられる土坑 07Ca 中区 203SK・07Ca 南区 179SK・同区 181SK に居住域に関連する遺構群と、その北側に 07Ca 中区 187SD・07Ia 北区 076SD の東西方向の区画溝が 1 条、竪穴建物 07Cb 区 246SB の南にある一辺 22m 程のマウンドをもつ方形周溝墓（07Cb 南区 259SD・07Cc 区 003SD・07Ib 北区 056SD・07Id 区 004SD の周溝に囲まれた範囲）1 基のコンパクトな構成である。以後、古墳時代の遺構は確認できない。

（6）古代（6 世紀～ 8 世紀）

この時期の遺構は、土坑 4 基が遺跡の北端部分で確認されているのみである。07Aa 北区 010SK・同区 011SK・07Ab 南区 080SK・同区 081SK は土壙墓の可能性があり、墓域が展開したと推定したい。

（7）中世～近世

中世の山茶碗・小皿や近世の土師器・陶磁器等が出土した溝や土坑がある。この時期の遺構は、遺跡の北端から南端までひろがり、所属時期を確定できるものが少ない。溝ではほぼ東西方向に流れるものとやや東に振れる南北方向の溝ややや北に振れる東西方向の溝があり、全体ではやや北や東に振れる溝の方が近世以前にさかのぼる時期のものと考えられ、ほぼ東西方向に流れる溝などは近代以後のものを含む。土坑も中世の陶器・土師器が出土するものもあるが、近世以後に掘削されたものが多いように思われる。

第 2 節　弥生土器・土師器・陶磁器の出土分布

次に今回出土した弥生土器・土師器の出土分布から、遺跡の営みの展開を検討したい。

（1）方法

出土遺物のカウントは発掘調査において遺物を取り上げた箇所（同一遺構・同一グリッドの包含層において複数の取り上げがある場合がある）毎に、弥生土器・土師器の時期のわかる破片数を時期ごとにカウントしたもので、11 点以上（図中では★マーク）、6 点～ 10 点（図中では◎マーク）、3 点～ 5 点（図中では●マーク）、1 点～ 2 点（図中では▲マーク）で、それぞれ 1 つのマークを調査区ごとに計上したものである（第 2 表）。

（2）各時期の出土傾向

A 期の出土遺物は出土箇所が比較的多く、県道西側の 07Ca 区～ 07Cc 区と県道東側の 0707Ia 区・07Ib 区・07Id 区・07Ie 区・07Ja 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Aa 区・07Ab 区・07Bb 区・07Cd 区・07D 区・07Fb 区と県道東側の 07Ha 区・07Ic 区・07Jb 区・07Jc 区においても少量の出土箇所がみられる。B 期の出土遺物も出土箇所が比較的多く、県道西側の 07Bb 区・07Ca 区～ 07Cc 区と県道東側の 07Hb 区・07Ia 区・07Id 区・07Ie 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Aa 区～ 07Ac 区・07Cd 区・07D 区と県道東側の 07Ha 区・07Ib 区においても少量の出土箇所がみられる。C 期の出土遺物も出土箇所が比較的多く、県道西側の 07Ab 区・07Bb 区・07Ca 区～ 07Cc 区と県道東側の 07Ha 区・07Hb 区・

第2表　弥生土器・土師器・陶磁器の出土傾向（上段：県道西側地点 下段：県道東側地点）

調査区・時期	A 期	B 期	C 期	D 期	E 期	F 期	古代	中世	近世以後
07Aa 区	▲1	▲1	▲1	◎1, ▲5		▲1		▲4	
07Ab 区	▲1	▲5	★5, ◎2, ●4, ▲21	▲2	▲2		◎2, ▲3	▲3	▲3
07Ac 区		▲1	▲1	▲4			▲3	★1, ◎3, ●1, ▲3	★1, ◎2, ●2, ▲2
07Ba 区				▲1					
07Bb 区	▲3	◎1, ●4, ▲11	●5, ▲15	●1, ▲14	▲2	▲1		●1, ▲4	◎1, ●1, ▲4
07Bc 区			▲2	▲2					▲2
07Ca 区	◎2, ●11, ▲21	●5, ▲27	◎2, ●4, ▲12	◎4, ●18, ▲54	●2, ▲17	●1, ▲2		▲3	▲2
07Cb 区	●1, ▲28	●3, ▲38	◎1, ●5, ▲31	★3, ◎22, ●38, ▲66	◎1, ●2, ▲8	▲1		◎1, ●1, ▲3	▲4
07Cc 区	◎4, ●21, ▲105	◎1, ●16, ▲94	●2, ▲46	★1, ◎23, ●55, ▲189	◎1, ●7, ▲29	▲6	▲3	●1, ▲7	◎1, ●6, ▲10
07Cd 区	▲1	▲6	▲1	◎1, ●7, ▲15			▲3		
07D 区	▲3	●1, ▲1	▲2	★2, ●2, ▲3					
07E 区									
07Fa 区								▲1	
07Fb 区	▲1		▲1	▲2					
07Fc 区									

＊A 期：弥生時代中期前葉、B 期：弥生時代中期中葉前半、C 期：弥生時代中期中葉後半、D 期：弥生時代中期後葉、E 期：弥生時代後期、
F 期：古墳時代前期前半、古代：須恵器・灰釉陶器・古代土師器、中世：山茶碗・小皿・中世土師器、近世以後：施釉陶器・磁器、近世土師器など
＊＊1 カ所からの時期別の土器・陶器・磁器などの出土点数を★：11 点以上、◎：6 点～10 点、●：3 点～5 点、▲：1 点～2 点のマークにより表示した。

調査区・時期	A 期	B 期	C 期	D 期	E 期	F 期	古代	中世	近世以後
07Ga 区									
07Gb 区			▲1	▲1	▲2	▲1	●3, ▲8	★2, ●4, ▲15	★1, ◎3, ●2, ▲8
07Ha 区	▲3	▲3	●6, ▲5	◎3, ●3, ▲7				▲4	▲5
07Hb 区		◎1, ▲4	★2, ◎1, ●1, ▲4	◎1, ●3, ▲2			▲1	▲3	●2, ▲2
07Ia 区	★2, ◎2, ●4, ▲21	★1, ◎1, ●3, ▲13	●6, ▲20	★7, ◎1, ●7, ▲75	●1, ▲3	▲1	▲2		★1, ◎1, ▲3
07Ib 区	◎1, ▲3	▲2	▲1	●1, ▲2				●1, ▲2	★1, ●1, ▲1
07Ic 区	▲1				▲1				
07Id 区	◎2, ●8, ▲17	●5, ▲26	◎2, ●7, ▲41	★8, ◎12, ●9, ▲40	★5, ◎11, ●6, ▲14	●1, ▲13	●5, ▲15	●7, ▲15	★6, ◎7, ●3, ▲7
07Ie 区	★2, ◎1, ●1, ▲7	◎1, ●2, ▲6	●1, ▲5	★3, ▲4			▲3		▲2
07Ja 区	★2, ●1, ▲3			▲1					
07Jb 区	▲2								
07Jc 区	▲1								

＊A 期：弥生時代中期前葉、B 期：弥生時代中期中葉前半、C 期：弥生時代中期中葉後半、D 期：弥生時代中期後葉、E 期：弥生時代後期、
F 期：古墳時代前期前半、古代：須恵器・灰釉陶器・古代土師器、中世：山茶碗・小皿・中世土師器、近世以後：施釉陶器・磁器、近世土師器など
＊＊1 カ所からの時期別の土器・陶器・磁器などの出土点数を★：11 点以上、◎：6 点～10 点、●：3 点～5 点、▲：1 点～2 点のマークにより表示した。

07Ia 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Aa 区・07Ac 区・07Bc 区・07Cd 区・07D 区・07Fb 区と県道東側の 07Gb 区・07Ib 区・07Ie 区においても少量の出土箇所がみられる。D 期の出土遺物は出土箇所・出土量ともに最も多い。県道西側の 07Aa 区・07Bb 区・07Ca 区～ 07Cd 区・07D 区と県道東側の 07Ha 区・07Hb 区・07Ia 区・07Id 区・07Ie 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Ab 区・07Ac 区・07Bc 区・07Fb 区と県道東側の 07Gb 区・07Ib 区・07Ja 区においても少量の出土箇所がみられる。E 期の出土遺物は出土箇所・出土量が少ない。県道西側の 07Ca 区～ 07Cc 区と県道東側の 07Id 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Ab 区・07Bb 区と県道東側の 07Gb 区・07Ia 区・07Ic 区においても少量の出土箇所がみられる。F 期の出土遺物は出土箇所・出土量が少なく、県道東側の 07Id 区において土師器の出土頻度が高いが、その他の調査区では県道西側の 07Aa 区・07Bb 区・07Ca 区～ 07DCc 区と県道東側の 07Gb 区・07Ia 区において少量の出土箇所がみられるのみである。古代の出土遺物は出土箇所・出土量が少なく、県道東側の 07Gb 区・07Id 区において須恵器と土師器の出土頻度が高く、その他では県道西側の 07Ab 区・07Ac 区・07Cc 区・07Cd 区と県道東側の 07Hb 区・07Ia 区・07Ie 区においても少量の出土箇所がみられる。中世の遺物は出土箇所・出土量がやや少なく、県道西側の 07Ac 区・07Cb 区・07Cc 区と県道東側の 07Gb 区・07Id 区において山茶碗・小皿・土師器の出土頻度が高く、県道西側の 07Aa 区・07Ab 区・07Bb 区・07Ca 区・07Fa 区と県道東側の 07Ha 区・07Hb 区・07Ib 区においても少量の出土箇所がみられる。近世以後の遺物では出土箇所・出土量が比較的多く、県道西側の 07Ac 区・07Bb 区・07Cc 区と県道東側の 07Gb 区・07Ia 区・07Id 区において陶磁器・土師器の出土頻度が高く、県道西側の 07Ab 区・07Bc 区・07Ca 区・07Cb 区と県道東側の 07Ha 区・07Hb 区・07Ib 区・07Ie 区においても少量の出土がみられる。

（3）小結

以上の出土遺物の出土頻度の分析から、全体に調査区が狭く、近年の開発により遺構の残存状態が悪い 07Ba 区・07Bc 区・07Fc 区・07Gb 区・07Jb 区・07Jc 区を除くと、A 期には県道西側の 07Ca 区～ 07Cc 区と県道東側の 07Ia 区～ 07Ja 区を中心に出土頻度が高いが、B 期には出土頻度の高い範囲が県道西側の 07Bb 区から 07Cc 区までと県道東側の 07Hb 区から 07Ie 区までの範囲になり、A 期に比べて北側に広がる。C 期には出土頻度の高い範囲が県道西側の 07Ab 区から 07Cc 区までと県道東側の 07Ha 区から 07Ie 区までの範囲になり、B 期に比べてさらに北側に広がる。D 期には出土頻度の高い範囲が県道西側の 07Aa 区から 07D 区までと県道東側の 07Ha 区から 07Ie 区までの、出土頻度の高い範囲が C 期に比べてさらに北側に広がる傾向がみられる。続く E 期には出土頻度の高い範囲が県道西側の 07Ca 区～ 07Cc 区と県道東側の 07Id 区のみの範囲になり、出土頻度の高い範囲が小さくなる。F 期では出土頻度の高い範囲が 07Id 区のみとなり、さらに広がりがなくなる。古代から近世以後にかけては県道西側の 07Ab 区・07Ac 区・07Cb 区・07Cc 区と県道東側の 07Gb 区・07Id 区を中心に出土頻度の高い範囲が広がっていく傾向が見られる。

よって、弥生時代の A 期から D 期にかけては全体に 07Ca 区～ 07Cc 区・07Ia 区～ 07Id 区を中心に北に遺物の出土頻度の高い範囲が広がり、E 期から F 期にかけて急速にその範囲が小さくなる。また 07Ac 区や 07Ib 区、07Ic 区のように、遺物の出土頻度の高い範囲の中にありながら、弥生時代を通じて出土頻度が低い地点がある。これらの出土傾向はおおよそ、先に分析した遺構変遷と同様の傾向を示すようであるが、遺物の出土傾向では遺構の少ない A 期から C 期においても遺物の出土頻度が高い地点では、人々の営みが盛んに行われたことを示すものであり、D 期における遺構の広がりと近い状況がうかがえる。また遺構がなく出土遺物の少ない 07Aa 区～ 07Ac 区・07Ha 区などの遺跡の北側においても、A 期の比較的早い時期から人々の営みが少しは存在した可能性が高いことを示している。この点では E 期・F 期の遺構・出土遺物の少ない時期においても、同じことを示すように思われる。一方、古墳時代の遺構・遺物のない時期を経て古代以後は、再び人為的営みが広がっていく傾向がうかがわれる。

第３節　石器の出土分布

次に今回出土した石器の出土分布から、遺跡の営みの展開を検討したい。石器の出土分布を調査区ごとに計上したものが第３表である。

（１）各石器の出土傾向

磨製石器には磨製石斧、管玉、磨製石剣、石包丁がある。磨製石斧は、両刃石斧と柱状片刃石斧、扁平片刃石斧を合計した点数であるが、県道西側の 07Cc 区の 20 点と 07Id 区の 7 点が多く、他に 07Bb 区に 1 点、07Cb 区に 3 点、07Cd 区に 1 点、07D 区に 1 点出土しており、07Cc 区と 07Id 区に出土の中心がみられる。その他には磨製石剣は 07Cc 区にて 2 点、石包丁は 07Cb 区に 1 点、管玉は 07Cc 区において 1 点出土している。

礫石器には凹み石・敲石、磨石、砥石がある。凹み石・敲石は 07Cc 区に 12 点と多く、07Bb 区・07Ca 区の 5 点、07Ia 区の 5 点、07Cb 区の 3 点と 07Cc 区の北側の調査区において比較的多く出土しており、その他に 07Ab 区・07Id 区・07Ie 区に 1 点ずつ出土しており、遺跡の北側と多数出土した 07Cc 区の南東側にも少量の出土がみられる。磨石は 07Cc 区に 9 点と多く、07Ia 区の 4 点と 07Ca 区の 3 点、07Cb 区の 3 点が比較的多く、その他に 07Ab 区の 1 点、07Bb 区の 2 点、07Cd 区の 1 点、07Gb 区の 1 点、07Id 区の 1 点と 07Ca 区～ 07Cc 区と 07Ia 区に分布の中心があり、遺跡の北側にも少量の出土がみられる。磨石は凹み石・敲石より出土点数は少ないが類似する出土傾向をもつ。砥石は 07Ca 区が 4 点、07Id 区が 3 点とやや多く、07Cc 区が 2 点、07Bb 区・07Ca 区・07Cb 区・07Ia 区・07Ie 区が 1 点ずつと各調査区の出土点数は 1 点～ 4 点であまり集中して出土する地点はなく、他の礫石器の出土地点とも重なるが遺跡の北側において出土例がない。他には明確な粗製剥片石器が 07Cc 区において 1 点出土している。

打製石器には打製石鏃、打製石錐、押圧剥離加工品、両極石器、両極剥片がある。この中で押圧剥離加工品と両極石器、両極剥片は両極打撃による打製石器製作の痕跡である。打製石鏃（未製品を合わせて）は 07Cc 区に 22 点と多く、07Id 区の 11 点、07Cb 区の 7 点、07Ia 区の 6 点と 07Cc 区付近の地点が比較的多く、その他に遺跡の北側の 07Gb 区に 1 点ずつ、07Ca 区に 3 点、07Hb 区・07Ib 区・07Ic 区・07Ja 区に 1 点ずつ出土しており、07Cc 区と 07Id 区に出土分布の中心があるが、遺跡の比較的広い範囲から出土している。打製石錐は 07Cb 区･07Cc 区が 3 点ずつ､07Bb 区が 2 点、07Id 区が 1 点と 07Cb 区・07Cc 区を中心に比較的狭い範囲から少量出土している。押圧剥離加工品は 07Cc 区に 20 点と 07Id 区に 13 点と多く、その周辺にある 07Ca 区に 7 点、07Cb 区に 4 点、07Ib 区に 3 点と比較的多く、その他に遺跡の北側の 07Ab 区に 2 点出土している。両極石器は 07Cc 区に 19 点と 07Id 区に 11 点と多く、その周辺にある 07Ca 区に 3 点、07Cb 区に 5 点、07Ia 区に 6 点、07Ib 区に 3 点と比較的多く、その他に遺跡の北側にある 07Gb 区に 1 点、07Ie 区に 1 点、遺跡の南側にある 07Ja 区に 1 点出土している。両極剥片は 07Cc 区に 39 点と 07Id 区に 17 点と多く、その他に 07Bb 区に 3 点、07Ca 区に 5 点、07Cb 区に 1 点、07Cd 区に 2 点、07Hb 区に 2 点、07Ia 区に 1 点、07Ic 区に 2 点と少量ずつ出土している。

（２）小結

以上の石器の出土分布の分析から、磨製石器･礫石器･打製石器・打製石器の未製品・加工途上品は、基本的に調査面積でも多い 07Cc 区・07Id 区に多く、07Bb 区・07Ca 区・07Cb 区・07Ia 区に比較的多く、その周囲の調査区に少量出土する傾向があり、遺跡の北側にある 07Aa 区・07Ab 区・07Gb 区などや遺跡の南側にある 07Ja 南区においても少量出土している。しかし、今回の発掘調査地点における石器の出土状況から、07Cc 区における石器出土点数が明らかに多く、生活・木材加工・石器製作など活動の中心は、07Cc 区を中心に行われたものと考えられる。ただし、磨製石器・礫石器・打製石器は遺跡内における疎密はあるが遺跡全体から出土していることから、これらの活動は遺跡の中心部だけではなく、あらゆる地点において行われていたことを示している。

第３表　石器の出土傾向（上段：県道西側地点　下段：県道東側地点）

調査区・器種	磨製石斧	凹み石 敲石	磨石	砥石	打製石鏃	打製石錐	押圧剥離 加工品	両極石器	両極剥片	その他
07Aa 区	1									
07Ab 区		1	1				2			
07Ac 区										
07Ba 区										
07Bb 区	1	5	2	1		2			3	
07Bc 区										
07Ca 区		5	3	1	3		7	3	5	
07Cb 区	3	3	3	4	7	3	4	5		石包丁 1
07Cc 区	20	12	9	2	19(3)	3	20	19	39	磨製石剣 2・管玉 1・石包丁？ 1
07Cd 区	1		1						2	
07D 区	1									
07E 区										
07Fa 区										
07Fb 区										
07Fc 区										

＊磨製石斧は、両刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧の合計した点数

＊＊凹み石・敲石は、敲石のみのものも合計した点数

＊＊＊打製石鏃にある（）内の点数は、打製石鏃未製品の点数

調査区・器種	磨製石斧	凹み石・敲石	磨石	砥石	打製石鏃	打製石錐	押圧剥離加工品	両極石器	両極剥片	その他
07Ga 区										
07Gb 区			1		1			1		
07Ha 区							1			
07Hb 区					1		1		2	
07Ia 区		5	4	1	6			6	1	
07Ib 区					(1)		3	3		
07Ic 区					1				2	
07Id 区	7	1	1	3	9(2)	1	13	11	17	粗製剥片石器 1
07Ie 区		1		1				2		
07Ja 区					1			1		
07Jb 区										
07Jc 区										

＊磨製石斧は、両刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧の合計した点数

＊＊凹み石・敲石は、敲石のみのものも合計した点数

＊＊＊打製石鏃にある（）内点数は、打製石鏃未製品の点数

第４節　遺構・出土遺物の分布と地形環境

先に分析した遺構分布から弥生時代の遺構変遷についてまとめた。これらの遺構分布の元となる古地形の分析を行い、先に分析した弥生時代の各時期における遺構分布との対応関係を考えたい。

（１）弥生時代以前の旧河道の痕跡

本節では、発掘調査において遺跡基盤層の堆積状況を南北に確認できた県道東側の堆積構造から上方細粒化の傾向を示す堆積を自然による旧河道（旧流路）の1単位として考え、その単位を抽出する。

まず、確実に旧河道として確認できたのは、07Gb中区043NRで南東から流れてきた流路の淵付近にあたり、県道付近にて流れを南西方向に変えて流れる自然河道が復元できる。この07Gb中区043NRの南側の上端は確認できていないが、その南にある07Ha区北側においてC期に堆積したと考えられる中間色細粒砂層を同じ流路の堆積と考えることができる。このように考えると07Gb中区043NRの南上端は07Ha区中程の028SDの付近となる。

次にその他の旧河道と考えられる堆積は、07Gb中区043NRの堆積とほぼ同時に堆積したか、その前に堆積したと考えられる堆積が07Ha区南側にある027SD付近から南に下る中間色細粒砂と明色極細粒砂の堆積で、この堆積は07Ia区にて標高9.50mの中間色粘土質シルトの上に堆積し、南側に下がる側方堆積がみられ、07Id区南側の028SK～030SK付近にて立ち上がる堆積である。その南側の遺跡基盤層の堆積は

明色極細粒砂と中間色極細粒砂の北に下る側方堆積が南に続く。名神高速道路の南では、07Ja 南区の中間色粘土シルトの高まりから北に下る中間色極細粒砂がみられ、その側方堆積の間に中間色細粒砂が一部入る状況である。しかし名神高速道路の南で県道西側の 07E 区では、07E 区北端で南に下る中間色細粒砂の堆積である 07E 区 006NR を確認できており、近接して別の流路痕が確認できるという複雑な堆積構造が確認できる。

（2）復元した地形環境と弥生時代の遺構の関係

（第 89 図～第 91 図）

以上の分析から今回の発掘調査地点では、弥生時代以前の旧河道が大きく 3 条確認できる。一つ目の流路は 07Gb 中区 043NR と考えられる南北 40m 前後の自然河道（南側上端は 07Ha 区中程あたり）、二つ目の流路は北側上端が 07Hb 区南側で南側上端が 07Id 区南端にある南北 125m 前後の自然河道、三つ目の流路は 07Ja 南区より北に下る自然河道で、この流路による堆積は 07Id 区付近の基盤砂層を形成した可能性がある（第 89 図～第 91 図に示した）。

この内、町屋遺跡の遺構が営まれた弥生時代中期前半に同時存在した可能性が高いのは 07Gb 中区 043NR で、07Ha 区北側までが流路であった可能性が高く、その流れは県道西側の調査区において遺構が不明瞭な 07Ac 区[註(1)] から 07Ba 区にかけて南西方向に流れていた可能性が高く、C 期までの遺跡南側の遺構が 07Bb 南区と 07Hb 区南側の辺りまでにしか分布しないことと、遺跡北側の C 期の遺構が 07Ab 区に分布することと関係するようである。また D 期に方形周溝墓の周溝と思われる溝などが確認できる 07Gb 南区・07Ha 区・07Hb 区は C 期の段階では、十分に埋没しておらず、D 期になって遺構形成が可能となったのかもしれない。

次に A 期から B 期にかけての町屋遺跡の最も古い段階の遺構は、07Gb 中区 043NR 以前に流れていた 2 条の旧河道により堆積された微高地上に形成されており、遺跡の変遷過程と整合する。また遺跡の北側にある 07Aa 区・07Ab 区・07Gb 区において A 期～ C 期の弥生土器や打製石器・打製石器の未製品などが少量出土する点は、遺跡北側において、木曽川扇状地の基盤礫層が比較的高くある地点であり、弥生時代の早い時期から遺構形成が可能であったためと思われる。

第 5 節　町屋遺跡の全体像

これまでの報告と分析をふまえて、発掘調査により検出できた遺構と確認できた出土遺物の評価を行い、町屋遺跡の全体像を少し考えたい。

（1）発掘調査で検出できた遺構の評価

先の分析により、各時代の遺構変遷を示し、出土遺物の出土傾向と発掘調査で確認できた遺構との関係を述べ、弥生時代の遺構については古地形の変遷との対応関係を明らかにした。これらから、遺跡における遺跡北側の 07Aa 区～ 07Ab 区・07Ga 区～ 07Gb 中区においては確実な遺構が確認できたのは C 期であるけれども、A 期・B 期にさかのぼって、少し人為的営みが存在したことを指摘した。また 07Gb 中区 043NR の変遷と関係する 07Ac 区・07Ba 区・07Ha 区・07Hb 区では、自然河道の埋没以後に方形周溝墓の周溝をはじめとする溝群が形成されたことを明らかにし、近代以後の開発による削平を除けば、大体の遺構の様相を推定できたものと思われる。また弥生時代の A 期～ E 期に居住域が展開した遺跡中央付近の 07Bb 区・07Bc 区・07Ca 区 ～ 07Cd 区・07D 区・07Ia 区 ～ 07Ie 区では、A 期～ C 期の遺構は少なく D 期の遺構が多数確認できているが、弥生土器の出土分布傾向からは A 期～ C 期の弥生土器が出土する箇所（遺構など）も多く、より多くの遺構が存在した可能性が高いことを指摘した。遺跡南側の 07E 区・07Fa 区～ 07Fc 区・07Ja 区～ 07Jc 区においては、近世以後の開発による削平が激しく、遺構の残存状況が比較的良かった 07Ja 南区において弥生時代の遺構が確認できるのみであった。

次に町屋遺跡の中心の時期である弥生時代中期の状況について考えるために、弥生時代中期（A 期～ D 期）の竪穴建物の分布状況について検討する。

弥生時代中期に属する竪穴建物の内訳は、(1) 07Ab 区で 2 棟、(2) 07Bb 南区で 2 棟、(3) 07Ca 中区・同南区で 6 棟、(4) 07Cb 北区・同南区で 7 棟、(5) 07Cc 区中央付近で 2 棟、(6) 07Cc 区南側・07Cd 区で 2 棟、(7) 07D 北区で 1 棟、(8) 07Ia 北区で 1 棟、(9) 07Ia 南区で 2 棟、(10) 07Id 区北端で 2 棟、(11) Id

区南端で２棟、(12) 07Ja 南区で１棟である（第 89 図～第 91 図)。

これらは、調査区の制約から遺構のごく一部しか検出できていない。このような状況で、今次発掘調査において竪穴建物跡の指標としたのは、方形で平らな底面があることと壁溝が伴うことであるが、例えば壁溝や柱穴は不詳ながら平らな底面のある方形遺構について、竪穴建物の可能性を指摘した遺構もある。そしてそれらのうちで方位が揃いかつ一辺が４～ 5m 前後の規模が想定されるものを組み合わせて、竪穴建物跡とみなしている。時にはそれが隣接調査区どうしで見出される場合や、逆に隣接調査区では削平されて続きの部分が残存していなかった場合もある。

今次発掘調査において、良好な検出状況の竪穴建物群は（5）のみである。(5) では２棟が一部重複しつつ検出されているが、これに似た状況が（1)・(2)・(6) ～（12）で看取される。このような検出状況の中では（3)・(4) の６～７棟という検出数が多い印象がある。その反対に（3)・(4) に近接する 07Cc 区北半部や 07Ib 北区・07Ib 南区北側において、E 期（弥生時代後期）の大型方形周溝墓造営による削平が影響しているとはいえ、竪穴建物の「無検出区域」は極端な差に感じられる。しかし 07Ca 区～ 07Cd 区・07Ia 区～ 07Ie 区の地点は先の古地形の推定では大きな凹地とは考えられないことから、(3)・(4) に該当する 07Ca 中区～ 07Cb 南区では後世の削平・撹乱が少なく、比較的上位（標高 10.3 ～ 10.5m）で遺構検出が可能であったのに対し、07Cc 区北半部での遺構検出面が標高 10.2m とやや低くなったことが大きく関係しているものと考えたい。したがって遺構の残存状況さえ良ければ、(5) 近辺においても、より多数の竪穴建物が検出されたと考えられる。また検出された弥生時代中期の竪穴建物の内、A 期の 07Ja 南区 008SB、B 期の 07Ia 南区 086SB の１棟、B 期～ C 期と思われる 07Bb 区 035SB・043SB、C 期の 07Id 区 038SB を除くと他は D 期の竪穴建物であり、A 期～ C 期の竪穴建物が D 期の竪穴建物の周囲、先の（1)・(2)・(8)・(11)・(12) の地点で確認できている。弥生土器の出土傾向では、D 期の竪穴建物が密集して分布する（3）～（7)・(9)～（11）の地点にも多数の A 期～ C 期の弥生土器が出土しており、土坑などの遺構は D 期の竪穴建物と重複するものと、その付近にて確認された。このことから、A 期～ C 期の竪穴建物が D 期の竪穴建物が確認された地点にも本来は重複して存在した可能性が高く、A 期～ C 期に属する竪穴建物のある程度数は D 期の竪穴建物の形成により消滅し、さらに中世以後の開発などによる削平によりほとんど消滅するに至ったものと考えられる。

さて、竪穴建物が多数検出された D 期の居住域について考えると、確認できた竪穴建物は短辺が 3m 前後で長辺でも 4m ～ 5m 前後のものがほとんどである。07Ia 南区において確認できた 07Ia 区 127SB・同区 133SB などは短辺が 2m 前後の遺跡の中では最も小型の竪穴建物である。一方で長辺が 6m 前後をはかると思われる竪穴建物は（7）の地点にある 07Cc 区 094SB･同区 097SX のみであり､調査地点の中では（7）の地点に居住域のやや中心的部分が推定できる。そして出土遺物の中で竪穴建物に重複する 07Cc 区 123SK から鳥形土器（E07Cc121）があり、磨製有樋式銅剣形石剣（S07Cc148）や管玉（S07Cc105）は 07Cc 区 094SB・同区 097SX から北東 5m 内の隣接する地点で出土していることからも、この地点の居住者が一定の文化的先導者の性格をもつものであったと想定したい。同様なことは竪穴建物が確認できていないが、07Cc 区北半部からも磨製石剣（S07Cc002）が１点出土していることからこの付近にもそのような存在があった可能性がある。

（２）出土遺物の評価

弥生土器では、全体には出土量が少なく、遺構の時期を決定するにも困難がある程であり、弥生土器のみの分析は今回行わなかったが、本章において出土傾向の分析を行った。

そのような状況ではあるが特に興味深いものとして、まず C 期に属する 07Ha 区出土の櫛条痕調整施文の内傾口縁高杯（E07Ha004）と双口壺（E07Ha005）があげられる。これらは、弥生時代中期の濃尾地域に盛行する櫛条痕調整をする深鉢と関連が深いものであり、E07Ha004 の脚部下端に布目圧痕が残る点は深鉢との関係からも貴重な成果と思われる。またこの２点の弥生土器が旧河道の埋没過程の中で、据えられたよう

に出土したことも特異な出土状況である。その他に希少な土器として先に触れた鳥形土器（E07Cc121）はD期の居住域の中心付近にあたる居住者の使用が想定され、土製品では07Cb区285SB出土のD期の小鉢（E07Cb025）や07Id区にて出土した沈線による装飾がある紡錘車（E07Id052）なども居住域の中心部分に関連する可能性がある。

一括で出土したものとして、07Cc区050SK・同区051SK・同区055SKは連続して埋没したものであり、一連の遺構とも考えられる。この土坑からはA期の弥生土器で報告した貝殻施文・調整の太頸壺や甕などが多数出土し、その中にB期の弥生土器で報告した少数の櫛施文の太頸壺・細頸壺があり、B期初頭の一括資料とも考えられるものである。今後、弥生土器の地域性の研究などにも利用できる資料と思われる。

石器についても、弥生土器などと同様に出土傾向を分析し、磨製石器・礫石器・打製石器が07Cc区を中心に、その周辺の07Ca区・07Cb区・07Ia区～07Id区に比較的多く、遺跡の北側の07Aa区・07Ab区・07Gb区や遺跡の南側の07Ja区にも少量ではあるが分布域が広がる傾向がうかがえ、これらの石器に関する営みも07Cc区を中心があるものの、遺跡のあらゆる地点において行われた可能性が高い。この中で管玉と磨製石剣は、07Cc区の南端部において出土していることから、磨製石剣の推定できる所属時期からD期の居住域の中心部に近い居住者との関係を想定できた。この磨製石剣2点は他の弥生時代の集落遺跡においても出土点数の少ないものであり、そのうちS07Cc148は有樋式銅剣を模倣したと考えられるものである。他に一宮市博物館寄託資料に同様な磨製石剣があり、町屋遺跡の代表的な遺物といえる。

今回の発掘調査では木製品は出土していないが、弥生時代中期の07Cb区248SB・同区250SK・同区253SB・同区272SK・同区322SX・07Cc区028SB・同区051SKから炭化材が1点～数点ずつ出土しており、竪穴建物の中には焼失した時のものがある可能性が高い。

また07Cc区028SB・同区031SK・同区051SK・同区086SK・07Id区006SBなどでは、遺構の層位ごとに土嚢袋により土壌を持ち帰り洗浄したものから、淡水魚を中心とした小骨が各層から1点～17点ずつ出土した。またこれと同時に07Cc区051SKと07Id区006SBからは炭化米が確認できた。これらは弥生時代中期の町屋遺跡の人々の食生活を考える上で貴重な資料になるものと思われる。

他にも土壌洗浄に伴って07Cc区051SKからはベンガラ粒が少量確認できた。弥生土器などの施文や他の営みに用いられたものと考えられる。

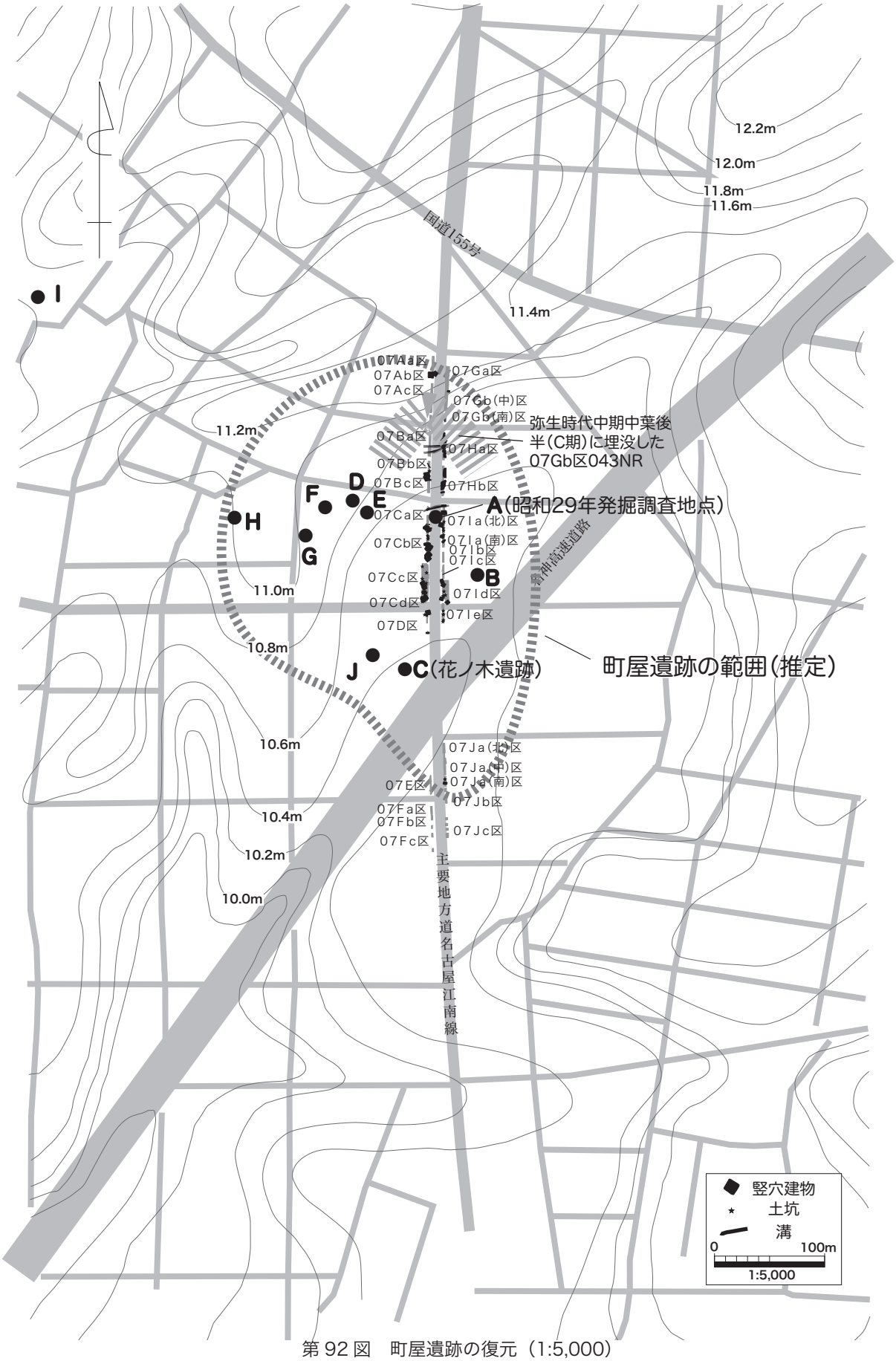
（3）町屋遺跡の全体像

最後に今回の発掘調査による成果とこれまでの町屋遺跡の考古学的調査成果を合わせて、町屋遺跡の全体像を検討したい。

そこで町屋遺跡の景観を考えるために、現在の調査地付近の表層地形解析のため等高線図を作成し、これまでの考古学的調査地点などと今回の発掘調査の情報を合成した（第92図）。等高線図の作成には、愛知県一宮市発行の「都市計画図（1/2500）」と岩倉市発行の「都市計画図（1/2500）」にプロットされた標高値を用いた[註(2)]。

現在の表層地形では、町屋遺跡周辺は木曽川扇状地の扇端（標高10mライン）に位置する地域にあたり、木曽川扇状地の傾斜に沿った北東から南西方向とは別にほぼ北から南にむかう谷地形が多くみられる。また表層地形の基盤をなす砂礫層は遺跡周辺の比較的高所において確認でき、今回の発掘調査においても、遺跡北側の07Aa区や07Ga区、07Gb北区・同中区などでは盛土（表土）直下の遺構面上面に砂礫層が露出する部分がみられた。町屋遺跡周辺の表層地形は今回の発掘調査地点の中程を北東から南西にはしる名神高速道路に沿って大きな谷地形があり、その北側微高地は先に述べた遺跡北側の07Aa区～07Ac区・07Ga区～07Gb中区がある北東から南西にのびる微高地で、この微高地が発掘調査地点の北西150mの地点にて南西にさらにのびる微高地と発掘調査地点の西150mをほぼ南北にのびる微高地に分かれて、発掘調査地点の西を南にのびる微高地は名神高速道路付近に至る。谷地形の南側の微高地は岩倉市鈴井町を南北にのびる微高地で、発掘調査地点の南端部付近に枝分かれ状にのびる部分がみられる。

次に町屋遺跡においてこれまでに調査・遺物が採集



第 92 図　町屋遺跡の復元（1:5,000）

第1表　町屋遺跡の発見・調査歴

地点	地点詳細	調査・発見日	出土遺物	その他	文献
A	字花の木 1619 番地	昭和 29 年 8 月 26 日～同年 8 月 28 日	貝田町式壺・甕、寄道式壺・甕・高杯・鉢など	調査指導は楢崎彰一氏	千秋村史編纂委員会編・発行 1956「町屋遺跡」『千秋村村史』
B	字花の木、07Ic 区の東 20m 地点付近	昭和後期	瓠形壺・赤彩広口壺	長谷川稔氏所蔵資料	本報告書付論 3 参照
C	花の木遺跡、07D 区の南西 100m 地点付近	昭和 36 年の土取りの際	弥生中期の壺・深鉢・甕	安達厚三氏採集	大参義一・岩野見司 1967「花ノ木遺跡」『新編一宮市史資料編二　弥生時代』一宮市
D	字北坪 1435 番地	昭和 10 年 3 月下旬頃と昭和 10 年 5 月頃と昭和 13 年 5 月上旬頃	石剣？・石鳶？（石小刀か）・敲石	梶田不二男氏採集（梶田氏は地点 D～地点 G 付近に於いて石器 500 点以上、弥生土器 100 点以上他にも採集された）	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
E	字北坪 1432 番地	昭和 6 年 7 月上旬頃	打製石斧・磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
F	字北坪 1438 番地	昭和 2 年 5 月中頃	磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
G	字北坪 1430 番地	昭和 10 年 5 月上旬頃と昭和 13 年 10 月上旬頃	勾玉・管玉・臼玉・磨製石斧・敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収、坂重吉 1941.6「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
H	字北坪 1398 番地	昭和 13 年 11 月上旬	弥生時代中期壺・土錘・球？	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
I	字北目保 1222 番地	昭和 10 年 5 月中旬	敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
J	07D 区の南西 100m 地点付近，地点 C の北側畑地	昭和後期～平成	弥生時代中期～後期の弥生土器片多数、磨製石斧・敲石・凹み石・砥石・石小刀・打製石鏃・打製石錐など多数	安藤春雄氏採集	本報告書付論 3 参照

されたもので、確認できるものを示したものが第 1 表で、現在の表層地形の等高線図（第 92 図）にも第 1 表にある地点 A ～地点 J の地点を落とした。第 94 図を見ると、昭和 29 年に千秋村村史編纂委員会により発掘調査された地点 A は 07Ca 区の東側地点にあたり、貝田町式と寄道式の弥生土器が出土する調査成果は、今回の発掘調査成果とも整合性がとれており、紅村弘氏により『東海の先史遺跡』に紹介された町屋遺跡長谷川政エ門氏所蔵資料にある弥生土器の構成と対応している。長谷川政エ門氏所蔵資料は字北ノ坪と字花ノ木において採集されており、特に字花ノ木地内にて多数採集されたようであり、この長谷川政エ門氏所蔵資料は地点 A から地点 B の長谷川氏所蔵資料の採集地点付近の採集遺物と推定することができる。その他の梶田不二男氏採集資料は昭和 2 年から昭和 13 年頃に主に採取された資料で、地点 I を除くと地点 D ～地点 J は、字北ノ坪地内の 07Ca 区～ 07Cb 区の西 150m 程の地点付近で多数採取されたようである。地点 D ～地点 J は、今回の発掘調査地点の約 150m 西を南北にのびる微高地の北側の地点にあたり、これらの出土遺物から弥生時代中期の集落域が存在した可能性も示されるものである。長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料の磨製有樋式銅剣形石剣は地点 D ～地点 G 付近にて採集されたものである。地点 C と地点 J は 07D 区から南西 100m 程の地点の畑地であったところの採集資料で、地点 C は『新編一宮市史資料編二』にある花ノ木遺跡である。こちらも弥生時代中期を主体とする弥生土器と石器が多数確認されている。

これらの調査・発見による成果は、今回の発掘調査成果とおおむね整合性をもつが、梶田不二男氏と長谷

川政エ門氏による採集資料の中に遺跡の性格を考える上で興味深い点がある。一つ目として梶田不二男氏採集資料は地点D～地点Gの資料の中に石器が多数あったことで、その中で磨製石斧などが比較的多くみられること、地点Gに勾玉と管玉が含まれていることである。このような石器の出土傾向は07Cc区における石器の出土傾向と類似し、この付近で長谷川昭三氏寄贈の磨製有樋式銅剣形石剣が採集されていることも重要である。二つ目として、長谷川政エ門氏所蔵資料の中に今回の発掘調査では出土していない磨製石鏃が9点紹介されていることである。これは弥生土器の中で弥生中期の壺類とともに紹介されている弥生後期前半と思われる壺や高杯の存在とともに貴重な記録である。弥生時代中期末から弥生後期前半にかけての時期に、地点Aから地点B付近（今回の発掘調査地点の07Ca区～07D区・07Ia区～07Ie区にあたる地点）が遺跡の中心地の一つであったものと考えられる。

以上の分析から弥生時代の町屋遺跡の範囲は、北は07Ab区付近から南の07Ja区付近までの南北約370m、東西は不明で推測を含むが東は地点Bから西の地点Hまでの東西約200mの範囲に広がる可能性が高い。この中で地点Aと地点Bである07Ca区～07D区、07Ia区～07Ie区の付近と地点D～地点Gにおいて、居住域の中心部分としての機能が想定でき、遺跡の北側を流れていた07Gb中区043NRの南側に弥生時代中期後半のC期からD期にかけて方形周溝墓からなる墓域が展開し、用水・区画溝などと思われる溝が多数掘削され営まれた。また弥生時代後期のE期～F期には一辺22m前後の大型方形周溝墓が1基単独で形成されていたようであり、この段階の墓域の類例として貴重な成果と思われる。

註1　付近在住の方によると、07Ac北区北東側の現在県道となっている地点には夏になると自噴する泉があり、以前はそこから南西方向の水田へ水を引いていたという。今回の発掘調査で確認された東西溝群・旧河道はその北側に位置し、先述した泉は標高10.8～11.2mの等高線間隔の狭い地点に相当する。おそらく犬山扇状地扇端にあたり、斜面地で地下水脈の露頭するところが泉になっていたのであろう。

註2　現在の表層地形の解析と等高線図作成は愛知県埋蔵文化財センター鬼頭剛氏によるものである。

参考・引用文献

梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第29号、復刻版中巻に所収
坂重吉 1941.6「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『濃尾の遺跡と遺物』第29号、復刻版中巻に所収
千秋村史編纂委員会編・発行 1956「町屋遺跡」『千秋村村史』
大参義一・岩野見司 1967「花ノ木遺跡」『新編一宮市史資料編二弥生時代』一宮市

町屋遺跡出土土器の胎土材料

藤根　久・米田恭子（パレオ・ラボ）

１. はじめに

土器や土師器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村，2001）。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在していることがあり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる場合がある。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器では、３分の１程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている（藤根，1998；車崎ほか，1996）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

町屋遺跡は、一宮市千秋町町屋に所在する青木川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡は、犬山扇状地の末端でもあり、現地表下約 2m で基盤礫層がみられ、標高は約 11m である。発掘調査では、弥生時代中期の竪穴建物跡約 20 棟と弥生時代後期と考えられる方形周溝墓５基のほかに、弥生時代以降の溝、古墳時代の河道、７世紀後半の土坑が検出された。ここでは、弥生時代中期～古墳時代前期の土器について、粘土材料の特徴を薄片法により検討した。

２. 試料と方法

試料は、壺 29 点、甕８点、深鉢８点、高坏４点、鉢１点の合計 50 点である（第１表）。

分析方法は、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。

（１）試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後スライドグラスに接着した。(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片（プレパラート）は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った（表 2）。

なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは 10 ～数百μｍ程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても 23 種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。このことから、骨針化石は水成環境を指標する。

第１表　胎土分析を行った町屋遺跡出土土器とその詳細

分析 No.	登録 No・器形	器種	遺構	グリッド	Bo.	特徴（切断面の特徴）	型式	時期
1	Ha004 櫛条痕施文内傾口縁高杯	高坏	検Ⅱ	4D14j	47	にぶい黄橙色（10YR 6/4）	貝田町式（前半）	弥生時代中期前葉
2	Id044 太沈線施文太頸壺	壺	051SK ﾍﾞﾙﾄ上	6O2j	211	外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/3）～内面側：黄灰色（2.5Y 6/1）、サンドイッチ構造		
3	Ia067 広口口縁太頸壺	壺	145SK	5D11j	513(2)	黄灰色（2.5Y 5/1）	高蔵式	弥生時代中期末葉
4	Cc107 タタキ調整甕	甕	086SK	5D19f	154	にぶい黄橙色（10YR 7/2）		
5	Cc083 櫛条痕調整深鉢	深鉢	051SK	6D1f	672	黄灰色（2.5Y 4/1）	貝田町式（前半）	弥生時代中期前葉
6	Cc072 櫛施文太頸壺	壺	051SK	6D2f	322	外面側：にぶい橙色（7.5YR 7/3）～灰黄色（2.5Y 7/1）～内面側：灰色（5Y 4/1）		
7	Cc041 太頸壺	壺	031SK	5D20g	363	内面側：灰黄色（2.5Y 7/2）～外面側：暗灰色（N 3/）		
8	Ab004 櫛施文広口口縁太頸壺	壺	084SD		20	にぶい黄橙色（10YR 7/2）		
9	Ab006 櫛条痕調整深鉢	深鉢	084SD		28	外面側：にぶい黄橙色（10YR 6/4）～灰色（5Y 4/1）～内面側：橙色（7.5YR 4/6）、サンドイッチ構造		
10	Ja003 貝殻施文太頸壺	壺	010SK	7D15j		にぶい橙色（7.5YR 6/4）	朝日式	弥生時代中期前葉
11	沈線文系大地式壺体部	壺	208SD			外面側：にぶい橙色（7.5YR 6/4）～灰色（5Y 6/1）～内面側：にぶい黄橙色（10YR 7/3）、サンドイッチ構造		
12	沈線文系壺体部	壺	208SD 上層			内外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/2）～灰色（10Y 5/1）、サンドイッチ構造		
13	沈線文系広口壺口縁部	壺	034SK	5D20f		内外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/2）～灰色（N 5/）、サンドイッチ構造		
14	沈線文系太頸壺体部	壺	東壁	5D20g	772	外面側：灰黄色（2.5Y 6/2）～内面側：黄灰色（2.5Y 4/1）		
15	貝殻描文系太頸壺体部	壺	118NR	5D7j		内外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/4）～にぶい橙色（5YR 6/4）、サンドイッチ構造		
16	沈線文系壺体部	壺	004SD	5D20j		内外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/3）～黄灰色（2.5Y 4/1）、サンドイッチ構造		
17	貝殻条痕深鉢体部	深鉢	118NR	5D7j		外面側：灰白色（2.5Y 7/1）～内面側：灰色（N 5/）		
18	櫛描文系太頸壺口縁部	壺	051SK	6D1f		灰白色（10YR 8/2）	貝田町式（前半）	弥生時代中期前葉
19	貝田町式櫛描文細頸壺体部	壺	031SD	5D20f		黄灰色（2.5Y 5/1）		
20	貝田町式櫛描文細頸壺体部	壺	004SD	5D20j		灰色（5Y 4/1）		
21	沈線文系太頸壺頸部	壺	001ST	5D20j		灰色（5Y 6/1）		
22	櫛条痕深鉢口縁部	深鉢	208SD			灰黄褐色（10YR 4/2）		
23	櫛条痕深鉢口縁部	深鉢	028SD	5D20f		内外面側：にぶい黄褐色（10YR 5/3）～黄灰色（2.5Y 4/1）、サンドイッチ構造		
24	ハケ調整甕口縁部	甕	051SK	6D1f		灰白色（2.5Y 7/1）		
25	貝田町式櫛描文細頸壺口縁部	壺	ﾄﾚﾝﾁ (2) 東			内外面側：にぶい黄橙色（10YR 6/3）～灰色（N 4/）、サンドイッチ構造	貝田町式（後半）	弥生時代中期後葉
26	磨消線文細頸壺体部	壺	ﾄﾚﾝﾁ (2) 東			外面側：橙色（7.5YR 6/6）～浅黄橙色（10YR 8/3）～内面側：灰色（5Y 4/1）		
27	櫛描文系太頸壺口縁部	壺	084SD		22	にぶい黄橙色（10YR 7/4）		
28	磨消帯壺体部	壺	187SD			にぶい黄橙色（10YR 7/2）		
29	貝田町式櫛描文細頸壺体部	壺	009SD	5D3i		外面側：褐灰色（10YR 4/1）～内面側：褐灰色（10YR 5/1）		
30	櫛条痕深鉢口縁部	深鉢	009SD	5D3i		内外面側：灰黄褐色（10YR 4/2）～灰色（5Y 4/1）、サンドイッチ構造		
31	櫛条痕深鉢口縁部	深鉢	009SD	5D3i		灰色（5Y 4/1）		
32	櫛条痕深鉢口縁部	深鉢	検Ⅰ北側			灰黄褐色（10YR 6/2）	貝田町式 (後半)・高蔵式	弥生時代中期後葉～末葉
33	内湾口縁細頸壺体部	壺	検Ⅰ北側			灰白色（10YR 8/2）	高蔵式	弥生時代中期末葉
34	凹線文受口縁細頸壺口縁部	壺	004SZ	6D1j	170	にぶい橙色（7.5YR 7/4）		
35	内湾口縁細頸壺体部	壺	004SD	5D20j		灰白色（10YR 8/2）		
36	櫛刺突羽状文鉢口縁部	鉢	検出Ⅰ			内外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/4）～灰色（10Y5/1）、サンドイッチ構造		
37	櫛描文太頸壺口縁部	壺	検出Ⅰ			内外面側：灰白色（10YR 8/2）～灰色（5Y 4/1）、サンドイッチ構造		
38	櫛描文太頸壺頸部	壺	検出Ⅰ			灰白色（2.5Y 8/2）		
39	タタキ甕口縁部	甕	187SD			にぶい黄褐色（10YR 5/3）		
40	タタキ甕口縁部	甕	111SD	5D6j	391	にぶい黄褐色（10YR 6/3）		
41	広口壺口縁部	壺	検出Ⅰ			灰白色（10YR 8/2）	山中式	弥生時代後期前葉
42	赤彩広口壺口縁部	壺	004SD	5D19j		灰白色（10YR 8/2）		
43	山中式高杯口縁部	高坏	004SD	5D20i		灰白色（2.5Y 8/2）		
44	山中式甕口縁部	甕	004SD	5D20i		黄灰色（2.5Y 6/1）		
45	山中式甕口縁部	甕	検出Ⅰ			にぶい橙色（7.5YR 7/3）		
46	山中式甕口縁部	甕	検出			内外面：にぶい黄橙色（10YR 6/3）～褐灰色（10YR 5/1）		
47	広口壺体部	壺	検出Ⅰ			外面側：灰白色（10YR 8/2）～内面側：黒色（N 2/）	山中式・廻間	弥生時代後期前葉～古墳時代早期・前期
48	内湾高杯脚部	高坏	004SD	5D19j		灰白色（10YR 8/2）	廻間	古墳時代早期・前期
49	内湾高杯脚部	高坏	検出Ⅰ	6D1i		にぶい黄橙色（10YR 7/2）		
50	S 字口縁台付甕体部	甕	表土剥ぎ			内外面側：にぶい黄橙色（10YR 7/3）～灰色（5Y6/1）、サンドイッチ構造		

目次
終了

［植物珪酸体化石］
主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約 10 ～ 50 μ m 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。
［胞子化石］
胞子は、直径約 10 ～ 30 μ m 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。
［石英・長石類］
石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。
［長石類］
長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。
［雲母類］
一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。
［輝石類］
主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。
［角閃石類］
主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。
［ガラス質］
透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。
［片理複合石英類］
石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。
［砂岩質・泥岩質］
石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。
［複合石英類］
複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒なものから細粒なものまでさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が 0.01mm 未満のものを微細、0.01 ～ 0.05mm のものを小型、0.05 ～ 0.10mm のものを中型、0.10mm 以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。
［斑晶質・完晶質］
斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。
［流紋岩質］
石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。
［凝灰岩質］
ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体

的に暗い粒子である。
［不明粒子］
下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察結果について述べる。

胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、おおまかな量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

ｉ）微化石類による材料粘土の分類

各土器の薄片全面の観察の結果、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数 100 μ m、珪藻化石が 10 ～数 100 μ m、骨針化石が 10 ～ 100 μ m 前後である（植物珪酸体化石が 10 ～ 50 μ m 前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9 μ m 以下、シルトが約 3.9 ～ 62.5 μ m、砂が 62.5 μ m ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会，1981）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、植物珪酸体化石を除く微化石類は、土器の粘土材料中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 海成粘土を用い粘土、b) 淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の 4 種類の粘土に分類された（第 2 表）。第 2 表において、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

なお、海成粘土は、放散虫化石あるいは海水種珪藻化石を含むが、淡水種珪藻化石は全く含まれていない胎土である。

a）海成粘土（7 試料）

これら土器胎土中には、放散虫化石あるいは海水種珪藻化石が含まれ、淡水種珪藻化石は全く含まれていなかった。また、骨針の化石が含まれていた。特に、分析 No.42 および No.43 では、海水種珪藻化石 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属が多産した。
東海地域では、新第三紀中新世の第 1 瀬戸内海の海進に伴って形成された東濃地域の瑞浪層群、三河地域の岡崎層群や設楽層群などが分布する（藤根，1998）。これらの地層粘土は、固結した地層であり、直接採取して土器の粘土材料に利用できる粘土ではないが、中新世以降に堆積した地層粘土として泥化して再堆積すると考えられ、基盤層として分布する地域では新しい地層中に放散虫化石や海水種珪藻化石が含まれている可能性がある。
また、第四紀後期更新世に形成された熱田層などでは、熱田海進（関東地方の下末吉海進に相当）に伴う海成粘土が堆積し、海水～汽水種からなる珪藻化石が豊富に含まれている（藤根，1998）。

b）淡水成粘土（20 試料）

これらの土器胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。このうち、分析 No.3，No.18，No.20，No.25 ～ 30，No.47 の粘土中には、安藤（1990）が設定した沼沢湿地付着生指標種群（O）や湖沼沼沢湿地指標種群（N）が特徴的に含まれ、湖沼沼沢湿地環境で堆積した粘土が用いられたと推定される。なお、湖沼沼沢湿地環境下の粘土で製作されたこれらの土器の器種は、9 点が壺であり、1 点（分析 No.30）が甕であった。
東海地域では、岐阜県東濃地域～瀬戸地域にかけて瀬戸層群（新第三紀後期中新世～鮮新世の古東海湖の堆積物）の良質の粘土が分布するが、これらの地層粘土中には珪藻化石が全くと言っていいほど含まれていない（藤根，1998）。また、濃尾平野の主に岐阜県側周辺部では、第四紀後期更新世に形成された段丘堆積物が見られるが、これら段丘堆積物中には珪藻化石が含まれていない場合が多い。

第２表　町屋遺跡出土土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

分析No.	器種	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	高坏	150μm～1.0mm	2.3mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石	石英･長石類〉完晶質、複合石英類（大型）、複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、ガラス質、流紋岩質、斜長石（双晶）、凝灰岩質、斑晶質、雲母類、斜方輝石、ジルコン
2	壺	60～550μm	1.3mm	珪藻化石：淡水種 Synedra ulna、植物珪酸体化石多産、骨針化石多産、植物遺体	石英･長石類〉複合石英類（微細）、流紋岩質〉カリ長石（パーサイト）、完晶質、ガラス質、斑晶質、複合石英類（大型）〉斜長石（双晶）、角閃石類、砂岩質、雲母類、ジルコン
3	壺	90～900μm	1.9mm	珪藻化石多産（外洋指標種群 Thalassionema nitzschioides、海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属、湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua 多産、淡水種 Diploneis ovalis、Pinnularia 属、Navicula 属、Eunotia 属、不明種）、植物珪酸体化石多産、骨針化石、胞子化石、植物遺体	石英・長石類〉流紋岩質、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、斑晶質、ガラス質、角閃石類、完晶質、砂岩質、雲母類、単斜輝石、ジルコン
4	甕	100～250μm	0.9mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石	石英・長石類》ガラス質、複合石英類（微細）〉カリ長石（パーサイト）〉斜長石（双晶）、斜方輝石、複合石英類（大型）、凝灰岩質、角閃石類、雲母類、文象岩、ジルコン、流紋岩質
5	深鉢	130～830μm	1.5mm	珪藻化石（淡水浮遊性種群 Aulacosira ambigua）、植物珪酸体化石（イネ型短細胞珪酸体含む）、骨針化石、胞子化石、植物遺体多い	石英・長石類、カリ長石（パーサイト）〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、角閃石類、複合石英類（微細）〉ガラス質、凝灰岩質、雲母類、斑晶質、完晶質、単斜輝石、ジルコン、流紋岩質
6	壺	80～350μm	5.4mm	植物珪酸体化石	石英・長石類》カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）〉複合石英類（微細）、雲母類、ガラス質〉斜長石（双晶）、複合石英類（中型）、斜方輝石、角閃石類、凝灰岩質、ジルコン
7	壺	60～680μm	2.4mm	植物珪酸体化石、骨針化石、植物遺体	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）〉複合石英類（大型）、ガラス質、斜長石（双晶）〉角閃石類、完晶質、斑晶質、微斜長石、ジルコン、文象岩
8	壺	60～680μm	1.3mm	植物珪酸体化石、骨針化石	雲母類〉石英・長石類、複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、ジルコン
9	深鉢	90～770μm	1.9μm	植物珪酸体化石多産、骨針化石多い、植物遺体	石英・長石類〉カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、角閃石類、斜長石（双晶・累帯）、流紋岩質、ガラス質、斜方輝石、雲母類、ジルコン
10	壺	100～400μm	1.8mm	植物珪酸体化石	石英・長石類、雲母類〉複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）〉ガラス質、斜長石（双晶）、斜方輝石、砂岩質、角閃石類、ジルコン、流紋岩質
11	壺	50～740μm	4.5mm	珪藻化石（砂粒付着珪藻、不明種）、植物珪酸体化石、骨針化石多い	雲母類、石英・長石類》斜長石（双晶）、複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、凝灰岩質、複合石英類（中型）、角閃石類、流紋岩質
12	壺	80μm～1.2mm	1.9mm	珪藻化石（淡水種 Eunotia biareofera）、植物珪酸体化石、骨針化石	石英･長石類》カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉角閃石類、ガラス質、流紋岩質、斜方輝石、ジルコン
13	壺	120μm～1.2mm	2.5mm	植物珪酸体化石、骨針化石、植物遺体、胞子化石	石英･長石類〉複合石英類（微細）、複合石英類（大型）〉凝灰岩質、流紋岩質〉完晶質、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、ガラス質、斑晶質、砂岩質、斜方輝石
14	壺	150～800μm	1.6mm	放散虫化石、珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属）、植物珪酸体化石多い、骨針化石多い	石英･長石類》複合石英類（微細）〉雲母類、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、ガラス質、斜方輝石、ジルコン
15	壺	90～700μm	2.4mm	植物珪酸体化石、骨針化石	石英・長石類》複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）〉角閃石類、斜長石（双晶）、斜方輝石、ガラス質、雲母類、ジルコン
16	壺	100～900μm	1.4mm	珪藻化石：海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属、淡水種 Eunotia biareofera、Eunotia 属）、不明種、植物珪酸体化石多い、骨針化石	石英・長石類〉凝灰岩質、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）〉複合石英類（微細）、完晶質、斜長石（双晶）、雲母類、砂岩質、斜方輝石、ジルコン
17	深鉢	150～900μm	2.8mm	珪藻化石：湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua）、植物珪酸体化石多い、骨針化石、胞子化石	石英･長石類、カリ長石（パーサイト）〉複合石英類（大型）、雲母類〉斜長石（双晶）、角閃石類、複合石英類（微細）、ジルコン、ガラス質
18	壺	200～850μm	1.8mm	珪藻化石多産（沼沢湿地付着生指標種群 Pinnularia viridis、Cymbella aspera、Eunotia praerupta var.bidens、Pinnularia nodosa、淡水種 Eunotia praerupta、Eunotia monodon、Nitzschia palea、Nitzschia 属、Eunotia 属、Pinnularia 属、不明種）、植物珪酸体化石多い（イネ籾殻含む）、骨針化石、胞子化石	ガラス質、複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）〉石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、凝灰岩質、完晶質、角閃石類、斑晶質、雲母類、文象岩、流紋岩質
19	壺	80～900μm	2.9mm	植物珪酸体化石、骨針化石	石英･長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）〉斜長石（双晶）、雲母類〉角閃石類、斜方輝石、砂岩質、ジルコン

目次
終了

第２表　町屋遺跡出土土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

分析No.	器種	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
20	壺	140～650μm	1.2mm	珪藻化石多産（沼沢湿地付着生指標種群 Pinnularia viridis、Cymbella aspera、Stauroneis phoenicenteron、湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua、淡水種 Eunotia monodon、Cymbella 属、Eunotia 属、Diploneis ellipica、Surirella 属、不明種）、植物珪酸体化石多い（ヨシ属、その他）、骨針化石、胞子化石多い	石英・長石類〉カリ長石（パーサイト）、完晶質、複合石英類（大型）〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、雲母類〉ガラス質、斑晶質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、流紋岩質
21	壺	100～550μm	2.3mm	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類（大型）、複合石英類（微細）〉雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、ジルコン
22	深鉢	50～450μm	0.8mm	植物珪酸体化石、骨針化石	複合石英類（微細）、石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類、完晶質〉角閃石類、斜長石（双晶）、斑晶質、ガラス質、カリ長石（パーサイト）
23	深鉢	100～900μm	2.3mm	珪藻化石（淡水種 Cymbella 属、Pinnularia 属、不明種）、植物珪酸体化石	ガラス質、石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）、雲母類〉角閃石類、完晶質、斑晶質、凝灰岩質、流紋岩質
24	甕	80～600μm	3.1mm	植物珪酸体化石、骨針化石	石英・長石類》カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、雲母類、斜長石（双晶）、ガラス質、角閃石類、流紋岩質、ジルコン
25	壺	80～750μm	1.7mm	珪藻化石多産（沼沢湿地付着生指標種群 Gomphonema gracile、湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua、淡水種 Eunotia monodon、Cymbella 属、Pinnularia 属、Eunotia 属、Gomphonema 属、不明種）、植物珪酸体化石多い、骨針化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）〉ガラス質、複合石英類（大型）、斜長石（双晶・累常）、雲母類、完晶質、流紋岩質、ジルコン
26	壺	150～450μm	1.6mm	珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属、沼沢湿地付着生指標種群 Stauroneis phoenicenteron、淡水種 Synedra ulna、Diploneis 属、Cymbella 属、Pinnularia 属、Eunotia 属、不明種）、植物珪酸体化石多い、骨針化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）〉ガラス質、複合石英類（大型）、凝灰岩質、完晶質〉斑晶質、斜長石（双晶）、流紋岩質、角閃石類、雲母類、斜方輝石、単斜輝石、ジルコン、片理複合石英類
27	壺	100～480μm	1.8mm	珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 Stauroneis phoenicenteron、淡水種 Synedra ulna、Cymbella 属、不明種）、植物珪酸体化石多い、骨針化石	石英・長石類〉雲母類、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）〉ガラス質、斜長石（双晶）、凝灰岩質、斑晶質、角閃石類、斜方輝石、ジルコン、流紋岩質
28	壺	120～650μm	1.5mm	珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属、湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua、淡水種 Eunotia biareofera、Aulacosira pensacolae、Cymbella 属、Eunotia 属）、植物珪酸体化石多い、骨針化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）〉ガラス質、複合石英類（大型）、凝灰岩質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、片理複合石英類
29	壺	150～800μm	2.8mm	珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 Pinnularia viridis、Cymbella aspera、Eunotia pectinalis var.undulata、湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua、淡水種 Cymbella 属、Eunotia 属、Pinnularia 属）、植物珪酸体化石多い、骨針化石、胞子化石、植物遺体多い	石英・長石類〉複合石英類（微細）、凝灰岩質、完晶質、カリ長石（パーサイト）、ガラス質〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、流紋岩質、角閃石類、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン
30	深鉢	60～750μm	1.9mm	珪藻化石（湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua、Cymbella 属）、植物珪酸体化石、骨針化石、胞子化石	ガラス質》石英・長石類、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、斜方輝石、ジルコン、流紋岩質、片理複合石英類
31	深鉢	30～400μm	1.25mm	植物珪酸体化石、骨針化石、胞子化石	ガラス質》石英・長石類、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、凝灰岩質、角閃石類、斜方輝石、カリ長石（パーサイト）雲母類、文象岩
32	深鉢	100～750μm	2.60mm	珪藻化石（不明種）、植物珪酸体化石、骨針化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、雲母類、カリ長石（パーサイト）〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、ガラス質、角閃石類、流紋岩質、ジルコン
33	壺	50～300μm	1.70mm	珪藻化石（淡水種 Cymbella 属）、植物珪酸体化石多産、骨針化石、植物遺体	石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類（大型）、ガラス質）カリ長石（パーサイト）、雲母類、斜長石（双晶）、凝灰岩質、流紋岩質、角閃石類、単斜輝石、ジルコン
34	壺	70～400μm	1.25mm	放散虫化石、植物珪酸体化石、骨針化石	石英・長石類》ガラス質〉複合石英類（微細）、複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、ジルコン、斜方輝石
35	壺	80～250μm	1.14mm	珪藻化石（淡水種 Surirella 属）、植物珪酸体化石多産（ネザサ節型、その他）、骨針化石、植物遺体	石英・長石類》複合石英類（微細）、ガラス質、複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、完晶質、凝灰岩質、角閃石類、斜方輝石、ジルコン
36	鉢	80～450μm	2.13mm	珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 Pinnularia viridis）、植物珪酸体化石多産（ネザサ節型、その他）、骨針化石、胞子化石	石英・長石類》ガラス質〉斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）〉複合石英類（微細）、角閃石類、雲母類、ジルコン、文象岩
37	壺	70～250μm	1.23mm	珪藻化石（淡水種 Eunotia biareofera、不明種）、植物珪酸体化石多産（ネザサ節型、イネ籾、その他）、骨針化石	石英・長石類》複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）〉ガラス質、複合石英類（大型）、雲母類、斜方輝石、角閃石類、ジルコン

目次
終了

第２表　町屋遺跡出土土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

分析No.	器種	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
38	壺	50～400μm	0.82mm	珪藻化石（不明種）、植物珪酸体化石多産、骨針化石多産	石英･長石類》ガラス質〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶)〉斑晶質、完晶質、角閃石類、斜方輝石、凝灰岩質、ジルコン
39	甕	100～600μm	1.52mm	珪藻化石（不明種）、植物珪酸体化石多産（ヨシ属、イネ籾、その他）、骨針化石、胞子化石	石英・長石類》ガラス質〉複合石英類（微細）、複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト)〉斜長石（双晶）、角閃石類、斑晶質、流紋岩質、斜方輝石、凝灰岩質、ジルコン
40	甕	80～350μm	1.45mm	植物珪酸体化、骨針化石、植物遺体	石英・長石類〉複合石英類（微細)〉雲母類、ガラス質、斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、斜方輝石、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、完晶質、角閃石類
41	壺	100～300μm	0.75mm	珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属）、不明種、植物珪酸体化石（ヨシ属、その他）、骨針化石、胞子化石	石英･長石類》複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶)〉雲母類、ガラス質、凝灰岩質、角閃石類、ジルコン
42	壺	100～450μm	0.86mm	珪藻化石多産（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属）、植物珪酸体化石（ネザサ節型、その他）、骨針化石、胞子化石、植物遺体多い	石英･長石類》複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶)〉凝灰岩質、完晶質、雲母類、ガラス質、斜方輝石、流紋岩質、角閃石類、ジルコン
43	高坏	80～400μm	0.74mm	放散虫化石、珪藻化石多産（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属、Actinocyclus 属）、植物珪酸体化石、骨針化石多産	石英･長石類》複合石英類（微細)〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、ガラス質、斜方輝石、雲母類、ジルコン、凝灰岩質、流紋岩質
44	甕	70～500μm	1.25mm	放散虫化石、珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属）、植物珪酸体化石、骨針化石多産、植物遺体	石英・長石類〉複合石英類（微細)〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ガラス質、複合石英類（大型）、雲母類、完晶質、凝灰岩質、角閃石類、ジルコン
45	甕	90～680μm	1.56mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石	石英･長石類〉ガラス質〉複合石英類（微細）､複合石英類（大型）､斜長石（双晶）､カリ長石（パーサイト）、角閃石類、雲母類、斜方輝石、ジルコン、流紋岩質
46	甕	120μm～1.0mm	1.65mm	珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属）、植物珪酸体化石、骨針化石、胞子化石、植物遺体	石英･長石類〉ガラス質､複合石英類（微細）､雲母類〉複合石英類（大型）､カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、角閃石類、砂岩質
47	壺	90～400μm	0.80mm	珪藻化石多産（湖沼沼沢湿地指標種群 Aulacosira ambigua、沼沢湿地付着生指標種群 Eunotia praerupta var.bidens、淡水種 Eunotia biareofera、Diploneis 属、Eunotia 属、Aulacosira 属）植物珪酸体化石多産（ネザサ節型、ヨシ属、その他）、骨針化石、胞子化石、植物遺体	石英・長石類〉複合石英類（微細）、ガラス質〉カリ長石、斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、雲母類、斜方輝石、角閃石類
48	高坏	80～250μm	2.30mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石、胞子化石	石英・長石類》複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、ガラス質、複合石英類（大型）、斜長石（双晶)〉斜方輝石、雲母類、角閃石類、斑晶質
49	高坏	50～180μm	0.65mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石、植物遺体	石英・長石類》ガラス質〉複合石英類（微細）、雲母類、斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、角閃石類、斜方輝石、完晶質、凝灰岩質、ジルコン
50	甕	100～380μm	0.95mm	植物珪酸体化石、骨針化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、複合石英類（大型)〉カリ長石（パーサイト）、ガラス質、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、ジルコン

目次
終了

第３表　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分析No.	器種	粘土の特徴							砂粒の特徴								鉱物の特徴				植物珪酸体化石	備考
		種類	放散虫化石	珪藻化石海水種	珪藻化石淡水種	珪藻化石不明種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類		
1	高坏	水　成					△		Bc		○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	○	
2	壺	淡水成			△		◎		Cb		○	○	△		○	△	△	△	△	△	○	植物遺体含む
3	壺	淡水成		△	◎	△	○	△	Cb		○	○	△		○	△	△	△	△	△	○	湖沼沼沢湿地成、植物遺体含む
4	甕	水　成					△		Cb		△	○		△	△	○	△	△	○	△	◎	植物珪酸体化石多産（灰質混入か）
5	深鉢	淡水成			△		△	△	Bc		◎	○	△	△	△	△	△	○	△	△	○	イネ型短細胞珪酸体含む、植物遺体含む
6	壺	その他							Bc		◎	○		△		△	△	△	△	○	○	
7	壺	水　成					○		Cb		○	○	△			△	△	△			○	植物遺体含む
8	壺	水　成					△		Bc		◎	○					△	△	△	◎	△	
9	深鉢	水　成					○		Bc		◎	○	△		△		△	○	△	△	○	植物遺体含む
10	壺	その他							Bc		◎	○			△	△	△	△	△	◎	△	
11	壺	淡水成			△	△	◎		Bc		◎	○		△				△		◎	○	砂粒付着珪藻含む
12	壺	淡水成			△		○		Cb		○	◎	△		△	△	△	△	△		○	
13	壺	水　成					○	△	Cb		○	◎	△	△	△	△			△		○	
14	壺	海　成	△	△			◎		Cb		○	◎				△	△	○	△	○	○	
15	壺	水　成					△		Bc		◎	○				△	△	○	△	△	△	
16	壺	淡水成		△	△	△	○		Bc		○	○	△	△			△		△	△	○	
17	深鉢	淡水成			△		△	△	B		◎	△				△	△	○		○	○	
18	壺	淡水成			◎	△	△	○	Cb		○	○	△	△	△	○		△		△	○	沼沢湿地成、イネ籾殻の珪酸体含む
19	壺	水　成					△		Cb		○	◎	△			△	△	△	△	○	△	
20	壺	淡水成			◎	△	△	◎	Bc		○	○	○		△	△	△	△	△	○	◎	湖沼沼沢湿地成
21	壺	その他							B		◎	△					△	○	△	○	○	
22	深鉢	水　成					○		C		△	◎	△			△		△		○	△	
23	深鉢	淡水成			○	△			Bc		○	○	△	△	△	○		△		○	△	
24	甕	水　成					△		B		◎	△			△	△	△	△		○	△	
25	壺	淡水成			◎	◎	△	○	Bc		○	○		△	△	○	△			△	◎	湖沼沼沢湿地成
26	壺	淡水成		△	○	○	○	△	Cb	△	○	○	△	△	△	○	△	△	△	△	◎	沼沢湿地成
27	壺	淡水成			△	○	○		Cb		○	○	△	△	△	△	△	△	△		◎	沼沢湿地成
28	壺	淡水成			◎	○	△	○	Cb	△	○	○		△		○	△	△	△		◎	湖沼沼沢湿地成
29	壺	淡水成			◎	○	△	△	Cb		○	○	△	○	△	△	△	△	△	△	◎	沼沢湿地成、植物遺体多く含む
30	深鉢	淡水成			△		△		Cb		○	○			△	○	△	△	△	△	△	湖沼沼沢湿地成
31	深鉢	水　成					○	△	Cg		△	○		△		○		△	△	△	○	
32	深鉢	水　成				△	△		Bc		○	○		△	△	△	△	△	△	○	○	
33	壺	淡水成			△		○		Bc		○	○		△	△	○	△	△	△	△	○	植物遺体含む
34	壺	海　成	△				△		Bc		○	○		△		○	△		△		○	ガラスやや多く含む
35	壺	淡水成			△		○		Bc		○	○	△	△	△	○		△	△		○	植物遺体含む
36	鉢	淡水成			△		△	△	B		◎	△				△	△	△		△	○	（沼沢湿地成）
37	壺	水　成			△	△	○		B		(○)	△				△	△	△	△	△	◎	
38	壺	水　成				△	◎		Bc		(○)	△	△	△		○	△	△	△		◎	ガラスやや多く含む
39	甕	水　成				△	△	△	Cb		○	○		△	△	△	△	△	△		○	
40	甕	水　成					△		Bc		○	○	△			△	△	△	△	○	△	植物遺体含む
41	壺	海　成		△		△	△	△	B		(○)	△		△		△	△	△		○	○	
42	壺	海　成		◎			○	△	Cd		○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	○	植物遺体多く含む
43	高坏	海　成	△	◎			◎		Cb		○	○		△	△	△	△		△	△	○	
44	甕	海　成	△	△			◎		Bc		○	○	△	△		△	△	△		△	○	植物遺体含む
45	甕	水　成					△		Bc		○	○			△	○	△	△	△	△	○	
46	甕	海　成		△			△	△	Cb		○	○				△	△	△		○	○	植物遺体含む
47	壺	淡水成			◎	△	△	△	Cb		○	○				○		△	△	△	◎	湖沼沼沢湿地成、植物遺体含む
48	高坏	水　成					△	△	B		(○)	△	△			△		△		△	○	
49	高坏	水　成					△		B		(○)	△	△	△		△	△	△	△	○	○	植物遺体含む
50	甕	水　成					△		Cb		○	◎				△		△		△	△	

c）水成粘土（20 試料）

これらの土器胎土中には、不明種珪藻化石または骨針化石が含まれていた。

d）その他粘土（3 試料）

これらの土器胎土中には、堆積環境を指標するような珪藻化石または骨針化石は含まれていなかった。

ii）土器胎土中の砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合

石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定することが困難となる。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第３表）。岩石の推定は、片岩質が片岩類（A/a）、複合石英類が深成岩類（B/b）、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類（C/c）、斑晶質・完晶質が火山岩類（D/d）、凝灰岩質が凝灰岩類（E/e）、流紋岩質が流紋岩類（F/f）、ガラス質または軽石質がテフラ（G/g）である。ただし、斑晶質・完晶質の多くは結晶度が低く、凝灰岩類に属する場合もある。推定した起源岩石は、第４表の組み合わせに従って分類した。以下に、胎土中の砂粒物の岩石組み合わせについて述べる。なお、第５表に器種と粘土の種類および砂粒組成の関係をまとめた。

第４表　岩石片の起源と組み合わせ

			第１出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第２出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

１）主に深成岩類からなる B 群（8 試料）

これらの胎土中の砂粒は、大型結晶から構成される複合石英類からなり、その他の起源岩石は少ない。

この岩石組成では、主に花崗岩が分布する地域が考えられ、東海地域では東濃地域～瀬戸猿投山地域の花崗岩が広く分布する地域（過去の河川流域を含む）の砂粒組成と考えられる。

２）主に堆積岩類からなる C 群（1 試料）

この胎土中の砂粒は、堆積岩類のほか、少量の火山岩類を含むことから、次に述べる Cb 群または Bc 群に近い組成と考えられる。

３）深成岩類を主として堆積岩類を伴う Bc 群または堆　積岩類を主とし深成岩類を伴う Cb 群（39 試料）

これらの胎土中の砂粒では、深成岩類と堆積岩類が特徴的であり、火山岩類や凝灰岩類あるいは流紋岩類を伴う場合が多い。このうち火山岩類あるいは凝灰岩類は、現木曽川の河川礫として見られる岩石である。一方、流紋岩類は、現木曽川や長良川など濃飛流紋岩類の分布域を流下する河川に見られる岩石である。今回の町屋遺跡は、木曽川流域に相当する地域であるため、今回の分析試料の７割以上の土器がこの Bc 類または Cb 類の砂粒組成に該当したと考えられる。

４）堆積岩類を主として火山岩類を伴う Cd 群（1 試料）

この胎土中の砂粒は、堆積岩類や火山岩類のほか、深成岩類、少量の凝灰岩類や流紋岩類を含むことから、先の Cb 群または Bc 群に近い組成と考えられる。

５）堆積岩類を主としてテフラを伴う Cg 群（1 試料）

この胎土中の砂は、深成岩類や凝灰岩類を伴うが、このうち凝灰岩類はテフラに付随する組成と考えられる。

このガラス質テフラを多く含む胎土は、明らかに地層中のテフラが混和したものであり、材料の調達地はテフラ層が分布する地域である。特に砂粒物の大部分がテフラで構成される場合はテフラが混和材であるが、テフラを混和材に用いたとされる土器は、東海地域のパレススタイル壺や千葉県市原市の長平台遺跡の弥生土器など各地に見られる（藤根，1986; 管野ほか，2010 など）。

ⅲ）土器胎土材料の特徴

土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a）海成粘土を用いた粘土、b）淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の４種類の粘土に分類された。

第５表　器種と粘土の種類および砂粒組成の関係

器種	海　成				淡水成			水　成					その他		総計
	B	Bc	Cb	Cd	B	Bc	Cb	B	C	Bc	Cb	Cg	B	Bc	
壺	1	1	1	1		6	9	1		3	3		1	2	29
甕		1	1					1		2	3				8
深鉢					1	2	1		1	2		1			8
高坏			1					2		1					4
鉢					1										1
総計	1	2	3	1	2	8	10	4	1	8	6	1	1	2	50

一方、岩石種の推定とその組み合わせから、砂粒は、1) 主に深成岩類からなる B 群、2) 主に堆積岩類からなる C 群、3) 深成岩類を主として堆積岩類を伴う Bc 群または堆積岩類を主とし深成岩類を伴う Cb 群、4) 堆積岩類を主として火山岩類を伴う Cd 群、5) 堆積岩類を主としてテフラを伴う Cg 群、の 5 種類に分類された。

器種毎に見ると、壺では、淡水成および水成粘土であり、砂粒組成 Bc 群または Cb 群である胎土が 21 点であった。また、海成や水成またはその他粘土であり、砂粒組成 B 群の胎土が 3 点見られた。

甕では、海成および水成粘土を材料とした個体が多く、砂粒組成 Bc 群または Cb 群の胎土が 7 点であった。また、水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土が 1 点見られた。

深鉢では、粘土材料が淡水成および水成粘土で、砂粒組成 Bc 群または Cb 群の胎土が 5 点であった。その他は、淡水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土、水成粘土で砂粒組成 C 群の胎土、水成粘土で砂粒組成 Cg 群の胎土が各 1 点であった。

高坏では、海成粘土で砂粒組成 Cb 群の胎土が 1 点、水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土が 2 点と Bc 群の胎土が 1 点であった。

鉢では、淡水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土が 1 点であった。

これ以外の胎土の特徴について見ると、分析 No.4 の甕胎土中には、イネ科植物の葉身中に形成される植物珪酸体化石が特徴的に多く含まれていた。この胎土の粘土材料には微化石類に乏しい粘土が用いられており、有機質粘土のような植物起源の遺体を多く含む粘土とは異なる。本来、粘土に含まれるイネ科植物起源の植物珪酸体化石は少ないと考えられるため、これらの植物珪酸体化石はイネ科植物を焼いてできた灰質の混入に由来する可能性が考えられる。このように灰質物を胎土の除粘剤として混入する土器はとしては、数例の事例が知られている（藤根，1998）。

分析 No.34，No.38 の壺胎土などには、砂粒物の一部としてガラス質のテフラが多く含まれている。これらのテフラは、明らかに地層中に挟在するガラス質テフラであり、材料の調達地はテフラ層が分布する地域と考えられる。東海地域では、伊勢北部地域および南部地域、名古屋市東部地域、知多半島に分布する東海層群中にテフラ層が挟在する（日本の地質『中部地方 II』編集委員会編，1988）。

なお、胎土中のテフラは、その屈折率を測定することにより対象テフラを同定することが可能である（管野ほか，2010）。町田・新井（2003）に示された主なテフラと比較・同定し、採取した地層層準の特定を行うことにより、採取地に関するより具体的なデータが提示できると考えている。

5. おわりに

土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。

その結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a）海成粘土を用いた粘土、b）淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の 4 種類に分類された。

一方、岩石種の推定とその組み合わせから、砂粒は、1) 主に深成岩類からなる B 群、2) 主に堆積岩類からなる C 群、3) 深成岩類を主として堆積岩類を伴う Bc 群または堆積岩類を主とし深成岩類を伴う Cb 群、4) 主堆積岩類を主として火山岩類を伴う Cd 群、5) 堆積岩類を主としてテフラを伴う Cg 群、の 6 種類に分類された。多くの土器胎土にみられる材料の特徴は、遺跡周辺での地質環境を反映したものと推定される。今後の発掘調査において粘土採掘坑の検出が期待されるが、粘土採掘坑の粘土等の材料と土器胎土材料との比較を行うことにより、土器作りの実態について検討することができるであろう。

また、砂粒物の一部にガラス質のテフラを多く含む土器胎土が見られたが、これらの胎土中のガラスの屈折率を測定して、対象テフラを同定することは可能であり、採取地に関するより具体的なデータが提示できると考えている。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（2），73-88.

地質調査所（1993）20 万分の 1 地質図「青森」．通商産業省工業技術院地質調査所.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典． 1612p，平凡社.

藤根　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ」：108-117，東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会．

藤根　久・今村美智子（2001）第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277，日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団．

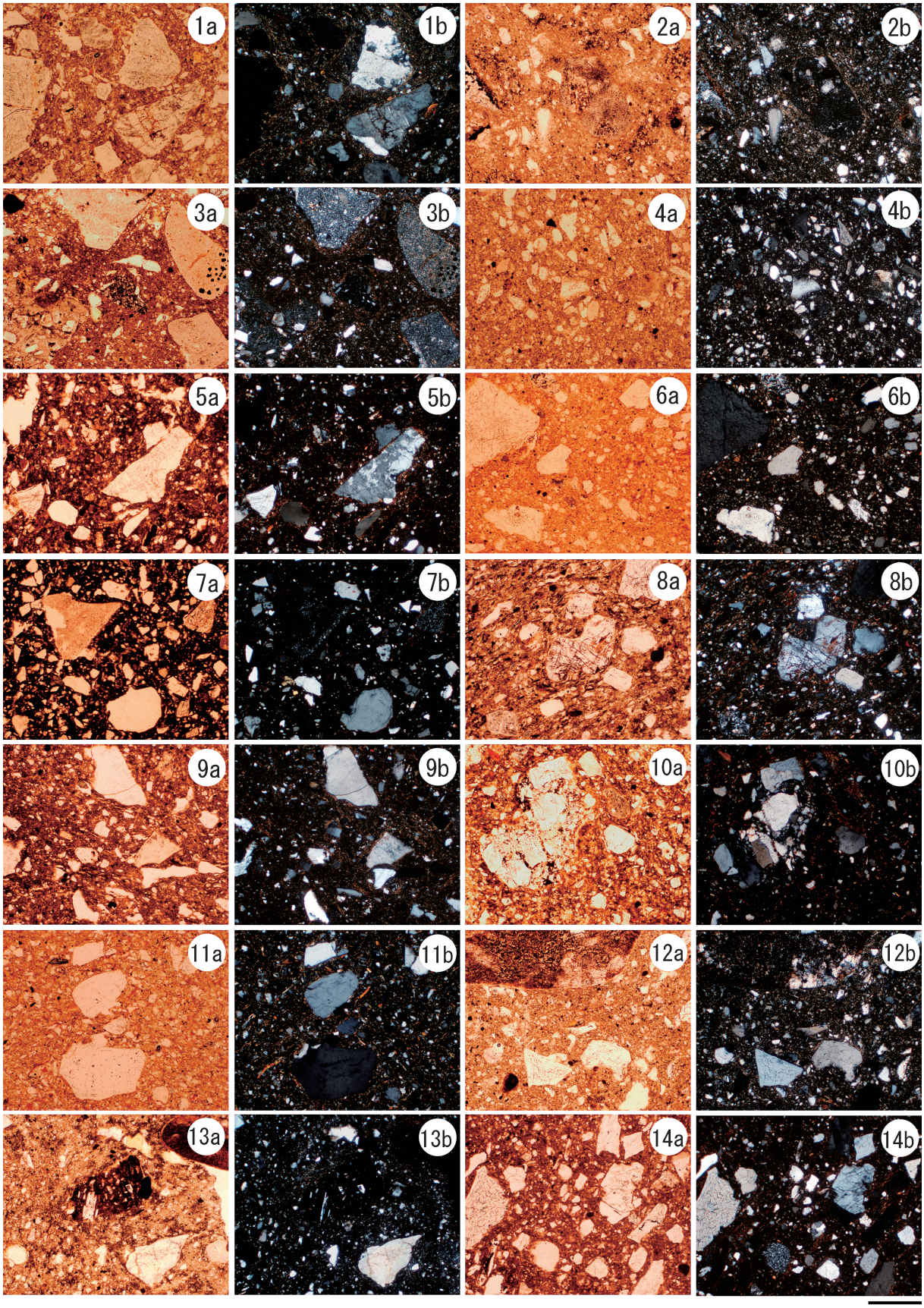
管野稔洋・嶋田有里奈・福岡孝昭・藤根　久（2010）土器中軽石の起源 - 千葉県長平台遺跡と鹿児島県牟礼川遺跡の場合 -．日本文化財科学会第 27 回大会研究発表要旨集，126-127．

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20．

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－．日本考古学協会編「日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨」：153-156，日本考古学協会．

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス [日本列島とその周辺]．東京大学出版会、336p．

日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会編（1988）『日本の地質５中部地方Ⅱ』．共立出版，310p．



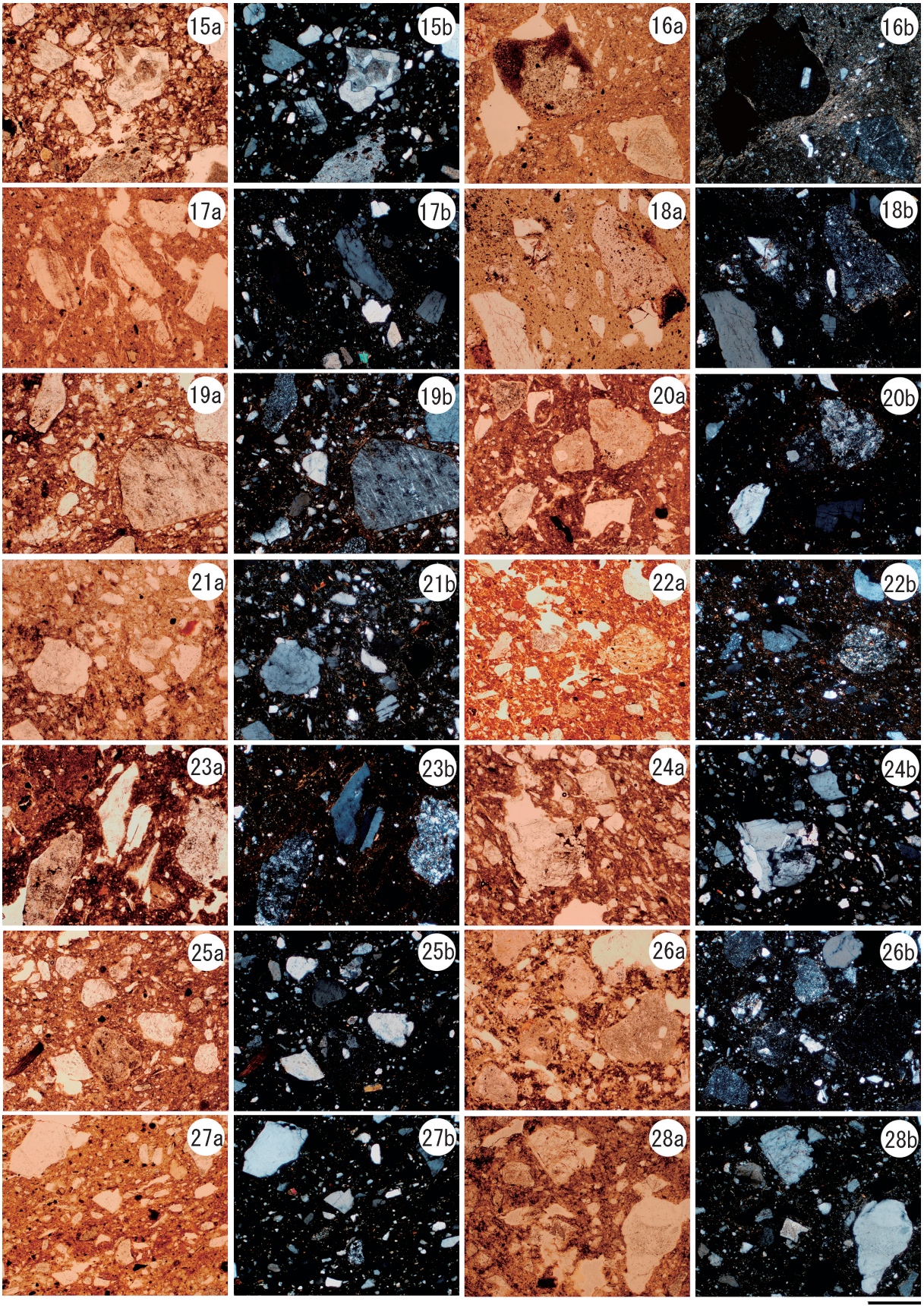
図版1　分析試料の偏光顕微鏡写真（a:開放ニコル、b: 直交ニコル、bar:500μm）

1a-1b. 分析No. 1　2a-2b. 分析No. 2　3a-3b. 分析No. 3　4a-4b. 分析No. 4　5a-5b. 分析No. 5　6a-6b. 分析No. 6

7a-7b. 分析No. 7　8a-8b. 分析No. 8　9a-9b. 分析No. 9　10a-10b. 分析No. 10　11a-11b. 分析No. 11　12a-12b. 分析No. 12

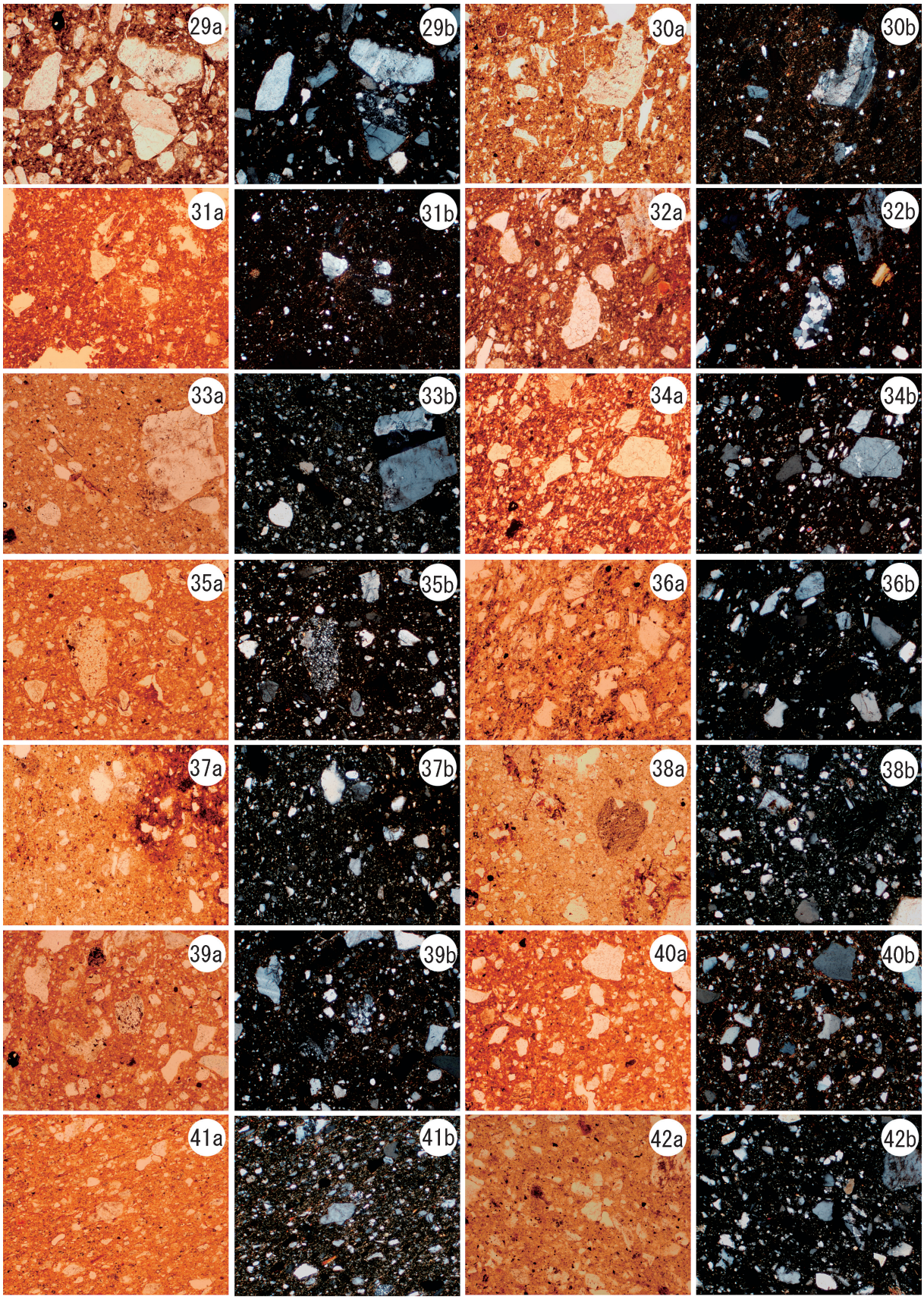
13a-13b. 分析No. 13　14a-14b. 分析No. 14

図版 1　分析試料の偏光顕微鏡写真



図版2　分析試料の偏光顕微鏡写真（a:開放ニコル、b: 直交ニコル、bar:500μm）
15a-15b. 分析No. 15　16a-16b. 分析No. 16　17a-17b. 分析No. 17　18a-18b. 分析No. 18　19a-19b. 分析No. 19　20a-20b. 分析No. 20
21a-21b. 分析No. 21　22a-22b. 分析No. 22　23a-23b. 分析No. 23　24a-24b. 分析No. 24　25a-25b. 分析No. 25　26a-26b. 分析No. 26
27a-27b. 分析No. 27　28a-28b. 分析No. 28

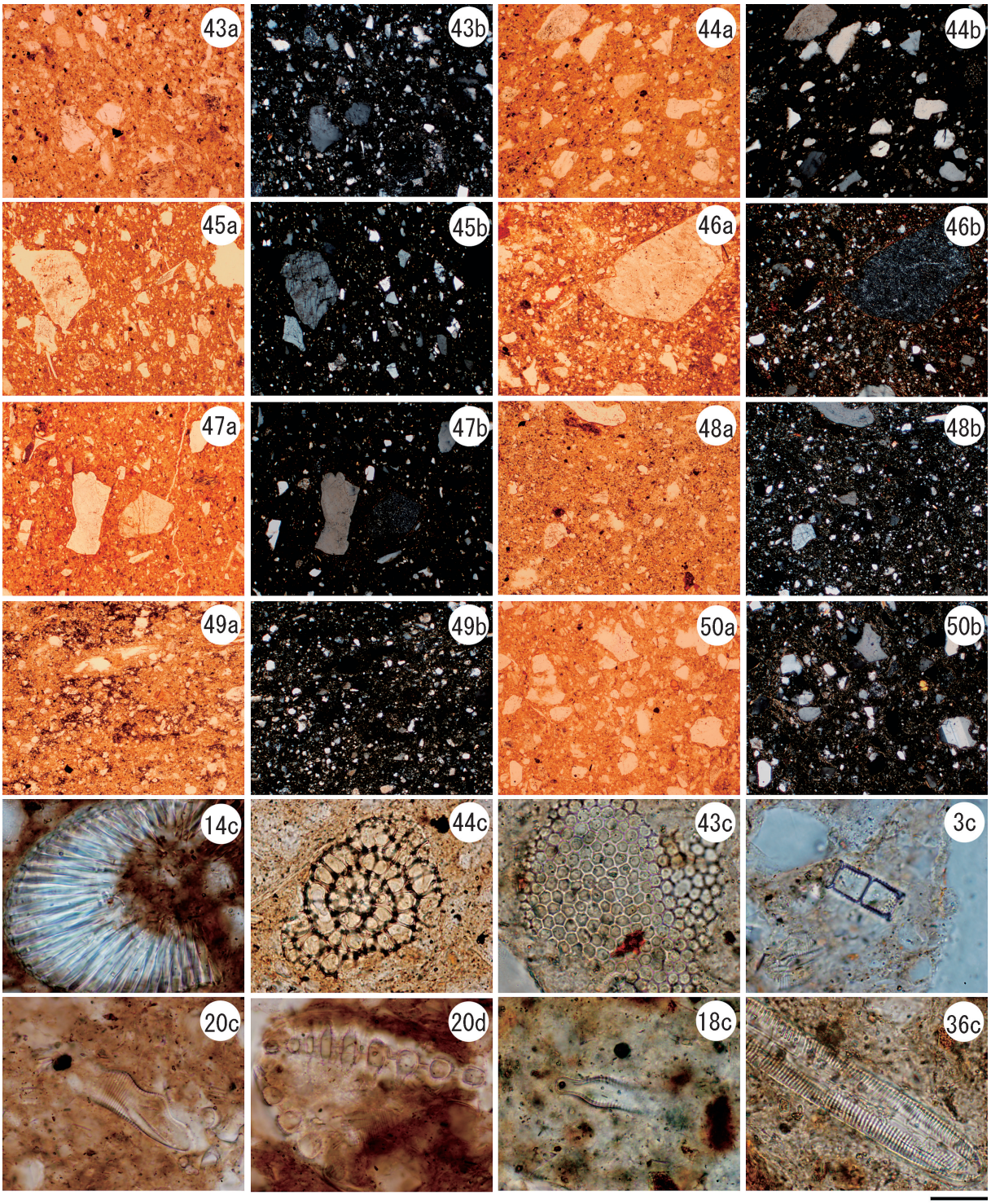
図版２　分析試料の偏光顕微鏡写真



図版3　分析試料の偏光顕微鏡写真（a:開放ニコル、b: 直交ニコル、bar:500μm）

29a-29b. 分析No. 29　30a-30b. 分析No. 30　31a-31b. 分析No. 31　32a-32b. 分析No. 32　33a-33b. 分析No. 33　34a-34b. 分析No. 34
35a-35b. 分析No. 35　36a-36b. 分析No. 36　37a-37b. 分析No. 37　38a-38b. 分析No. 38　39a-39b. 分析No. 39　40a-40b. 分析No. 40
41a-41b. 分析No. 41　42a-42b. 分析No. 42

図版３　分析試料の偏光顕微鏡写真



図版4　分析試料の偏光顕微鏡写真（a:開放ニコル、b: 直交ニコル、bar:500μm）
43a-43b. 分析No. 43　44a-44b. 分析No. 44　45a-45b. 分析No. 45　46a-46b. 分析No. 46　47a-47b. 分析No. 47　48a-48b. 分析No. 48
49a-49b. 分析No. 49　50a-50b. 分析No. 50　14c. 放散虫化石(20μm)　44c. 放散虫化石(50μm)
43c. 海水種珪藻化石*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属(20μm)　3c. 淡水種珪藻化石*Aulacosira ambigua*(20μm)
20c. 淡水種珪藻化石*Eunotia monodon*(20μm)　20d. 淡水種*Surirella*属(20μm)
18c. 淡水種珪藻化石*Pinnularia nodosa*(20μm)　36c. 淡水種珪藻化石*Pinnularia viridis*(20μm)

図版４　分析試料の偏光顕微鏡写真

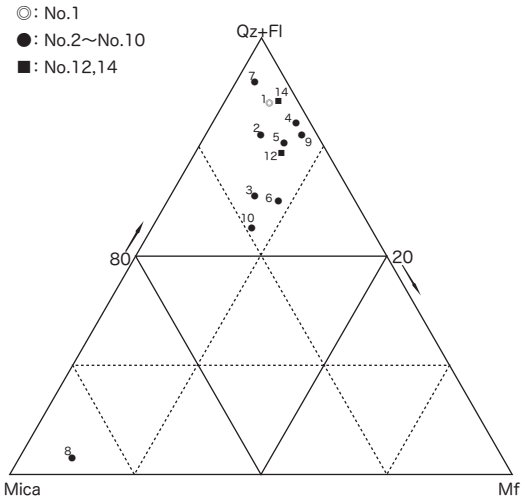
愛知県一宮市町屋遺跡から出土した櫛条痕文系土器の胎土に関する考察

永草　康次

1．はじめに

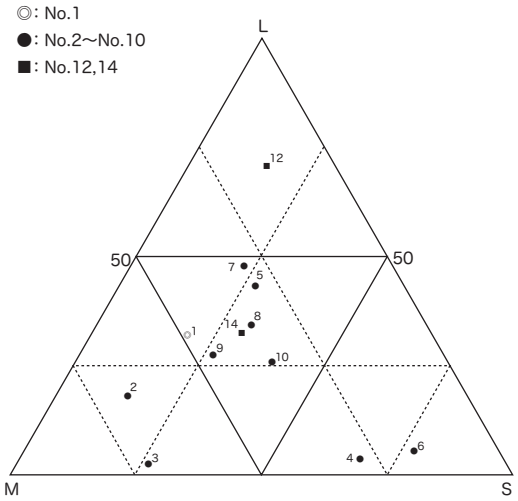
町屋遺跡（愛知県一宮市千秋町）は犬山扇状地先端部に位置し、以前から弥生時代の遺物の発見が報告されていた。近くには猫島遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 2003）などの同時期の遺跡も多い。

町屋遺跡は、愛知県埋蔵文化財センターにより平成19 年から 20 年に調査され、その際自然流路と思われる遺構から、双口壺（第３図）と内傾口縁高坏（第３図１）が互いに深い関係をうかがわせる状態で出土し、注目されるものである。この２点の土器は考古学的には櫛条痕系土器に分類されるが、搬入品である可能性があった。そのため産地推定を目的として、他の町屋遺跡出土弥生土器と愛知県春日井市松河戸遺跡出土の弥生土器を比較試料として胎土分析を行ったので、その結果について報告する。



（Qz+Fl：無色鉱物、Mica：雲母、Mf：雲母以外の有色鉱物）

第１図　主要鉱物三角ダイヤグラム



第２図　粒径三角ダイヤグラム

2．分析試料

今回の調査において、最も注目すべきは上述の双口壺であるが、この試料は破損が少なく、破壊を伴う分析に供することは困難であった。そのため、この土器に関しては非破壊による表面の実体顕微鏡観察にとどめた。また同時に出土した内傾口縁高坏（試料番号１）が、同様に観察した結果非常に類似した胎土であると結論付けることができ、これらは出土状況や考古学的位置づけからも同じ起源を持つと判断し、内傾口縁高坏を分析の試料として提供いただいた。

また、比較試料として同遺跡の弥生時代中～後期の土器９点（試料番号２～ 10）と、春日井市教育委員会のご協力により提供いただいた松河戸遺跡（愛知県春日井市松河戸町）の土器３点（試料番号 12･14･20）の、合計 13 点を対象に分析を行った（第１表・第３図）。

3．分析方法

対象となった試料について、土器表面の実体顕微鏡観察とプレパラートの偏光顕微鏡観察の２方法で分析を行った。詳しい方法は（池本他 1990）等を参照いただきたい。

第１表　町屋遺跡胎土分析試料一覧

試料番号	調査区	グリッド	遺構名・出土位置	層位 No.	取上げ日	器種	時期など
試料１	07Ha	4D14j	検出２	No.047	080208	櫛条痕施文内湾口縁高杯	E07Ha004、弥生時代中期中葉前半（B 期）
試料２	07Id	6D2j	051SK ベルト上	No.211	071207	太沈線施文太頸壺	E07Id044、弥生時代中期中葉前半（B 期）
試料３	07Ia	5D11j	145SK	No.513	080116	広口口縁太頸壺	E07Ia067、弥生時代中期後葉（D 期）
試料４	07Cc	5D19f	086SK	No.154	071130	タタキ調整甕	E07Cc107、弥生時代中期後葉（D 期）
試料５	07Cc	6D1f	051SK	No.672	071207	櫛条痕調整深鉢	E07Cc083、弥生時代中期中葉前半（B 期）
試料６	07Cc	6D2f	051SK	No.322	071204	櫛施文太頸壺	E07Cc072、弥生時代中期中葉前半（B 期）
試料７	07Cc	5D20g	031SK	No.363	071204	太頸壺	E07Cc041、弥生時代中期中葉前半（B 期）
試料８	07Ab		084SD	No.20	080130	櫛施文広口口縁太頸壺	E07Ab004、弥生時代中期中葉後半（C 期）
試料９	07Ab		084SD	No.028	080130	櫛条痕調整深鉢	E07Ab006、弥生時代中期中葉後半（C 期）
試料 10	07Ja	7D15j	010SK		080215	貝殻施文太頸壺	E07Ja003、弥生時代中期前葉（A 期）、縄文施文
試料 12	松河戸安賀 D	F14・F15	SD75 ３層(Ⅲ区)	南溝部	970910	壺口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ
試料 14	松河戸安賀 B		SD44			条痕文系壺肩部	弥生時代前期、貝殻条痕
試料 20	松河戸安賀 D		SD75			壺肩部	弥生時代前期、遠賀川式古いタイプ

４．分析結果

（１）試料番号１　内傾口縁高坏（弥生時代中期中葉後半）

土器表面の実体顕微鏡観察結果から、今回同時に出土した双口壺と共通の特徴を有する。

比較的よく締まった暗褐色の素地中に、淘汰のよい１mm 前後の砂礫中には、長石が目立って含まれており、土器を特徴づける。砂礫の量自体は多くなく、内表面の 11 視野で 188 粒と、基準の 200 粒に満たなかった（１視野平均約 17.1 粒）が、データはほかの試料と同等に扱う。

無色鉱物のほか、花崗岩片が含まれる。偏光顕微鏡下でも、花崗岩とそれに由来する黒雲母・角閃石が観察され、それらに加えわずかながらチャート片がみられた。

（２）試料番号２～10　町屋遺跡比較試料（弥生時代中期前葉～後葉）

試料番号２～５，９，10 は、実体顕微鏡観察・偏光顕微鏡観察の両方でチャートの存在が目立ち、これに加え偏光顕微鏡下で火山岩が伴い、またそれに由来する斜方輝石が含まれることがある。

試料番号６は、ほかの試料に比べ土器表面に小片も含めて白雲母が多く、偏光顕微鏡下でも火山岩やそれに伴う輝石が確認できなかった。

試料番号７は、粗粒の砂礫が極端に多く含まれる。無色鉱物の割合が多く、岩片には花崗岩・チャートが含まれる。

試料番号８も粗粒岩片が多いが、７とは異なり黒雲母が他に比べ極端に多い。偏光顕微鏡下でも花崗岩が多く、チャートが伴う。

（３）試料番号 12，14，20　松河戸遺跡比較資料（弥生時代前期）

比較試料として分析を行った、松河戸遺跡出土試料３点である。

試料番号 12 は、肉眼的には松河戸遺跡で多数を占めるタイプである。偏光顕微鏡下においてチャートに加え比較的多くの火山岩片を含むことで特徴づけられる。

試料番号 14 は、表面の特徴から試料番号１および双口壺と関連が考えられる土器である。分析の結果もやはり類似した傾向があることがわかった。

試料番号 20 は、尾張西部との関連が予想される土器である。土器中の砂礫が極端に少なく緻密な印象を受ける。砂礫組成では、チャート・花崗岩の岩片が多くを占め、偏光顕微鏡下では視野中に火山岩は認められなかった。

５．分析試料土器の産地と考察

（１）町屋遺跡比較試料

比較試料のうち、チャート・火山岩・斜方輝石に特徴づけられる一群は、これまでの筆者による分析から尾張平野産の土器胎土としてよいと考えられる。中に試料番号２，４には火山ガラスが、試料番号４にはさらにプラントオパールがみられ、胎土素地にやや異なる特徴があり、小地域差や調整時に複数種類の素地を混和するなどの調整があった可能性もあるが、大局的には同じ産地と考えてよい。

試料番号６は、尾張平野でもより西部産の土器と思われる。この試料にも土器表面で火山ガラスが観察できる。

試料番号７は、構成する砂礫種からは花崗岩地質の影響が大きいと判断されるが、その特定は困難である。これまでに分析を行った試料の中では、三重県北部等が候補として挙げられるが、比較的円磨度の高い粗粒砂礫が多く含まれる表面的な組織は、後述の松河戸遺跡産の土器に類似する。

試料番号８は、土器表面での黒雲母の多さが特徴的であり、その点を除けば試料番号７に共通の組織を有するといえる。

（２）松河戸遺跡出土試料

試料番号 12 は、上述のように外観では松河戸遺跡で多数を占めるタイプである。具体的には素地中に円磨度の高い大粒（＞２mm）の砂礫が極端に多く、場合によっては脱落が多数認められる一群で、同様の土器は一宮市周辺の複数の遺跡で一定数見ることができ（町屋遺跡試料番号７等）、その起源との関連が予想される土器であった。

しかしながら分析の結果胎土中に火山岩片が多数含まれるなど、これまでに分析を行った庄内川流域の土器胎土とは大きく異なり、木曽川流域の土器胎土に類似するという結果となった。火山岩片の量比や粒度などから、木曽川中流域との関連を伺わせる。また試料番号７とは表面的には類似するが、砂礫組成は大きく異なることがわかった。

今回の松河戸遺跡出土土器からは、類似試料がこの１点のみの分析であったため、今後同様の土器の分析を進め、町屋遺跡出土の試料番号７の様に一宮周辺で見られるこの一群の土器と、松河戸遺跡との関連を再考することが必要である。

試料番号 14 は、上述のように試料番号１（内傾口縁高坏）および双口壺との類似性が認められる。その胎土の起源については以下に述べる。

試料番号 20 は肉眼的な特徴からは尾張西部に類似するが、砂礫が細粒であるため極端に少なく、詳細は不明である。火山岩片が認められないことを除けば、町屋遺跡試料番号９と類似しており、砂礫の少なさゆえに火山岩が認められなかったが、町屋遺跡を含む尾張西部の遺跡との関連も考えられる。

（３）内傾口縁高坏と双口壺

さて内傾口縁高坏であるが、チャートがわずかに含まれるものの花崗岩地質の影響が強いことは明らかであり、町屋遺跡産の比較試料にも似た傾向の土器はみられるが、表面での長石の占める割合が高い点などからは区別される。一般に無色鉱物では、その硬度から石英の占める割合が多い場合がほとんどである。現在までの分析対象とした遺跡では、同様の胎土の土器が試料中に含まれることはあっても、その産地を特定するには至っていない。

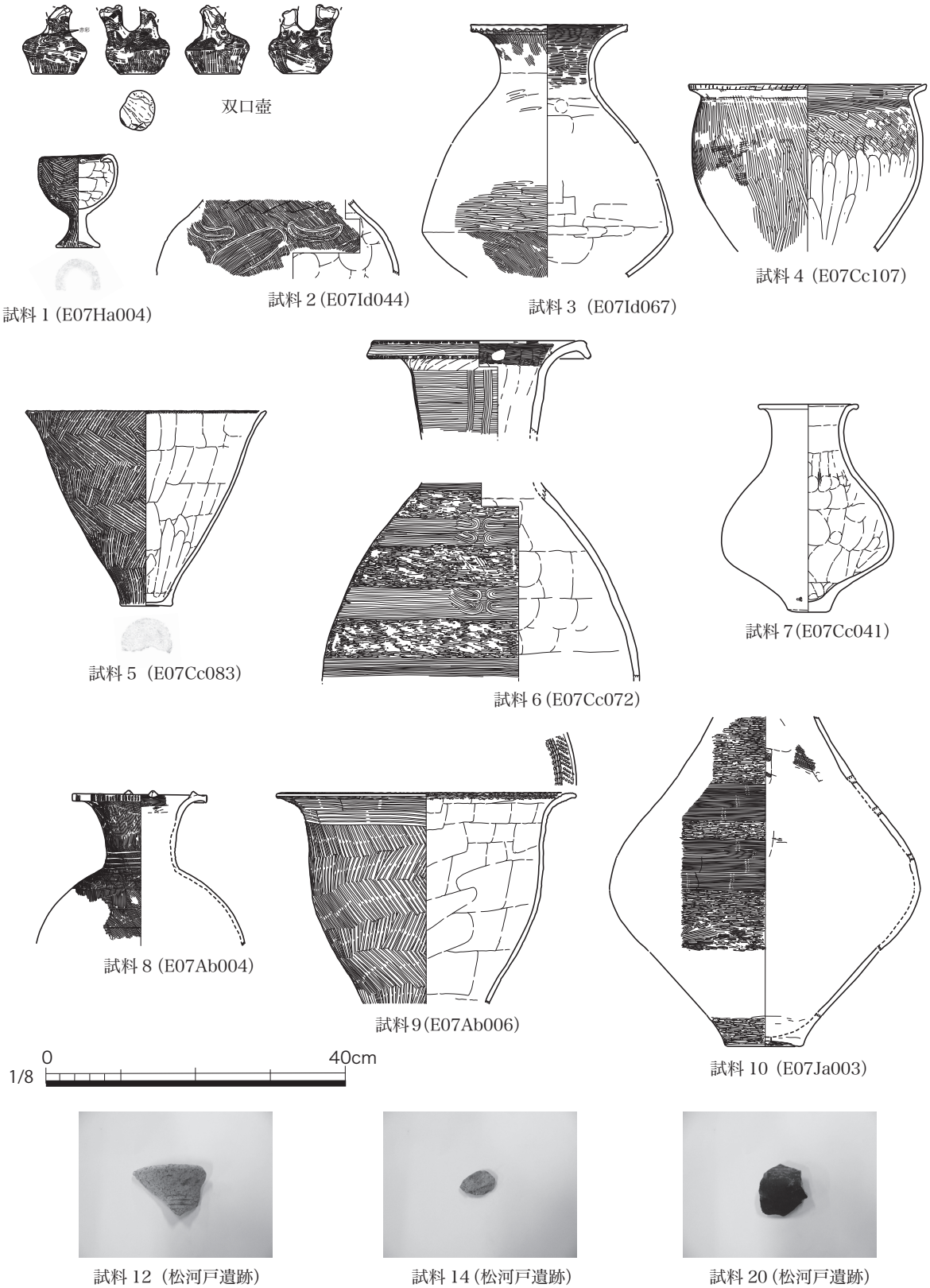
詳細な胎土分析の対象にはなっていないが、これまでに訪れた遺跡や土器表面を観察した土器の中では、岐阜県多治見市に共通の特徴を見いだすことができる。今回、多治見市文化財保護センター矢部氏にご協力により、平田遺跡（多治見市太平町）、喜多町西遺跡（同市喜多町）の土器の観察の機会をいただいた。比較の結果、素地の色合いや砂礫の構成比率など若干の差はあるものの、長石の入り方など肉眼的には比較的似た胎土の土器があり、今回分析した内傾口縁高坏や、それと共通の胎土の双口壺が、庄内川（土岐川）の中・上流にあたる多治見市あるいはその周辺地域に起源を求めることができる可能性が考えられる。庄内川（土岐川）に沿ってその南側に走る屏風山断層・笠原断層の南側には、広く花崗岩類が分布しており、地質にも整合するといってよい。

また、松河戸遺跡の出土土器の中にも、前述の試料番号 14 だけでなく、いわゆる条痕紋系の土器に同様の土器が含まれている可能性があり、今回注目すべき双口壺も含め、松河戸遺跡や町屋遺跡が、庄内川を介してその上流域と交流があったことが考えられる。

ただし、多治見市近辺には弥生時代の遺跡は多くはなく、現在までに得られている情報のみで詳細を把握することは難しい。今後の該当地域の調査の進展や、詳細な胎土分析を待ちたい。

６．謝辞

分析にあたり、愛知県埋蔵文化財センター蔭山誠一氏および鬼頭剛氏には、試料の提供をはじめとし、多くのご協力を賜った。春日井市教育委員会文化財課村



第３図　胎土分析資料実測図（１：８）・写真

第２表　実態顕微鏡観察結果

サンプル No.	黒雲母	白雲母	角閃石	斜方輝石	単射輝石	カンラン石	ジルコン	火山岩	花崗岩	チャート	砕屑性堆積岩類	火山性堆積岩類
N1	○	－	△				(－)		◎	△		－
N2	○	(－)	－	(－)				△	○	◎		
N3	○	(－)	△	(－)				△	△	◎		
N4	－						(－)	(－)	－	○		
N5	△		△	－				△	△	○		
N6	○	－							○	◎	(－)	
N7	－	(－)							○	△	(－)	
N8	(－)		△						○	△	(－)	
N9	○		△					△	△	○		
N10	△	(－)	△	(－)				△	○	○		
N12	△	－						△	○	○		
N14									○	△		
N20	△						(－)		○	○		

第３表　偏光顕微鏡観察結果１

No.1	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	16	2	0	0	0	0	0	1	0	19		
M	57	3	0	0	1	0	4	0	0	65		
S	72	21	3	1	6	0	1	0	0	104	視野数	1視野平均
合計	145	26	3	1	7	0	5	1	0	188	11	17.1

No.2	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	2	1	1	0	0	0	0	1	1	6		
M	40	1	1	0	1	0	0	3	4	50		
S	35	1	1	1	3	0	0	0	0	41	視野数	1視野平均
合計	77	3	3	1	4	0	0	4	5	97	8	12.1

No.3	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
M	42	4	1	0	0	0	0	3	8	58		
S	60	5	9	0	9	0	0	2	1	86	視野数	1視野平均
合計	103	9	10	0	9	0	0	5	9	145	7	20.7

No.4	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1		
M	8	1	0	0	2	0	0	5	4	20		
S	160	7	0	2	11	0	0	7	3	190	視野数	1視野平均
合計	168	8	0	2	13	0	0	13	7	211	8	26.4

No.5	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	9	1	0	0	0	0	2	1	0	13		
M	14	2	0	0	0	0	0	1	1	18		
S	55	13	2	1	7	0	0	0	0	78	視野数	1視野平均
合計	78	16	2	1	7	0	2	2	1	109	7	15.6

No.6	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
M	6	1	0	0	0	0	0	0	0	7		
S	95	12	1	7	12	2	0	0	0	129	視野数	1視野平均
合計	102	13	1	7	12	2	0	0	0	137	6	22.8

No.7	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	23	6	0	0	0	0	2	0	1	32		
M	42	1	0	0	0	1	0	0	0	44		
S	115	12	5	0	3	0	0	0	0	135	視野数	1視野平均
合計	180	19	5	0	3	1	2	0	1	211	10	21.1

No.8	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	16	0	0	0	0	0	1	0	2	19		
M	37	1	4	0	0	0	0	0	0	42		
S	69	6	65	3	9	0	0	0	0	152	視野数	1視野平均
合計	122	7	69	3	9	0	1	0	2	213	8	26.6

第３表　偏光顕微鏡観察結果２

No.9	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	11	0	0	0	0	0	3	0	1	15		
M	52	3	0	0	0	0	0	0	0	55		
S	93	17	2	0	15	0	0	0	3	130	視野数	1視野平均
合計	156	20	2	0	15	0	3	0	4	200	9	22.2

No.10	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	11	1	0	0	0	0	0	0	0	12		
M	31	2	2	0	1	0	0	0	1	37		
S	115	18	18	0	16	0	0	0	1	168	視野数	1視野平均
合計	157	21	20	0	17	0	0	0	2	217	9	24.1

No.12	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	16	0	0	0	0	0	0	1	1	18		
M	4	1	1	0	0	0	0	2		8		
S	30	1	1	0	4	0	0	0		36	視野数	1視野平均
合計	50	2	2	0	4	0	0	3	1	62	3	20.7

No.14	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	15	3	0	0	0		0	0	0	18		
M	35	11	0	0	0		0	0	0	46		
S	119	15	3	0	9		0	0	0	146	視野数	1視野平均
合計	169	29	3	0	9	0	0	0	0	210	10	21.0

No.20	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L										0		
M										0		
S										0	視野数	1視野平均
合計	○	△	＋	＋	＋			－		0	砂礫極少	1～2程度

松一秀氏および浅田博造氏、若杉尚代氏には、松河戸遺跡をはじめとする資料観察と資料提供をはじめとする多大なご協力をいただいた。多治見市文化財保護センターの矢部由美子氏には、多治見市出土土器との比較にあたり、便宜をいただいた。記して感謝の意を表す。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 107 集）猫島遺跡（2003），387.

池本正明・永草康次・楯真美子（1990）岡島遺跡の土器胎土の特徴．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 14 集）岡島遺跡，51-63.

池本正明・永草康次・楯真美子（1990）岡島遺跡の土器胎土に関する考察．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 14 集）岡島遺跡，98-101.

永草康次（1992）朝日遺跡出土の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 31 集）朝日遺跡Ⅱ（自然科学編），299-314.

永草康次（1993）岡島遺跡の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 43 集）岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡，142-152.

永草康次（1994a）朝日遺跡 sz162 出土の土器胎土．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 34 集）朝日遺跡Ⅴ，322-328.

永草康次（1994b）伊勢湾岸地域の土器胎土－弥生時代から古墳時代を中心として－．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書(第 34 集）朝日遺跡Ⅴ，355-362.

永草康次（1998）一色青海遺跡出土土器の岩石学的手法による胎土分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 79 集）一色青海遺跡（自然科学・考察編），101-108.

永草康次・蔭山誠一（2001）川原遺跡出土弥生中期土器の胎土分析とその考古学的評価．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 91 集）川原遺跡（第三分冊），61-70.

永草康次・蔭山誠一（2003）猫島遺跡出土弥生土器の分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 107 集）猫島遺跡，130-140.

永草康次（2007）朝日遺跡（2001 年度・2002 年度出土）における土器胎土の岩石学的分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 138 集）朝日遺跡Ⅶ（第三分冊），143-145.

森勇一・永草康次・楯真美子（1989b）町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 9 集）町田遺跡，50-53.

森勇一・永草康次・楯真美子（1989b）町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第 9 集）町田遺跡，50-53.

森勇一・永草康次・楯真美子（1989a）尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について．

愛知県一宮市町屋遺跡採集資料の分析

蔭山　誠一

町屋遺跡は一宮市南東部にある遺跡で、木曽川扇状地の末端にあたる地域に位置する。平成 19 年度の町屋遺跡発掘調査終了後、私は町屋地区の弥生時代の資料を所蔵される方からご協力を頂き、その発掘調査地点の周辺にて採集された資料を実見・調査する機会を得た。以下において、その資料の概要を報告する。

1．安藤春雄氏所蔵資料（第 1 図～第 3 図）

安藤春雄氏により 07D 区の南西 100m 地点付近にある畑地で、近年採集された土器、石器、鉄滓（椀形鉄滓 1 点）などがある。

（1）土器

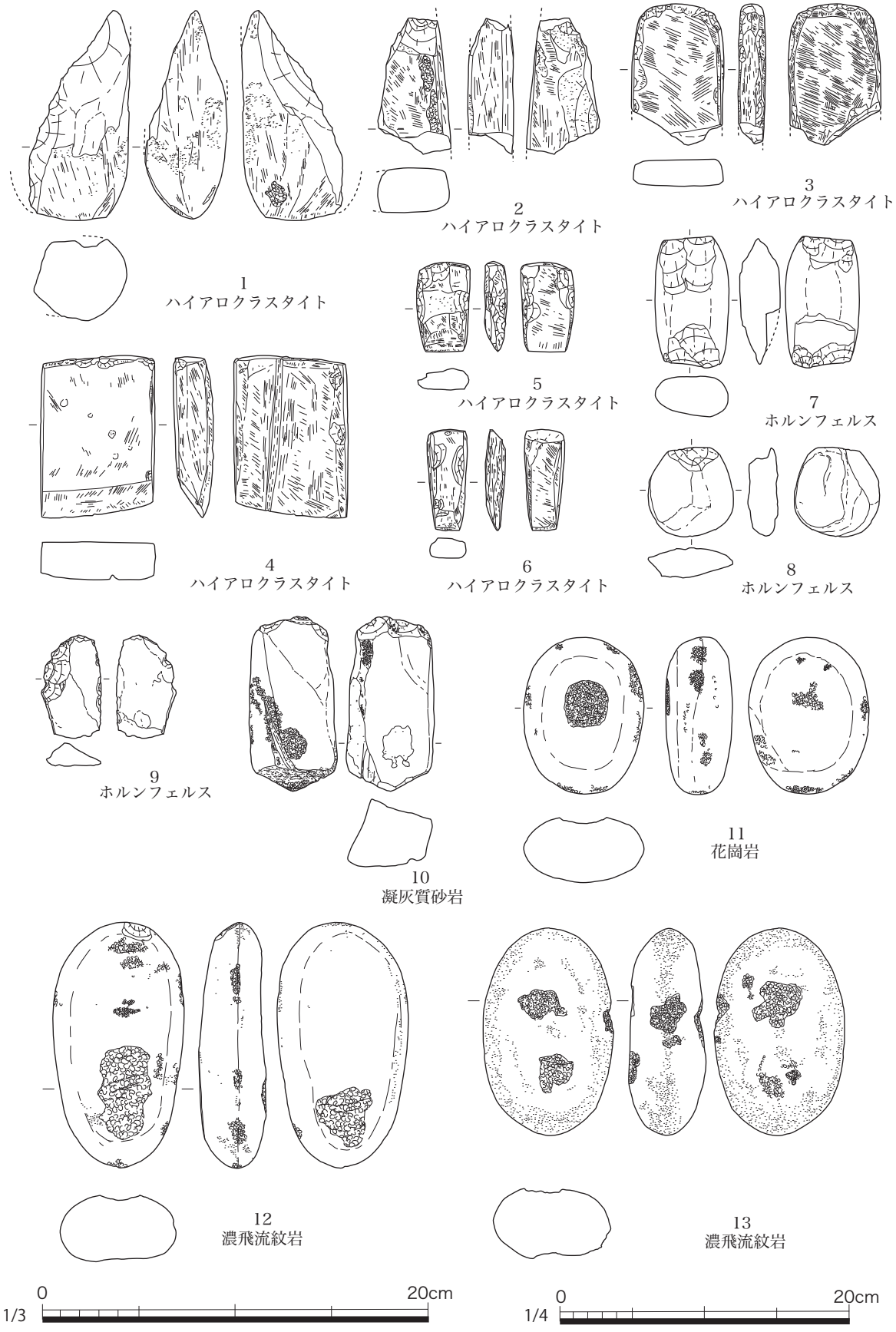
土器・陶器には、弥生土器 5 点、布目平瓦片 1 点、他土器片 3 点があり、弥生土器には貝殻施文太頸壺 1 点、台付甕？ 1 点、有孔蓋 1 点、貝田町式細頸壺底部片 1 点、凹線文期の太頸壺片 1 点があった。また一宮市博物館所蔵安藤春雄氏寄贈資料に弥生土器片が保管されているコンテナ 2 箱が別にある。弥生土器の構成は、弥生時代中期前葉では貝殻条痕調整壺片 11 点、貝殻条痕調整深鉢 3 点、貝殻条痕調整厚口鉢 1 点、弥生時代中期中葉前半では櫛施文受口口縁細頸壺 10 点、ハケ調整深鉢 1 点、櫛条痕調整深鉢 8 点（弥生時代中期中葉後半に及ぶ可能性あり）、櫛施文太頸壺の底部 5 点（弥生時代中期中葉後半に及ぶ可能性あり）、高杯脚部 1 点､弥生時代中期中葉後半では､櫛施文太頸壺 1 点、櫛施文細頸壺 15 点、ハケ調整甕 14 点、櫛条痕調整深鉢 11 点（他に体部片 65 点ある）、弥生時代中期後葉では凹線文太頸壺 12 点、凹線文細頸壺 6 点、西三河系太頸壺 1 点、凹線文鉢 ?1 点、高杯脚部 1 点、タタキ調整甕 15 点、内面ケズリ甕 21 点、受口口縁甕 1 点、弥生時代後期では「く」の字口縁内面ケズリ甕 5 点、時期不明の壺片が他に 13 点ある。

弥生土器は弥生時代中期前葉～弥生時代中期後葉のものが多数あり、弥生時代後期のものが少量ある。

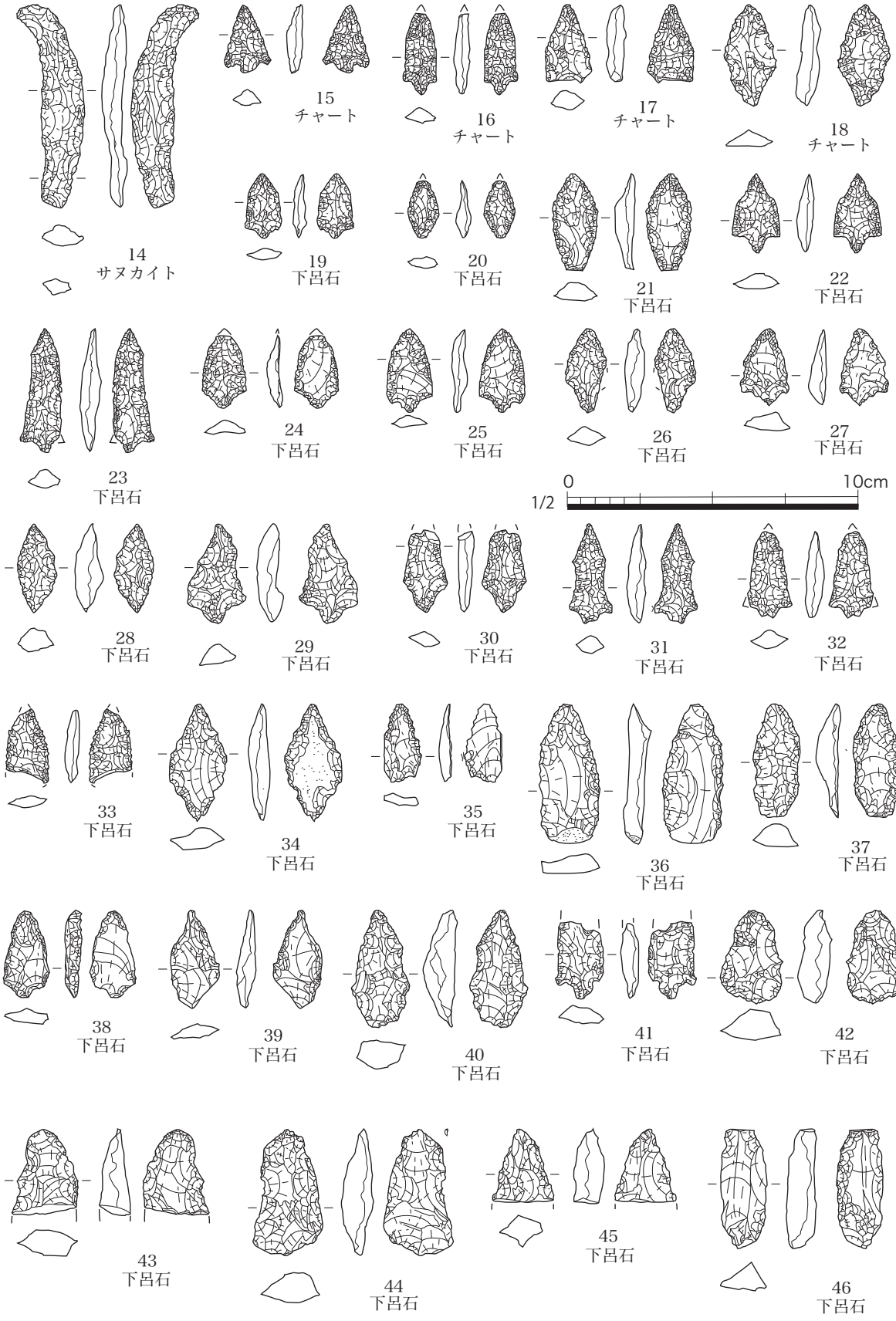
（2）石器

石器ではハイアロクラスタイト製磨製石斧 6 点（両刃石斧 2 点、片刃石斧 4 点）、ホルンフェルス製石錘 2 点、ホルンフェルス製刃器 1 点、サヌカイト製石小刀 1 点、サヌカイト製剥片 1 点、下呂石製打製石鏃 15 点、下呂石製打製石器未成品（押圧剥離が認められるもの）31 点、下呂石製両極加工剥片 26 点、下呂石製剥片 27 点、チャート製打製石鏃 4 点、チャート製剥片 3 点、凝灰質砂岩製砥石 1 点、砂岩製砥石 1 点、変成岩製砥石 1 点、タタキ石･凹み石 12 点（内 2 点に線状痕あり、花崗岩製 1 点、砂岩製 5 点、安山岩製 1 点、ホルンフェルス製 1 点、濃飛流紋岩製 5 点）、被熱礫 4 点、珪化木 1 点、小礫多数、高師小僧多数がある。

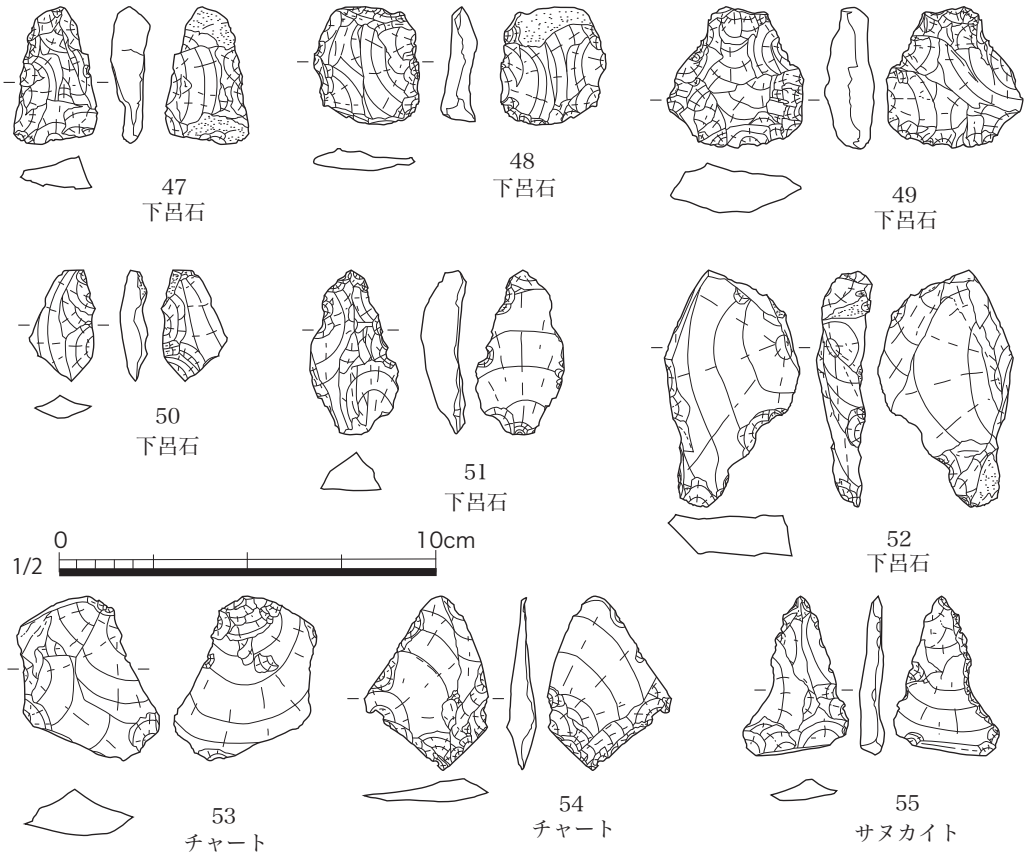
この中で、重要と思われる石器を 55 点実測したものが第 1 図～第 3 図である。磨製石斧は、全てハイアロクラスタイト製で、1 が両刃石斧の刃部、2 がやや基部に近い両刃石斧の身部である。3・4 はやや大型の扁平片刃石斧の身部で 3 が厚み 1.4cm、5 が長さ 8.0cm、幅 5.9cm、厚み 2.0cm で身部の片面に長辺に沿った擦切り溝があり、より小型の扁平片刃石斧への加工途上のものであろうか。5・6 は小型の扁平片刃石斧で、5 が長さ 4.6cm、幅 2.7cm、厚み 1.2cm、6 が長さ 5.2cm、幅 2.1cm、厚み 1.05cm をはかる。これらは基部より刃部の幅が細くなっているものである。7・8 がホルンフェルス製の石錘と思われるもので、7 は石材の短辺部に打ち欠きがあり、8 も短辺側の片側であるが打ち欠きがある。9 はホルンフェルス製の刃器と思われるもので、断面三角形の剥片の一部が片面加工され、刃状になっている。10 は凝灰質砂岩製の砥石で長さ 12.0cm、幅 5.8cm、厚み 4.6cm をはかり、研磨面が形成された後に敲石として使用されたと思われる敲打痕や敲打による凹みがみられる。11 ～ 13 は敲石･凹み石で、11 が花崗岩製で長径 10.9cm、短径 8.3cm、厚み 4.6cm、12 が濃飛流紋岩製で長径 17.0cm、短径 9.0cm、厚み 4.5cm、13 が長径 14.3cm、短径 9.0cm、厚み 5.2cm のもので、12・13 の凹み部では、敲打による凹みが線状になっているものがみられる。14 ～ 55 は打製石器で、14 がサヌカイト製の石小刀、15 ～



第１図　安藤春雄氏所蔵資料（１）（１～６は１：３、７～１３は１：４）



第２図　安藤春雄氏所蔵資料（２）



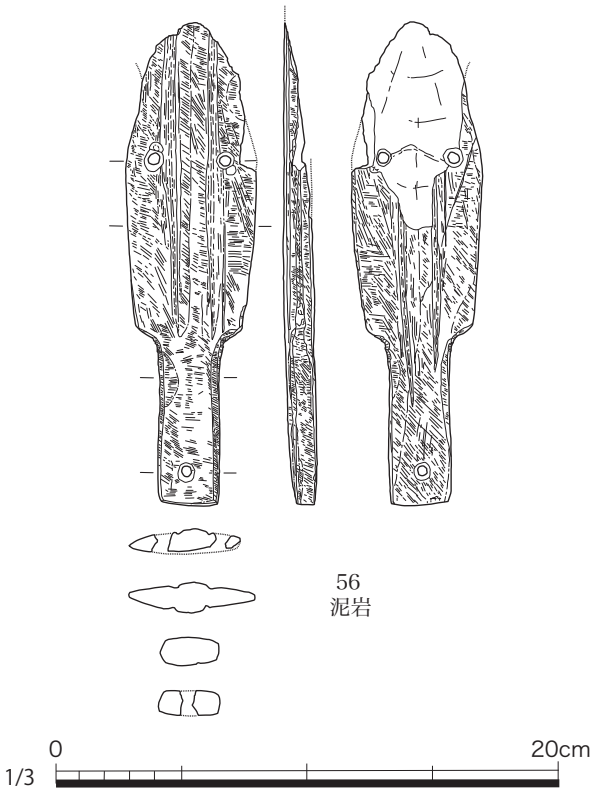
第３図　安藤春雄氏所蔵資料（３）

18 がチャート製の石鏃とその未製品、19 ～ 41 が下呂石製の石鏃、42 ～ 49 が下呂石製の両極石器、50 ～ 52 が下呂石製の両極剥片、53・54 がチャート製の両極剥片、55 はサヌカイト製の石器加工品である。14 は長さ 6.9cm、幅 1.5cm、厚み 0.75cm の優品で、町屋遺跡では唯一の完形品である。石鏃では 23・31・41 が基部から逆刺部のつくりが丁寧な平面五角形石鏃になるもの、15・16・19・22・24・25・27・29・30・32・38 は有茎石鏃で、逆指部から先端までがほぼ平面三角形状になる 15 と先端からやや左右の刃部が作り出される 19・22・24・25・27・30・32 があり、他は先端からの左右の作り出しが不明瞭に膨らむものである。29 は基部から先端部の軸線が曲がっており、失敗品の可能性がある。18・20・21・26・28・34・35・36・37・39・40 は未製品の可能性のあるものを含むが、逆刺部の作り出しがない平面柳葉形から菱形状のものである。42 ～ 49 は両極打撃による加工品で、42 ～ 47 は石鏃の形態を意識した平面長い三角形のもの、48・49 は平面楕円形から隅丸台形のもので石鏃の製品・未製品より厚みが大きいものである。50 ～ 52 は両極打撃により派生する両極剥片と思われるもので、縁辺に剝離加工がみられる。53・54 も両極打撃による派生する剥片の可能性があるものである。55 はサヌカイト製の加工品で、定型的な製品とはいえないので、町屋遺跡においてサヌカイト製品の加工が行われたことを示す資料として重要なものである。

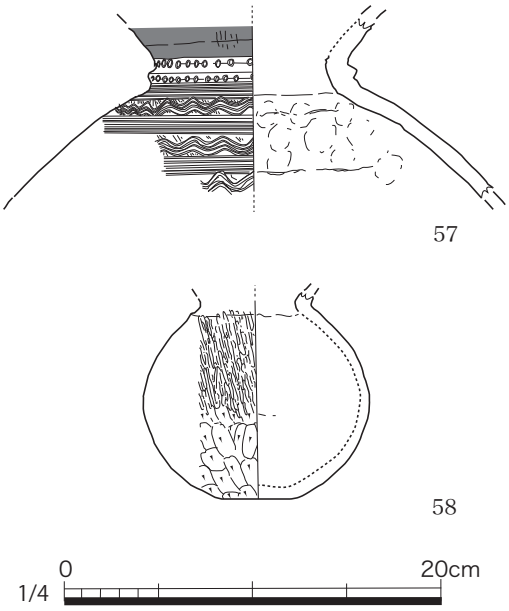
2. 長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料（第４図）

長谷川昭三氏により所蔵されていた磨製石剣が１点ある。この磨製石剣は、07Ca 区の西北西約 150m 付近の畑地で採集されたもので、付近では梶田不二男氏など町屋地区の方々により多数の弥生土器と石器が地表面などで採集されている。

56 は泥岩製の磨製有樋式銅剣形石剣で、刃部の先端側を欠損している。現存している長さは 19.2cm、刃部幅 5.2cm、刃部厚み 1.2cm、基部の長さは 6.86cm、



第 4 図　長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料



第 5 図　長谷川稔氏所蔵資料

基部幅 2.4cm、基部厚み 1.1cm をはかる。平面形では刃部の欠損部付近に刳方と考えられる刃部の抉れる部分があり、刳方の基部側が最も幅広になる形態である。刃部の横断面は長い菱形で、刃部の稜の両側で擦切りによる溝状の樋によって脊と翼を区分している。基部の横断面は隅丸長方形で、基部の端際に径 2.3mm 程の両面穿孔の孔があり、柄との組み合わせるための固定用目釘穴と思われる。また刳方の基部側に樋の両側に 1 カ所ずつの孔がある。この 2 つの孔は両面穿孔によるものであるが、片面側で貫通していない凹みがそれぞれ残る。

3．長谷川稔氏所蔵資料（第 5 図）

長谷川稔氏により字花ノ木 07Ic 区の東約 20m 地点付近にて採集された弥生土器が 2 点ある（第 5 図）。

57 は弥生時代後期中頃から後半の赤彩広口壺で、頸部径 10.1cm をはかる。外面の色調は灰白色で、比較的緻密な胎土をもつもので、頸部から口縁部の内面に赤彩がみられる。外面頸部には断面三角形の帯状浮文が貼付けられており、その帯状浮文の上・下に円形管状刺突文列がめぐる。体部上半には、ハケ調整後櫛施文直線文と波状文を交互に上から施文している。

58 は弥生土器とほぼ同時期と思われる瓢（ひさご）形壺で、頸部径 5.8cm、体部径 12.0cm、のもので、体部下半のタテケズリ後体部上半をタテ方向のミガキ調整を施している。この土器も大型方形周溝墓の葬送に関係する土器である可能性がある。

その他

坂重吉により「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」において紹介された用途不明の彫刻のある石器（被熱痕があり、立っていたようですが）1 点と江戸時代以後の青磁の鉢片を利用した砥石用の土器 1 点、礫 1 点がある。

4．まとめ

以上の報告させて頂いた資料について若干の検討を加え、結びとしたい。1 の安藤春雄氏所蔵の資料は、発掘調査地点の南西に位置する地点のもので、『新編一宮市史』において花ノ木遺跡として紹介されている北側の地点の資料である。採集資料には石器を多く含み、かつ弥生時代中期前葉から中期後葉を中心とする発掘調査において得られた遺跡中心部が 07Cc 区付近

から続くことを示すものである。２の長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料は単品ではあるものの、本報告の第４章において町屋遺跡の全体像を分析する上で、遺跡の北西側地点において弥生時代中期後葉に遺跡の中核部分の存在を示す好資料であり、町屋遺跡を代表する遺物といえる。３の長谷川稔氏所蔵資料（第５図57・58）は、本報告にある弥生時代後期の大型方形周溝墓（07Cc003・07Id004）の東隅あたりで出土していることから、葬送に関係する供献土器の可能性があるものである。

以上から、これらの資料は町屋遺跡の構造や性格を考える上で、貴重な資料といえるものである。今後の調査・研究に活かされることを期待したい。

謝辞

町屋遺跡の資料調査にあたり、安藤春雄氏、長谷川昭三氏・長谷川稔氏にはご理解とご協力を頂き、誠にありがとうございました。また一宮市博物館における資料調査では、土本典生氏と松本彩氏にお世話になった。記して感謝の意としたい。

参考文献

梶田不二男 1941.6「丹羽郡千秋村ニ於ける遺物」『尾張の遺跡と遺物』第 29 号（復刻版中巻に所収）
坂重吉 1941.6「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『尾張の遺跡と遺物』第 29 号（復刻版中巻に所収）
大参義一・岩野見司 1967「花ノ木遺跡」『新編一宮市史 資料編二 弥生時代』一宮市

写真図版 1

07Cc 区・07Id 区第 2 面全景（南より）

07Cc 区より遺跡の南西を望む（北東より）

写真図版 2

07Aa 区第 1 面全景（北より）

07Ab 北区第 2 面 110SK と東壁（西より）

07Ab 南区第 1 面全景（北より）

07Ab 南区第 2 面検出状況（北より）

07Ab 南区第 2 面全景、084SD・085SD（北より）

07Ab 南区第 3 面全景（北より）

07Ac 北区第 1 面 045SD（西より）

07Bb 北区第 1 面全景、005SD（北より）

写真図版 3

07Bb 北区第 2 面全景、029SD・030SD（北より）

07Bb 南区第 2 面 023SD（南より）

07Bb 南区第 1 面 017SK（東より）

07Bb 南区第 1 面 018SK（南より）

07Bb 南区第 1 面全景（南より）

07Bb 南区第 2 面 038SD（西より）

07Bb 南区第 2 面 008SD（北より）

07Ca 中区第 1 面 203SK（南より）

写真図版４

07Ca 南区第 1 面全景（北より）

07Ca 中区第 1 面 200SB（南より）

07Ca 中区第 1 面 202SD（南西より）

07Ca 中区第 2 面 217SB（南より）

07Ca 中区第 2 面 208SD（北より）

07Cb 北区第 2 面全景（北より）

07Cb 南区第 2 面全景（南より）

07Cb 南区第 3 面 285SB（東より）

写真図版 5

07Cc 区第 2 面全景（南より）

07Cc 区第 2 面 003SD 南溝断面（北西より）

07Cc 区第 2 面 033SK（南より）

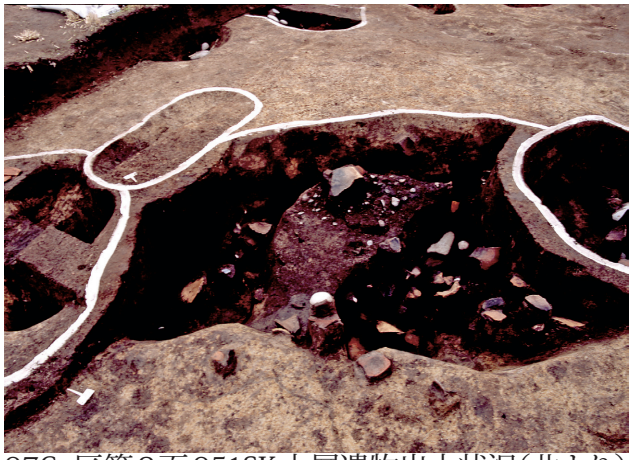
07Cc 区第 2 面 034SK（南より）

07Cc 区第 2 面 008SK（西より）

写真図版 6

07Cc 区第 2 面 031SK（西より）

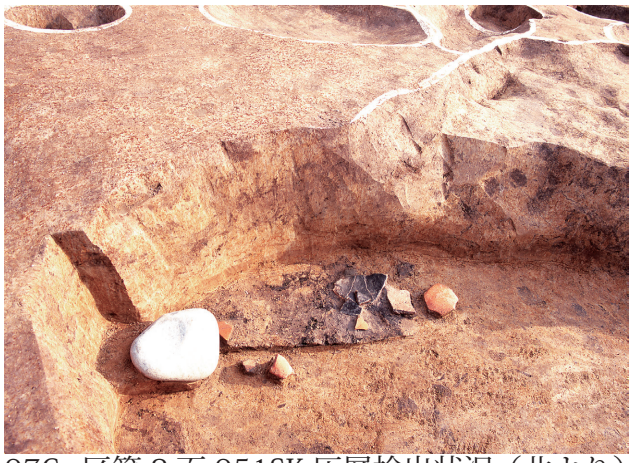
07Cc 区第 2 面 050SK・051SK・055SK（西より）


07Cc区第2面051SK 上層遺物出土状況(北より)

07Cc区第2面051SK 下層遺物出土状況(南より)

07Cc区第2面050SK 下層遺物出土状況(南より)

07Cc区第2面055SK 下層遺物出土状況(南より)


07Cc 区第 2 面 051SK 灰層検出状況（北より）

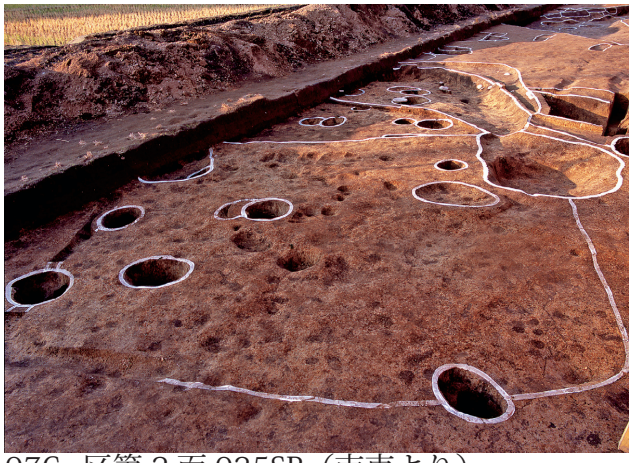
07Cc 区第 2 面 051SK 完掘状況（南西より）

写真図版 7

07Cc区第2面028SB･086SK遺物出土状況(北東より)

07Cc 区第 2 面 028SB・086SK（南東より）

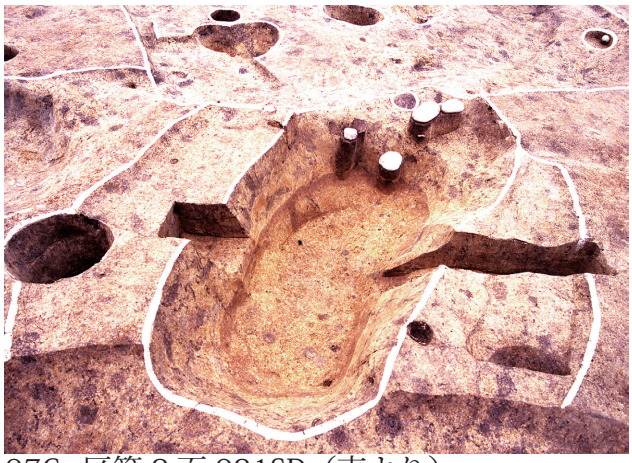
07Cc 区第 2 面 133SK（東より）


07Cc 区第 2 面 035SB（南東より）

07Cc 区第 2 面 048SK（南東より）

07Cc 区第 2 面 041SK（東より）

07Cc 区第 2 面 117SK（西より）


07Cc 区第 2 面 031SD（東より）

写真図版 8

07D 北区第 1 面全景（南より）

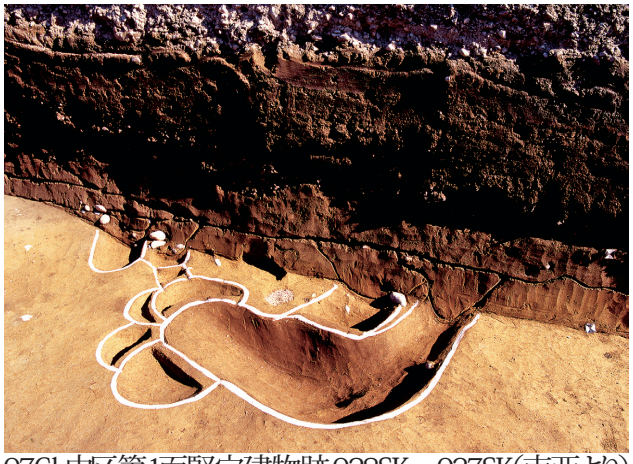
07E 区第 1 面全景（南より）

07Fb 区第 2 面全景（北より）

07Ga 区第 1 面全景（南より）

07Gb 中区第 1 面全景（南より）

07Gb 中区第 1 面 019SK・020SK（南より）



07Gb中区第1面竪穴建物跡028SK～037SK(南西より)

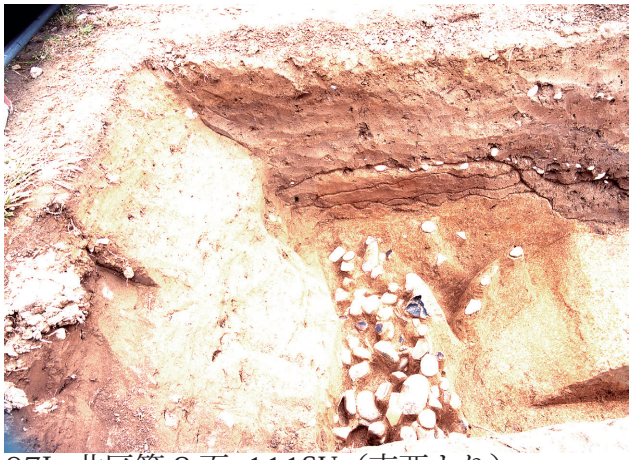
07Gb 中区第 2 面 043NR（北東より）

写真図版 9

07Ha 区第 2 面全景（北より）

07Hb 区第 2 面全景（南より）

07Ia 北区第 2 面全景（南より）


07Ia 北区第 2 面　111SU（南西より）

07Ia 北区第 2 面　112SD（南西より）

07Is 南区第 2 面全景（北より）

07Ia 南区第 2 面 145SK（東より）

07Ja 南区第 1 面全景（南より）

写真図版 10

07Id 区第 2 面 004SD（北東より）

07Id 区第 2 面 005SB・006SB（南東より）

07Id 区第 2 面 006SB 土層断面（南東より）

07Id 区第 2 面 031SK・032SK（南より）

07Id 区第 2 面 051SK（東より）

写真図版 11

櫛条痕施文・調整の双口壺（E07Ha005）と内傾口縁高杯（E07Ha004）

E07Ha005 側面

E07Ha005 斜め上から

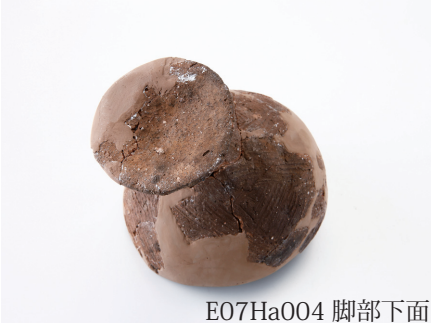
E07Ha005 上面

E07Ha005 側面

E07Ha005 側面

E07Ha005 下面

E07Ha004



E07Ha004 脚部下面

写真図版 12

鳥形土器（E07Cc121）

E07Cc121 正面

E07Cc121 側面

E07Cc121 下面

E07Cb025

E07Id052

E07Ia041

E07Id053

E07Ia007

E07Cc115

写真図版 13

E07Ja002

E07Ja003

E07Cc059

E07Cc064

E07Cc065

E07Cc066

E07Cc074

E07Cc061

E07Cc072

E07Cc081

E07Cc082

E07Cc083

E07Cc019

E07Cc021

E07Cc022

E07Cc023

E07Cc036

写真図版 14

E07Cc040
E07Cc041
E07Cc042
E07Id044
E07Id045
E07Id046
E07Ab004
E07Ab006
E07Bb004
E07Ca025
E07Cb040
E07Hb001
E07Ia067
E07Id033
E07Bb007
E07Bb009
E07Ha002
E07Ha003

写真図版 15

E07Cc116
E07Ca021
E07Ia070
E07Ia022
E07Ia044
E07Ie016
E07Cb024
E07Cc107
E07Ie015
E07Ca033
E07Ca034
E07Ca035
E07Cc006
E07Id012
E07Cc014
E07Aa002
E07Ab002
E07Ab008

写真図版 16

S07Cc002

S07Cc148a

S07Cb028

S07Cc127

S07Cc003

S07Cc037

S07Cc116

S07Cc119

S07Cc004

S07Cc134

S07Cc135

S07Id002

S07Id020

写真図版 17

S07Cb006

S07Cc013

S07Bb009

S07Cc007

S07Ca003

S07Bb005

S07Bb001

S07Cc017

S07Aa002

S07Bb011

S07Bb013

S07Cc015

S07Ie002

S07Ab001

S07Cc018

S07Ie006

S07Ca013

S07Cb016

写真図版 18

S07Ia001

S07Id003

S07Id039

S07Ab003

S07Bb010

S07Cc088

S07Cc112

S07Cb009

S07Ia004

S07Id031

S07Cb027

S07Cc082

S07Cc106

S07Cc129

S07Cc126

S07Ie005

S07Cc006

S07Cc086

写真図版 19

S07Cc089

S07Cc131

S07Bb004

S07Cc121

S07Ia023

S07Ia016

S07Ca018

S07Ia008

S07Cc124

S07Id043

S07Id047

S07Ca017

S07Cc076

S07Cc071

S07Cb008

S07Hb002

S07Ia006

S07Ca008

写真図版 20

S07Id044

S07Id017

S07Id022

S07Cb005

S07Cb001

S07Cc092

S07Cc080

S07Cc101

S07Cc141

S07Id050

S07Ca015

S07Id013

S07Ia014

S07Cc029

S07Cc094

S07Id034

S07Cc043

S07Cc102

抄　録

ふりがな	まちやいせき
書　　名	町屋遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第179集
編著者名	蔭山誠一・永井邦仁・永草康次・藤根　久・米田恭子
編集機関	公益財団法人　愛知県教育･スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL 0567-67-4163
発行年月日	西暦2013年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
まちやいせき 町屋遺跡	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 ちあきちょうまちや 千秋町町屋	232033	02034	35度 17分 30秒	136度 51分 44秒	2007.11 ～ 2008.2	1,600	県道名古屋江南線道路拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町屋遺跡	集落跡	弥生時代中期前葉～中期後葉 弥生時代後期～古墳時代前期 古代 中世～近世	竪穴建物24棟・土坑35基・溝24条 竪穴建物１基・方形周溝墓1基・土坑3基・溝3条 土坑3基 土坑11基・溝18条	弥生土器・磨製石剣・管玉・磨製石斧・石鏃・石錐・敲石・凹み石・磨石・砥石・叩石・炉縁石 弥生土器・ガラス小玉 須恵器・土師器 土師器・山茶碗・瓦器	弥生時代中期から弥生時代後期における集落跡を確認。

文書番号	発掘届出(19埋セ第51号、平成19年8月23日付) 通知(19教生第1305号、平成19年8月31日付) 終了届・発見届･保管証(19埋セ第115号、平成20年3月11日付) 監査結果通知(19教生第2968号、平成20年3月24日付)

要　　約	今回の発掘調査成果とこれまでの調査地周辺にて採集された資料の調査によって、これまで内容が不明であった当遺跡について、遺跡の範囲が南北約370m、東西約200mの範囲に広がることを明らかにした。また、遺構変遷と出土遺物の検討から弥生時代中期前葉から遺跡が形成され、弥生時代中期後葉にかけて居住域が広く展開し、同時に弥生時代中期中葉後半から方形周溝墓からなる墓域が形成されることを指摘した。続く弥生時代後期には居住域と墓域の範囲が急速に小さくなり、古墳時代には遺構が消滅することを明らかにした。そして古代には、遺跡の北側で墓が小規模に形成され、中世から近世にかけて土坑や用水路と思われる溝が営まれたことを明らかにした。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 179 集

町屋遺跡

2013 年 3 月 31 日

編集・発行　公益財団法人教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

DTP　有限会社アルケーリサーチ

印刷　サンメッセ株式会社